
俺と幼馴染みの共同生活

左リュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と幼馴染みの共同生活

【Nコード】

N3728V

【作者名】

左リユウ

【あらすじ】

主人公、桐山幸助きりやまこうすけはある日、幼馴染みの天音彩あまねあやと共同生活を行う事となってしまう。そして幸助の周りの悪友達とその幼馴染み達も、なぜかそれぞれの理由で共同生活を行う事となってしまう。果たして、彼らは周りの人達にバレずに共同生活を行う事ができるのか！
？ 色々なネタ満載の、遠距離恋愛ならぬ、超「近」距離恋愛の、共同生活学園ラブコメ！！ PV10万アクセス突破！ ありがとうございませう！ 現在、キャラクター&エピソード人気投票開催中！
【11/16】山田様より、挿絵をいただきました！ 山田様、

ありがとうございました！

第一話 いつもの日常と変わる日常 (幸助 side) (前書き)

これからよろしくお願いたします (一) (一) m

第一話 いつもの日常と変わる日常(幸助side)

幼馴染みは、君に居るだろうか？

俺には、一人居る。

そいつは美少女で、頭も良くて、スポーツ万能で、スタイル抜群で、あとついでに、胸の発育も良い。

そんな幼馴染みは俺にとっては自慢で、誇らしい。

そいつは頑張り屋さんだから、頑張ってるそいつを見てるだけで、俺はそいつの姿にドキドキしたりもした。

だって、メチャクチャ良い表情してるんだからよ。

そして、今は高校一年。

俺とその幼馴染みは同じ高校に進学し、今ものほほんと同じ時間を過ごしている。

「……………何よ」

「ん？」

「なに人の事じつと見てんの。気になるんだけど」

「へっ？ い、いや、やっぱりお前ってスタイル良いなあって思っ
て」

「なにエロい目で見てんのよ」

のほほんと……………

「え、エロい目でなんか見てねえよ!」

「見てたじゃない!」

「見てねえよ!」

「じ、じゃあ、ドコ見てたのよっ!」

「だから、やっぱり良い発育してる胸だなあつて……………」

「なあっ!? こ、この変態があああああああああああああああ
あああああああああッ!!」

「ごめんなさい。」

朝から顔面に右ストレートをくらって始まる日々は、「のほほん
とは言わないと今、気付いた。」

「おっ。今日も元気そうだな」

「それは俺の顔を見てから言え」

俺、桐山幸助は朝、幼馴染みからいきなり顔面にとび蹴りをくら

つてから学校に登校した。

今話しているコイツは、しろかみあいつし白上嵐。コイツは中学から知り合った、いわゆる『悪友』だ。成績は上。憎々しい事この上ない。それに加えて、

「そういえば、今日は直ちゃんは？」

「ん？ 途中まで一緒。中学の近くで別れた」

後輩ツインテールというとてもなく強力な属性を持った子と、幼馴染みときた。因みに『直』というのは、嵐の幼馴染みの名前だ。本名、かしがわなお加古川直。嵐の一つ下の後輩で、（俺の後輩でもある）現在受験生。

「そういえば龍神は？」

「まだ来てねーな」

「居るよ」

「「何いッ!?!」」

「ずざざっ、と俺と嵐が背後を見て、後ずさる。」

そこには、手に本を持って、開いている『悪友その2』の菅田かんだり龍神の姿があった。

龍神はいわゆる『本の虫』で、いつも本ばかり読んでいる。

なのに、

「りゅーじん？」

「何？」

「今日の放課後、空いてる？」

「空いてるよ」

「よかった。大事な話がある」

「解った」

サラサラロングヘアのクールビューティというこれまた強力な属性を持った幼馴染みが居る。

そして今の龍神の幼馴染みは、かみとあい神戸愛。龍神の幼馴染みと聞いた時にはそりゃあもう驚いたものだ。

なにせ学年トップがこの『本の虫』と幼馴染みだったりしたのだから。

因みに、俺達と、その幼馴染み達は全員同じクラスだったりもする。(直ちゃんは中学生なので居ないが)

で、その俺の方の幼馴染みは、というと……………

「……………(ムスツ)」

なにやらとても不機嫌そうにしてらっしゃる。この不機嫌な俺の幼馴染みは、あまねあや天音彩。嵐とは中学からの付き合いだが、彩とはもう幼稚園からの付き合いだ。

この様子は、どうやら朝の事をまだ怒っているようだ。

「ん〜？ また幸助は天音を怒らせたか？」

「理由が聞きたいな」

「あゝ．．．．それは、だな」

どうしよう。「幼馴染みのスタイルに見とれてました」なんて言えるわけがない。

「変態」

「なるほど」「」

「なんで解ったような顔をするんだ!？」

どうやら今の彩の一言で理由が解明されたようだ。

ここまでは、いつもの日常だったんだ。(いや、毎日こんな変態などとよばれているわけではないぞ!?)

でも、この『いつもの日常』が、変化しはじめたのは、放課後からだった。

放課後。

俺は彩と帰り道を歩いていた。俺も彩も、部活動に入っていない。クラスも同じ、帰る方向も同じな俺達は必然的に一緒に帰る事となる。

「なあ。彩」

「ん。何？」

「前々から思ってたんだけど、なんでお前は部活やらないんだ？」

「え、えッ!？」

いや、そこまで驚くような事か？

「い、いや、だってさ、お前、結構運動とか出来るし。部活に入れば結構良い成績でも出せるんじゃないかって思ってた」

「……………い、いいじゃない。別に。入らなくても」

ま、そりゃそうか。

「あ、アンタが家に一人で帰るのがさびしいからと思って一緒に帰ってあげるためよ」

俺は小学生かつ！ と言いたくなかったが、俺の家には親が現在居ない。毎日毎日世界中を飛び回ってボランティア活動に勤しんでいるからだ。

そもそも、俺の名前の『幸助』も、「人の幸せを助ける事の出来る人間になりなさい」と言って名づけられたものだし。

まあ、そんなわけで、俺の両親はお人よしで、そして俺は家では一人だ。

そこら辺の事情を良く知っている彩なりの配慮なのかもしれない。

「そうか。ありがとな」

「べ、別にお礼なんて……………」

「プイツ、とそっぱをむく彩。」

「でも、さ。だからこそ、なんかやっつけよ。部活。もう俺の為に彩に迷惑かけたくないしな」

それに、彩は色んな部活からよくスケッチを頼まれるので、（そのたびに俺は応援に行っているわけだが）どこかの部活に入ればある程度落ち着くだろう。

「.....」

「彩？」

「ばか」

「へっ？」

たっ、とそのまま彩は走り去っていった。

何か、気に障る事を言ってしまったのだろうか。

家に帰ると、彩はすぐさま自分の部屋へと戻った。

「あ~~~~~！ もうっ！！ あのバカああああッ！！」

なんにも解ってない、とひたすら言い続ける。

そもそも。

彩がわざわざ部活動に入らず、毎日幸助と下校しているのも、幸助と一緒に居たいから、だ。

しかし。

彩は素直にはなれず、あんな回答をしてしまったのだが。

(にしても、あの鈍感っぷりはないんじゃないの!? ただ、ただ私は……………)

幸助と、一緒に居たいだけなのに。

そう願いつける彩なのだが、

それは意外な形で実現する事となる。

「はあ。なんで怒られたんだろ」

俺はあの後、わけが解らないまま、一人で家へと帰った。

そしてあの成績優秀、スポーツ万能、スタイル抜群、の美少女幼馴染みがなぜ怒ったのかを考えていたのだが、一向にその理由が解らずに居た。

そして今はコトコトと夕食のカレーを作っている。

とりあえず、もう解らないからには仕方が無い。

明日、彩にはちゃんと謝ろうと思ったその時だった。

ピンポーン、と玄関のチャイムがなった。

「あれ? 誰だ? こんな時間に」

俺はカレーの鍋の火を止め、玄関へと向かう。
そしてドアを開けるとそこには、

「……………」

なぜか大荷物を抱えた彩が居た。

「彩？ どうしたんだ。こんな時間に」

「……………」から

ポツリ、と彩は呟いた。

そして。

「私、今日からここで暮らすから」

なんて事を言い出した。

「はい？」

俺はそのまま突っ立っていた。

こうして、俺の『いつもの日常』が、大きな変化を迎えた。

第二話 幼馴染みと迎えた朝

朝。

開け放たれた窓からそよそよと心地よい風が送られてくる。気持ち良い。これならまだまだ寝れそうだ。

「・・・・・・・・さい！」

なんだろう。

「・・・・・・・・なさい！」

声が聞こえる。この家には俺一人だけのはずなのに。

「起きなさい！ 幸助ッ！！」

ドガッ！！ と俺は朝からいきなり、文字通り叩き起こされた。具体的に言えば、蹴飛ばされた。

「痛つてええええええええええええッ！？」

「いつまで寝てんのよっ！！ 遅刻しちゃうでしょ！？」

朝叩き起こされた俺の眼前に、制服姿の幼馴染みの彩が居た。

・・・・・・・・あれ？

「彩？ なんで居るの？」

「は、はあっ!?! 昨日説明してたでしょうがっ!?!」

そうだった。昨日、彩が突然家に来たと思ったら、「今日からここに暮らす」なんて事を言い出したんだ。

それというのも……………

これは、昨日の事だ。

「私、今日からここで暮らすから」

「はあっ!?!?」

な、何言ってるんだ!?!?

「あゝ、まあ、そんな反応を示すのも解るけど……………」

話しづらそうに彩はゴソゴソとカバンから一枚の紙を取り出す。

そこには手書きで、

「ごめん、彩ちゃん。パパとママはちょっと世界一周旅行に行ってきます。しばらくの間戻らないから、こうちゃんの所にも泊まっついでね」

「 P.S. お金はちゃんと銀行に振り込みして仕送りしておくから」

「な、なんじゃこりゃあああああああああああああああああああああッ!？」

「うるさい……………私も今頭痛いのよ」

確かにこれは俺も頭が痛くなってきた。

普通、大切な一人娘をほったらかして世界一周旅行に行くか!？
しかも人の家に押し付けて!

「と、いうわけで、その、あ、ああ、アンタの家に今日から住むから」

「いや、ちょっと、」

「だ、ダメ?」

と彩は上目づかいで俺に懇願する。

ぐうつ! く、くそっ! 元がかなり可愛い分、この上目づかいはキツイッ!!

「あゝ、ま、まあ、仕方が無いな」

荷物も持ってきているようだし。

これは仕方が無い。

……………つーか、普通に泊まる気まんまんじゃねーか。

「じ、じゃあ、決定ね」

そのままトタトタと家の中に入って行った。そういえば、昔は良
く彩は俺の家に来て遊んでくれてたな。

今思えば、家では一人の俺のためだったのかもしれない。

「ありがとな、彩」

「？ 何か言った？」

「いや、なにも。そうだ。今カレー作ってたんだよ。一緒に食うか？」

「そうね。私も夕食はまだだったし」

そして、彩と一緒に夕食をとった後。

「じゃ、お風呂借りるね」

「ゴフツ！？」

盛大にむせた。

「何むせてんの……………」

「い、いやっ！ だって！」

いくら幼馴染みとはいえ、なあっ！？

「はっ？ …… な、ななな、何変な妄想してんの！？」

ばしんっ！！ と思いつきリカバンを顔面に叩きつけられた。そのまま俺は気絶し、意識を失い、ラッキーイベントは起こりませんでした。

少し残念、なんて言ったら彩に怒られるんだろうなあ。

その夜。

俺は意識が回復し、風呂にも入り、ふらふらと自分の部屋へと入る。

そして部屋を空けると、俺のベッドには……………
すーすーとなんとも可愛らしい寝顔の、彩が居た。

「……………はいッ!？」

いやいやいや!! ワケが解らん! ワケが解らないぞ!?!? そ
もそもなんで俺の部屋で寝ているの!?!? しかも、その、ね、寝顔
がなかなか可愛いし……………つーか、このままじゃ俺の理性が
保たないんですけど!?!?

「んっ……………?？」

パチッ、と彩が目を覚ましてしまった。

「「あっ」「」

一瞬の沈黙。

そして。

「ななな、何見んのよ!?!？」

「ここは俺の部屋だぞ!?!？」

「う、うるさいっ!!」

その後、彩の右ストレートで完全に俺の意識は途絶えた。

「もうっ。このバカは……………」

気絶した幸助を見つつ、彩は呟く。

彩がなぜ幸助の部屋で寝てしまっていたのかというと、久しぶりに入る幸助の部屋。

昔を思い出して懐かしみつつ、ベッドに座っていると、ついウトウトとしてしまい、そのまま寝てしまったワケだが。

「あんなに怒らなくても、よかったかも……………」

自分のさっきの行動を思い返して、少し反省する。

「じめん……………」

声が聞こえるハズもない幸助に、一言謝る。
するど。

「……………彩」

「え？」

何かを呟く幸助。

そして。

「彩……………」

彩の名前を呟く、幸助。

「あつ……………」

少し嬉しくなった彩は、そのままベッドで眠り続けるのだった。幸助と、同じ部屋で。顔を真っ赤にしながら。

「彩……………右ストレートは痛いからマジで止めてくれ……………」

幸助がこんな事を呟いている事も知らずに。

そつだそつだ。

たしか俺はあの後、彩に意識を刈り取られたんだつた。（『刈り取られた』という所がポイント）

「あつ。そついえば朝食の準備……………」

「大丈夫よ。やっておいたから」

そつ言つて、彩はトテトテと下のリビングへと降りていった。俺は制服に着替えて、カバンに学校の教科書を入れ、リビングへと降りた。

そこにはテーブルに揃えられた朝食。

「遅いつー!!」

「お、おお。わりい」

彩はもうテーブルに着いていた。
どうやらまだ朝食をとっていないようだ。

「悪いな。朝食の準備までしてもらって。しかも待ってくれて」

「ッ!? べ、別に待ってたわけじゃないわよ!!」

「お、おおっ」

なぜだか怒られた。

とりあえず、さっさと朝食をとらないと、学校に遅刻してしまう。
俺がテーブルの席につき、箸を手取る。目の前には卵焼きや、
白ご飯、味噌汁等といったバラエティ豊かな朝食。

いつもは基本トーストで済みますから、こういう朝食は久しぶりだ。

「……………(じー)」

彩がなぜか、こちらを凝視している。

「な、なんだ」

「へっ? いや。なんでも!? は、早く食べなさいよ!!」

「お、おおっ」

俺はとりあえず、卵焼きを一口食べてみる。

.....

「ぎゅぎゅっ」

「んっ。美味しい」

「そ、そう。と、当然ね！ 私が作ったんだからっ！」

「そうだな」

「」

なんだかとてもご機嫌な様子で、朝食を食べ始める彩。
まあ、機嫌が良くなってなによりだ。

「っと、そういえば弁当をまだ作ってないな」

と、言っても、今日は弁当を作るには寝坊だ。
パンで済みますか。

そう思っていた瞬間、

「ほら。そう言うと思って作っといたわよ」

ぼんっ、と俺の手に一つの弁当が手渡された。

「おっ、わ、悪いな。朝食から弁当まで」

「べ、別にっ。ただ、ありあわせを詰めただけだし」

朝食のレベルを見ると、どうやら昼食も楽しめそうだ。

「おう。楽しみにしておく」

「ッ!! じ、じゃあ、さっさと行くわよッ!!」

そして俺と彩は家を出た。

俺はこの時は知らなかったが、俺の他にも、二人の悪友の『いつもの日常』も、大きな変化を迎えていたのだった。

第三話 いつもの日常と変わる日常(嵐side)

嵐は下校する道中、今日はまず本屋に寄った。店内で参考書コーナーへと寄り、中学生用の参考書を探す。それというのも、幼馴染みの中学生に勉強を教えるためなのだが。

「っと、参考書のコーナーは……………」

きよろきよろと辺りを見回し、目当ての参考書コーナーを探す。立ち寄った本屋は駅前の大型の本屋で、ゆえに店内はそれなりの広さを誇る。普段は漫画や雑誌のコーナーばかり立ち寄るためか、参考書のコーナーを探すのは苦労する。店内の案内板を見つけて、参考書のコーナーを見つける。今の位置から料理本コーナーを通ればすぐだ。そして目的地の参考書コーナーへと向かう。料理本コーナーを通る。

するとそこに、見慣れた中学生が居た。

ツインテールの髪に、自分が通っていた中学の制服。

幼馴染みの、直だった。

(直……………?)

なにやら本を探している様子だった。
側に近づいてみる。

「よっ、直なま」

ぽんっ、と肩を叩く嵐。

「ひゃ、ひゃいつ!?!?」

ビクウツ!! と急に肩を叩かれてビククリする直。

「あ、嵐さん、でしたか。ビックリした……」

「あ、なんだか驚かせてしまったみたいだな。わりい」

「い、いえ。そんな事はありませんっ」

そしてそそくさと持っていた本を棚へ戻す。しかし嵐はそれをひよいつ、と手に取る。

「ああっ!?!?」

「何買おうとしてたんだ? 本ぐらいなら買ってやるぞ?」

ぴらっ、と表紙を見てみると、『手作り料理レシピベスト百!』と書いてあった。要するに、手作り料理のレシピ本だ。

「あれ? 直って料理してたっけ?」

「こ、これから始めてみようかと思って」

「ふん。それならこれよりこっちの方がいいぞ。あっ、でもこっちでもいいな」

ヒョイヒョイと次々と料理本を選ぶ白上。嵐は実家ではなく、マ

ンションを借りての一人暮らしなので、料理も一人でこなしている。一人暮らし当初は、よく料理本を片手にキッチンで格闘したものだ。った。

「え、え〜つと……………」

「おっ。やっぱりこれがいいかも」

ポンツ、と料理本を手渡す嵐。

「あつ……………」

パラパラとページをめくると、そこには手順や材料等のが細かく、解りやすく書かれていた。

「じ、じゃあ、これで」

「そっか。じゃあ俺がおこるよ」

「えっ。でも」

「気にすんなくて」

そして選んだ料理本を持って嵐は会計へと消えていった。

帰り道の方は同じなので、二人揃って歩き出す。嵐の片手には、本屋のレジ袋に納まった一冊の料理本。

「にしても、急に直が料理を始めるなんてな」

「わ、私だってやれば出来ますっ」

「まあそうムキになんたって」

「ば、バカにしないでくださいっ！」

「ははっ。そうかそうか」

「むっ」

ぶくっ、と少し頬を膨らませる直。

そして二人は順調に歩を進める、が。

「そっぴゃあ、おばさんとかは元気か？」

直の足がピタリと止まる。

「.....」

「直？」

「.....あの、その件、なのですが」

なんだろ？ と内心首を傾げる風。

「どっした？」

「えっと、その非常に言いづらいのですが.....」

そしてすうつ、と意を決したように、

「あの、その前にそこに……………」

すつ、と直が指差したのは、近くの喫茶店だった。とりあえず、喫茶店に入る。二階にある手近な席に座る。周囲には、まだ人があまり居なかった。そして直は意を決したように口を開く。

「えっと、実は、急に海外に引越しが決まっちゃって……………」

「引越し?」

正直に言つと、ショックだった。

それは否定しない。

なぜなら直とは小さい頃からの付き合いだったし、これから一緒に居続ける物だと思っていたからだ。しかも海外となるとかなり遠い。もうあまり会えないだろう。

しかし、嵐はすぐに調子を整える。

「そうか。で、いつなんだ?」

「あつ。わ、私は引越しはしないんです」

「へっ?」

「えっと、来年はもう受験だし、その、こっちにどうしても居たいって事で私だけ」

「そ、そっか。そっかそっか」

内心、少しホツとする嵐。

「なるほどな。それで普段料理もしない直が急に、な」

「あっ、今バカにしたですっ!」

「してないしてない」

「したっ!」

「そっだな」

「そ、そんなっ!」

ガーン、という効果音が響きそっな表情をみせる直。場の空気が少し和んだ、ような気がした。

「そっか。ならおじさんとおばさんは引越しか。それならしばらく会えなくなるし、今から挨拶に行ってもいいか?」

「はい。大丈夫だと思います」

白上としては今まで結構お世話になったおじさんとおばさんに挨拶しておきたいという気持ちがあったので、挨拶はどうしてもしておきたかった。

というわけで、二人は直の家へと向かった。

家の前へ着くと、もう引越屋のトラックが来ていて、荷物が大半

運び出されていて、いつでも出発のような体勢だった。

「なんとか間に合ったみたいだな」

「ですね」

すると、玄関から、直の両親が出てきた。手には荷物と思われるトランクがあった。

「おや。嵐君」

「嵐君？ 久しぶりねえ」

「お久しぶりです。おじさん。おばさん」

「ははっ、と直の父親は微笑み、

「そうか。もう高校生か。大きくなったね」

「はい。おじさんもおばさんも、海外に引越するならそうと早く言ってくればよかったのに」

「ごめんねえ。この人も急だったから」

「オイオイ。仕方が無いだろ。仕事の都合でなんだから急なのは当たり前だろ？」

仲良さそうに話す二人。そんな光景を嵐は昔から見ていて、そして羨ましく思っていた。

「あつ。そーだそーだ。そついえば嵐君」

「はい？」

「私たち、一緒に海外に引越ししようっていったんだけど、直がどつしてもごつちに居るっていうんだけどね。それだと直、一人になつちやうじゃない？」

「はあ。まあ、そうですね」

「だからね、」

にごつ、と笑う直の母親。

そして。

「だからさ、直と一緒にこの家に居てくれない？」

「は？」

「じゃ、たのんだわよ。直、ばいばい」

そのまま一瞬にして、二人は車で行ってしまった。

「「・・・・・・・・」

呆然とする二人。

「じつは、白土の『いつもの日常』も変わり始めたのだった。

第四話 いつもの日常と変わる日常(龍神side)

放課後。

龍神は、近所の図書館に居た。毎日のように図書館に通っている龍神だが、今日は本を借りる為だけではない。

幼馴染みの愛と一緒に、勉強を行う為だ。そもそも、愛の言う大事な話というのも、この龍神との『勉強会』だったのだ。

とは言っても、愛は学年トップの成績を誇るので、龍神はなぜだろう、と思ったのだが、愛が強く言うので了解したのだ。

自分の借りたい本を本棚から取ってから、愛と共に席に着く。

「りゅーじん。勉強はしなくていいの？」

「？ だって愛ちゃんの方が成績は良いでしょ？」

「そう、だけど」

「？」

「(わかってない)」

「？ 何？」

きよとんとする龍神。そもそも、愛がワザワザ図書館で勉強しようと言い出したのも、龍神と二人つきりで居たかったからなのだが、当の本人は微塵もそうは思っていないようだ。『好きな人と二人きりで居たい』という辺りは、彩も愛も似ているのかもしれない。

「うん。それじゃ、愛ちゃんも居るし僕も勉強しようかな。解らない所があつたら聞けるし」

「……………うん」

そして二人は勉強を始める。参考書を開き、問題を解く。時折解らない所があれば愛に聞く、のだが、なぜか愛は龍神に聞くことが多い。

「りゅーじん。ここはどうやって解くの？」

なぜか。

「りゅーじん。ここ教えて？」

……………なぜか、だ。

「えっと、愛ちゃん？」

「何？」

「な、なんでそんなに問題の解き方を聞いてくるの？（しかもさつきからなんだかかなり密着してくるんだけど……………）」

「解らないから」

「嘘だよな？ それ絶対嘘だよね!？」

そもそも、幼馴染みの龍神にとって、愛の学力の高さは十分に知っている。龍神自身も、学力はそれなりに高いのだが、学年トップ

の愛の方が遙かに上、だ。

「……………りゅーじんはわかってない」

「うん。この問題は僕、まだ解ってないんだ」

「……………」

「え？ 何？」

「……………」

「りゅーじん」

「……………はい」

「謝って」

「……………ごめんなさい」

わけも解らず、龍神は謝るのだった。

帰り道。

二人は家と同じ方向なので、一緒に帰路につくのだった。
龍神の手には図書館から借りてきた本。

……………りゅーじんは少し鈍感すぎる。この分だと、彩も苦

労してそう)

鈍感。

その言葉を思い出し、ふと、彩と幸助の顔を思い出す愛。
そしてチラリと龍神を見る。龍神の顔が夕日に当てられて、キラキラと輝いていた。

「あっ……………」

思わず、見とれてしまった。
ふと、足が止まる。

「どうしたの？」

「あっ、なんでも……………ない」

「？ そう」

そして再び、二人は歩き出した。

(……………こうなったら、りゅーじんには強硬手段に出る必要がある)

「りゅーじん」

「何？」

「私、今日からりゅーじんの家で暮らす」

「ゴフツ!？」

思わず、菅田はむせてしまった。

「げふっ、ごふっ、な、ななな……!？」

突然のトンデモ発言でもはや「な」としか言えない。

「ちちち、ちょっと待って!? 一体、いきなり、なんなの!? どうしたの!? 第一、親の許可は!？」

愛は大きな財閥の娘であるため、正直親の許可は取れないだろうと踏む龍神。第一、同じ年の男と同居などという事になればなおさらだ。

「ちょっと待って」

ピピピッ、と携帯を操作する愛。

「パパ？」

『どうした愛』

「私、りゅーじんの家で暮らす」

ドストレートに事を告げる愛。

(ま、どうせ無理だろう)

と考えた龍神だった。

しかし。

『おおっ！ そうかそうか！ はっはっはっ！！ いいぞいいぞ！
！ よし、許すっ！！』

「へっ？」

「ありがとう。パパ」

『おおっ。そうだそうだ。龍神君に代わってくれるか？』

「うん」

はいつ、と龍神は愛から携帯を受け取る。

『龍神君？』

「……………はい。ご無沙汰してます」

正直、龍神は少しこの父親が苦手だった。

それというのも。

『娘に手エ出したらどうなるか解ってるんだろっなあ？』

「……………はい。重々承知しております」

『それならいいんだ。解ってるじゃねえか』

ドスの効いた声で確認する愛の父親。これだからこの父親は苦手なんだ、と思う龍神。そして龍神は愛に携帯を返す。

『はっはっはっ！ 頑張れよ！ 愛！』

「うん。私、頑張る」

「.....」

ピッ、と携帯を切る。

もはや龍神は何も言えなかった。

そして、家に着くと一人暮らしの龍神の家に次々と荷物が運び込まれていった。龍神は開いた口が塞がらなかった。

そんな龍神をよそに、愛は楽しそうにしているのだった。

第四話 いつもの日常と変わる日常(龍神side)(後書き)

これで序章が終わりました

第一話 自称『天音彩研究者』

学校に、彩と共に向かう。

登下校自体は毎日一緒にしていたので問題ない。というか、これが普通だ。

「ねえ。幸助」

「なんだ」

「えつと……その……どどど、同居の件なんだけど……」

「……おっ」

「く、くれぐれも、学校で言いふらさないでね!？」

「当たり前だろ」

幼馴染みの俺が言うのもなんだが、彩は学校ではかなりのルックスを誇る。新聞部の裏・アンケート、『美少女生徒ランキング』では神戸さんと並び、同率一位だ。そんな彩と共に生活しているとなれば、俺に明日は無いだろう。確実に。

そう。『確実に』に、だ。

「はあ。おばさんとおじさん、いつ世界一周旅行から帰ってくるん

だ？」

「知らないわよ。そんなの」

だろうな。

知っていたら苦勞はしない。彩の両親は、彩の親とは思えないくらい気ままな性格の持ち主だ。もしかしたら旅行に飽きて明日にでも帰ってくるかもしれないし、三年は帰ってこないかもしれない。

「ま、なんとかなるだろ」

「なるのかしら」

「なるようになれ、だ」

実際、そう願うしかない。彩と共に、そのまま何事もなく学校まで着くことが出来た。周りのクラスメイトは何も言わない。そもそも俺と彩はいつも一緒に登校しているので、不信に思われない。最大の不安要素はこっちからボロが出る事だ。その事態だけは必ず避けなければならぬ。バレたら何度も言うが、俺に明日は無い。教室に入ると、既に嵐が居た。

「よっ。嵐」

「ん？ あ、ああ」

なぜだろう。少しきこちない、よつな気がする。

「？ どうかしたのか？ 嵐」

「イヤ。ナンデモナイ」

「お、おおっ」

これ以上追求すると嵐ヒートが壊れそうだ。それに、こっちのボロが出るかもしれないし。そしてそそくさと彩は席へと向かう。うーん。やっぱ俺達もなんだかぎこちない。

「おやおやあ〜？ 彩、どうしたあ〜？ なんかぎこちないぞお〜？」

「り、莉子？」

つつん、と彩のほっぺを指でつついているのは、新聞部部长、紙絵莉子かみえりこ。愛読書は週刊少年ジャプとしているクラスメイトだ。

紙絵さんとはさっきの裏・新聞部アンケート『美少女生徒ランキング』での取材によって知り合った。

以来、親しくしているようだ。

因みに、『そのネタを取るのには命がけ』、『そのネタはパンドラの箱』とまで言われた彩の取材を成功させた時の功績により、紙絵さんはなんと副部長に昇進したそうだ。

そしてその取材の結晶である裏・新聞部アンケートは瞬く間に男子の間に広がり、しばらくは男子のニヤニヤ顔が止まらなかったそうだ。

因みにその一部百円の新聞部の製作新聞、『THE・NEWS』に『美少女生徒ランキング』を載せた号は、毎回一千部を記録するという。(因みに学校の生徒数は六百人)

そして紙絵さんは新聞部で取材慣れしているせいか、なかなか感

覚が鋭い。

もしかしたら初日でアウトかつ!?

「あれあれえ〜? どうしたどうしたあ? 大切な幼馴染みの幸助と喧嘩でもしたかあ?」

「は、はあっ!? たたた、大切な、つてなによ!?!」

そこかよ。

「ん〜、でもなんかぎこちないなあ。喧嘩では、ないと。だって本当に喧嘩してるならこんな素直じゃないし」

「ッ……………!!」

おおつ。さすが自称『天音彩研究者』。

しかしいくらなんでもいきなり「君達、同居してるよね?」なんて事にはならな……………

「もしかして、ついに幸助と同居でも始めたかあ?」

「「違うつ!!」」

やばい。

想像以上にやばいぞ。

自称『天音彩研究者』。

「そそそ、そうだぞ。紙絵。そんな事があるわけないだろう?」

嵐からの援護射撃。意外だな。まさかこんな援護射撃がくるとは。嵐にも何かあったのか？

「ん〜、そうだよねえ。そんなワケないか」

「」「」「」「」

「そっかそっか。そうだよねえ〜」

「」「」「」「」

「ま、それはそうと」

ゴソゴソとカバンから何か取り出そうとする紙絵。取り出したのは、カメラだった。

「さあさあさあ！ 特ダネの宝庫天音彩！！ 今日こそバッチリ取材させてもらっからねえッ！！」

「ちよっ！ また!?!」

カメラを構える紙絵から彩は逃走を開始する。

「今度の『THE・NEWS』にはグラビアつきたいんだよね。だから私のおもちやになっ〜てえ〜」

「なるかああああああああああああああああああああああああああああッ!?!」

なれよ!?! と心の中で叫ぶ男子一同。解るぞ。解るぞ男子諸君。

ぶつちやけ俺も超見たいぞ！！ 彩のグラビア写真。
そして。

ドゴッ、と俺の顔面に綺麗な右ストレートが炸裂した。

「な、なぜに……」

「なんか危険な感じがしたから。直感的に」

ニユータ プかお前は。

「隙アリ」

「つきやあああああああああああああああああああああ
っ！！」

そして紙絵が彩の発育の良い胸をもみもみともんでいく。同時に
男子のテンションが最高潮に達する。

「ち、ちよつと！ し、取材つてこれ！？」

「そうそう スキンシップから始めるのが紙絵流取材術なのだ」

「嘘つけえええええええええええええええええええええええ
えええ！！」

見ていてとても微笑ましい光景だ。周りの男子達も微笑んでいる。
すると嵐が、

「お前ら、何ニヤニヤしてるんだ？」

「ちょっと微笑ましい光景が、な」

「み、見てないで助けるおおおおおおおおおおおおお
おおー!!」

本日二度目の右ストレートが炸裂。

「な、なぜに俺にばかり……………」

「……………」

「いやあ。朝からにぎやかだねえ」

「「お前のせいだろ（でしょ）」」

紙絵のおかげで朝から右ストレートを二発もくらってしまった。
その代償として素晴らしい物はおがめたが。

「そういえば、龍神が来てないな」

「愛もまだね」

あの二人がまだ登校してきてない？
これは何かがありそうだ。

「うつふつふ。これは何か特ダネの予感」

それは俺達にとって幸か不幸か。

「…………おはよう」

噂をすればなんとやら、だ。

しかし、なぜか顔がげっそりとしている。

「おはよう」

と、思ったら、なんと神戸さんまで龍神と一緒に登校してきた。

しかし。

問題はそれだけじゃない。

手を、つないでいた。

男子共の警戒レベルが一気に上がる。

そして紙絵は「特ダネキター……………ッ!」と言っ
てパシャパシャとシャッターを切っている。

一体龍神と神戸さんに何があつたのやら。

第二話 龍神の憂鬱

朝。

僕はいつも通りの時間に起きて、いつも通りに着替えて、いつも通りに朝食を作ろうとリビングに下りると、

「りゅーじん。おはよう。朝ごはん、出来てる」

愛ちゃんがエプロン姿で朝食を作り終えていた。

「.....」

「りゅーじん。どうしたの?」

きよとんと首を傾げる愛ちゃん。

うん。首をかしげたいのは僕の方だ。

「お、はよう」

しかも良く見るとかなりバラエティ豊かだ。

「頑張って作った」

「う、うん。ありがとう」

しかしマズイ。

非常にマズイ。

朝食はとても美味しいけど、状況的にはかなりマズイ。

もしも「朝食を愛ちゃんに作らせてる」なんて勘違いをあの父親にされたら、僕の命は恐らくないだろう。

「あ、あの、さ。愛ちゃん」

「なに？」

「これからは朝食は僕が作るよ」

「なんで？」

僕の命がかかってるから。

なんて言っても信じてもらえないだろう。なにしろあの父親は愛ちゃんの前ではただの親バカになってしまふのだから。ここはなんとか都合の良い、いいわけを搾り出さなきゃ、本当に命が危ない。

「……………ぼ、僕の作った料理を愛ちゃんに食べてもらいたいから」

「ほんとう？ 嬉しい」

ふっ。

なんとかごまかせ……………

「でも、私が作る」

てないようだ。

たたり、と僕の頬を冷や汗が伝う。

ぼ、僕の命が……………今、終末を迎えようとしている……………

．．．！！

．．．．．朝食の権利を得られなかったのは痛い、が。まだ昼食と夕食の権利を得れば、まだ生存の可能性は上がる！！

「昼食のお弁当はもう作ってあるから」

トントン、と弁当を二つ置く愛ちゃん。いきなり、昼食の権利が強奪された。

しかしまだ夕食がつ．．．．！！

「夕食も私が作るから」

「えっ。いや、でも」

「作るから」

「．．．．．はい」

父親譲りの鋭い視線に圧された僕は、食事の権利を強奪された。僕はなんだか命を少しずつ削られるような感覚に襲われた。

朝食をとり終わると、僕と愛ちゃんは一緒に家を出る。学校まで約二十分。それまでなんとも無ければよいのだが。

「りゅーじゅ」

「なに？」

「手、つないでいい？」

「てッ!?!」

愛ちゃんはどうかやら僕を殺したいらしい。

どうしてそこまで僕を殺したがるのだろうか。

「つないでいい？」

「だめ」

ここだけは譲れない。

なにしろ僕の命がかかってるのだから。

「つなごうっ？」

「だめ」

「つなごうっ？」

「だめ」

「えいつ」

ストン、と僕の首筋に手刀を入れる、愛ちゃん。

そこから、僕の意識は途切れた。

次に気がついたのは、学校の校門前だった。手は強制的に握られている。ものすごい握力だ。振りほどけない。

そして気がつけば、この状態で教室に着いてしまった。紙絵さんが居るのは不幸だった。本当に不幸だ。

「私たち、結婚します」

「しないよっ！！」

ダメだ。

もう完全に愛ちゃんは自分の世界に入ってしまったている。そして男子。

なぜにそんな殺気立った目で見てくるんだ。これじゃあ、敵が増えただけじゃないか。愛ちゃんはなぜ僕を殺したがるのだろう？というか、なんとしてもこの状況は学校中に広めてはならない。

「うふふふ。特ダネもくらいっ」

ぴゅん、と一瞬にして紙絵さんは教室から消えた。

ひとまず、状況整理。

その一、今の僕の状況は、愛ちゃんと手をつないでいる。

その二、愛ちゃんは新聞部の裏・アンケート、『美少女生徒ランキング』で天音さんと並んで一位。

その三、今の僕と愛ちゃんの状態を新聞部の紙絵さんが激写。

その四、紙絵さんは一瞬にして教室から消えた。

その五、紙絵さんが向かったのは、新聞部の部室、そしてそこで行われるのは『THE・NEWS』の号外の編集、および、発行作

業。

これらの事を整理するのに、数秒。

僕がこれから始まる授業を放り出して教室を飛び出すのには、十分な理由だった。

第三話 弁当

昼休み。

直は友達「みこと」と「あき」の齊藤明子と共に、昼食をとっていた。

「あれ？ 直。今日は弁当なんだ？」

「えっ。あつ。うん」

直の母親は弁当を作るときと作らない時がある。それも週三のペースで。学校に通うのは週五日。その内三日も忘れるのだから困ったものだ。そしてもう既に今週は二日弁当を作ってるので、明子は今日のはてつきりパンか何かかと思ったのだが。

「直が作った……………」

「う、うんっ。そうだよ」

「わけないよね」

「……………それどういう意味」

明子は直が料理をあまりしないのは知っている。

ゆえに、急に弁当を作るという可能性は無いと踏んでいる。

「ん、あなたのお母さんじゃないとすれば……………」

頭を悩ませつつ、直の弁当を作った人物を必死に考える明子。

そして。

「解った。嵐さんでしょ」

「そそそ、そんな事ないんですよおお!???」

「それ、ごまかせてるつもり? でもまあ、嵐さんも大変ねえ〜。
わざわざ作った弁当を届けてるなんて」

(えっ?)

さすがの明子も、どうやら『同居』という発想まで行き着かなか
ったようだ。

「そ、そうそう。そうなんだよねえ〜」

あははは、とにこやかに笑う直。

(な、なんとかセーフ……………)

こうして、なんとか危機を回避した直の昼休みは過ぎていくのだ
った。

「……………」

「? どうした嵐」

「なんか。今俺の知らない所で誰かがかなり危ない橋を渡ってたよ

うな」

「なにそれ」

「俺にも解らん」

昼休み。

俺、彩、嵐、龍神、神戸さん、紙絵さんは机をくつつけた状態で一緒に昼食をとっている。因みに、朝龍神は結局授業には間に合わず、二時間目から授業を受けた。さて、そろそろ俺も弁当を開けるか。パカッ、と弁当のふたを開ける。これは朝、彩が作ってくれた弁当だ。

「おやおや？ お二人さん、仲が良いねえ」

紙絵さんが俺と彩の弁当を交互に見て、言う。

「何が？」

「だって弁当のおかずが全く一緒じゃん」

瞬間、俺と彩は空けたばかりの弁当のふたをバンッ！！と閉める。

く、くそっ！！まさかこんな落とし穴があるとはッ！！

ちらっ、彩を見る。

彩も「どうすんの？」みたいな視線を送ってくる。いや、どうするって言われても……するとすすっ、と龍神が弁当を隠す。

「ん？ どうした龍神」

龍神には悪いが、話題をそらさせてもらおう。なんで弁当を隠したのかは知らないけど。

「い、いや。なんでもない」

「ほほう。まさか」

紙絵さんが一瞬にして、龍神の弁当箱を取り上げる。そして神戸さんの弁当を見て、

「ほほう。こちらも全く一緒」

「.....」

「だって私が作った」

「さ、さあ愛ちゃん。僕達は屋上で食べよう」

そのまま龍神は即座に弁当を取り返し、神戸さんと屋上へと向かった。そして、なぜか俺と彩をじっと見つめている嵐が気になった。

放課後。

俺と彩は一緒に下校しようとしたその時、嵐に呼び止められた。

「幸助。ちょっといいか？」

「？ 解った。彩、先に帰っててくれ」

「解ったわ」

とりあえず、彩には先に家に帰ってもらおう。待たせるのも悪いし。

「……………」

そしてまた、嵐がじつと俺達を見つめている。

その後俺と嵐は屋上へと移動した。屋上の真上にはよく晴れた青空が広がっている。

「一つ聞くぞ。幸助」

「ああ」

なんだろう。わざわざ屋上まで来て。それほど重要な案件なのだろうか。

「お前、まさか天音と同居してるのか？」

……………えっ？

第四話 幼馴染×幼馴染

「は、ははははは……嵐、何を言ってるのかなかしらん？」
いかん。

言語バランスが崩壊している。

「お前、それでごまかせてるつもりか？」

く、くそっ！ 普通、弁当の内容が被ったってだけで、『同居』
なんていう発想までたどり着くか！？ こうなったら……
殺るしか、ないっ……！！

「まあそうあわてるな。何も他のヤツにばらそうってワケじゃない」

「へっ？」

「……だからその物騒な拳を収める」

なんだ。言いふらすつもりなら、ここで息の根を止めようと思っ
てたのに。

「っーか、なんで……」

「あー……ま、こっちにも色々あってな」

嵐は深くため息をつく。そういえば今日はなにやら朝から不自然
だよな。コイツ。

「協力してやる」

ガシツ、と俺の肩に両手を置く嵐。ど、どうしたんだ!? コイツ!?!? つてまさか……………

「実を言つとだな、」

俺は嵐から諸々の事情を聞いた。

簡単に言えば、直ちちゃんと同居する事になったと。

……………

「羨ましすぎるぞコラアアアアアアアアアアア!! あんな後輩ツインテールなんていう強力な属性を兼ね備えた中学三年生と同居!? 死にさらせええええええええええええええええツ!!」

「待て待て待て! あまり大声で言つなツ!!」

くっ!! なんて羨ましいツ!! もういつそこの場で殺してやるつかあああああアツ!!

「落ち着け! お前も同じだろうがツ!!」

「ぐっ」

た、確かに、彩は性格はともかく、ぱつと見はかなりの美少女だろう。これはこれで、ラッキー、なのか?

……………性格はともかく。

その時、俺の制服のポケットから着信音が響く。彩からだった。

メールボックスからメールを開く。そこには

『帰ってきたら覚悟しなさい』

と書かれていた。

「だからお前はニュータープかつ！それともあれか、純粋種のイノベターかッ!？」

「何を言ってるんだ」

「いや。なんでもない。っつーか、なんでお前はワザワザ自分からばらしたんだよ」

「そりゃあれだ。見方はあった方がいいからな」

確かに。

こんな綱渡りのような生活を続けるのならば、見方は一人でも多い方が良い。

「それにしても、朝の様子を見る限り、龍神も……………」

「……………だよな」

そして俺と嵐は二人揃って深く、はあっ、とため息をつくのだった。

彩は一度幸助の家に戻ると、すぐに近所のスーパーへと向かった。

今日の夕食の食材を買ったためだ。

「えっと、野菜はっど………」

きよろきよろと野菜コーナーを目指す、彩。野菜コーナーを見つけ、さっそく食材を探す。

（何にしようかな。そういえば幸助^{あいつ}、肉じゃがとかが好きだったっけ）

と、色々と今夜のメニューを考えていると、何やら見知った顔があった。

直だった。

「あれ？ 直ちゃん？」

「あっ、彩、さん」

トコトコとそのまま彩は直に近づいてゆく。高校に入学してから、もうしばらく会っていない。最後に会ったのは、高校の入学式の直後だろうか。

「久しぶり」

「お久しぶりです」

ぺこり、と頭をさげる直。

「めずらしいわね。お買い物？」

「はい。夕食の食材を買いに」

あれ？ と彩は思った。彩は直とは付き合いは少しばかり長い。よって、直があまり料理をしない事は知っている。それなのに、どうして夕食の食材を買いに来ているのだろう。

「彩さんは？」

「わ、私？ 私も夕食の食材を買いに、ね」

考えすぎだろう。もしかしたら料理を始めようと思っただけかもしれない。それに、あまり料理をしていないので、まだ直が料理が下手か否かも解らない。

「今日は夕食は何を作るのですか？」

「えっとそうね。肉じゃが、かしらね」

「肉じゃが、ですか」

じっ、と彩を見つめる直。

そして

「あ、あのっ」

「ん？」

「こ、今度、よ、よかったら料理、教えてくれませんか？」

「えっ？」

突然の直からの申し出。勿論、教えてあげたいのはやまやまだが、現在彩は幸助の家に居候中だ。幸助の家で教えるわけにもいかない。そもそも、現在彩の家は電気もガスも水道も止められている。誰も使わないからと言って彩の両親が止めたのだ。

「い、いいわよ」

「本当ですか？」

「ぱあっ、と表情が明るくなる直。

「そ、それじゃあ、また今度、『直ちゃんの家』に行くわね」

「ここでキッチリ、『直の家』という部分を強調する事がポイントだ。

「えっ。私の家、ですか」

直は直で、それはそれで困る。なにしろ今は嵐が居るのだ。見つかったらそれはそれでヤバイ。

「えっと、私の家は無理かも、です」

「そ、そうなんだ」

「「・・・・・・・・」

二人の間には、しばらく沈黙が続いたという。

第五話 イベント

トントントン、と軽快なリズムで彩は包丁を動かす。

「あ、そうだ」

「ん？」

彩が途中で包丁の動きを止める。

「日曜日、直ちゃんが来るから」

「はあっ!？」

「いやいやいやいやいや!! 待て待て待て!! 「来る」ってあれだよな、家にだよな!？」

「な、なんでそんな急な展開になってるんだよ!？」

「.....色々あったのよ」

そりゃあ色々あってもらわなければ困る。

「家来る?」^{ウチ}「みたいな軽いノリで言われてたのならば正直怒ってたかもしれない(多分返り討ちだが)。

「で、なんの用なんだ?」

「なんか料理を習いたいんだって」

「ふうん……あつ」

そういえば直ちゃんって、嵐と同居してたんだっけ。
だから料理を習おうとしてるのか？

「『あつ』て何よ『あつ』て」

「うおっ！？」

気がつくのと、彩が目の前から俺を覗き込んでいた。うん。これは一応黙っておくか。言うほどの事でも無いし。

「なんでもない」

「嘘」

一瞬でバレた。ここは……

「ち、ちょっと待ってくれ」

俺はするりと彩から逃げ、廊下に出る。とりあえず携帯をつかみ、嵐に電話する。コール音が三回響き、そしてようやく嵐が出た。

「どうした？」

「いや、なんか色々あってさ。彩にお前らの事教えていいのか？」

「ダメだ」

即答。

「出来るだけ、知るやつは少ないほうがいい。そもそも俺がお前にばらしたのも、お前が俺と同じ立場だからだ。それ以外のヤツに不用意に情報をばら撒かない方がいい。それにあいつ等じゃあどこでボロが出るか解らないしな。特に天音は紙絵の事もあるし」

「お、おう。解った」

ブツツ、とそのまま通話は切れてしまった。よし、なんとかごまかそう。こういつ時はなにか他の話題を振ればいいんだよな。何か他の話題は………

「何してんのよ」

すっ、と彩が廊下に出てきた。

「で、なんで嘘ついてんの？ 何隠し事してんのよ」

くっ………！ まずい！ 何か話題を振らないと！ ええい！ なんとか働け！ 俺の直感力！

「あ、」

「あ？」

「彩のパンツの色が気になって」

「こ、この変態……！」

ズゴオツ！！ と彩の飛び膝蹴りが俺の顔面に炸裂した。
恨むぞ。

俺の直感力。

そして俺のその日の夕食は、魚の骨だったとき。

「……………どうしたんだその顔」

「直感力のせいだ」

「？」

次の日。

俺は腫れた頬を押さえながら登校した。嵐が驚くのもムリはない。それにしてもなぜあの時あんな考えが浮かんだのだろうか。もっとこう、ピキイイイイイン！！ と良いアイデアが浮かばなかったものか。

しかも彩があれから少し機嫌が悪い。今日の朝食も魚の骨だったし。いや、まあカルシウムがとれるから我慢するとしよう。

因みに昼食も魚の骨だ。

……………あれ？ おかしいな。なんだか目から汗が出てきたよ。

「何泣いてるんだ」

「違うこれは涙じゃない。汗だ」

「そ、そうか……………」

これを涙と認めてしまったら多分昼食になると精神崩壊を起こしかねない。

「おはよう……………ってどうしたのその顔。しかも泣いてるし」

「ふっ。俺がニュータ プじゃなかったのがいけないだよ」

「そ、そう」

龍神。そんな哀れみをもった顔で見ないでくれ。もう人目をはばからず大泣きしたくなる。

「そういえば、今日ってなんか生徒会の方から発表があるみたいだよ」

「「発表?」「」

「この学校のモットー、というより校訓は『遊ぶならおもいつきり遊ぼうぜ!』だ。こんな推薦入試の時に「我が校の校訓はご存知ですか?」なんて聞かれてもし答えを知っていても言いづらい校訓だが、この校訓に順じ、この学校は様々なイベント事を行ったりする。正直、年がら年中文化祭みたいな物だ。そのかわり、イベントで抜けた分の授業を補うため、補習地獄が待つわけだが。」

「で、肝心な発表の内容は?」

「さあ」

「知らないのかよ……………」

「僕も今聞いたばかりだから」

「今聞いた？ 一応生徒会主催のイベントだから発表までは一般の生徒には情報を隠さなければいけないはずだ。それをどうやって……………」

「紙絵さんから」

「……………」

ああ。あの人なら新聞のネタの為に生徒会室に無断侵入して盗聴器を仕掛けかねないな。隣を見ると、嵐も妙になっとくしている。

「多分、そのイベントと同時に号外でもばら撒きそうだな」

「だろうな。多分今教室に居ないのも、その新聞の作成をしてるからかも」

「……………はあ……………」

俺達三人は自然と、ため息が出た。

ピンポンパンポーン、と軽いリズムにのり、メロディーが流れる。放送が始まるという合図のメロディーだ。

「おう！ 俺の愛するこの学園の生徒共！ 元気にしてるかあ〜！
？」

と、元気良く声を出しているのは、二年生にして生徒会長の座についた天才生徒会長「祭盛人^{まつりせいと}」さんだ。

「今から生徒会より重大発表をするぜ！ なんと一週間後、あるイベントを行う事になった！ それがコレだ！ みんな、外を見てくれ！」

クラスのみんなが一斉に窓の外を見る。
すると、校庭に

『今年度第一回！ チキチキ！ クラス対抗優勝商品を手にしてウハウハになるのはどのクラスだ！？ 宝探し大会！』

と、白い文字で勢い良く書かれていた。おそらくよく陸上競技等で使う白線で引いたのだろう。今日の朝には何もなかったから、多分朝のHR開始直前に間に合うように引いたのだろう。なんという早業……！！（ゴクリ）

「こんかいのイベントは宝探し！ そして優勝商品はな、なんと！ クラス単位で行ける沖縄旅行だ！」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおっ！！」「」「」「」

と、学校中が盛り上がる。

「そして諸君らの中には『え？ 旅行？ どうせ土日使っただろ？

土日は家でゆっくりしたいんだよ』みたいな事を言うヤツ等も居るだろう。しかし安心してくれ。勿論！ 旅行に行くのは平日だあああああああ！！」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおっ！」「」「」

おいおい。そんなんでいいのか生徒会。

「しかも月曜と火曜だ！ これであるいだるい休み明けにムリヤリだるい体を引きずって学校に行くことはなくなるぜ！ やったね」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおっ！」「」「」

「しかもこれで四連休だあああああああああああ！！」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおっ！」「」「」

何か忘れてないか。君たち。

その代わりに、『補習』という名の地獄が待っているんだぞ？

「さて、肝心の宝だが、どんな物なのか等は一切不明！ タイムリミ時間終了時の時にそれを持ってたヤツが所属するクラスが優勝だ！ そして旅行についてだが、現地自由行動、交通費は学校負担の夢のような内容！ 友達と楽しむもよし、彼女と楽しむのもよし！ 本当に『自由』な旅行だ！」

本当にそんな事でいいのか生徒会！！ つーかこの学校は、本当

に大丈夫か！？

「それでは俺の愛するこの学園の生徒達よ！ 今日も頑張って授業に励みたまえっ！！」

ブツツ、とそのまま放送が途切れてしまった。

こうして、『今年度第一回！ チキチキ！ クラス対抗優勝商品を手にしてウハウハになるのはどのクラスだ！？ 宝探し大会！』が開幕した。

側では、紙絵さんが号外をばら撒いていた。

第六話 P 研部長宅

あの祭さんのトンデモ発表、『今年度第一回！ チキチキ！ クラス対抗優勝商品を手にしてウハウハになるのはどのクラスだ！？ 宝探し大会！』は、瞬く間に学校中に活気を与えた。

そしてその企画を行うに伴い、その日の分の授業を補うために鬼のような補習があったのだが、みんなあのお楽しみ企画の為に補習もなんのそのと気合で学校中が乗り切った。

まあ、恐らくは生徒のやる気の向上も狙い通りみたいだが。

「なんか、あの生徒会長にしてやられたような気がしてならないわね」

「ああ。それについては俺も同感。でもさ、学校中が盛り上がったからいいんじゃない？ 活気がある事はいい事だぜ？」

「ん。まあそう、ね」

と俺と彩は帰り道を歩きながらこうして雑談をする。

隣には嵐と龍神と神戸さんも居る。

「にしても、その分補習があるのがいやだよなあ」

と嵐が腕を頭の後ろに組みながらお気楽そうに言う。

「仕方が無いよ。うちの学校は一年中イベントと補習だらけのようなものなんだから」

「でも、その分生徒は集中して勉強に取り組んでいるから、全体と

しては学力の向上につながってる」

そうやってみんなで雑談をしていると、

「おっ！ やあやあやあ！ これはこれは皆さんおそろいで！」

紙絵さんが、前方の曲がり角から姿を現した。発言と様子から察するに、偶然居合わせたらしい。

「あら。莉子」

「おおっ。麗しの我が姫、彩ちゃんじゃないかあ」

「……. . . やめて。気持ち悪い」

「おおっとこりゃ手厳しい」

とおなじみのコントが一通り終わると、俺はある一つの疑問をぶつける。

「紙絵さん。どうしてこんな所に？」

「ああ。P研の部長に『THE・NEWS』最新号発行前のアンケートの結果を渡してたんだよ」

P研というのは、『パソコン研究会』の略称だ。

『パソコン研究会』とは銘打っちゃいるが、実際はアニメオタクの集まりと言っても過言ではない。しかし、一応活動はしているらしく、『全国ガン ラコンテスト』に入賞したり、『全国パソコン技能大会』とかなんとかいった、自作パソコンの大会で入賞したり

と、その活躍の幅は広い(?)。

ぶつちやけ、運動部を差し置いて学園一の功績を持っているといつても過言ではない。

「アンケートって何の?」

新聞部は、独自に様々なアンケートやランキングをとっている。

例えば、『オススメ図書』、『オススメ勉強法』、『オススメ参考書』など等、表向きのアンケートもあれば、『美少女生徒徒ランキング』や、『最新ゲーム期待度ランキング』等、表向きには出せないようなランキングまで取り扱っている。

「これこれ」

ピツ、とカバンから取り出した紙には、『P研部長が選ぶ、オススメアニメランキング』とある。

「いやあくこういうアニメランキングって結構人気でさあ。どうやら学校には隠れアニメ大好き人間が多いみたいだね」

うん。

俺もそんなにアニメは嫌いではない。少し興味があるので覗いてみると、けい ん!、ガン ムX、インデッ ス、仮面ラ ダー等など俺も見たことのあるようなアニメや特撮ドラマがズラリと並んでいた。

そしてアニメのタイトルの下にそのアニメの画像と、そのアニメについての詳細がズラリと解りやすく描かれていた。

「な、なんかスゲエな。紙絵さん、よくもまあこんなに解りやすくまとめたもんだな」

「ああ、いやあ、その、コレ、私がまとめたもんじゃないんだよねえ」

「へっ?」

「なんか、P研の部長に『オススメのアニメのランキング作るからタイトルだけ書いてまとめといて』って言ったら、こんなにも詳しくまとめられちゃって。もうこのまま使っただけだから楽だったよ」

「てへへ、と言う紙絵さんを前に、神戸さんはじっ、とこのランキング用紙を見つめる。あれ? 神戸さんってそんなにアニメ好きだったっけ?」

「愛ちゃんどうしたの?」

と、様子が気になったのか、龍神が声をかける。

「このランキングの詳細もそうだけど、読者の考慮やレイアウトも含めて何もかも完璧にまとめられている。これを作った人は、かなり凄い人。」

確かに、初見で見ても解りやすいように描かれているようには見える。
そしてこれを作ったのはP研の部長。

「そういえば、さ。P研の部長って、誰も知らないよな」

「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

生徒会長が手渡す事になっている表彰の時も、P研の部長だけは姿をあらわさない。部長の正体をP研の部員は割らないため、これは一つの学園内の都市伝説となっているほどだ。

学年一の成績と容姿を誇る神戸さんにここまで言わせるP研の部長。一度は見ておきたい、という気持ちかなぜだか湧き出てくる。

「な、なあ、紙絵さん」

「ん〜？ なあに？」

「P研の部長って、誰？」

「秘密」

予想通りの反応。

まあ、そりゃそうか。

これだけ美味しいネタを紙絵さんがそう簡単にばらすとは思えない。

「私から言う事は出来ないけど、家にまでなら案内してあげようか？」

「……………ええっ！？」「……………」

まさかの展開。今まで秘密にされてきたP研の部長の正体が明らかになるっていうのか！？

「行きたい人〜！」

と紙絵さんが手を上げる。俺達は静かに、全員手を上げた。

「はい。そうなんですよお〜」

紙絵さんはP研の部長に携帯で電話をしていた。

「えっ？ OK？ はあ〜い。解りました」

ピツ、と携帯の通話を切る。

「OKだって」

案内簡単に許可が降りたんだな。

P研の部長といえば、公には一切姿を現さない、学校一の天才、祭盛^{まつじせ}人生徒会長と肩を並べるぐらいの天才という噂もあるのだ。

そんな謎に包まれたP研の部長の家。紙絵さんを除く他のメンバー（俺を含めて）はそれぞれ緊張した面持ちだ。

因みに、今は途中で嵐が呼んだ直ちゃんも合流している。彩と神戸さんは一瞬なぜだろう、というような顔をしたが、嵐の事情を知っている俺としては直ちゃんを家で一人にしたくなかったんだろくな、と思った。

そして、龍神にも事情は説明済みだ。俺と嵐の事情を説明した時に『これで少しは命が守られる可能性が上がった』みたいな顔をしてたのは気のせいだろうか。

「学園で噂の天才、ですか。なんだか凄そうですね」

「ん〜、確かに凄いからなあ。P研の部長って、また後でなんか話をしてやるよ」

と嵐と直ちゃんは雑談をしている。

「な、なんだかドキドキするわね。謎の天才の家に行くのって」

「お、おう」

そこでふと、俺は思う。そういえば、紙絵さんって電話の時に敬語を使ってたような。それはつまり、同級生ではなく、上の学年の人、という事はやはり確定みたいだ。

「ついたよ」

と、紙絵さんが手を伸ばした先には、絵に描いたような大豪邸が広がっていた。

「」「」「」

俺達は全員文字通り空いた口が塞がらなかった。いや、だってなんか噴水とかあるんだもん！

「部長さ〜ん。来ましたよ」

と紙絵さんがインターホンに向かって言うと、ガコン、と豪邸の鉄格子のような門が開いた。

「おおっ」

「そんじゃ、中に入って入って」

と紙絵さんが俺達を案内する。門から豪邸のドアまで少し距離があつて、着くまでに少し時間がかかった。やっぱり広い。ここはアメリカか？ と勘違いしてしまいそうだ。

「おじやましまゝす」

と紙絵さんがドアを開け放つ。中には赤いカーペットが敷かれていて、階段も両サイドに設置されている。これこそまさに、『THE・GOUTE』といった感じだ。

「す、凄すぎです……………」

うん。直ちゃん。そんな「こんな凄い家、みなさんは慣れてるんですよね？」みたいな顔をしないでくれ。
俺だって驚いてるんだから。

「さあ、こっちこっち」

紙絵さんはまるで自分の内のようにひよひよいと移動している。そして、そんな紙絵さんの案内でたどり着いたのは、一つの部屋。

「それじゃ、入りまゝす」

がちやつ、と軽い感じで一気にドアを開く。ち、ちよっ！ まだ心の準備がっ……………！

「おう！ 来たかつ！」

と、聞いた事のある声が、俺達を出迎えた。そして、部屋の中に居たのは、

「ようこそ。俺の家へ。俺の愛する我が学園の後輩達」

そう。

中に居たのはなんと、学校一の天才、祭盛^{まつりせいと}人生徒会長だった。

第六話 P 研部長宅（後書き）

作中で挙げられたアニメはもう作者の趣味全開ですので温かい目で見守ってやってください（笑）

第七話 メイドの明さん

「ま、祭生徒会長、ですか．．．．．？」

「おう！　つてなんだ？　その『なんでこの人が居るんだ？』とでも言いたそうな顔は」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

もはや全員の心は一つだ。そう、言いたいのたまさしく、

「なんでアンタがこんな所に居るんですか！？」だ。

「うおお！？　お、俺が俺の家へんがしにいちゃマズイのか！？」

やっぱり、ここは、この大豪邸はこの人の家なのか。

「っていつか祭生徒会長　『祭でいいぜ』いや、そういうわけにはいきません　P研．．．．．パソコン研究会の部長も勤めてらっしゃったんですか！？」

すると祭生徒会長は、

「おう」

と簡単に言った。

いや、「おう」って．．．．．

よくよく考えれば、表彰式に出ないのも、『出ない』のではなくて、本当は『出ているが気づかれていない』だけなのだ。

だってまさか学園のオタクの頂点、P研の部長が天才生徒会長とは誰も思っまい。『学園一の天才と肩を並べる』と言われていても、実際同一人物なのだから肩を並べているのも当然だ。

「な、なんで隠してたんですか……………」

がくつ、と思わず膝から崩れ落ちる。

「ど、どうした幸助。俺は別に隠してたわけじゃないんだけどな」

隠してるつもりは無いって……………確かにそうかもしれないけど……………ん？ ちょっとまで。

「今、俺の名前言いました？」

「ん？ そうだけど」

おかしいな。

俺と生徒会長の接点なんてほとんど無いのに。せいぜい、たまに廊下を歩いている時にみかけるぐらいだろうか。それ以外は放送で声だけとか。

「なんで俺の名前を？」

「へっ？ 名簿と写真みだから」

きょとんとした顔で言い放つ祭生徒会長。

「因みに、他のヤツも知ってるぜ。白上嵐に菅田龍神に天音彩に神戸愛に、えっと、その他中の生徒は加古川真、か？ 愛する我が

学園の生徒の名前ぐらい、全部覚えてるよ」

簡単に言い放つ祭生徒会長。この学園の一クラス三十人、それが四クラスだから一学年百二十人。それが三学年だから、全校生徒は約四百八十人。

「……いやいやいや！ 四百八十人全員の名前と顔を覚えてるって事だろ！？」

しかも何気に他中の生徒まで知ってるし！

「ありえねえだろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

「はっはっはっ！ やっぱ面白いなあ！ お前達は！」

「生徒会長。『お前達』というのはやめてください。俺をこんな『おちゃらけバカ』と一緒にしないでください」

「生徒会長。俺ではなくてこの嵐を『くたばれこのバカ』と呼んでください」

「殺んのかこらああああああああああああ！！！！」

ガッ！ と互いの胸ぐらをつかむ。

「生徒会長。僕達をこんな野蛮な猿人類達と一緒にしないでください」

と、俺達の殺しあいじゃれを龍神が冷めた目で見ていたのだった。

「「・・・・・・・・」」

俺と嵐はあの後、ニコニコ顔の祭生徒会長に取り押さえられた。もつと厳密に言つと、ボロボロにされた。よつて、今は仲良く頼に痣が出来ている。

「全くアンタ達は」

「本当にバカですね」

彩と直ちゃんからのトドメ。後輩に「バカ」と言われるのはなかなか無いだろう。

「「バカはコイツだ」」

「「どっちもバカよ」です」」

ゴツン、と彩と直ちゃんからのダブルパンチ。

「「すみませんでした」」

男つて、本当に弱い生き物だと痛感した時だった。

「それで、なんでお前等家に来たんだ？」

「「「「・・・・・・・・」」」」

「P研の部長がどんな人が興味本位で見に来ました」なんて言いづらい。なんとか別の理由を模索しなくては。

「P研の部長がどんな人が興味本位で見に来たんだよね」

今まで静かだった紙絵さんが急に爆弾を投下してきた。俺と彩はすぐさまその爆弾娘の口を塞ぐ。

「あ・ん・た・は・（お・ま・え・は・）バカかつー!!」「

こんな失礼な事を生徒会長に言えるかつー!

「ふつがふがふご?（訳：だってそうでしょ?）」

しかし祭生徒会長はきよとんとした顔で

「なんだそんな事か」

とだけ言った。

「あれ? そんだけですか?」

と嵐が意外そうな顔で言った。

うん。そりゃあ意外だろうな。俺だって意外だと思ったし。

「だって俺がお前等なら絶対見に行くもん」

「「「「「「「「「「「「「「「」

なんかすげえ納得。

「でも、ま。このまま帰るのもなんだからゆっくりしていけよ」

「はあ」

「いや、この際泊まってけ！ どうせ明日は休みだしなっ！」

「「「「「はあっ!?!」「」「」「」

俺達の意見を全く聞かずに、トントン、いや、ドンドンと話を進める祭生徒会長。

「遠慮すんなって！ 着替えとかも全部用意させるからさっ！ . . .

. . .俺も暇だし（ボソッ）」

「今本音出ましたよね!?!」

あれか。俺達はアンタの暇つぶし要員ですか。

「決定だな！ 明^{めい}っ！ 今日は六人が泊まってくぞ！」

「かしこまりました」

気がつくくと、祭生徒会長の近くに急にフツ、メイドが現れた。『メイドは忍者のような身のこなし』というのはよく漫画とかである設定だけど、まさか本当に実在したとは。

見てみると、メイドの明さんは綺麗な人、だった。年は恐らく祭さんと同じで、彩と同じセミロングの髪。メイド服がやけに似合っている。

「初めまして。如月明きんづきあきらと言います」

ペコリ、と丁寧にお辞儀をする明さん。やっぱりメイドさんって、
礼儀が良いな。あれだよ。彩に足りないのもこういった礼儀が・・・

「なんか言った？」

ヒュンツ、と俺の目の前を凶器いんぎがかすめた。

「言ってますん」

今度からは不用意な思考は改めようと思った。そうでもしないと
一カ月後、俺はこの世には居ないだろう。

「明は生徒会の副会長もやってくれてるんだよ。いやあ。助かる
助かる」

「「「「「ええっ!?!」「「「「「」

普段、祭さんのイメージが強すぎて他の生徒会の人って言われて
もあんまり浮かばないけど、メイドの明さんが生徒副会長!?! そ
れじゃあ祭さんと同い年!?!

って、同い年のメイドさん!?! 学校にも一緒に通ってるって事
か!?! 一気に受け止めた情報量が多すぎてなんだか目眩がおきそう
だ。

「き、恐縮です」

再びペコリと頭をさげる明さん。

そんな明さんの頭に手をぽんっ、と置いた祭さん。

「もう少し自信持てっ！ お前が居てくれてるおかげでかなり助かってるんだから」

「は、はあ………」

おどおどとして、それでもどこか嬉しそうな表情を、明さんはしていた。なぜ明さんがそんな表情をしているのかが少し、気になった。

いや………まさか、な。

第八話 セルフサービス

突然、祭生徒会長の家に泊まる事となり、まずはそれぞれの部屋に案内された。

「ま、個室もあるんだけど、皆で居た方が楽しいだろ？」

と、祭生徒会長に案内されたのは、ベッドが四つ並んでいる部屋だ。

「ここがお前ら男子の部屋だ。明。女子を部屋に案内してやってくれ」

「かしこまりました」

女子達は、俺達の隣の部屋へと案内されていった。そしてそれを見送ると、俺達は目の前の部屋の中に入る。

「荷物はまあ、適当にその辺に置いていてくれ」

荷物、というより学校のカバンを隅にまとめて置く。

「それじゃ、後でまた来るな」

それだけ言い残して、祭生徒会長は部屋を出て行った。パターン、とドアが閉まる。

「なんか、色々と展開についていけねえ……」

「でもま、たまにはこういうのもいいかもな」

確かに、嵐の言つとおりなのかもしれない。こんな大豪邸に泊まれる事なんて、滅多に無いのだから。こういう時ぐらい楽しもう。

「そついえばさ、例えば、だよ？」

「「？」」

龍神がふと、何かを思いついたかのような目をしている。

「もしも、学校 みんなに僕達の状況がバレたら……」

「「殺されるに決まっているだろ」」

「いや、殺そんなことされることぐらい解ってるよ。だから、その場合祭まつりさんはどうでるのかな、って」

一体何が言いたいんだ龍神は。しかし、そんな俺をよそに、隣では嵐が「なるほどな」と呟いている。

「？ 何が」

「ったく。いいか、龍神が言いたいののは、もしも今の俺達の状況を祭さんにバラした場合、祭さんが、俺達の味方になってくれるかどうかって事だ」

「そうか。確かに、俺達も今まで明さんが祭さんの家のメイドで、それも一つ屋根の下で一緒に暮らしてるなんて知らなかったもんな」

「紙絵さん号外をばら撒いていない所を見ると、恐らく祭さんから口止めされているのだろ。そうでなければ、多分今頃祭さんの命は全校生徒の手によって闇に葬られているだろ。それはつまり、『全校生徒に知られては困ると自覚しているから』だよ。きっと」

「明さん、可愛かったからな」

「ああ。それに胸も大きかったしな」

嵐。お前とは気が合うよ。

「……………?」

「あれ? どうしたのですか? 彩さん」

「……………いや、なんか今もの凄いイラッとした感じがして」

「そ、そうですか」

とりあえず、隣の部屋につながってる壁を拳で叩きつけて警告を与えておこう。ついでに部屋を出た瞬間襲撃しよう。

彩はそう、心に決めたのだった。
対して。

(なぜだか解らないけど、後で嵐さんには歯をくいしばってもらいましょ)

と直は心に誓うのだった。もしも幸助と嵐がこの二人の女子の考えを読み取れてた場合、口をそろえてこう言うだろう。

「女子って怖い」

と。

「因みに、明さんは『美少女生徒ランキング・二年生部門』で堂々の第一位だしね」

「やっぱりそうか。明さん可愛いもんな。っつーか、なんだかんだ言って龍神って情報通だな」

と、俺が呟いた所で、隣の部屋からドンツ！！と拳を壁に叩きつけたであろう音が響いてきた。なぜだろう。壁の向こうから「アトデカクゴシナサイ」という声は今にも響いてきそうだ。

俺の直感力がこの部屋を出た瞬間、俺の命は無いを告げていた。すると、ガチャツ、と部屋のドアが開いた。出てきたのは私服に着替えた祭さんだ。

「晩飯は食堂で食うから、三十分後には部屋の外に出てくれよな。そんだけ」

バタン、とドアが閉まる。

さようなら。俺の命。

「……なんだろう。俺、後でとんでもない目にあいそうな気がする」

嵐。死ぬときは一緒だぜ？

「おう。お前ら、揃ってるな〜って幸助、嵐。顔が腫れてるぞ？
どうした？」

「「転びました」「

「いや、でも普通転んで顔に腫れは出来な……………」

「「壁に顔をぶつけました」「

「一体どうし……………」

「「ドアに小指をぶつけました」「

「そ、そうか」「

言えない。

部屋を出た瞬間、「阿修羅と化した幼馴染みが襲い掛かってきて
ポッコポコにされました」なんて言えない。

というか俺は何もしてないのになぜ殴られなきゃならんのだ。

「今日の晩飯はセルフだから好きなだけ食って行けよ」

「……………セルフ？」「……………」

セルフって、ホテルやファミレスのセルフサービスしか思いつか

ない。あの「ご自由におとりください」みたいな。俺達の部屋があったのは、二階。そして食堂は三階だった。この家は一体何階まであるんだ。

階段を登って、着いたのは大広間のような食堂だった。中には、バイキングのような設備があり、お皿やトレイ、そして和食から洋食までかねそなえた様々な料理の数々。

「好きだけ食っていいぞ〜！ この家の料理ってめちゃくちゃ美味いんだ。なっ！ シェフ！」

すると、厨房の方から出てきたのは、シェフと思われる青年。結構若い。年は二十代前半、と言った所だろうか。

これだけの若さでもうこの豪邸の料理人として働いてるなんてウデはかなりの物なのかもしれない。

「ありがとうございます。祭坊ちゃま」

ペコリとシェフは頭を下げる。

「……………」

俺達はぶつちやけ、開いた口が塞がらなかった。セルフって、そのまんまの意味だったのかよ……………

「おおっ！ これは豪華豪華 さっそく食べちゃおっと！ いっただきま〜す」

お皿とトレイをつかみ、紙絵さんはすぐさまセルフサービスと化している夕食へと向かっていった。

「なんか、時々思うけど、あの子の中に『常識』ってあるのかしら？」

と、彩がポツリと呟いた疑問に俺達は何も答えられなかった。

とりあえず、ボーっとしても仕方が無いので俺達は各々夕食をとる事にした。トレイをつかみ、その上に皿を乗せ、夕食の備え付けられているテーブルへと移動する。俺は、和食が好きなので和食コーナーへと移動する。まずはごはん、味噌汁を乗せる。

「後は………」

「はい。焼き魚、でしょ」

ひょいっ、と俺のトレイの上に彩が焼き魚を乗せる。

「おっ。さんきゅっ」

「んっ。いーわよ別にこれぐらい」

見てみると、彩のトレイの上にもごはん味噌汁。彩は俺と同じ和食派だ。このへんは気が合う。

「彩はコレだろ。卵焼き」

ひょいっ、と彩のトレイに俺の手近な位置にある卵焼きを乗せる。

「あ、ありがとう」

「いって」

「な、なんで解ったの？」

「お前と一緒にだよ。幼馴染みだしな、大体解るって」

「そ、そう」

ん。なんだろう。彩の顔がほんのり赤い。

「どーした彩。顔が少し赤いぞ？」

「なっ！ べ、別に赤くなってなんか……………」

「……………彩、まさかお前……………俺の事を……………」

「は、はあっ！？ 別にアンタの事なんかこれっぽっちも……………
……………」

あわてても無駄だ。俺には解ってるのだから。今更隠したって無
駄だぜ？

「俺の事を散々ボコボコにしたから、その分汗でもかいたんだろ？」

「……………」

また彩が俺のトレイの上に何かを乗せた。

ってこれは……………!!

「悪魔^{ビーマン}．．．．．だと．．．．．!」

「そつ。アンタ嫌いだったでしょ?」

「な、なんとという愚行!」

「ふふん。好き嫌いはいけないわよ」

「ああっ! 畜生! お前の嫌いな物は．．．．．」

「それじゃっ」

そして彩はすぐさま俺の元を離れ、戦線離脱した。多分、このピーマンの山をどけると、後で阿修羅モードとなった彩にゴミクスにされるだろうから俺は頑張ってこの悪魔^{ビーマン}食べる事を決意した。

第八話 セルフサービス（後書き）

訂正箇所があったので訂正しておきました。

「味方」の誤字と、祭と明の設定です。

祭と明は二年生です。

第九話 渾身の告白(?)

悪夢を終えた後、俺達はそれぞれの部屋に戻る。ぶっちゃけ俺は龍神と嵐に担がれて戻ったが。

いや、本当にピーマンが苦手なんだって。

「うぶ……あ、彩の野朗……」

「そろそろ食べられるようになったら?」

「無理だ。もうこの世の悪魔共を全て駆逐しなければ、俺は今日の悪夢から解放されないだろうな」

ボフツ、と俺はベッドに顔をうずめる。家のベッドよりもふかかだ。思わず寝てしまいそうなくらいに。

「まだ寝るなよ。たしかもうすぐ風呂だから」

と、嵐がさつき明さんが持ってきてくれた俺達の分の着替えを確認しながら俺に言う。

明さんに聞いてみると、大浴場（この呼び方の時点でもう家の風呂じゃないだろ）を使える時間が今日は限られているようだ。

なんでも、大浴場のメンテナンスとかなんとか。

「確か、大浴場には九時集合みたいだな」

「そつみたいだね」

「今は八時半か。そろそろ準備するか」

「いやあ〜。こうしているとなんか中学の時の修学旅行を思い出すな」

話をする俺達の間、気がつくやと祭さんが居た。

「」「どうやって入ってきたんですか!?!」「」

「こ、この部屋って確か鍵がかかってたはずだぞ!?! どうやって入ってきたんだこの人はっ!?!」

「あっはっはっ! まあ細かい事は気にするなって!」

「気にしますよ!」

簡単に人が侵入してくる部屋に居たくはない。

「鍵! 鍵はどうしたのですか!?!」

「ああ。そりゃあれだよ。俗に言うピッキング」

祭さんの右手には、キラリと黒く光るヘアピンが光っていた。ピッキングって.....アンタは一体何になるつもりだ。

「そうだそうだ。コレ持ってきたんだっ」

ゴソゴソと祭さんが手に持っているスポーツバッグから何かを取り出してきた。ゴトツ、という鈍い音を立てて床に落ちたのは、ビデオカメラとその他多数。

ざっくり言ってしまうえば、『THE・盗撮グッズ』の数々。

「……………なんですかコレ」

「男湯と女湯は隣り合わせだ。……………この言ってる意味が、解るよな？」

「……………それでいいのか生徒会長は！！！！」

こんな生徒会長は見たこと無いぞ！？いや、これから未来永劫祭さんと同じような生徒会長とは会わないだろうけど。

「そもそも祭さん。俺達はそんなおろかな事はしませんよ」

「意外と真面目だな」

「いや、真面目とかそんなんじゃないですね」

そつだ。俺達は別に真面目ってわけじゃない。そもそも。

「そんな事をすれば、確実に死が待っているからですよ」

フツ、と俺は悲しげな表情で事実を述べる。本心を言うと、正直覗きたい、が。覗き＝死あるのみ、なのだ。

普段の彩の暴挙を見れば解ると思うが、こんな事をしようものならば恐らく俺に明日はない。ぶっちゃけ、自殺を行うような物なのだ。

そんな死を犯してまで俺達は覗きを行うつもりはない。

「あー．．．．．なんとなく理解したわ」

「ご理解していただけで、なによりです」

その後、祭さんは部屋を出て行った。心の底から同情してくれていた目がなんだか悲しかった。

俺もね、結構苦労しているんですよ。

集合時間には、もう全員大浴場の前に集まっていた。勿論、俺達はバスタオルと着替えのみ。自殺行為のそをする気は全く無い。その事を理解したのか、彩は最初はじろじろと俺達を警戒心で満ち溢れたまなざしで見えていたが、その警戒も解かれたようだ。

無実が証明されてなによりだ。

このままありもしない罪のレッテルを貼り付けられたままだと、その内襲い掛かってきそうだからだ。そして、男子と女子はそれぞれの大浴場へと別れた。

大浴場、という単語は中学の時の修学旅行で聞いた事がある。要するに、『旅館にある大きなお風呂』ぐらいの認識だった。

実際、修学旅行の時に入っていた旅館はそのイメージのまんまだった。

しかし。

俺達の目の前に広がる大浴場は、『大きなお風呂』どころではない。高級感溢れるようなその光景。旅館のお風呂を『十』という数字で評価するなら、この家の風呂は『千』だ。

「癒される〜……………」

湯船につかると、ぽかぽかと体の芯まで温まってきそうだ。頭の上に、畳んだタオルを乗せて湯船につかる。

これこそ、日本人の風呂の入り方だろう。たぶん。

「お前ら〜。こっちこっち」

広大な湯船につかっていると、同じく湯船につかっている祭さんが壁際の方でなにやら俺達を呼んでいる。なんだろう、と思っ近づいてみる。同じく、嵐と龍神も来る。

「集まったな。よし、少し静かに……………」

しっ、と人差し指を口の前に当てて、祭さんが静止を促す。その指示に従い、しばらく静かにしていると、

『彩』

「こ、この声は、紙絵さん？

ってまさか……………!!

『り、莉子!?!』

これは彩の声。間違いない。この向こうは女湯だ。上を見上げると、この男湯と女湯を隔てる壁は天井まで届いてないらしく、声がバッチリ届く仕様となっている。

『うっふっふっ。大浴場コトなら逃げ場は無いわよ〜』

『逃げ場って何する気よ!? それにその不自然な手の動きを止めろ! 嫌な予感しかしないのよっ!』

『問答無用! 覚悟』

『ちよっ! や、やめっ!』

.

この先から響いてくる彩の悲鳴からして、何が行われているかが解る。美少女二人が何をしているのか。

.
.
.

「幸助。鼻血が出てるぞ」

嵐が言う。体って正直だな。

『なに聞いてんのよっ!』

上からオケが降ってきて、見事に俺の頭に直撃した。恐らく彩が向こう側から放り投げてきたのだろう。正直、悔いは無い。俺は今とても満足だ。

『この変態ッ!』

満足な俺に、もう一撃オケがプレゼントされた。

「^{いて}痛え」

すりすりした後頭部をさする。風呂で彩からの襲撃で受けた後頭部が痛む。今、俺は部屋の前にあるベランダに居る。一足先に風呂から上がった俺は、風に当たろうとベランダに出たのだ。夜風が頬をさする。風呂上りなので、ほてった体には夜風は心地良い。

「ったく。彩のヤツ、もう少し加減って物を……………」

「しなくて悪かったわね」

ベランダの仕切りの向こう。そこから、彩の声が聞こえた。そうだ。忘れてた。俺達の部屋と彩達の部屋って隣り合わせだったんだ。

「なんだ。お前ももう上がったのが？」

「莉子が色々と変な事してくるから」

「ああ。要するに逃げてきたんだな。」

「逃げてないっ」

「お前はエスパーか。つーかあれか。女はみんなエスパーか？」

「……………」

「……………」

しばらく、俺と彩はだまつたまま夜空を見上げる。いや、彩は実

際どうしてるか仕切りのせいで解らないけど、恐らくは俺と同じで夜空を見上げているだろう。

「明日の朝食って、何が出るんだろうな？」

「さあね。夕食がセルフサービスだから、朝食もそうじゃない？」

「うん。ここの肉じゃが結構美味しかったからな。また食べた
いよ」

「そ、そう」

「あつ。でも前お前が作ってくれた肉じゃがも美味しかったな。また作ってくれよ」

「へっ？ あ、そ、そうね。また作ってあげる」

「そうか。じゃ、楽しみにしてるよ」

そしてまた沈黙が訪れる。しかし、それは意外にもすぐに、そして彩の方から破られた。

「アンタって、肉じゃが、好きよね」

「そうだな。結構好き」

「……わ、私、」

「？ どうした？」

「私は、大好きよ」

「何が？」

彩にしてはめずらしく歯切れが悪い。彩はもっところ、結構ズバとハッキリと物事を言うヤツなんだけどな。

「肉じゃが………が、好きな人」

………？

全く意味が解らない。この言葉の意味の説明が入るのかと思いきや、それっきり彩はずっと黙ったままだ。

「え〜っと、彩さん？ 何の意味だかさっぱり………」

「ッ！ も、もう知らないっ！」

ドンッ！ と窓を乱暴に閉める音がした。いやいやいや。何の事だかさっぱり解らないって。俺はしばらく、わけも解らずその場に立ち尽くすのだった。

(い、言っちゃった言っちゃった言っちゃった言っちゃった言っちゃった………)

一応、『渾身の告白』、だった。

前々からそろそろ告白はしようとは思っていた。

しかしなかなかチャンスが無く、共同生活を始めてからも、その

チャンス、というより良いタイミングが回ってこなかった。

そして今日のこの『お泊り』だ。これはチャンスだ、と思った。

そして風呂場から上がって、まだ他の人が上がっていないこのタイミング。

幸助も部屋に一人つきりときた。

絶好のチャンス。

そしてぶつけた渾身の告白。

しかし問題は。

(あ、あのバカ、なんつつつつつつつつ、にもっ！ 気づいていないっ！ 普通、あのタイミングであのセリフと言ったらアンタの事を指してるに決まってるでしょうがっ！ ああ鈍い！ 本当に鈍いっ！)

確かにあのセリフを普通の状況で言ってもわけが解らないだろう。というより、素直になれない彩にはドストレートに告白なんて無理だ。

彩は当然それを計算していて、わざわざ話題をふったのだ。それなのに。

(な・ん・で！ あのバカは全く気づいていないのよおおおおお
おおおおおおおおお
おおおおおおお
おおおおおおおおお！！！)

こうして、恋する乙女の渾身の告白は空しくもからぶりに終わったのだ。

第十話 第一のヒント

宝探^{けっせん}し大会当日。

学校全体が、異様な空気に包まれていた。後に全校生徒に通知された内容によれば、なんと旅行には学校外の人間も連れて行けるらしい。

よって、学校外に彼氏、もしくは彼女が居るような人も連れて行けるというワケだ。

この通知によって、特に学校外に彼氏、もしくは彼女が居るような連中もメラメラと闘志を燃やしている。

クラス単位、と言っても旅行自体は自由そのものだからカップル二人っきりの旅行となるわけだ。そして、生徒会長からの開会宣言が始まるまであと五分を切った。

大半の生徒は運動場に集まっていて、俺達も例外では無かった。

「いやあ〜。解ってはいいたが、やっぱりスゲエな」

「まあこの学校はイベントが多い上にその一つ一つのイベントの規模が他の学校とは比べ物にならないからね。皆が必死になるのも無理はないさ」

などという会話を、嵐と龍神がしている。そして側には彩、神戸さん、そして紙絵さんも居る。なぜか紙絵さんの手にはなぜかカメラが。

「うつつふつつ。こういう場合はシャッターチャンスが溢れているからね〜。バシバシ撮りまくるよ〜」

それに、『THE・NEWS』の記事にもなるんだから」

「そ、そう………」

彩、一応言っておくが気をつけるよ。
いやホント、マジで。

『おつっ！ 俺の愛する学園の生徒共！ 元気にしてるか！？』

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお~~~~~ッ！！」「」「」

祭さんの声に反応して、雄たけびを上げる全校生徒。本当に、この学校の連中はノリが良いと思う。

『さて、かつたるい話は無しにして、さっそく宝の第一のヒントを上げちゃうぜ 次のヤツに宝のヒントが隠されてるからな〜！』

そう言ったと同時に、バサッ、と校舎の屋上から白い垂れ幕が落ちる。白い布には、黒い文字でこう書いてあった。

『ve¥k：ygg84』

「んじゃ、これで開会宣言を終了し、『今年度第一回！ チキチキ！ クラス対抗優勝商品を手にしてウハウ八になるのはどのクラスだ！？ 宝探し大会！』を開始する！」

開会宣言が終了し、パパンツ、と校舎の頭上に三色の花火が上が
る。

こうして、『今年度第一回！ チキチキ！ クラス対抗優勝商品を手にしてウハウ八になるのはどのクラスだ！？ 宝探し大会！』

が始まった。

「さっぱり解らない」

白い垂れ幕に黒く輝くヒントの文字。しかし、何がなんだかさっぱりだ。そもそもなんだよ。『ve¥k:ygg84』って。しかも第一ヒントって事はまだ他にもヒントがあるって事だろ。冗談じゃねえ。

「そもそも、宝自体がどんな物か解らないからね。ヒント無しで探すのは難しいと思うよ」

「それじゃあやっぱりヒントを解かなきゃならないのか……………」

むづづ、と俺は白い垂れ幕とにらめっこを続ける。しかし、そうしてもヒントが解るわけも無い。周囲を見てみると、他の生徒達もあの白い垂れ幕とにらめっこを続けては頭を抱えている。

「それじゃ、行くよ」

「へっ？ 行っくってどいこっ？」

「パソコン室」

と龍神と神戸さんが俺達を先導する。

「パソコン室……………そうか。なるほどな」

「なんとなく解ったわ」

「ああ。なるほど」

俺以外のメンバーはどうやらみんな解ったようだ。という事は解ってないのは俺だけ!?

「他の生徒に気づかれないように移動するよ」

と、龍神が他の生徒に気づかれないようにみんなを引き連れて校舎へと向かう。

「つつーか。なんでパソコン室に行くんだ？」

「まあ、確認みたいな物だね」

「確認って……」

ダメだ。さっぱり解らない。

「もしかしてアンタ、まだ解けてないの？」

「鈍いな。相変わらず」

「やっぱり鈍い」

「ドンマイ」

次々と俺を貶めるコメントの数々。

「……イヤだなあ。涙なんて出てないぜ？」

「ワンワン！」

と、校舎へと向かう俺達に、突然犬がほえる。種類はゴールデンレトリバー。祭さんが（なぜか）この学校で買っている犬、「ヨッシー」だ。

なぜか目から汗が止まらない俺を慰めに来てくれたのだろうか。

「うわっと、悪いなヨッシー。今相手してる暇は無いだ」

なぜだか俺はヨッシーになつかれている。本当に謎だ。初めて会った瞬間からいきなり突撃されて顔をべろんべろんになめまわされたものだ。

ヨッシーと別れ、校舎へと入る。

そして俺達は校舎の三階にあるパソコン室に到着した。

「で、何を確認するんだ？」

「勿論、コレだよ」

と龍神は一台のパソコンを指差す。

「？」

「まだ解っていないようだから説明するけど、あのヒントの『ve¥k:ygg84』っていうのは、いわゆる『キーボード暗号』ってやつだよ」

「『キーボード暗号？』」

「そう。あのヒントの文字を、このキーボードに当てはめていくんだ。この場合、ひらがなにね」

「あの暗号の文字を、キーボードに当てはめる……………」

確かヒントは『ve¥k:ygg4』。俺はパソコンに設置されているキーボードに目を通す。

vはキーボードで言うと、『ひ』、eは『い』、¥は『ろ』、kは『の』、:は『け』、yは『ん』、ggは『き』、8は『ゆ』、4は『う』。

「ひいろのけんきゆう……………ひいろのけんきゆう……………
『緋色の研究』って事さ」

と龍神はニヤリとする。

「緋色の研究？」

なんだそれ。聞いた事ないぞ。

「コナン・ドイルが執筆したシャーロック・ホームズシリーズの第一作目」

と神戸さんが俺の様子を察して答えてくれる。

「本、つっ—事は図書室にある『緋色の研究』の中にヒントがあるのか？」

「違うよ。よく思い出してよ。祭さんは言ったよね。『次のヤツに

宝のヒントが隠されてるからな』って。コレも、ヒントの一部なんだよ」

そして神戸さんに説明をバトンタッチする龍神。

「シャーロック・ホームズシリーズの『緋色の研究』の次の作品は『四つの署名』。だから図書室にある『四つの署名』に多分ヒントが隠されてると思う」

「な、なるほど……」

種がわかってしまえばなんとも簡単なヒントだ。初見ごろしにも程がある。こんな簡単な（俺は解けなかったが）問題を祭さんが作るはずが無い。大方、明さんに押し付けたのだろう。

「この程度のヒント、多分もっと多くの人が解けてると思うよ。さあ、僕達も急ごう」

俺達はパソコン室を後にして、図書室へと向かう。パソコン室は三階だが、図書室は一階。移動に少し時間がかかる。

「龍神と神戸が一番に解ってたみたいだが、いつから気づいたんだ？」

と嵐が走りながら質問する。すると龍神と神戸さんが同時に、

「見た瞬間から」

とだけ答えた。どんだけ頭の回転が速いんだ……この二人は。

そして、途中で特に他の人にも会う事も無く、俺達は図書室にたどり着いた。

ここに、第二のヒントがある。

第十一話 第二のヒント

図書室に入ると、中にはまだ人がほとんど居なかった。しかし、図書室のカウンター席に、ポツンと眼鏡をかけた女子生徒が、一人で本を読んでいたくらいだ。

「あつ。初書先輩そめがきじゃないですか」

と紙絵さんがカウンター席で本を読んでいる女子生徒に話しかける。

「あら。紙絵さんじゃない。どうしたの？ こんな所に」

初書葉子先輩そめがきよつこといえは、図書委員長じゃないか。見たところ、暗号が解けた……. というわけでも無さそうだ。

そもそも、本当に暗号が解けたのならもうとっくに次のヒントの場所に向かつてるだろうし。

「初書先輩そめがき。私達の他に図書室に来た人達って、居ますか？」

「ん？ そうね。アナタ達が来る少し前に、生徒会長が来たわよ」

「祭さんが？」

「そう。どうやら今回の宝探し、企画したのは生徒会長だけど、ヒントや目標の宝とかを設定したのは副生徒会長らしいし。あの生徒会長はなんだかんだで楽しい事が大好きだからね。自分も参加したかったんじゃないの？」

「「「「「ああ〜……………」」」」」」

納得。

確かにこんなイベント、生徒会長あのひこなら喜んで参加しそつだ。しかしこれは相当マズイ事になった。天才生徒会長と競争とは。これはかなり手ごわい敵だ。

……………つーか勝てる気がしねえ。

「と、とりあえず、『四つの署名』を見に行こうか」

俺達は、『ミステリー』のコーナーへと足を運ぶ。この学園の図書室は広く、そして大きい。それゆえに収められている本の種類や量も膨大で、パソコンでの検索機能を儲けなければいけない程だ。そもそも、こんなイベントを何回も行うぐらいの資金もあるのだから、当然だろう。

「あつた。これだ」

『四つの署名』だけでも本棚に十冊あつた。そして、その内の一つを手に取り、開く。本が納められているスペースは、二つの本棚に挟まれているので、ぎゅうぎゅうだ。

そんな所でみんな一つの本に視線を集中させているので、正直狭い。

「次のヒントは何処にあるんだろう?」

パラパラとページをめくる龍神。

「これは?」

と神戸さんが本の間挟まっているしおりに手を伸ばす。

「うっ」

と龍神の手に、神戸さんの手が当たる。

「うめん」

「い、いや。別に、いい、よ」

と照れる龍神。全く。手が当たったぐらいで照れるなよな。俺なんかいつも手どころか顔面に彩の拳が当たるんだから。

「悪かったわね」

げしっ、と彩が俺の足を蹴る。もう彩のエスパーには驚かないぞ。というか、蹴りが通称、『弁慶の泣き所』と呼ばれている場所にヒツトしたのが痛くて、驚く所では無いのだが。

「痛えッ！！」

よろっ、とよろける俺。思わず彩にぶつかってしまっ。

「ちよっ、ぶつかってこないでよ！ 狭いんだから！」

「い、いや。今は不可抗りよ……」

むにゅり、と腕になにやらやわらかい物が当たって……

「きゃっ！？ ち、ちよっど！？ 何処触ってんのよっ！？」

文になってないからかなりずさんだね。アナグラムだと簡単に解る」
そして龍神はポケットからメモ用紙とペンを取り出し、メモ用紙にサラサラと文字を書いてゆく。

「まずはこの文をひらがなに直してみよう」

『言つ会初日』

「いつかいしよじつ」

「『しよじつ』？ 『しよにち』じゃなくて？」

と彩が質問をする。

「うん。一度解いてみた結果、『初日』は『しよにち』では無く、『しよじつ』と置き換えるのが正しいかもね。そして、この文の配置を変えてみると」

龍神が更に文を書き加えてゆく。

『言つ会初日』

「いつかいしよじつ」

「ついでにかいじょう」

「『追試会場！』『追試会場！』『追試会場！』」

「多分ね。この学校に関する言葉の組み合わせがこれぐらいしか

無かったし」

この学校には、『追試会場』と呼ばれる特別な教室がある。『追試会場』には携帯電話が届かないようにしてあるし、そして携帯等を探知するための金属探知機、そして会場内で使う筆記用具を完備、会場内あらゆる物の持ち込み禁止等、追試する際のカンニング行為を防ぐための設備がある教室だ。

次のヒントは、その追試会場にある。

直と齊藤明子（たけしつあけい）は現在、二時間目の授業にのぞんでいた。しかし、二時間目は担当教師の体調不良により自習となっているのだが。直の席の目の前が明子の席なので、二人は配られた自習中の課題をすくぐに終えて、おしゃべりに精を出していた。

「へえ〜。やっぱり楽しそうね〜。嵐さん達の学校って」

「その分、補習が大変らしいけどね」

と直は苦笑いする。宝探しのイベントの為に補習で苦しむ嵐をすぐ側で見えてきたからだろう。

「でもさ、優勝したら沖縄旅行でしょ？ いいなあ〜」

「なんでも、その旅行って学校外の人でも招待出来るらしいよ」

「うそっ!?!? じゃあもしも嵐さん達が優勝したら私も連れてってもらおうかな」

「良いんじゃない？ 多分連れて行ってくれると思うよ。まあでも優勝出来たらだけど」

「あつ、でも」

と明子はちやかすように微笑む。

「お二人の邪魔しちゃ悪いから遠慮しておこうかな」

「なっ！ じゃ、邪魔って何の事!？」

「またまた」

と明子は直をからかう。そして直は明子にからかわれつつも、『もしも』の展開を考える。

(もし……もしも優勝したら、嵐さんと沖縄旅行……
・それも一泊二日のお泊り……)

ぼく、と直は『もしもの沖縄旅行』に思いをはせる。もうすでに毎日一緒に暮らしているにもかかわらず旅行先でのお泊りにドキドキするのはやはりもう今の生活に慣れつつあるからなのかもしれない。

こうして、自習時間が過ぎてゆくのだった。

第十二話 お宝見つけた その後のピンチ

追試会場はなんと四階にある。

今までで一番遠い。というか、これ校舎の中ばかり移動しているぞ。ヒントを解く事を諦めて必死になって校舎の外を探してる連中は一体なんなんだ。

でも、ゆっくりはしてられない。

図書室にも人が集まりつつあるし、なにより祭さんが先行している。

モタモタしてられない。

「何してんの幸助！ 急ぎなさいよ！」

「わ、解ってるって彩！ つつか、なんでそんなに必死になってるんだよ！」

俺の場合はただ単に楽しんでるのと、学校を休みたいがためなのだが、彩はこんなに必死になるとは意外だ。
アイツ、そんなに学校を休みたいのか？

（お、沖縄旅行．．．．．^{アイツ}幸助との沖縄旅行．．．．．ふ、二人きりで．．．．．）

なにやらブツブツ言っでは時折顔が赤くなっている。これはそっとしておいた方がよさそうだ。

階段を登り、四階に到達。『追試会場』と書かれたプレートが付いてある教室に足を踏み入れる。中には無数に広がる机。変わった所は何も無い。

「おっ。これがヒントかな？」

紙絵さんが追試会場のホワイトボードに目を向ける。俺達も黒板を見てみると、そこには次のヒントが記されていた。

『もうネタ切れなう（．．．）』

最後のヒントは”シ”』

「「「「「「「「「「「「「「「「」

一つ目二つ目と暗号の連続だったのに、最後の最後でネタ切れとは。相当悩んだんだろうな。明さん。

．．．．．つーか顔文字がやけにイラつく。しかし、これだけでは何も解らない。

「あれ？ まだ何か書いてあるよ？」

紙絵さんが更なる発見をする。あのネタ切れヒントの真下に、『全ての頭を取れ』とだけ書いてあった。

「どつやらこれも暗号みたいだね。いや、今までのも暗号と言えるようなレベルの物じゃなかったけど」

それは言っただけだよ。明さんだって必死に考えたんだよ。

「全ての頭を取れ？」

彩が首をひねる。意味が解らない。のは俺にとって恒例だが、これも本当に意味が解らない。

「頭……ああ。そういう事が」

もはや探偵と化した龍神はもう解ったようだ。

「多分、これは今までのヒントの答えの頭を取ればいいんだよ」

「今までのヒントの？」

「そう。最初のヒントは『四つの署名』、そしてその次のヒントは『追試会場』最後のヒント(?)は

『シ』。で、第一と第二のヒントをひらがなに直して、最初の文字だけ取って順番に読むと、『よつし』となる」

「よつし?」

「よつし……ヨツシ……ヨッシ……ヨツ
シー」

「ヨツシー!?」「ヨツシー」

ヨツシーといえばあの祭さんのペットの名前だ。さっき外で見かけたが、まさかヨツシーが^{ターゲット}お宝!?すると、軽やかなメロディーと共に校内放送が入る。

「^{タイムリミット}時間終了まであと十分です」

これは明さんの声だ。

まずい。早く急がないと……!!

俺達はヨツシーを探すため、急いで校舎の外へと出た。
先ほど見かけた場所にはもうヨツシーは居なかった。

「とりあえず、手分けして探すか」

嵐の提案により、それぞれお宝ヨツシーを探すためにそれぞれ四方へと散る。

(ヨツシーを見つけて、りゅーじんと一緒に沖縄旅行……………
絶対に見つける)

(絶対見つけてやるんだから！ そ、そして……………あ、ああ
あ、アイツ幸助と沖縄旅行……………)

なんだろう。

物凄い気迫を感じる。一体二人に何があったというのか。

しばらくして、残り時間がラスト五分となった。くそつ。このま
まだと、答えは解ってるのに取り逃してしまう。でも、よく考えれ
ばもう祭さんにヨツシーは確保されているのかもしれない。そんな
事を考えていた時だった。

「ワンワン！」

遠くの方から、聞きなれた犬の鳴き声が響いてきた。そして泣き
声が響いてきた方向を見ると、まぎれもない、ヨツシーが走っ
ているではないか。

「見つけ……………」

と祭さんの声が学園全体に響き渡った。

「現時点でお宝を所持しているのは、一年四組の『桐山幸助』だ！
よって、優勝は、一年四組！」

こうして、『今年度第一回！ チキチキ！ クラス対抗優勝商品
を手にしてウハウハになるのはどのクラスだ！？ 宝探し大会！』
が幕を閉じた。

教室に戻った瞬間、クラス中は祝杯ムードだった。

クラスメイト達からは「よくやった」と言われまくり、それぞれ
沖縄旅行への思いをさせ、まさにお祭り状態だ。

しかし忘れてないか君達。俺達は学校を休んだ分、補習が待つて
るんだぞ？なんて俺はこの時、のんきに考えていた。

教卓の前に紙絵さんがダンッ！ と立ち、そしてクラス中に向か
って、叫ぶ。

「よし！ パーッ！ と打ち上げやろうよ！」

紙絵さんからの突然の提案。 うん。 まあ打ち上げぐらいは別にい
いんじゃないかな。 でも俺、今お金が無いんだよな。 割り勘だと
どれぐらいになるんだろ。

「場所は勿論、優勝者、桐山君の家で」

「.....入っ？」

思わず彩と声が被る。 い、いやいやいや。 それはいくらなんでも

クラス皆が納得しな

「おう！ いいぞ！ やるうぜー！」

「優勝者の家に殴りこみだあ〜！」

となんだか乗り気なクラスメイト達。どつやら決定のようだ。

「おい。やばくね？」

「そりゃそつでしょ」

思わず彩と顔を見合わせる。

「.」

「.」

そして俺と彩は同時に呟く。

「どつしやう」「どつしやう」

俺と彩の共同生活以来、最大の大ピンチだ。

第十三話 ミッション(前書き)

沖縄旅行編までまだもう少しお付き合いを。

第十三話 ミッション

俺の家は、ただの、ごくごく普通のありふれた一軒家だ。

彩と二人で暮らすぐらいなら、数人の友達を呼んで遊ぶぐらいならスペースは有り余ってるだろう。

しかし。

決して三十人も人間が打ち上げを起せるスペースではない。とうに定員オーバーした俺の家は、一年四組のクラスメイトで溢れていた。なんとか説得に成功し、大半のメンバーはなんとか庭の方に待避してもらえた。がやがやとクラスメイト達はそれぞれ沖縄旅行に向けて思いをはせる。だがその裏で、俺はとてつもなく大変な状況におかされていた。

いや、決して家にクラスメイトが勝手に上がりこんできたからじゃない。あいつ等は勝手に打ち上げ道具やら食い物やら勝手に持ってきて勝手に騒いでいる。だから放置していて問題は無い、のだが、この家は今朝まで俺と彩が二人きりですごしていた家だ。

不意に俺達の同居がバレるような証拠が出てきた日には打ち上げ会場は瞬く間に公開処刑会場へと変貌する事になるだろう。

俺のミッションは、『彩との同居がバレるような証拠を出さずにバカ共を退ける』事だ。

そして現在はみんな庭でがやがやと騒いでいる。異常無し、だ。ふう、となんとか一息ついてしていると、不意に、肩がぼん、と軽く叩かれる。嵐だった。背後には更に龍神まで居る。

「まあ、なんとかバレないように協力してやる」

「その代わり、僕達のピンチの時にも協力してね」

持つべきものは共犯者だ。なんとも心強い。

「でもまあ、一番警戒しなきゃいけないのは……」

チラツ、と嵐が目線に移す。その視線の先に居たのは、カメラを持ってせわしなく動きまわる紙絵さん。

「さあて、撮りまくるわよ。明日の大見出しは『一年四組、宝探し大会制す!』で決まりね!」

因みに、我が学園の新聞部が発行する新聞、『THE・NEWS』は週一のペースで発行している。

『THE・NEWS』は有料で、一部百円するのだが、紙絵さんが取り上げてくるネタは学外の物があつたり、面白いネタが多かつたりするので、発行すればたちまち売れに売れ、最近では新聞部の利益はうなぎ登りだそうだ。

その上、紙絵さんが取り上げてくるネタの量と速度が半端ではないため、よく号外が出される。因みに号外も有料だが、出すたびにやはりよく売れる。

そして嵐の言うとおり、一番厄介なのは紙絵さんだ。いつどこでこの家をガサゴソと探りまわすか解らない。一応証拠となる物は全て隠しはしたが、正直紙絵さんの前では焼け石に水、だ。

「ねえ、ちょっと」

密かに対策を練ろうとした俺達に、彩が背後から話しかけてきた。そしてするりと自然に嵐と龍神がその場から離れる。

そうだ。彩は嵐と龍神には俺達の同居がバレてるって事、知らないんだっけ。

「どうするの？ 正直莉子はかなり厄介よ？」

「うーん．．．．．どうするって言われてもお前、紙絵さんに家をあさるのを止めろって言ったらどうなるか解ってるか？」

「絶対に漁りだすわね」

「だろ？」

やはり仲が良いだけあって解ってる。

そう。

紙絵さんに不用意な発言をすると逆効果だ。嬉々として家をゴキブリのごとく徘徊し、カラスのようにあさりまくるだろう。

「お前の生活用品一式、どこに隠した？」

「アンタの部屋」

なんてこった。

「なんで俺の部屋!？」

「し、仕方が無いじゃない！ それ以外特に思いつかなかったのよ

」!

まずい。俺の部屋なんて一番危険なポイントだ。

「なら俺の部屋には誰も近づけさせないようにしないと．．．．．」

」

まさに俺の部屋は今、地獄の門と化している。見つかった瞬間、俺は一気に地獄へと直行だ。チラリと紙絵さんを見ると、無邪気な笑顔で写真をパシャパシャと撮ってはガリガリと手帳に何やら書き込んでいる。

しかし、その無邪気な笑顔は俺にとっては死神の笑顔にしか見えない。手に持っている一眼レフとあらゆる情報が詰まっている手帳はまるで死神の鎌だ。

あの鎌がまさに今、俺の首をちょん切って俺を地獄へと連れ出すとしてている。

「さーてと、そろそろ優勝者の自宅でも取材しようかな」

くるっ、と俺の方をみてにこりと笑う。恐い。恐いよ紙絵さん。トコトコと紙絵さんは家へと入ってゆく。ここで遮ったら怪しまれる。なんとか俺の部屋に行かせないようにするしかない。

「それじゃあさっそく、幸助君の部屋でも……………」

「な、なあ紙絵さん？　まずはリビングでお茶でも」

「ふふん。取材は一分一秒が勝負なんだよ。覚えておきたまえ」

これはまあ、普通の状況ならばカツコイインだろうけど、今の状況だととてつもなく厄介だ。

「何言ってるんだ幸助。さっさと取材ぐらい済ませてしまった方がお前も楽だろ？」

こんな爆弾発言をしたのはなんと嵐。まさかの裏切りだ。

(お、お前、裏切るのかああああああああああああああ！)

(安心しろ。天音の生活用具一式は今龍神が別の場所に移動させておいた)

(えっ?)

な、なるほど。さっきそそくさと移動した後にはさっそく行動に移したのか。さすが嵐と龍神。

(それに、バレそうになった瞬間に俺達の事もバラされて道連れにされたくは無いしな)

バレてたか。

(それで、彩の生活用具一式は何処に移動させたんだ?)

(天音の家だ。まあ鍵は無いから庭辺りに置くだけだが)

そこならなんとか見つからずに済むだろう。因みに彩の家は俺の家から近い。走れば一分ほどの距離にある。だから龍神もすぐに戻ってくるだろう。

「桐山。白上」

「ん？ 神戸さん？」

「りゅーじん知らない？」

うっ。ごめん神戸さん。龍神は今ある重要なミッションの途中な

んだ。俺達の命がかかっている重要な。

「さあ？ 多分、食料の買出しじゃないかな」

「そう」

少し悲しそうな顔をして、神戸さんはふらつ、と再び庭へと戻って行った。なんか神戸さんに悪い事したな。今度お詫びに龍神を生贄にささげよう。

「ねえ、大丈夫なの？」

今度は彩が話しかけてきた。

「大丈夫だ。安心しろ。荷物は別の所に移動させたから」

「そ、そっか」

ほつ、と彩は一安心する。その後、俺の部屋を一通り見学した紙絵さんだったが、結局何も出てこなかったようだ。そして時間が過ぎてゆき、ついに打ち上げもお開きとなった。

「幸助。今日はありがとな」

「また来るよ」

いや、来るな。にしても、今日はある意味とてつもなく疲れた。しかし何事も無く無事乗り切れてよかった……

「あ。そうだ幸助君。君の家の洗濯物の中に、こんな物があったん

「だけど(ピラッ)」

紙絵さんが真上に掲げたのは、彩の制服のブラウス。他のみんなはそれが彩の物とは気づいていないのが幸いだ。

途端に男子共の警戒レベルが上がる。

しまった。洗濯物はノーマークだった。

「そ、それは……………」

まずい。この状況は非常にマズイ。

「それは？」

紙絵さんが興味深々と言った表情で見つめる。ええい！ もうこ
うなったらヤケクソだ！

「そ、それは……………！ 俺のブラウスだああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ
ああ！！！」

この日から、俺に女装趣味があるというような噂が流れ始めまし
たとさ。

第十四話 ショッピング／前編

「幸助」

リビングで宝探し大会優勝商品である旅行のせいで休日に出された鬼のような宿題と格闘していると、彩がどこかに出かけるような格好をして、話しかけてきた。

「ん？ なんだ彩？ って、その格好、どこかに出かけるのか？」

「うん。今日、ちょっと買い物に行つて来るわ」

「買い物？」

「ん。ちょっとね」

「買い物、か。」

「多分食材か何かなんじゃないのだろうか。女の子一人だと荷物を持ったりすると結構キツイかもな。」

「だったら俺も行くよ」

「えっ!?!」

「なんだこの反応は。」

「食材とかの買出しだろ？ 荷物とか大変だろうからさ」

「あ、そ、そう。そうよ」

珍しく、彩にしては歯切れが悪い。何かマズイ事でも言ったのか？

「それじゃあ、俺も準備するからちよつと待っててくれ」

俺と彩は、近くの大型ショッピングセンターへとやってきた。ここにはかなりの数の、様々な種類の店が揃っている。スーパーは勿論、例えば本屋、洋服屋、ゲームショップ、飲食店等も完備している。

「まずは何処に行く？」

今、俺と彩が居るのは大型ショッピングセンター内のの入り口付近にある案内板。この案内板にはショッピングセンター内の地図や、全ての店が描かれている。

そんな案内板と俺は今にらめっこしているのだが、問題はこのショッピングセンターの規模の大きさだ。

この大型ショッピングセンターは広く、大きいのだが、その分移動に時間がかかる。効率良く店を回らなければ無駄に時間をロスしてしまう。

「そ、そうね……………」

彩はまだ何かを言いづらそうにしている。
そうだな。

折角こんな所に来たんだし、少しぶらぶらと歩いていくか。

「少し、店内を見回っていくか」

「ええっ!?!」

彩が顔を真っ赤にして叫んだ。周囲の人の視線が一瞬、俺達二人に集まる。

「お、おいつ! こんな所で大声なんか出すなよ」

「う、あ、う、うめん」

「それじゃ、行くぞ」

「う、うん………」

まず、俺と彩は二階へと足を運んだ。やはりどの店も近所の店よりもラインナップが充実している。どの店もかなりのお客さんが来ていた。とりあえずは適当に店を見て回る事にしてので、ほぼ素通りだ。

「はあ。そういえば沖縄旅行って来週だったよな」

「そうね。沖縄旅行って言ってもほぼ自由行動らしいし。ちゃんと集合場所に集まれば、問題無いわよね………」

と、なにやら彩が確認するようにブツブツと呟く。

「集合場所は学園に朝九時。そして空港に十時着でそこから飛行機に乗って、沖繩（むいじょう）に着くのが十一時。そこから自由行動でまずは．．．」

「よくもまあそんなに覚えてるな。俺なんか学園の集合時間ぐらいしか覚えてねえよ。なんだかんだで彩も楽しみなんだな。沖繩旅行」

その代わりに俺は今、宿題と言う名の地獄に居るわけだが。

「べ、別に楽しみなんかじゃないわよ！」

と必死になって反論する彩。

「お、おう。そうなのか。なら別に行かなくても．．．」

「行くっ！」

やっぱり行くのかよ。まあ、解ってたけどさ。なんだかんだで彩も結構楽しみにしてるって事は解ってたし。じゃないとあんなに必死になって宿題を瞬殺するわけが無い。

正直、宿題を終わらせようとしている彩は近寄りがたい雰囲気纏っていた。締め切り直前の漫画家みたいな。

．．．．．と、今ふと思うと、彩が来てから家事全般を彩がしてくれてるからな。宿題に家事と、彩に負担をかけたばなしだ。逆に家事を手伝おうとしても「私がやるからいい」って言ってやらせてくれないし。家事を手伝えないのなら、この機会に一つプレゼントの一つでも買ってあげよう。

「あ、そうだ。俺、買う物あったから、彩はちょっと先に行ってくれ。買いたい物があつたんだろ？」

「えっ？ あ、うん」

「よし、それじゃあ別行動な。後で連絡するから」

それだけ言い残し、俺は彩の元から駆け足で去っていった。

正直、「最近頑張ってくれてるから感謝の気持ちとして」みたいな感じで渡すプレゼントを選ぶなんて恥ずかしくて言えない。

俺がまずプレゼントの第一候補として選んだのは、ぬいぐるみだ。ぬいぐるみ専門店はこの大型ショッピングセンターの中にもあるが、今はそんなにお金を持っていないので、まずはUFOキャッチャーで取ろうと計画したのだ。

ゲームコーナーに行くと、そこには様々なゲームが置いてあった。アーケードゲームは勿論、お目当てのUFOキャッチャーも完備されている。たまに嵐や龍神とゲームセンターに行くので割りところというのは得意だ。

さて、どのぬいぐるみを取ろうかと考えていると、UFOキャッチャーのコーナーの奥の方に、イルカのぬいぐるみがあるのを見かけた。

うん。あれにしよう。そして問題は、あのイルカのぬいぐるみを取れるのかどうかという事だ。現在の所持金は約五千円。食材を購入する事を考えると使えるのはせいぜい五百円か。

そして俺は、最初の百円をUFOキャッチャーに投じた。

彩は現在、先ほど幸助と居た二階よりも一階上の、三階の水着シ

ヨップに居た。元々沖縄旅行に向けて水着を新しく買っておこうと思っただが、まさか幸助がついて来るとは思わなかった。幸助なりに気をつかったのだろうか。

最初、彩の返事の歯切れが悪かったのもこの為だ。自分が買う水着を選んでいる所なんて恥ずかしくてとても見られたくない。

なので、さつき幸助が急に別行動を提案した時には正直助かった。幸助は幸助で、それぞれ買う物があるのだろう。しかしゆっくりはしてもらえない。早く決めてしまわないと幸助からの連絡が来てしまう。

「どれにしようかな……………」

しかし、折角の沖縄旅行。それも幸助と旅行に行くのは初めてだ。中途半端に選びたくないという気持ち強い。

そして、あれこれ悩んでいる彩の視界に、意外な人物を捉えた。

第十五話 ショッピング／後編（前書き）

これで色々大変だった「宝探し大会編」が終了です。
次は（多分）SSを挟んでから、「沖縄旅行編」が始まります。

第十五話 ショッピング／後編

UFOキャッチャーのアームが目的のイルカのぬいぐるみをつかむ。ゆっくり、ゆっくりとアームが移動し、そして、ようやくイルカのぬいぐるみをゲットした。

「ぎ、ギリギリ．．．．．」

使ったのは丁度限度額の五百円。なんとか手に入れられて良かった。

「取れてよかった」

．．．．．なんか聞いた事のある声と被ったような。

「あれ？」

隣のUFOキャッチャーの台を振り返ると、なんと嵐が居た。手にはなにやらUFOキャッチャーで取ったと思われる猫のぬいぐるみ。

どうやら考える事は同じだったようだ。

「あれ？ 直ちゃん？」

彩が視界に捉えたのは、中学の時の後輩であり、現在受験生の加古川直だ。こっそりと背後から直の元へと忍び寄る。

(ちょっと驚かせようかしら)

そして、直の肩をぽんっ、と軽く手を乗せ、

「彩？ 直？」

「「うっひゃああああああああっ！？」」

なぜか、彩も同時にびっくりする。後ろを振り返ると、愛が彩の肩を軽く手を置いていた。

「あっ、あれ？ 彩さん？ 愛さん？ どうしてここに！？」

「あ、愛！？」

「二人とも、どうしてこんな所に？」

「それはこっちのセリフなんだけど(なんですけど)………」

「まさか、幸助が居るとはな……正直驚いた」

「そりゃこっちのセリフだ」

偶然出くわした俺と嵐はそれぞれのプレゼントを持って、とりあえず三階にある喫茶店に入った。さすがに高校生の男子二人がこんなファンシーなぬいぐるみを持って喫茶店に入るのには抵抗があるので、袋の中に詰めてある。

「っーかなんで嵐がここに？」

「俺が沖縄旅行の補習の宿題を必死に片付けていると、急に買い物に行つてくるとか言つてたからな。一人だと心配だし、一応ついてきたんだよ」

「このロリコン」

「地獄を見せてやろうか？」

とにかく、わざわざ買ひ物にやつてきた理由は大体俺と同じだな。まだ鬼のような宿題が片付いていない所まで。

というか、嵐も過保護だよな。

まるで親子だ。いつまでも子供扱いじゃ、直ちゃんもかわいそうだよな。

「宿題も終わつて、ようやく一段落したから良い気分転換になるしな」

「地獄を見せてやろうか？」

「何故だ!？」

俺は家に帰つたらまた宿題という名の地獄が待ち構えているのに、コイツは先に天国に逝つてしまったようだ。

この裏切り者がっ！

「で、なんでUFOキャッチャーなんかしてたんだよ」

「ま、まあ。普段、直も頑張^{アイツ}ってくれてるし（主に料理以外で）たまにはこれぐらいの物ぐらい渡してやろうと思つて、な。そういう

お前は……」

「お前と同じ」

やっぱり考える事は同じだ。すると、嵐が何やら店の外を見て、表情を変える。

「ん？」

「どうした？」

「あれ、龍神じゃねえか？」

そう言っつて嵐は店の外を指差す。嵐が指した先に居たのは、なにやらとてつもなく疲れている龍神だった。

時は朝に遡る。龍神の家では今日も愛が朝食を作つて、それを二人で食べていた時。

「りゅーじゅ」

「何？」

「今日、水着を買いに行つてくる」

「いつてらっしやい」

「……」

「ッ!? 痛ったあああああああああああああああああ
?」

一瞬にして、目の前の席に座っている龍神の背後に回り、腕を締め上げる。何処で教わったのかは定かではない。

「心配じゃないの?」

「な、何が……」

「てい（ギリッ）（）」

「ぎゃあああああああああああああ! し、心配です! とても心配です!」

「なら、一緒に行こう?」

「……まず締め上げを解除してから（ギリギリギリ）ぎゃあああああッ!! 行きます! 行かせていただきます!」

「それじゃ、すぐに準備してくる」

そっぴい残すと、愛はリビングから出て行き、支度を始めた。龍神は腕の痛みをこらえながら、仕方が無く準備を始めるのだった。

「……と、言うわけさ。僕も結構苦労しているだろ?」

「お前が悪い」

「え？ いやいやいや。僕は何も……」

「お前が悪い」

喫茶店の中で、龍神はやれやれと言った顔で話し終えたのを、俺と嵐で一蹴する。つーかコイツは本当にバカだろ。
鈍感にも程がある。こりゃあ嵐並みだぞ。

「君にだけは言われたくない」

「は？」

「全くだ」

「え？」

どうして俺の心はそう簡単に読まれるのだろうか。

「あれ？ 龍神どうしたんだ？ その袋」

今気がついたが、龍神の手には一つの何かが入れている袋。
心なしか、俺と嵐の持つ袋と似ている。

「これ？ ……普段、家の事を愛ちゃんが色々としてくれるから（命の危機をも現してるけど）お礼にと思って」

「お前もか」

なぜか今日はUFOキャッチャーが人気のようだ。

俺達はその後、それぞれの集合場所に別れ、帰宅した。家では現在、彩が夕食を作ってくれている。今日ぐらい俺が作るのかと思っただが、真つ赤な顔をして拒否されたので仕方が無い。

「っと、危うく忘れる所だった……なあ。彩」

「ん？ 何？ 今夕食作ってるんだけど」

「いいからちよつと来てくれよ」

「ったく。早く済ませてよね」

料理を中断し、なんやかんやで来てくれる彩。

「で、何？」

「えっと、今日ちよつと取ってきたんだけど……」

ガサゴソと袋の中から今日取ってきたイルカのぬいぐるみを差し出す。

「な、何コレ？」

「いや、お前が家に来たら家事の事とかお前に任せっぱなしだから、お礼に、よ」

くそつ。なんかこういふ事言つて恥ずかしいな。

「……………」

「まあ、金が無かったからUFOキャッチャーで取ってきたような物だが……………って、やっぱり気に入らなかったか?」

「へっ!?! い、いや!?! ま、まあ受け取つてあげるわよ!」

バツ! と俺の手からぬいぐるみが一瞬にして消える。というより、彩が奪い取る(元々渡すつもりだったから奪い取るという言い方も変だが)。まあ、気に入ってもらえてなによりだ。

「そういえば、お前は今日は何を買ってたんだ?」

「っ!?!?」

な、なんだ。急に顔が真っ赤になっていくぞ!?

「い、いいい、言う必要があるわけ!?!?」

そのまま彩はぬいぐるみを持ったまま再びキッチンへと姿を消した。

(新しい水着を買いに行ってきたなんて言えるわけじゃない……………!?!?)

彩は何か呟いたようだが、そのセリフは聞こえなかった。
沖縄旅行は来週だ。

俺はさっそく、鬼のような宿題に取り掛かった。アイツ等との、

コイツとの沖縄旅行を楽しむために。

第十五話 ショッピング／後編（後書き）

この「ショッピング」は一話にまとめようとしたのですが、長くなったので二話に分けました。

俺とメイドさんのロケ地巡り／前編（前書き）

仮 ライダーオーズ最終回記念！（笑）

一年間おつかれさまでした。

この作品はフィクションです。実際の人物、団体とは一切関係ありません。念のため。

俺とメイドさんのロケ地巡り／前編

生徒会長、まつりせいと祭盛人は、現在自宅にこもっていた。

学園の天才生徒会長と称される祭の事だ。おそらく難解な問題か、もしくは勉強に勤しむか、それとも生徒会の重要な案件を抱え込んでいて頭を悩ませているとか、……『そんな事では無い』。

「……完成だ！マスターグレード MG百分の一ダ ルオークアンタ！」

簡単に言えば、ガ プラを作っていた。

しかも細部にまで塗装を入れ、ウエザリングまで施すという気合の入りっぷり。

天才生徒会長は学園のオタク達の頂点、『パソコン研究会』、通称『P研』の部長を務めていた。

今、祭が居るのは自室、では無く『製作ブース』という場所で、周囲には大量のガ プラが棚に飾られていた。

「よし次はもう一つ組み立ててクアंटムバースト版を作ってるぞっ！」

と、祭が意気揚々と二箱目に手を伸ばそうとした瞬間、コンコン、とドアをノックする音が聞こえた。

「ん〜？ 明？」

「あ、はい祭さん少しお伝えしたい事が……って、なんでまだ名前を言っていないのに解るんですか!？」

驚きながら、祭家に仕えるメイドの明が『製作ブース』に入って

きた。そのメイドさんは祭と同年代の、メイド服に身を包んだ胸の大きな美少女だった。

明はこの家のメイドとして、そしてまたは祭の幼馴染みとして幼少期からこの屋敷に居る。祭と同年代、という事もあり、同じ学校に進級し続け、学校では同じように過ごし、祭に仕えてきた。

「なんでって、ノックする時のドアを叩く時の手のリズム、力加減が明^{めい}だったから」

「そ、そんな事が解るんですか……」

祭の天才ぶりにいつも驚かされている明だったが、それはそうと調子を戻す。幼少期からずっと祭の側に居るだけあって、その辺りは恐らく慣れてるからなのだろう。

「で、伝えたい事って？」

「えっと、」

明は少し間を置いて、そして深呼吸してから、言う。

「なんでも、屋敷の者がみんな一泊二日の旅行に行くとか何とかで屋敷を離れるそうです」

「知ってる。だって俺が言ったんだし」

「ええっ!？」

明は初耳だった。

そもそも、明と祭を覗いた屋敷の人間全てが一泊二日の旅行に行

く、なんて事を聞いたのも、今日の朝が初めてだ。

「つつーか、明。お前も聞いてなかったのか？ 屋敷の使用人は全員休暇の旅行に行けって言うておいたんだけど」

「えつと．．．．．その事なんですけど、執事長のカルヴァンさんが『祭坊ちゃんを一人にするのは心配だからお前が着いていなさい』と言われて．．．．．」

カルヴァン、というのはこの家に古くから仕えているこの家の執事の長の名前だ。（祭は爺と言っている）

そしてカルヴァンから朝、祭の事を言いつけられた際に、なぜか「頑張りなさい」と言われて、ウインクされたのは祭には秘密だ。

「ええつ！？ 爺のヤツ、まだ俺を子供扱いしてるなあ。なんか悪いな、明」

「い、いいえつ！ とんでもございません！」

ぶんぶんぶん！ と勢い良く首を横に振りながら否定する。

「あ、そういえばもうすぐ仮ライダーオーズの最終回じゃねーか！ やべっもうすぐ始まるっ！」

それだけ言い残して、祭は『製作ブース』を飛び出し、リビングと消えていった。一人室内に立ち尽くす明。

そこで、一人きりになった室内でふと、考える。

（そういえば、今日は私と祭さんの二人きり．．．．．？）

今更ながらその事実気づく明。
そこで。

『頑張りなさい』

と、カルヴァンの一言を思い出す。

「……い、いやいや！ 別に私はっ、それに私はメイ
ドさんだしっ……！ し、しかも頑張るってなにを……」

残された部屋で一人真っ赤になって否定する。しかし、いくらメイ
ドさんといえどもそこは恋する一人の乙女。恋心こゝろという感情は隠
しきれない。問題は、その隠しきれない感情を祭あいてが理解してくれる
のかどうかだが。

「終わったー……」

祭は燃え尽きていた。

それというのも、今見ていた特撮ドラマの最終回が終わったから
だ。画面には、去ってゆく主人公とその相棒の後姿と『一年間応援
ありがとうございました』という文字が躍っている。

因みに祭のいくつか所有する内の一室は、特撮ヒーロー物のグッ
ズで一杯だ。そして、燃え尽きている祭を、後ろから明はぽっつ、
としながら見ていた。

（今日は祭さんと二人きり……今日は祭さんと二人きり……
……今日は祭さんと二人きり……今日は祭さんと二人
きり……今日は祭さんと二人きり……）

きり……今日は祭さんと二人きり……)

どうやら今は混乱中のようだが。元々祭は顔はイケメンなので、メイドである前に一人の少女である明が惚れてしまうのも無理はない。

そもそも、幼少期から一緒に居る分、外見だけでなく内面もしっかりと見据えている明なので、惚れてしまうのはなおさらだ。

「……………よし、行こう！」

と燃え尽きていた祭は一瞬にして復活し、ソファから立ち上がる。同時に、明も我に帰る。

「はづつ、え、えつと、行っつてどこにですか？」

「クスクシエ」

「は？」

ワケの解らないような、それでいて聞いた事のあるような単語が飛び出してきて少し混乱する明。

「ほら、あれだよ！ 仮ライダーオーズの中に出てきた多国籍料理店の名前！」

「あ、な、なんかそんな感じの名前の料理屋さん、出てきましたね」

毎週かかさず見てる祭と共になんとなく見ていたので、祭の説明を理解する明。

「つて行く?」

「そう! クスクシエのロケ地へ行く!」

「ええ つ!?」

『思い立っただけで行動』というのがポリシーの祭。その後の行動は、明は呆然として見ていた。祭は携帯で最終回を迎えた特撮ドラマのロケ地を調べ上げ、そしてルートを調べ上げ、移動手段をチャーターした。

あまりにも迅速すぎる行動で明はそれらが一瞬の出来事のように思えた。

「よし、この際、クスクシエだけじゃなくて、仮ライダーオズのロケ地を複数巡るぞ! 最初はクスクシエのある埼玉県越谷市だ!」

「えっ、ええ!?!」

更に向かうロケ地が増えてとまどう明。最初に向かうのはなんと埼玉県と来たものだ。もはや開いた口が塞がらなかった。

「よし、それじゃあ出発するから早く明も着替えるよ!」

どうやら明の参加も決定しているようで、そのまま祭は自室へと消えていった。明はようやく我に帰ると、ため息をつきながら準備を始めた。

「うつうつ……せっかく二人きりで過ごせると思ったのに……」

「・・・」

恋する乙女の眩きは、意気揚々と準備する祭には届かなかった。

俺とメイドさんのロケ地巡り／前編（後書き）

祭が出てくるとどうしてもこういうネタが増える。

まあ書いてる方は楽しいんですけどね（笑）

．．．．．え？ 楽しくない？ ですよー．．．．．
（．．．）

俺とメイドさんのロケ地巡り／中編（前書き）

この作品はフィクションです。実際の人物、団体とは一切関係ありません。念のため。

俺とメイドさんのロケ地巡り／中編

さいたまけんこしがやし
埼玉県越谷市。

埼玉県の南東部にある人口約三十二万人の町で、埼玉県では人口第五位にあたる市だ。

そんな越谷市の街中を、祭と明は歩いてきた。埼玉県までは、電車で来た。当初はリムジンを使ってここまで来る予定だったが、祭の気が変わったようで、急に電車に乗って行こう、と言い出したのでキャンセル。

電車を乗り継いで来たのだ。

「えっと、この辺りなんだけど……」

今日の朝に放送が終了した特撮ドラマのロケ地へと足を運んだ祭と明。電車の二人旅で緊張度MAXになった明と、大好きな特撮ドラマのロケ地へと赴いた祭。形は違えど、それぞれ気分的には晴れやかだ。

(祭さんと、ふ、ふふふ、二人旅。ううっ。緊張する……)

(もうすぐあの『クスクシエ』か。緊張する……)

互いに別の意味で緊張する二人であった。トコトコと沈黙したまま、町の景色を楽しみながら二人は歩く。そして、風にパタパタとあおられるイタリアの国旗が二人の目に飛び込んできた。目的地だ。

「おおっ！ あれだあれ！」

祭ははしゃぎながら目的地のロケが行われた建物へと駆け出す。

明の気持ちも少なからず高揚する。なんとなくとはいえ、見ていたテレビの中に実際に登場した建物が今、目の前にあるのだから。

そして、明の眼前に居る、はしゃぐ祭はまるで小さな子供のようにだ。パシャパシャと一眼レフのカメラでロケ地を撮りまくっている。

「EDで後藤さん達がここに集まるんだよねー！ 畜生！ 千回記念のTシャツ欲しかったあああああ！」

テンションMAXの祭を、ほほえましい目で見ている明なのであった。

「もう満足ですよね？ さっ。帰りましょう」

確かに最初の方は感動もしていたものの、さすがに三十分も見続ければその感動も薄れてきたのか、明が帰宅を促す。

「まだ」

「ええっ!？」

「複数回ろうつて言ったじゃん！ 次は『鴻上生体研究所』のロケ地、『埼玉県立大学』だ！」

「ええ　　っ!？」

再び移動。今度の移動手段はタクシーだ。

「今度は大学ですか……………」

「おう！」

意気揚々と、今度は『埼玉県立大学』へと足を運んだ二人。祭のテンションは高く、逆に明のテンションは少し低い。

「埼玉県立大学は『人間の尊厳に立つて、保健・医療・福祉の専門的知識と技術を教授するとともに、それぞれの分野が連携して人々の健康を統合的に支えることを通じ、共生社会に貢献できる人材を育成する。』を教育理念としている大学なんだ。しかも、今まで色んなドラマのロケにも使われてきたんだぜ」

「そ、そうなのですか？」

「おう！ 例えば、最近のドラマだと『ブルドクター』や『BOSS』、『のだめ』、『SP』。映画だと『デノート』、『L ch ange the World』とか、しかも『仮ライダーW』のロケにも使われていたんだっ！！！」

テンションが更に上がりまくる祭。周囲の学生が「なんだなんだ」という好奇心の目で祭を見ている。ついでに「あの子可愛くね？ 胸でかくね？」という目で明を見ている。

「ま、祭さん！ 解りましたからっ！ だからもう少し静かにつ！」

「よーし！ 再来年はここを受けるぞー！ 俺もここでガ アメモリを作るんだ！」

「そ、そんな動機で受験する大学を決めないでくださいっ！ それにそんな物は作れませんかっ！」

二人は揃って大声を出して、周囲の学生の注目を集めるのだった。その後、祭が元々話しをつけていたらしく、時間制限付きで大学の中を見学していった。祭はテンションを上げて周囲を撮りまくっている。

「ああっもう！ そろそろ時間ですよ！ さっ。帰りましょう！」

「やだ。まだまわる」

「ええ つ！？ ま、まだまわるんですか！？」

「次は『東京都渋谷区』にある『鴻上ファウンデーション』だ！」

「逆方向じゃないですかあああああああああああああああああああああ
ああー！」

そして再び電車に乗車する二人であった。天才わがまま生徒会長のご主人様に仕えるメイドさんの苦勞はまだまだ終わらない。

ガタンガタン、と電車が揺れる。遅めの昼食をとった二人は現在電車の中で揺られていた。祭の目の前の席で、明はメモ帳とボールペンを片手になにやら悩んでいる。

「ん？ どうした明？」

「えっと、『宝探し大会』の準備ですよ。ヒントを考えているんです」

「ふん。大変だな」

「祭さんが考えてくれって言ったんじゃないですか！」

「お、おうつ。そうだったな」

(も、もう忘れてる……つい昨日の事なのに……
しかも自分が考えたイベントなのに……)

思わず膝から崩れ落ちそうになるが、あれこれ考えても仕方が無い。明は再びペンを握る。

(でも頑張らなきゃ。これも祭さんのお手伝いなんだから。にしてもなかなかこれといったヒントが浮かばない。しかも二つ目ってこじつけすぎるし……三つ目なんかさっぱり浮かばないし。
う~~~~~！)

悩みに悩んでいる明を見かねて、祭が明の隣に座り込む。

「はづつ!?!」

「ん〜。やっぱり俺がやるうか？」

「あわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわっ!?!」

急に隣に祭が来た事で、パニックになる明。しかも距離が近い分

どんだん心臓の鼓動が高くなっていく。

しかしそこはやはりメイドさん。ご主人様に迷惑をかけないようになんとか言葉を搾り出す。

「い、いえっ！　だだだ、大丈夫ですっ！」

「そうか？」

そう言っただけは明の前の席へと戻っていく。しかし明のパニックは収まらない。

（うわわわわわわっ。も、もうさっさと作ってしまいたいっしょっ！　えっと、ああっ、もう。『ネタ切れなう』でいいやっ！）

そう言っただけ、『ネタ切れなう』という言葉と共に最後のヒントを殴り書きする明。その瞬間、電車は東京都へと入っていった。

東京都渋谷区にある山野美容専門学校。そこに、祭と明は足を運んでいった。時刻は現在午後四時半。ここも、祭が話をつけていたらしく、再び時間制限付きですんなりと見学を許可された。祭は一通り中を見学&撮影した後、今度は屋上へとやってきた。

「ここが今日の最終回で会長が映司に十枚目のタトバコンボを渡し
．．．．．」

「あの、疲れたんでそろそろ帰りましょっ？」

もうかれこれ三十分は語り続けている祭に、明はそろそろストッ

プをかける。

「ん？ あゝ、もうこんな時間か。じゃあそろそろ帰ろっかな」

「そうですか……」

ようやく帰る事になってとりあえず一安心する明。
しかし。

「そういえば今日は俺と明の二人きりだったな」

「はっ！—！」

その事実を思い出し、そして急に顔が真っ赤に紅くなっていく明。

（そそそ、そういえばどうしようっ！ 二人きり！ わ、わわわわわわ……）

「よし、帰るか帰るか」

「い、いやっ！ まだ時間がありますし、もう少しまわっていきませんか!？」

と、なんとか帰りを引き伸ばそうとするが祭ももう満足なのか、

「やだ」

と一蹴。

「ええ

!？」

俺とメイドさんのロケ地巡り／中編（後書き）

なんか今回はかなり遊んだ気がする。

それと、今回の話は「沖縄旅行編」へ向けての練習をかねた話です。色々調べるのが大変だった……

次でラスト！ 「後編」へと続く！

俺とメイドさんのロケ地巡り／後編

祭の思いつきで、今日の朝最終回を迎えた特撮ドラマのロケ地を巡る旅に付き合わされた明だったが、今更ながらロケ地巡りを続けていた方が良かったと思う明。

(どうしようどうしよう……こ、今夜は二人っきり……)
……どうしようどうしよう……)

頭の中はもはや爆発寸前だ。そんな明をよそに祭は気楽に自宅のドアをバンツ、と開け放つ。

「たっだいまゝ。って誰も居ないか」

自宅に足を踏み入れた瞬間、ポケットから祭の携帯に着信が入る。祭は携帯を取り出し、メールボックスを開く。メールは、新聞部期待の新生にして副部長の紙絵莉子かみえりこからだった。

「んゝ？ オツケーっと」

ピピピッ、とタッチパネルのキーを軽快に打ち、返信を終える祭。

「明〜？」

「どうしよびどうしよびどうし……はっ。な、なんでしょっ？」

祭の声ではっ、と我に帰る明。

「今から莉子が来るから」

「ええっ!?!」

莉子、というのは勿論紙絵莉子の事だ。明もそれは知っている。前々から祭の家によく取材を行いに来る、新聞部の一年生にして副部长を務める少女だ。自分という少女が家に居ながら、他の少女も家に招き入れるという事になんとかずーんと落ち込む明。

(それに、なんだかあの子苦手なんですよね。なんでも見透かしている感じがするっていうか……)

そういった理由に加え、祭と楽しげに話している紙絵を見ていると、明はいつもはらはらしているの、正直明は莉子が苦手だ。

「まっつりさーん! 来ましたよー!」

メールを返信してから十分も立たないうちに、莉子が家にやってきた。

「来たか」

「はい! 例のアレが手に入ったって聞いて、飛んできました!」

莉子なら記事のネタの為に本当に空を飛んできそうに怖いと思う明。

「例のアレなら俺の部屋にあるぜ」

「ほほう」

「それじゃあ来てくれよ」

「了解」

二人はなにやらフッフ、と笑みを浮かべながら祭は莉子を自分の部屋へと招き入れる。パタン、とドアが閉まり、そして明の頭の中はというと、

(へ、へへへ、部屋！？ 二人つきりで部屋にいいいいいいいいいいいいいいいいいい！?)

もはや爆発寸前どころか爆発していた。今までも、莉子がこの家に来ることは何回もあった。しかし大体は自分も付き添いで居たわけ、二人きり、というシチュエーションは無かった。密室に男と女が二人きり。うろろろると祭の部屋の前で悩む、恋するメイドさん。

(うろろ。気になるっ！ 気になる！)

気になるが、勝手に部屋に上がりこむのはどうかと自分の中のメイドさんとしての心構え的な事と葛藤する。

戦況は現在長いメイド経験から生み出されたメイドさんとしての心構え的な感情が勝って、恋心を押ししている。

が。

「おおっ！ これはっ！」

「フッフッフツ。いいだろ。特別だぜ？」

「ああ〜！ いいなあ！ 私も行きたかったなあ！」

と、なんとも楽しそうな声がドアから響いてきた。

「~~~~ツ！！！」

もはや我慢の限界。恋する乙女の恋心が、長いメイド経験を上回った瞬間だった。すぐさまメイド服に着替えて、ドアの前にスタンバイする明。

因みに、私服からメイド服に着替えるまでの時間は約二秒。これぐらいの事はメイドさんにとっては必須(?)のスキルだ。

(ちょっとだけ……ちょっとだけなら……)

そつと、ドアを気配を消して、気づかれないように、少しだけ開ける。気配を消す、という技術はメイドさんには必須(?)のスキルだ。そして中の様子を探ろうとした瞬間、ガチャツ、とドアが開いた。ゴツン、と額にドアの角をぶつける。

「いたっ」

「おや？」

莉子が部屋の中から出てきたのだ。ドアが遠慮なく開かれたので、おもわず床に転がる明。

「あれ？ 明さんじゃないですか。そこで何をしてるんですか？」

きよとんとした様子で床に転んでいる明を見て当然の疑問を投げかける莉子。

「えっ？ えっと、その、」

「覗き見しようとしてました」なんて言えるわけもなく、返答に困る明。

「あ、解った。あれでしょ？」『ドジっ子メイド明ちゃん』的なキヤラを狙ってるんですよね？」

「ち、ちちち、違います！」とすぐに否定したい明だったが、『覗き見メイド』よりも『ドジっ子メイド明ちゃん』の方がまだマシか、という心もあるので、再び返答に困る。

「うっ．．．．．あゝ．．．．．そ、そうです」

もはや選択肢は無かった。

「最高ですー！」

明にはもう莉子の考えてる事が全く理解不能だ。

「あの、今度は是非取材をつ．．．．．！ 『ドジっ子メイド明ちゃん』を連載形式で写真を載せれば．．．．．売り上げアップ間違い無しっ！」

さつきからチラチラと明の胸を見ながらうつつとしたりとした様子でカメラを構える莉子。なぜだかこのオフアーを受けたら自分はタダでは帰れないような気がしてならない明。

ぐへへへと邪悪な笑みを浮かべながらカメラを持って明に迫る莉子の頭に、ペチッ、と祭の手刀がヒットする。

「いたっ」

「ウチの幼馴染みを変な目で見るなって。用は済んだんだろ？」

「イタタタタ。もうっ。冗談ですよ」

「「嘘つけ（ですよね）」」

祭と明のダブル否定を受ける莉子。そして莉子はにこっ、と満足そうに笑うと、トタトタと下の階へと降りていく。

「じゃあ祭さん。今回のコレは助かりました」

「そうか。良い記事、期待してるぞ」

「まかせてください」

「へっ？ 記事？」

「？ そつですよ」

そつ言っつて莉子は「そごそとポケットからSDカードを取り出す。

「今日、祭さんと明さんがまわった飯 ライダーオーズのロケ地の画像が手に入ったっていうので、『THE・NEWS』の『飯 ライダーオーズ最終回記念号』に載せて頂こうかと。．．．．勿論、『裏』の方ですが」

なんでも、最近新聞部は教師にばれないように新聞の『裏』の記事を隠すための偽造が達者になったという噂と、莉子の関係性を否定できない明であった。

「それでは、私はどうやらお邪魔なようですし、これで退散」

祭と明を交互に見て、いたずらっ子のような笑みを浮かべてそれだけ言い残して、莉子は去っていった。

まるで嵐が通り過ぎたかのような虚脱感に襲われる明。

「はあ。なんだ。思い過ごしか……」

ぺたんと床に座り込む明。

「ん？ どうした明？」

「あ、いえ。なんでもございませぬ（なんだか前回一年生が一気に泊まりに来た時ぐらいから、結構あわただしくなっている気がします……）

そして明は、ふとさっきの祭の言葉を思い出す。

『ウチの幼馴染みを変な目で見るなって。用は済んだんだろ？』

（幼馴染み、か……ふふっ）

何気に、自分の事を『メイド』では無く、『幼馴染み』と呼んでくれたのが嬉しかったのだ。

(そういではいつからだろう。祭さんに敬語を使うようになったの
って。幼馴染みとしてでは無く、メイドとして仕える事になったの
って)

「……そういえば、あいつ等ももうすぐ帰ってくるんだよ
な」

祭がふと、呟く。

「はづつ。そ、そうですね」

思い出に浸る明は、一気に我に帰る。『あいつ等』というのは勿
論この屋敷の使用人達だ。

「お前ともそうだけど、あいつ等もずっと俺と一緒にだったよな」

「そうですね。祭さんが生まれる前からずっとこのお屋敷で働いて
いる人も居ますし」

「ふーん……ずっと、ね」

何か思い立ったかのように祭は携帯を操作し、電話をかける。

「あ。もしもしカルヴァン？ あのさあ、旅行の延長決定な。えっ
？ 急にどうしたって？ いや、考えてみたらずっと働いてばっか
りだったなと思ってたまには長期休暇も必要だろ？ は？ 別にい
い？ 無理。決定事項だから。一、二年ぐらいは自由に遊べよ〜じ
やあな〜」

一方的に通話を切る祭。祭の話す言葉だけで、大体的内容はつか

めた。それはつまり、

(わ、私と祭さんが、いいい、一、二年はふふふ、二人きりで生活するって事ですか!?)

少し違つがもはや爆発どころでは無くなった明の脳内。

そんな明の脳内事情を知らずに祭は明の方にくるりと振り返り、

「明もいいぞ。遊んできても。考えて見りゃあ、ずっと俺のわがままに付き合いつぱなしだもんな」

祭はそう言うが、明は首を横に振る。

「……いえ。私は祭さんのメイドですから。一緒に一緒にさせていただきます」

にこつ、と微笑んで明は言う。

(そうだ。私はメイドなんだから。ご主人様と一緒に居たいと思つのはあたりまえなんだ)

そして、祭は優しく微笑む。

「そうか」

と、ただ一言、呟いた。

たとえばわがままな天才生徒会長でも、優しい所もあるのを、明は知っている。

だからこそ、たとえあちこちに連れて行かれても、仕え続ける事が出来る。

（・・・ううっ。緊張する。これからちゃんとやっていける
のでしょうか。だ、だって私と祭さんのふ、ふふふ、二人きりだし
・・・それにそれに・・・以下略）

こうして、天才生徒会長とメイドさんの共同生活が幕を開けたの
だった。

俺とメイドさんのロケ地巡り／後編（後書き）

今回は長かった．．．．．

正直まとまるか不安でした。

因みに、これは前編、中編、後編、三本まとめて一つのエピソードです。

描きたかったのは「祭のどんなわがままにもなんだかんだで付き合い明」です。

長くなったので三つに分けましたが．．．．．

最終的に二人きりで共同生活を始める事になりましたが（笑）

タイトルの幼馴染『み』の意味が無くなるぞこれ．．．．．

因みに、この作品では『幼馴染』を『幼馴染み』と書いていますが、これは幸助、嵐、龍神の『3』人（3 み）が幼馴染と共同生活をを行うから、「幼馴染み」という風に書きました。

さて、今回はこの辺りで終わって、新章突入！

別のエピソードはまた次のSSで！

まだあるのかよ（笑）

第一話 大富豪（前書き）

第二章「沖縄旅行編」スタート！

第一話 大富豪

ついに沖縄旅行当日。俺はなんとかあの地獄のような宿題の山を片付けた。宿題が終わった時にはもう既に燃え尽きていたが。

ちなみに沖縄までは飛行機で移動。なんでも祭さんの家の自家用機だそう。現在は、フライトの真っ最中。

機内は一年四組のメンバーや、それぞれのクラスメイト達の招待した人達で一杯だ。ただ、その招待した人の大半が彼女、彼氏というのがなんかこう、イラツとくる。

因みに、嵐は直ちゃんを招待したらしい。今は月曜日だが、学校の方は大丈夫なのだろうかと最初は心配したが、偶然にも開校記念日だったそう。

「や、やっぱり高いわね」

彩がチラリと窓の外を見て呟く。多分、飛行機に乗るのは初めてなのかもしれない。

ぶっちゃけ俺も初めてだ。親は俺を放ってボランティア活動ばかりしてるし。恐らく今頃は関東大震災の瓦礫撤去の活動にでも勤しんでいるのかもしれない。

「恐いのか？」

「ち、違うわよっ！ ただ言ってみただけよっ！」

「おやおや。新婚旅行先でも喧嘩ですか？ 仲がよろしいですね

」

と紙絵さんがからかってくる。

「し、ししし、新婚！？ ななな、何言ってるのよ!？」

「あっはっは。やっぱり彩はからかいがあるな」

もはや彩は紙絵さんのおもちやだ。真っ赤になりながら食いついてくる彩を紙絵さんはひらりとかわす。

「っーかお前ら、もう少し静かにしろよ」

「うっっっ」

「てへっ」

そう言って両者静かにし、席に座りなおす。やれやれ。この調子じゃあ沖繩に着いたらどうなるか予測できたもんじゃねえな。

「いやあ、これじゃあ行き先でどうなるか解ったもんじゃねえよな」

「いや、ホントにそうだ……っつて、え？」

くるり、と声のした方を振り返ると、そこには当然のごとく機内に居座っている祭さんと、その隣に明さんが居た。

「祭さん!？」

「授業がめんどくさいから一緒に旅行に来ちゃった てへべる」

「それってアリですか……いや、もう良いですけど」

なんかもう、祭さんのこういう所はなんか慣れた。それに祭さんにとっては確かに学校の授業なんて物は簡単すぎてめんどくさくなるのかもしれない。

気がつくと、祭さんはなにやら紙絵さんと、日曜に最終回を迎えた特撮ドラマについて熱く語り合っている。

俺はため息をつき、嵐達の大富豪に混じる事にした。

大富豪は、とても白熱した物と．．．．．ならなかった。なんかかんやで彩、直ちゃん、神戸さんの三人の女性陣が強すぎて、男性陣が全く歯が立たず、いつも俺、嵐、龍神の三つ巴となってしまう。

「あんだ達弱すぎ」

いや、お前達が強すぎるだけだ。

「ほづほづ。なにやら面白そうな事やってるじゃん？」

ひょいっ、と俺の席の真上から顔を覗かせたのは、祭さんと紙絵さんだ。

「あはは。どうやら男子陣が大敗してるようだね？」

「しょうがないだろ紙絵さん。女子が強すぎるんだよ」

すると祭さんはにやりと笑い、

「それってもしかして、緊張感が無いからじゃねーか？」

「緊張感？」

「ん〜。確かにそうかも。もう少し緊張感を持ってやれば、違った結果になるかもよ？」

紙絵さんもなにやらニヤニヤしながら同調する。

「緊張感って言っても、どうやって持たせるんだ？　そもそもこれはあくまでもお遊びだから緊張感も何も……………」

「じゃあ、次負けたら、なんでも言う事を一つ聞くって事でいいじゃない？」

その紙絵さんの言葉を聞いた瞬間、ぴくんっ、と女子陣がなにやら反応した、ような気がした。

「は、はあ？　ちょっと待て、それはどういう……………」

「さあ、やるわよ幸助。さっきビリはアンタなんだから、さっさとカードを配りなさい！」

「あ、彩!？」

「今度も負けませんかからね。嵐さん」

「待て、直。今度ぐらいは負けてくれ。っつーか、本当にやるのか!？」

「勿論です！」

「りゅーじん。この勝負は必ず勝つ」

「ちよつと待って愛ちゃん。さつきもボロ勝ちだったよね？ 一抜けしたよね？ 余計に気合を入れられても困るんだけど！？」

ダメだ。これはもはやさっきの条件付けの勝負が確定しているよ
うな物だ。

「じゃ、頑張つてね」

「あつはつは。大変だなお前ら。頑張れよ」

爆弾を投げるだけ投げて、そのまま紙絵さんと祭さんは席を離れた。

「しょうがないから、こっちは十勝したら勝ちで、そっちは一勝でいいわよ」

一発勝負だったら諦める所だったが、これはなめられた物だ。

「なめんなよ。男の意地を見せてやるッ！！」

「ちよいとバカにされたみたいで悔しいな」

「この言葉、後悔させてあげるよ」

ルールは、男子陣、女子陣の内、どちらのチームが全員先にあがるかで勝敗を競う変則大富豪が幕を開けた。

ダメだ。こうなったら仕方が無い。この手だけは使いたくなくかつたが、背に腹はかえられない。

俺はチラリと嵐とアイコンタクトを取り、カードを配るフリをして、嵐がカバンからこっそりと取り出したイカサマカードを、嵐、龍神と共にこっそりと入れ替える。これは嵐と龍神とトランプをすする時に、よく俺達が使った手だ。

いわゆるイカサマというヤツだが仕方が無い。

……だってコイツに「なんでも一ついう事をきく」なんて特権を与えたらこき使われるのが目に見えてるもん！（泣）

イカサマは嵐も龍神もよく使うので、もはや俺達のトランプはイカサマ合戦という物になっているが。

そしてもうすぐ入れ替え作業が終わる、という所で

「ストップ」

ガシツ、と上腕を彩につかまれた。

「これ、何？」

ギリギリとつかむ力が強くなる。

「痛い痛い痛い！」

そしてぼろぼろと入れ替えカードが落ちていく。隣を見ると、嵐も龍神も同じような状況だ。

「バレバレなのよ」

「ずるいです。嵐さん」

「りゅーじん。後でおしおきだよ？」

こんな時、か弱い男がしなければいけない事を、俺は知っている。

「「「ごめんなさい（土下座）」「「「

渾身の土下座せうざを見せる事だ。

プライド？ 恥？ 外聞？ そんな物、とっくの昔に捨てている。
そしてその後、俺達はあっさりと瞬殺されましたとさ。

第二話 魔王様と行くOKINAWA地獄巡りツアー

空港に着いた。飛行機から降りると沖縄の陽射しが俺達を歓迎するかのように照り付けてくる。

そこまでは、良い。

しかし問題はこの後だ。

俺達は機内で行われたトランプで負けた事により、女子達の言いなりの奴隷と化している。もはや俺達にとってこれは旅行ではなく『魔王様と行くOKINAWA地獄巡りツアー』だ。

「誰が魔王様だったって？」

「痛い痛い痛い！！ 腕が！ 腕がああああああああああああああああああああッ！！」

俺の右腕がメキメキと不吉な音を立てている。彩が片手で握りつぶそうとしているからだ。

「つーか、ここ最近俺の頭の中が完全に読まれているのはどういう事だ。もしか彩はついに純粹種のイノイターへの変革を完全に果たしたのか！？」

「だったら彩を倒せば俺の有用性は不動の物とな『誰を倒すって？』ぎゃああああああああああああああああああああああ！！」

人の腕を握りつぶすのはダメ！ ゼツタイ！

晴れ渡った沖縄の青空に、ゴキーンツ、と軽快な骨の潰される音が鳴り響いた。

ゴロゴロと、熱く発熱しているアスファルトに、トランクが滑る。俺が引つ張っているのは、彩のトランクだ。空港に着くや否やさっそく俺は奴隷の役割として荷物持ちをやらされた。

まさか人生初の沖縄旅行がこんな奴隷という形でスタートするとは思わなかった。

「あー、良い気持ち」

ぐぐつ、と彩が背伸びする。因みに俺は『ヤな気持ち』だ。

「やっぱり暑いですね」

直ちゃんが服をパタパタとさせる。確かに、暑い。まんま沖縄のイメージ通りだ。

「それじゃあ今から自由行動開始だー！ お前ら、ちゃんと楽しめよー。宿はさっき言った通りの場所な。迷ったら電話してこいよ」

祭さんが注意事項を述べ終わると、それぞれの生徒は散開していく。カップルがイチャイチャしながら歩いていくのが腹立たしい。お前らも散開してしまえ。

「あー、彼女欲しいな畜生」

と、俺がポロツ、と本音を漏らす。

「「「「「黙れこのリア充がツツツ！！」「」「」」」」」

すると直後に彼女無し、男子同士で組んで旅行を楽しむ、むさ

くるしい彼女無しの五人組、『男の友情は永遠だぜ!』の野朗共が
噛み付いてくる。全く。俺の何処がリア充なのか教えて欲しい。

「ホント、バカよね……………」

背後では不機嫌な彩がぶくつ、と頬を膨らませていた。

俺達はとりあえず、荷物を預ける為に祭さんの家の系列の旅館に
向かった。因みに祭さんも行動を共にしている。

「そういえば前々から聞きたかったんですけど、祭さんもあの宝探
し大会に参加してましたよね?」

「んー? そうだけど?」

「俺達よりも進んでたのに、なんで俺達が宝モンスターを見つけた時に居な
かつたんだろ?と思ひまして」

「途中で予約してたけ おん! のね どろいどをアニメ トまで
取りに行ったから」

納得。

とても祭さんらしい理由だ。

しばらく歩くと、明らかに周りよりも頭一つ出ている旅館が目
に入った。あれが、祭さんの家の系列の旅館だろう。

いかにも高級旅館というような雰囲気を出している。祭さんが旅
館に入るや否や、目の前には女将と思われる女性が立っていた。

「よーばあちゃん。久しぶりー」

「よく来たわねえ。盛人^{せいと}。あら。明ちゃんまで。前まではこんなに小さかったのに」

「あつはつはつ。何時の話してるんだよばあちゃん」

「じ、ご無沙汰しております」

陽気に笑う祭さんの側で、明さんがペコリと丁寧にお辞儀をする。すると、女将の人が俺達に気づいた。

「こっちは、盛人の……」

「おう！ 後輩だ！ それと後輩になる予定の中学生が一名」

祭さん。まだ直ちゃんは俺達の学園を受けるとは言ってないですよ？ もはやこの短時間の間に祭さんは直ちゃんはもう自分の学園の後輩になる事が確定してしまっているらしい。

「おやおや。よく来たねえ。こんにちは」

「じ、こんにちは」

この女将、というか、俺の中の女将のイメージはもっと年をとったお婆さんが務めているイメージなのだが、目の前の女将と思われる女性^{むすめ}はぱつと見は三十代後半のような人だった。

「この人は俺の御婆ちゃんの皐月^{あきづき}ばあちゃん。因みに五十七才」

「「「「うそおつ!?!」「」「」

嘘だろ!?! ぱつと身はまだ三十台後半でも十分通じるぞ!?!

側ではみんなあんぐりと口をあけている。(ただし紙絵さんは「ワオ ふっしぎ」) と言ってニコニコしている)

「お、お若いですね」

と直ちゃんが全員の言葉を代弁する。

「あらまあ。ありがとう」

臯月さんは嬉しそうにニコニコと笑顔になった。

幸助達が旅館に来る少し前。

旅館のとある一室に、むさくるしい彼女無しの五人組、『男の友情は永遠だぜ!』が集まっていた。手にはPSPを持ってなにやらカチコチと無言で、せわしなくボタンを押している。

「あゝあ。沖縄に来て、結局はする事は同じだよな」

「そつだよなあ。結局は旅館に閉じこもってゲームだしな」

「まあまあ。バカみたいに彼女を作ってイチャイチャしてるヤツ等なんてほつとこうぜ。どうせこんな学生時代に付き合っても別れるつて。ガキなんてそんなもんだ」

「そつだ! 本番は社会人からだ! 俺達、『男の友情は永遠だぜ

「!」は社会人編からが盛り上がるんだよ!」

「……………でも、もしも社会人になっても彼女が出来なかったら……………」

「……………」

ポツリ、とメンバーの内の一人が呟く。同時に、全員に冷や汗がタラリと流れ落ちる。

「ま、まあとりあえず今はゲームを楽しもうぜ!」

「そうだよな! 俺達の青春は友情に捧げるって決めたんだ!」

あっはっはっ、と無理に笑顔を作る。すると、一人の少年が立ち上がる。

「? どうしたんだ市尾^{いちのお}。トイレか?」

「……………俺、同じクラスの友里花^{ゆりが}ちゃんに、一緒に外を散歩しないかって誘われてるんだよな……………」

「……………」

気まずそうにする市尾。すると、ポツリとまた一人呟く。

「……………行けよ」

「……………」

ガシャン、とゲーム機を落とす。

「行けよ！ 折角の沖縄旅行だぞ！ 俺達の事はかまうな！ だから行けッ！！ 女子エメンの元につ！！！」

「そうだ。折角のチャンスなんだ。行け！ お前の事は決して忘れない！」

「……………みんな。ありがとう。俺もみんなの事は、絶対に忘れない！」

だっ！ とそのまま駆け出していく市尾。室内に取り残された四人。

「……………本当に、違う意味で忘れられねえよ」

「……そうだな」「」

四人の絆が強まった瞬間であった。

第三話 バレなきやいって問題じゃない

俺達が旅館の中を進んでいくと、前の廊下の方からドタドタと同じクラスの市尾が駆け出してきた。なにやらとても嬉しそうな、悲しいような、そんな複雑な表情をしている。

「市尾？ どうしたんだ？」

「桐山か。．．．．俺は女子エチンの為に、仲間との友情きずなを断ち切った、罪深い男だ。だがしかし、ついにお前達リア充の仲間入りを果たすかもしれない。いや、果たして見せるッ！！」

わけのわからない事を言うと、そのまま市尾は俺達とすれ違い、旅館の玄関へと駆け出していった。

「な、なんだったんだ．．．．」

「そういえば友里花ゆりかが、前から気になっていた男子に思い切って声をかけてみるって言ってたわね。なんでも散歩に誘うとかなんとか」

神様。どうか哀れな独り身の市尾に春をくださいますよう。

その後、俺達が案内されたのは二階の部屋だった。まずは男子と女子、それぞれの部屋に分かれて荷物だけ置き、必要な荷物を持ってそのまま再び旅館の外へと出る。

「よーし、それじゃあ出発！」

「祭さん。まずは目的地を言わないと．．．．」

祭さんの隣で明さんがため息と共に言う。

「わりいわりい。まあとりあえずついていこうい！」

「話聞いてました!？」

明さん。残念ながら聞いてないと思う。

そして祭さんが案内した所にあつたのは、旅館の近くに留めてある一台のリムジン。中には運転手は居ない。そして祭さんは何事も無くリムジンに向かっている。まさかとは思つが……

「よし、そんじゃあ行こうぜ！」

祭さんが車の運転席に乗り込んだ。

「「「ちよつと待つた!!」「」」

何事も無く行くこととする祭さんを、俺、嵐、龍神が待つたをかける。

「? 何か問題があるのか？」

「大有りですよ! なんで祭さんが運転席に座っているんですか!」

「へっ? なら誰が運転するんだ?」

「知るかあああああああああああああああああああああああああああああああッ!」

祭さんにはもう少し自分の年齢という物を自覚して欲しい。

「まあ大丈夫。ちゃんと策はある」

「策？」

嫌な予感しか無いが、一応聞いてみよう。

「バレなきゃ問題無し（キリッ）」

「バレるだろっ！」

結局、旅館の人に運転してもらおう事になり、俺達を乗せたリムジンは出発した。もはや祭さんが居る以上、リムジンぐらいでは驚かなくなった自分が恐ろしい。

因みに運転してくれるのは旅館で働いている青年、小野寺大樹おのでらたいきさんだ。祭さんは小さい頃に会って以来の久々の再開らしい。

「あっはっはっ。盛人君も無茶をするようになったなあ」

「小野寺さん。そんな褒めないでくださいよ」

「祭さん。褒めてないです」

小野寺さんはリムジンを走らせながらニコニコと笑う。

「いやあ。盛人君が後輩を引き連れに来たか。もうそんな年なんだねえ」

「小野寺さんだって、俺が一年生の頃はまだ中学生だったじゃない

ですか」

「ああ。あの頃は俺も若かった！」

二十六歳は若いとは言わないのだろうか。

「えっと、そっちの子達は……」

「俺の可愛い可愛い後輩達」

「あはは。君達、盛人君の後輩は大変だろう？ 今回の旅行だって、盛人君の思いつきに巻き込まれた結果だろ？」

「大体当たってます」

と龍神が答える。

「あははははっ。やっぱり」

楽しそうに笑う小野寺さん。そしてミラー越しに俺達の方に視線を向ける。

「古宇利大橋って、知ってる？」

「あっ知ってます。沖縄に来る前にネットで観光名所をググったんですけど、確か某サイトではランキング一位になってましたよね？」

「そうそう。よく調べてきたねえ」

「えへへ。調べるの、大好きなんですよね」

チラツ、と紙絵さんが彩の方を見る。そして彩はゾワリと背筋が凍りついたように身を震わせる。

「瀬低ビーチの前に、少しここを見ていくといいよ」

リムジンは古宇利大橋に入った。古宇利大橋は、古宇利島と屋我地島を結ぶ全長1960mの真っ直ぐに伸びている離島架橋で、ドライブにはもってこいの場所だ。因みに、歩道も整備されているらしく、徒歩で渡る事も出来る。

リムジンの窓が開く。車窓からは風がバタバタと入り込み、髪がなびく。日も照っていて、心地よい風も入ってくる。

橋の下を見てみると、青い海がただただ広がっている。

「綺麗……」

と、彩が俺の隣で呟いている。確かに、綺麗だった。

そして、皆その景色を堪能した後、全長千九百六十mもある古宇利大橋を渡りきった。

「さあ、今度はご要望のあった瀬低ビーチだ！」

小野寺さんの操るリムジンがスピードを上げた。

次の目的地は、瀬低ビーチだ。

瀬低ビーチ。本部半島の沖に浮かぶ瀬底島にある、約七百mの天然のビーチだ。全長七百六十二mの瀬底大橋により沖縄本島とつながり、車で渡りきる事も出来る。海自体の透明度も高く、海の中に

は魚達も居るらしい。沖縄本島でも屈指のビーチと言われている。
因みに駐車場も有料だが完備している。(一台千円)
そして俺達は、女子達の着替え待ちの為、現在はビーチパラソル
の下でボーツと座っている、という状況だ。

「なんかこんな綺麗な所にみんなが学校で忙しい中いるっていうの
も罪悪感あるよな」

「ま、それもそーだな」

「でもこれって皆勤賞とかどうなるんだろう？ やっぱり欠席扱い
になるのかな」

真面目な龍神にとってそこは気になるのだろう。

「学校主催のイベントの優勝商品なんだからそこら辺は問題無いみ
たいだぜ？」

と嵐が補足する。

「そっか。なら問題は無いな」

それだけ確認すると、本を読み始めた。

「ああ。平和だなあ」

と、俺もレジャーシートの上でごろんと寝転ぶ。
本当に、こんな平和が続けばいいなと思っていたのだが、そう無
らないような気がしてならないのだった。

第四話 いつも通りやりやあいんだよ

瀬戸ビーチでは、月曜日、という事もあってか人通りが少ない。まあそれも当然だろう。学生の殆どは月曜日からせつせと学校に通っているハズだから。

全く持ってご苦労な事だ。もしもここでのおんきに月曜日に旅行に来ている俺達を見て「学校は大丈夫なのか？もしかしてサボり？」とかなんとか言ってくる奴が居たら俺はこう言い返そうと思う。

「ちゃんと課題しゅくを見てから来ました」ってな。

あの課題地獄は本当にきつかった。正直俺の命は宿題のせいできるとは思うかと思っただ程だ。しかし神様も鬼では無かった。こうして俺達に報酬を与えてくれたのだから。

その報酬は、目の前に広がる青い海。晴れ渡る青空。そして、水着姿の幼馴染み。

「.....」

「な、何よ」

ボーツ、と思わず彩の水着姿に見とれてしまう。だって、綺麗だから。

「ど、どこか変だった？」

きよろきよろと水着を見渡す彩。

止めてくれ。そんな水着でくねくねと動き回られたら俺の鼻から赤い何かがあふれ出てくる。

「い、いや、似合ってるなあ、て思ってよ」

「そ、そう?」

ぱあっ、と途端に笑顔となる彩。

ああ畜生。いつもそんな顔して笑えば可愛いのかな。と思っていると、彩が突然ハッ、とする。

「って、何じろじろ見てるのよッ! この変態!」

晴れ渡る青空の下、彩の右ストレートが綺麗に俺の顔面を打ちぬいた。

結局、女子全員が着替えを終わって出てきたのは彩が出てきてから十分後だった。それぞれ見事に水着を着こなしている。しかしこうして見てみると……

「幸助。どうしたの? なんかもたブーツとしちゃってさ」

「ん? ああ。ちょっと気になる事があってよ」

「気になる事?」

「ああ」

「どんな?」

「いやあ、こうして改めてみんなの水着姿を見るとき、やっぱり紙絵さんって胸が大きいなあって

「このド変態がああああああああああ！」「ごぶあああああああああああッ！！」

神様。恨むぜ。俺の幼馴染みにとんでもない凶器（凶器）を授けた事を。

「うっっっ……」

直はなんとか着替え終わり、皆と共にビーチに来たのだが……

（み、皆さんのレベルが高すぎる……！！）

目に付くのはその大きな胸。ぶっちゃけ、まだまだ直には無い物だ（足りない物とも言える）。

（うっっ。仲間だと思っていた莉子さんも結構大きいし、彩と愛さんにはまるで勝てる気がしない。そもそも明さんは論外。な、なんか張り合う所か微塵も勝てる気がしない！ さ、差別ですこんなの！ どうして神様は皆平等にしてくれなかったんですかあ~~~~~！！）

直は涙目でチラリと他のメンバーの様子を伺う。足りない物（むね）を補う為になんとか試行錯誤しようとする直。

（せ、せめて今日ぐらいは何か特別な事を……）

彩は幸助に向かってなにやら拳を放っている。幸助は赤い花を咲

かせながら天高く空に舞い上がっている。

(これはこれでいつもの光景ですね)

しれつ、としてそのまま視線を移す直。

今度目に飛び込んできたのは愛がなにやら龍神にそつ、と寄り添っている。龍神はそのまま無視して本を読み続けているが、愛はそれでも龍神の側に居た。しかししばらくすると、「りゅーじん。感想は?」「感想? 何の?」「やっぱりりゅーじんにはおしおきが必要」「えつ? ちよつ、何を.....ぎ、ぎゃああああああああああああああああああ!」となにやら向こうは向こうで赤い花を咲かせている。

真つ白な本が真つ赤に染まっているのは気にしない直であった。

(あれはあれでまたいつもの.....)

今度は莉子の方に視線を移す。

莉子は海中にもぐってカメラを構えている。恐らく撮影の気を持っているのだろう。

(あれもいつも通り.....)

直は今度は明の方に目を移す。明はなにやらスースーと寝ている祭の隣にちょこんと座っているだけだ。

(あれはあれでいつもの.....つて、あの人達の『いつも』が解らないけど.....)

そこでふと、思う。

(あれ？ みんな．．．．．いつも通り．．．．．?)

赤い花を咲かせている幸助と龍神。赤い花を咲かせた彩と愛。カメヲをかまえて水中に潜む莉子。のんきに寝ている祭。それをただただ側で見つめている明。

別に特別な事などしていない。
何処にいても自分のペースで。
それぞれ想いの人と共に居る。

「おっ、居た居た」

ひよいつ、と嵐が直の顔を覗き込む。

「はわっ!？」

「なんでそんな所でじっとしてるんだ？」

「い、いえっ、そのっ、あのっ。え、えと、」

「? なんだか解らねえけど、行くぞ」

ぐいつ、と直の手を引つ張る嵐。

「何を悩んでいるか知らねえけど、お前はお前で、いつも通りやりやあいいんだよ」

「あっ．．．．．」

まるで見透かしたかのように、自分の求める答えを言ってくれる

嵐。

（うつつ。うつついつ時って、本当にかっこいい……）

顔が赤くなっている事に気づき、あわててなんとかごまかそうとする直。

「あ、そうだ」

「？」

「やっぱりこうしてみると、皆胸が結構大き「死んでください」ごぶ
うつつ」

白い砂浜に赤い花が咲いた。

（うつつ。うつつ。どうしてこういう所はちゃんと察してくれないのですか
あ）

真っ赤な顔で涙目となる直であった。

第五話 これ、無理ゲーじゃね？（泣）

「ビーチバレーをしよう」

俺達は赤い花（ 出血）をビーチに咲かせた後、のんびりとしていたのだが、突如祭さんが切り出した。

「ビーチバレーですか？」

「そつ。チーム分けをして、対決するんだよ」

「どうして急にそんな事を言うんですか？」

「暇だから」

俺があたりまえの質問をすると、間髪入れずに即答された。まあ祭さんだから仕方が無い。こういうペースの人だ。

「おつ。そりゃあ面白そうだな。どうやってチーム分けするんだ？」

嵐も乗ってくる。龍神はもくもくと本を読んでいるので関心は無いようだ。まあ、龍神はどっちかって言うインドア派だから当たり前だが。

「とりあえずチーム分けの前に、メンバーを集めないとな」

その後、俺、嵐、祭さん、彩、直ちゃん、明さんが一緒にビーチバレーをする事になった。神戸さんは龍神、紙絵さんと共に見学するようだ。

「さうて、まずはどうやってチーム分けをするかなあ」

「とりあえず、力が均等になるようにしなきゃいけませんよね」

とは言っても、ぶつちやけ祭さんが居る時点でゲームバランスが完全に崩壊しているが。

「彩。祭さんをそっちのチームに入れようか？ 男子VS女子じゃ話にならないだろ？」

「そんな事言ってるのかしら？ アンタの負ける確立がさらに高まるわよ？」

「ムツ。失敬な。さすがに女子には負けねえよ」

「アンタじゃ無理よ」

「な、なんだと !?」

少し大人気無いと思って手加減してやるつもりかと思っただが、どうやらその必要は無いらしい。

「それなら、男子VS女子でどうだ！」

「望む所よ！」

互いに火花を散らす俺と彩。

「後でほえ面かくなよ!？」

「こっちのセリフよ！」

やれやれ。大人気ないがこうなったら完膚なきまでに叩き潰す必要がありそうだ。

「あっはっはっ。お前らと居ると退屈しないなあ」

そんな俺達の側で、祭さんがのんきに笑っていた。

ポーンツ、とボールが空高く舞い上がる。男子VS女子の三VS三の変則ビーチバレー対決が始まった。先行は相手である女子チーム。彩のサーブが放たれた所だ。

因みに、どこから持ってきたのか祭さんはすぐにビーチバレーのネット、その他諸々を引っ張ってきた。どうやら元々準備していた物のようだ。

それにしても、いくら彩とは言え、彩はやっぱり女の子だ。それに変わりは無い。ここで男子である俺が彩のサーブも取れなければ男がすたるというものだ。

ポーンツ、と軽く俺はそのボールをレシーブする。これぐらいのハッデは必要だろう。

「はっ！」

すると、浮いた甘い球を捉え、ビシッ！と、鋭いスパイクが、彩の手から放たれた。

「へっ？」

放たれたスパイクはゴウツ！！ と、空気を切り裂き、閃光のごとくポスト、と白い砂浜に落下した。いや、この場合『突き刺さった』、というような表現が正しいだろう。

シユルシユルと白い砂浜に突き刺さったボールが回転する。取るうとするどころか、反応すら出来なかった。

.....

これ、無理ゲーじゃね？（泣）

「あ.....彩.....さん？」

「何よ」

「ど、どうしてそんなに鋭いサーブをお打ちになっているのですか？」

「ビーチバレーは初めてだけど、バレーなら少しだけやった事があるわ」

そういえば、彩は運動神経が良いという設定をすっかり忘れてた。度々、クラブチームの助っ人にも駆り出された事もある。そういえば、応援に行ったスポーツの試合の中にバレーも含まれてた気がする。

「……………彩さん？」

「何？」

「手加減とかは……………」

「無し」

確かに、手加減してくれるような目つきではない。どうやら完全にムキになっている。彩も負けず嫌いな所があるからなあ（しみじみ）

「えっと、祭さん、ビーチバレーってやった事ありますよね？」

「無い」

「ええっ！？　じゃあどうして急にやるって言い出したんですか！？」

「一回やってみたかったから」

ああ。終わった。これ。

その後は次々とポイントを取られ、一セット目が終了。因みに俺達は一点も取れなかった。

「いやあ。強いなあ」

「いやいやいや。笑い事じゃ無いですよ（涙目）」

「自分から持ちかけておいて、よくもまああれだけボコボコにされ

る事が出来るな。幸助」

「うっせえ！（涙目）」

「つーか彩、^{アイツ}第一セットは俺しか狙ってこなかったぞ……俺がボロ雑巾のようにいじめられている間、祭さんは笑っていたし、嵐は嵐で暇そうに、（哀れみの目をむけて）してたし。

「にしても、これじゃあゲームにならないな」

「いや。だいじょーぶ。こっからだって」

本を読んでいた祭さんがパタンと本を閉じ、にっ、と笑う。

「？」

「それに、男がやられっぱなしってのも少しカッコ悪いしな」

そして第二セットが始まった。嵐がアンダーサーブを放つ。それを間髪入れずに彩がスパイクを叩き込む。

「よっ」

俺に向かって放たれたスパイクを、祭さんが瞬時に俺の正面にまわりこみ、そして、拾った。

「ええっ！？」

驚く彩。むしろ見方である俺も驚いている。

「行つたぞ。幸助」

「え、あ、は、はい」

俺は祭さんにトスを上げる。そしてそれを祭さんが綺麗に相手のコートへと叩き込んだ。俺達のチームの、初めての得点だ。

「え、えっと、祭さん？ 確かビーチバレーって初心者じゃあ．．．
．．．」

「そうだけど？」

「でも今のスパイクは．．．．．」

「ああ。彩アイツのプレーを観察して、大体、どんな風に動けばいいのかわかったからな。さっき読んでたビーチバレーのルールブックの中にあるプレーの動きと、第一セットで見た実際の動きを照らし合わせ、組み合わせ、どういう風に動けばいいのかを計算して、後はそれを実践しただけ」

しれつ、と言い放つ祭さん。さ、さすが『天才』と言わざるおえない。しかし、これならなんとかゲームになりそうだ。

その後の第二セットは、第一セットの彩による『一方的な虐殺ワンサイドゲーム』とは違い、なんとかゲームの形となっていた。（主に祭さんのおかげで）

相変わらず彩は俺を狙ってるけどさ．．．．．もう今日だけで五回はボールが俺の顔面を直撃している。

そして、何気に直ちゃんも運動神経が良く、なかなかの働きをしている。明さんは身体能力は相手チームの中ではずば抜けているのだが、途中で転んだり、ドジっ子メイド属性が発動して程々、と言

った感じだ。

そして、ラストポイントだった所で、祭さんが衝撃的な一言を
発した。

「疲れた」

「「は？」」

「うう。俺、そろそろ寝るな」

それだけ言うと、祭さんは眠たそうにパラソルの下へと戻って
いった。

「「「「「」」」」」」

彩がそっ、と俺に一言だけ伝える。

「覚悟は出来てるわよね？」

はい。どうぞお好きに虐殺なさってください。

その後、再び彩による俺に対する『ワンサイドゲーム 一方的な虐殺』が再開されま
したとさ。

第六話 願い事

昼間、彩に虐殺された俺はふらふらの体でなんとか旅館にたどり着き、死ぬように眠りに落ちた。そして気がつくと、あたりは夜になっていた。夕食は広間でみんなで食べた。

さすがに祭さんのおばあさんが経営する旅館なだけあって、夕食はとても豪華だった。そして、夕食を食べ終わると、広間の中で今度は彩が俺に突然の提案を持ちかけてきた。

「幸助、ちよつといい？」

「ん？ 何？」

「あの、その、」

もじもじと何か言いづらそうにする彩。なるほど。大体察しはついていた。ここは紳士な俺が気を使ってあげなきゃな。

「もしかして、お前……………」

「うう。そ、そうなのよ。実は……………」

「腹でも痛いのか？ だったらさっさとトイレに『死にさらしなさい（ごきゅっ）』ぎゃああああああああああああああああッ！！」

うう。畜生。何も首をひねらなくてもいいじゃないか。一体どこが間違っているというんだ。

「ち、ちよつと散歩に付き合って欲しいのよ」

「散歩……………」

俺は不吉な音を立てた首をさすりながら呟く。

「散歩つってもなー。この後嵐と龍神と祭さんとでポーカーをしよ
うかと……………」

「確かまだ、あの『約束』は有効よね？」

『約束』というのは多分飛行機のオーバーキル大富豪で、俺達男
チームが惨敗した時に課せられてしまった『なんでも言う事をきく』
という制約だろう。

破れば恐らく死。最早俺に選択肢など無かった。

「解ったよ。俺の華麗なロイヤルストレートフラッシュが決められ
ないのが残念だが大人な俺がしぶしぶついて行ってや『黙りなさい
(ぼぎゅっ)』ぎゃあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ！！」

俺は沖縄から帰ってくる頃には五体満足で居られるのかどうか疑
問だった。

「……………なあ長谷川……………」

「なんだ小林。竹川。日延」

「市尾、やっぱり戻って来ないよ……………」

ポツリ、と小林が呟く。

『男の友情は永遠だぜ!』のメンバーは現在、夕食を済ませた後、自室に集合していた。手には充電の切れたPSP。

「……………何も言つな」

と長谷川。

「そうだよ。ここは俺達『男の友情は永遠だぜ!』から卒業生が出ただけでも喜ばうじやないか。市尾アイツは俺達の希望の星だ。ここは黙って見送つてやろう」

と竹川。

「竹川……………」

と日延。

男達四人ははあつ、とため息をつく。
するとそのタイミングを見計らったかのように、コンコン、とドアが叩かれる。ぴくっ、とする四人の男達。これは昼間のパターンを考えると、女子からのお誘いだ。

「あの……………篠田しのだ、ですけど……………」

（ ）（ ）篠田しよじ……………だど!?()（ ）

やはりこのパターンは女子だった。しかも篠田はクラスでもそれなりに綺麗な方の女子だ。普段は物静かに本を読んでいる女子だ。

しかし問題はこの次。この次に呼ばれるのが誰かで再び『男の友

情は永遠だぜ!』のメンバーの運命がガラリと変わる。

「日延君、居る?」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

指名されたのは、日延だった。日延は申し訳なさそうにその場を立つ。そして、ドアの前へと移動した所で、

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

そのまま日延はその部屋を後にした。支払った代価は、『男の友情』。今の日延にとっては、あまりにも安い代価だった。

俺は彩と共に旅館を出た。散歩、と言っても辺りを適当に歩くだけだ。民家からの明かりが、道を照らしてくれる。

彩も、俺も、しばらくは黙って道を歩いた。正直こんな夜道で二人つきりってなんだかんだで始めてだった気がする。学校から帰る時も、部活動に入っていない俺達にとっては、下校中の夜道なんて物は無縁だったせいもある。

「な、なあ、彩?」

「ふわっ!? な、何よ?」

「なんか、こ、こついうのってなんだかんだで初めてだよな」

「そ、そうかしら？」

「お、おう……………」

「……………」

再び沈黙してしまう俺と彩。

別にこの沈黙が嫌なわけではない。この沈黙に耐え切れないわけではない。ただ、なんか、緊張してしまうのだ。

そもそもなんで急に散歩をしようなんて言い出したのが解らない。

「ちょっと、止まって」

突然、彩がピタリと動きを止める。その場所には、神社があった。

「ここ、一緒に行ってくれる？」

断る道理も無い。俺と彩は一緒に神社へと足を踏み入れた。じめんにパラパラと散らばっている小石を踏みつけると、じやりっ、じやりっ、というような音が辺りに響く。俺も彩も沈黙したままだし、周囲はとても静かだからなおさら音が響く。

気がつくくと、目の前には賽銭箱と鐘が。

「お参りしない？」

「お参り？ 季節的にはまだまだ先じゃねーのか？」

そもそもまだ夏休みすら始まっていない。とは言っても、もうす

ぐ期末テストだが。

「なんかこの神社ね、夜に二人きりで来ると、来てくれた人達の願い事を叶える為に神様が降りてきてくれるらしいわ。ちょうどこの季節にね」

「へえー……………」

それは知らなかった。つまり、俺も彩も現在はその条件を満たしている、というわけか。これで彩が急に散歩に行こうと言い出した理由も明らかになった。

彩はあらかじめ用意しておいたらしい十円玉を俺に一つ渡す。二人同時に賽銭箱に賽銭を入れ、共に願い事をする。(鐘は鳴らさないでいいらしい。とは言っても近所迷惑だからという理由もあり、当然鳴らさないが)

そつ、と目を閉じた彩の横顔がチラリと目に入った。その横顔は月明かりに照らされて、とても綺麗、だった。

「? どうかした?」

「っ!? い、いや? なんでも無いけど!」

「……………」

彩はそれ以上の言及はしなかった。そして、そのまま俺達は帰路についた。

「幸助は何をお願いしたのよ?」

「俺? ん〜、そうだな。『いつまでも今のままの生活が続きますように』、かな」

「平和ねー。もう少しマシな事は無かったの？」

「ほっとけ。だったら彩は何をお願いしたんだよ」

「私？ 大丈夫よ。アンタとは違って、ずっと前からの夢だから」

コイツのずっと前からの夢。なんだろう。俺には解らない。

「そうか。その願い、叶うといいな」

「……………そうね」

旅館に帰る途中の道で、今度は嵐と直ちゃん、その少し後に龍神と神戸さん、そしてまたその後に祭さんと明さんと出くわした。

どうやら今日は散歩が流行っているみたいだ。……………男子メンバーの無理矢理連れられました感が否めないが。

月明かりが照らされる中、俺と彩は帰り道を歩いた。

「そうか。その願い、叶うといいな」

彩の目の前で、幸助はそう言った。

「……………そうね」

彩はそれだけ、返した。

(半分はもう、叶ってるんだけどね)

彩の願い。それは、幸助と、結ばれる事。ずっと前から思っていた、子供の頃からの夢。それが叶うのがいつになるのか解らないけど、彩は頑張り続ける。

そう、決めたのだから。

帰りの飛行機の中。愛は疲れ果てて寝てしまっている皆を見る。

その目はどこかさびしそうで、まるで今の光景を焼き付けておこうとしているようだ。

「眠れないの？」

突然、莉子が話しかけてきた。愛はこくりとうなずく。

「……………あの話、本当に受けるの？」

「……………うん。お父さんの困っている顔は、見たくないから」

愛が生まれて早々に、母親は他界した。父親はそんな愛を、精一杯育ててくれた。そんな父親に愛は感謝している。だからこそ、自分のせいで困る父親の顔を、見たくはなかった。

「そう」

莉子はいつものそのテンションとは裏腹に、表情を曇らせている。

「あの事、まだみんなには言わないで」

「本当にいいの？ 一番悲しむのは、心が傷つくのは、多分菅田君だよ？」

「……………いいの。りゅーじんには、感謝してるから。」

こんな自分と、一緒に居てくれて。と、愛は心の中で呟く。

「だからこそ、言わない。言えなきゃと無茶をするから」

「……………そう」

莉子はそれだけ確認すると、眠りについた。愛はそんな莉子に感謝しながら、隣で眠っている龍神の顔見る。

「ありがとう。りゅーじん」

それだけ、言っておきたかった。

自分がみんなと一緒に過ごせる時間は、もう残り少ないから。

第六話 願い事（後書き）

「沖縄旅行編」 完結です。次はSSを挟んでから、新章開始です。

ある日の日曜日の料理教室

ある日の日曜日。家に直ちゃんがやってきた。なんでも、彩に料理を習いたいのだそう。なぜ急にそんな事を言い出したのかはあえて言わないが、問題は、現在彩が住んでいるのは俺の家、という点だ。

最初は直ちゃんもなぜ俺の家なのか解らなかったが、そこはなんとかごまかした。そして、ついにその約束の日曜日がやってきたのだが。

「おじゃまします」

「入るぜ」

「い、いらっしやい」

俺はひきつった笑顔で二人を出迎える。因みに嵐は俺の所の事情を知っているのだが、問題は別の所にある。

因みに彩は少し遅れて俺の家に来る予定だ。初めから俺の家に居ると、少しばかりだろうが怪しまれる。こちらとしては、なんとか同じ立場にある直ちゃんには同居生活の事を知られたくは無い。確かに見方が増えるのは良いのだが、何かの拍子に誰かに聞かれては困る。主に俺達の命が。

よって、秘密を知るのは必要最低限の人数（俺、嵐、龍神の三人）でなければならぬ。

「彩は少ししたら来るから。なんでも買い物をしているらしい」

これは本当。全て嘘の情報ばかりを与えると、逆にボロが出る。

「なんだか幸助さんの家も久しぶりですね」

「お、おう。そうだな」

確かに、中学時代はよく俺の家や嵐の家、そして龍神の家や、彩、神戸さんの家に集まったりもした。

「それにしても、私はともかく、皆さん家に集まらないんですね？」

「「……………」」

……………いきなり痛い所をついてくるなあ（しみじみ）

「そりゃあれだ。高校生活は忙しいからな」

「やっぱりそうですよね」

嵐が上手く切り抜ける。やれやれ。来てまだそんなに経っていないのにこの調子じゃあ、この後の危機は乗り越えられないかもな。今日の最大の難関。それは直ちゃんが来る事では無い。

よりにもよって、今日に限ってぞろぞろとやってくるクラスメイト達だ。

時は金曜日に遡る。

「なあ幸助。日曜日、お前の家に行っていないか？」

「？ どうした急に」

俺に話しかけてきたのは、映画研究会部長の、ともえかずき巴和樹だ。映画研究会は昨年、部員数が0になってしまったのだが、巴が中学時代の仲間と共に、映画研究会に入部。そして同時に巴が部長になったそうだ。

巴は中学時代からの知り合いだが、中学でも何本か実際に映画を製作している。その出来は見事な物で、何気に、高校で作るコイツの映画が楽しみだったりする。

「実はさあ、俺、日曜日は部員のヤツ等と映画鑑賞をしてるんだけどよ、俺の家のBD/DVD対応のデッキが壊れてしまってな。だからお前の家で見させて欲しいんだ」

「お前の家、確かデッキが三台あったよな？」

「全滅した」

「他の部員の家のデッキは？」

「何度も鑑賞し、酷使し続けた結果、全滅だ」

どれだけ映画を見ているんだよ……

しかし、それだけ映画が好きなヤツ等が作るのだったら、中学時代に見たあの映画の出来も納得だ。

「解った。OKだ」

さすがに彩を呼ぶ、というような口実は使えない。その日は、彩とどこか映画でも見に行つて家を空けておけばいい。

そして、その日の夕食前に彩の口から、直ちゃんが今日の日に俺の家に来る、というような事を聞いたのだ。

因みに嵐もその事は知っている。そして俺達のやるべき事は一つだ。

俺の家に向かってくる、映画研究会部員の排除だ。

映画研究会あいつ部員が聞いたら、なんてヤツだ、と思うかもしれない。しかしこっちはそれどころでは無いんだ。友情を壊してでも守りたい物がある。

それは当然、俺の命、だ。

現在時刻は午前十一時。映画研究会が家に来るのは十一時半。時間が無い。俺はチラリと嵐にアイコンタクトをとる。嵐はそれに答える。

作戦ミッションスタートだ。

「直ちゃん。俺ちょっと用事があるから、少しここで待っていてくれるか?」

「へっ? 別に良いですけど.....」

「っと、俺も少し出てくるからな」

「ええっ!? 嵐さんまで!?!」

「それじゃあ頼んだ!」

そのまま俺と嵐は家を飛び出した。

この作戦にミスは許されない。なぜなら失敗した暁には妬み度が頂点に達した野朗共が、俺達に向かって襲撃をかけるだろう。

ターゲット
映画研究会は全部で五人。

映画研究会には悪いが、早急に始末しなければならぬ。

和樹は、四名の部員と共に、幸助の家へと向かっていた。

「さて、今日はどんなジャンルの映画を持ってきたんだ？」

副部長の長田海斗ながたかいとが言う。

「今日はアニメを見ようと思って、色んなアニメ作品の映画を持ってきたんだ」

和樹が肩にかけているエナメルバッグの中には、様々な映画のBDが入っている。

「アニメ？」

部員の一人、江西洋介えにしよすけが首を傾げる。

「ああ。あまりアニメもバカにしたものではないぞ。『千と千尋の神隠し』なんかは、日本で最大の興行収入を記録しているし、ジブリ作品やディズニー作品は長く、多くの人に愛されている」

「なるほどな。しかし映画は売り上げじゃなくて内容、だろ？」

海斗がにやりとする。

「ああ。けど、たまにはこういうのも見ておこうと思うんだ。俺達に実際にアニメ作品は作れなくても、学べる所はあると思うんだ」

「例えば今日はなんの映画を？」

「そうだな。さっき言った『千と千尋の神 じ』のジブリシリーズとか、『エヴァ ゲリオン新劇場版：序』、『破』とか、『劇場版 起動戦士ガ ダム〇〇』とか、とにかく色々な方面の物だ」

そんな映画談議に花をさかせ、映画研究会は道を行く。
しかし、そんな彼らの背後に、不信な影があった。

見つけた。巴達、映画研究会だ。なにやら楽しそうに話をしている。しかし、今からあの集団を排除しなければいけないとは、心が痛む。(多分)

現在、俺達は路地裏に隠れて映画研究会の様子を観察していた。

「さて、まずは路地裏（じちり）に誘い込んでから適当に殴り倒すか」

さらりと嵐がとんでもない事を言ったが、気にしない。

「お前は今の時間帯は家に居る予定だからな。路地裏には俺が誘い出す」

スッ、と嵐が俺の側を抜け、映画研究会（タイゲット）に迫る。

「おつ。偶然だな。こんな所で会うなんて」

「嵐じゃないか。どうした？」

「日曜は暇でな。そっちは？」

「今から幸助の家に行って映画鑑賞するんだ。そつだ。暇ならお前もどうだ？ 一般の人の感想も聞いてみたい」

「そつか。ならお邪魔させてもらおうかな」

嵐のおもつがままに事が運ばれていく。後は、路地裏に誘い込んだ所を（映画研究会には悪いが）潰すだけか。

「俺、近道知っているから案内しようか？」

「ありがとう。頼んだよ」

こつちに近づいてくる。俺は近くのゴミ箱の裏に身を隠す。

「こつちだ」

嵐が路地裏に誘い込んできた。そしてなにやらポケットから鍵を落とす。キンツ、と軽い金属の音が路地裏に響いた。

同時に、嵐がわざとらしくよろける。

「っつ」

「どつした？」

「ちょっと鍵を落としてしまったみたいだ」

「探すの手伝おうか？」

「頼む」

と、言ったのは部員の一人、長瀬友也ながせともやだ。なんていいヤツなんだ。しかしそれがアダとなるのだが。

他の部員達も腰をかがめて探そうとしてくれる。

そして、嵐は隣に居た長瀬の後頭部をぐっ、とつかみ、捻る。

「へっ？」

瞬間、ごきゅっ、という不吉な音が響いたが気にしない。

「長瀬？」

他の部員二人がすっ、と立つ。その背後に俺は回りこみ、同じように首をひねる。再び響く不吉な音。

もはや知った事では無い。だってこっちがかけてるのは命なのだから。ここは感情を殺して無にしなければ。

「どっしたんだみんな……ごきゅっ」

副部長の長田の首を嵐は再び捻る。

「!?!? どうしたみんな!」

巴が周囲に倒れている部員を見て目をまるくする。俺はそっ、とその背後に忍び寄り、首をひねる。

ごめん。

俺達はまだ死にたくは無いんだ。

コトコトと、カレーを煮込む音がキッチンに響く。今回、彩と直が作ったのはカレーだ。そっ、と味見を試してみる直。

「どう?」

「うっ。少し微妙、かもです」

「そう? 私は十分美味しいと思うけど」

しかし直としては、中途半端な物を嵐には出したくなかった。

「何が足りないのでしょうか?」

「足りない物、か。十分足りてると思うんだけど」

「足りてる? 何が、ですか?」

彩はにこっ、と微笑む。

「愛情、かな」

我ながら少し恥ずかしいセリフだったのだが、それは本心だった。実際、あまり料理もした事の無い直が頑張ろうとした時点で、それは十分に足りていた。

それが誰にむけての物だったのかは、彩はあえて口にしなかった。

その事を察したのか、直は顔を真っ赤にしてうつむいた。

俺達はなんとか事をやりすごし、すがすがしい気分で家に帰った。

「遅い！」

彩が玄関に仁王立ちで待ち構えていた。いや、本当にすみません。いままで命をかけた重要な聖戦（または一方的な虐殺、とも言つ）をしてたんだ。そんな事、彩には言えないけど。

「さっさと来なさい。せつかくのカレーが冷めてしまっわ」

「おっ。カレーか」

「そういえば嵐、カレー好きだったよな」

雑談をしながら食卓につく。テーブルには皿に盛り付けられたカレーが。

「……いただきます」「」「」

カレーは上手く味付けがされていて、コクもあり、美味しかった。しかし、まず感想を言うべきヤツが言わないと、感想は避けよう。

「ど、どうでしょう………?」

直ちゃんがドキドキとしながら、自分のカレーには手をつけずに嵐の感想を待っている。

「ん？ 美味しいけど」

それだけ言うと、嵐はパクパクと忙しそうにカレーを口へと運ぶ。その様子を見て、直ちちゃんはほっとする。

この食べっぷりを見てみると、確かに本当に美味しいと思っっているのだろう。

その後、特にこれといったトラブルもなく、嵐と直ちゃんは家に帰った。なんとか、俺達は今日の一日をやり過ごしたのだ。

．．．．．因みに、あの時の次々と映画研究会の仲間が気絶していき、最後には自分も気絶してしまうという巴達の体験を元にした映画研究会の第一作目、『消えてゆく友人達』というショートホラー映画が宝探し大会後に上映され、大反響を呼んだのはまた別の話である。

俺とアイツ達との出会いの話（前書き）

白上嵐過去編SS。

嵐の家庭の事情、直や幸助、龍神との出会いについてのSSです。

俺とアイツ達との出会いの話

中学に入学すると同時に、家を飛び出した。いや、飛び出した、というのは正しくないのかもしれない。生きていくためには、金が要る。

所詮、俺はまだまだ親からの保護を受けている子供だ。自分は子供じゃない、と言い切れる程俺は子供じゃない。

だから親からは毎月口座に生活費が振り込まれている。学校への支払いも済ませてくれる。正直、父親には頼りたくなかったが、仕方が無い。

毎月、十分すぎるぐらいの金が銀行の口座には振り込まれている。通帳を見るたびに、腹が立つ。自覚する。まだ自分が親の保護下、いや、支配下に置かれているのだと。

俺の家は、ある一つの世界的大財閥だ。そして父親が俺に言うセリフはただ一つだ。

『俺の跡を継げ』

まっぴらごめんだ。そもそも、家庭をかえりみず、仕事ばかりして、俺の母親にも負担をかけて、結局死んでしまった。……

俺はそんな悪魔の跡を継ぎたくも無い。

小学生の頃、一時期ある家に居た。普通の、一般の小学校に通うためにそこに居た。父親は自分が薦める進学校に行かせたかったようだが、知った事ではない。だからこそ、小さいながらもささやかに反抗し、『普通の』小学校へと通った。

ある日、隣の家に居た小さな女の子と友達になった。年は一つ下。長い髪をツインテールにしている女の子だった。

きっかけは、下校中だった。上級生にいじめられていたソイツを

助けた時だ。ソイツは『ありがとう』、とお礼を言ったが、別にそんなお礼が欲しかったわけでは無い。

ただ単に、弱い人間をいじめるようになつたらならないようなヤツがムカついただけだ。

しかし、いつの間にかその女の子とは仲良く、とは行かなくても、顔見知りぐらいにはなった。その内、学年が上がるたびに仲良くなつていった。

しかし、小学校を卒業した時に、父親が言った。「お遊びは終わりだ」、と。要するに、俺は外国の進学校に行かなければならないらしい。

嫌だった。父親の言う事を素直に聞く、というのもあったが、あの小さな女の子と別れるのもなぜだか解らないが嫌だった。

だからこそ、家を飛び出した。まさか父親も家を飛び出すとは思わなかったようだ。しかし後で考えが変わるだろうと思つているのか、あっさりと金銭面を援助してきた。

俺はそんな父親に反抗するように、中学に入學すると毎日喧嘩を繰り返した。気がつくと、ある程度の人数に囲まれても倒せるぐらいに強くなった。

けど、何も得る物が無かった。解っている。こんな事をしても、父親の支配から逃れる事が出来ないっていう事は。

それでも、何かしないとおさまらない。

中学二年生になった。一つ下のあの女の子が入學してきた。俺が小学二年生からの付き合いだから、もう幼馴染み、ぐらいにはなったのだろうか。中学に入ってからあまり会ってなかったのも、その幼馴染みを見たのは久しぶりだった。

久しぶりに見たその幼馴染みは少し大人になったような気がした。しかし、俺が言う事でも無いがまだまだ子供らしさが残っている。

同時に、俺は少し恐ろしかった。今の俺の現状をあの幼馴染みが聞いたら、どう思うのか。

俺の事は忘れようとするだろう。

それが当たり前だ。当然だ。

俺は忘れられる事を覚悟した。

しかし、その幼馴染みは今の俺の現状を聞いても、何も変わらなかった。逆に、前よりももっと親しくなるうとしてきた。

そしてある日こう言ってきた。

『今度は私が助ける番です』、と。

あの幼馴染みは、まだあの日の、俺と出あった日の事を覚えているのだ。

本当に、バカだ。

俺にとっては別になんでも無いのに。なのにその日の事を宝物のように覚えて、抱えて。

そして、俺を見捨ててくれなかった。

他の人間が俺を見捨てていく中で、アイツだけが、俺を見捨てないでいてくれた。

嬉しかった。

その日から俺は喧嘩を止めた。

いや、止めようとした、と言うのが正しい。

俺が喧嘩を止めてしばらくしたある日。突然、誘い込まれた廃工

場の中で複数の人間に囲まれた。どうやら俺が叩きのめした不良の中に、グループ的な物に所属していたヤツが居たらしい。

人数は二十人。グループにしては小規模だが、一人の俺にとってが多い。しかし喧嘩は避けられなかった。別に喧嘩を止めようとしたから反撃しなかった、というワケでも無い。

反撃したが、やはり数としての分が悪い。俺が相手出来るのはせいぜい三人。それ以上はキツイ。数が二十ならばなおさらだ。

俺はいいようにサンドバッグにされた。

朦朧とする意識の中、やはり俺は変わらないのか、と思った。

倒れようとした。その方が楽だと思ったからだ。

しかし。その時、

「止める！」

聞き覚えの無い声が響いてきた。倒れようとする足をなんとか支え、声の響いた方を見してみる。予想通り、見覚えの無い顔だった。

しかも二人居る。

「ねえ、本当にやるの？」

「……いや、だってほっとけ無いじゃねーか」

「はあ。君のそのお人よしにも付き合うのは僕、もう疲れたよパトラッシュ」

「誰がパトラッシュだ。それにこれは親の遺産だ。文句があるなら親に言え」

「君の両親、今確かアリゾナ州だったよね？ どうやって文句を言

うのさ」

「……………すまん。多分携帯の電源も切ってるかも」

「やはり、所詮君はパトラッシュユさ」

「うるせえ！」

なんともバカっぽい会話だ。それに見てみると、同じ中学の制服を着ている。

その後は、バカ二人と入り乱れての大乱戦。そいつ等はこんな場にノコノコと出てくるだけあって、まあまあ強かった。その後、なんとか俺達は逃げ切る事が出来た。

「……………お前ら、何のつもりだ？」

「はあ、はあ、何が？」

「何のつもりで助けたんだよ」

「？別に。なにやら怪しげな不良集団に怪しい場所に連れ込まれていたからちよっと助っ人しただけだ」

「それだけか？」

「それだけ」

目の前のバカその一がきよとん、としている。

「ああ。気にしなくてもいいよ。幸助はバカだから」

バカその二が言う。

「バカとはなんだバカとは！　せめて『通りすがりの仮面ラ　ダー』
と言え！」

「バカだ。やはり君はバカだ」

「龍神！　覚悟しろやあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああ！！！」

この会話を聞いていると、不思議とこいつ等のペースに巻き込まれてしまう。あの、幼馴染みと同じように。

その後、来る日も来る日も同じ不良集団が襲撃をしかけてきた。

俺の決意とは裏腹に、毎日毎日喧嘩三昧。（基本逃走だが）しかし、不思議と俺はあの頃のような虚しくなるような感覚が無かった。

得る物は相変わらず何も無いが、それでもなぜか満足していた。

二人のバカは、俺と共に喧嘩をしていくと共に強くなっていった。同時に、俺達の仲は次第に深まって行った。もう名前で呼び合う仲間までに。

そしてあの不良集団がおれ達をあきらめたのは、あの二人　幸助と龍神　が乱入してきてから一ヶ月経った頃だ。

それから俺も、あいつ等と一緒に、友達として過ごすようになった。幼馴染み、直ともまた小学校の頃のように過ごすようになった。

直と幸助達も知り合うようになったり、幸助や龍神にも居た幼馴染みとも知り合い、俺達と一緒に時間を、みんなで過ごすようになった。

そんなある日、俺はふと、幸助と龍神に聞いてみた。

「なあ。もしも、光の届かない、走っても走っても抜けられないようなトンネルの中に居るとしたら、どうする？」

「？ どうしたんだ嵐。急に」

「どこか電柱に頭でもぶつけたんじゃないの？」

まあ、そりゃあ意味不明だろうな。

これはただ単に、父親の支配下に置かれている俺が、どうすればいいのかコイツ達に聞いてみたかっただけなのかもしれない。

「いや、別に何も無い。ただ言ってみただけ……」

「走る」

幸助がポツリ、と呟いた。

「光が見えるまで、出口を抜けるまで、走る」

一瞬、俺はきよとんとしてしまった。考えもしなかった答えだからだ。

「何言ってるの？ 最初に嵐が言ったじゃないか。『光の届かない、走っても走っても抜けられないようなトンネル』だ、って。だから走っても意味ないでしょ」

「ええ！？ 意味ねえのか！？」

「はあ。本当に君はバカだね」

俺とアイツ達との出会いの話（後書き）

次からは新章開始です。

今回の『SSS?』は嵐と直がメインでしたが、次の新章は龍神と愛がメイン（というより話の軸）になる予定。

第一話 期末テスト

期末テスト。

それは文字通り、学期末に行われるテストだ。この時期になると学生達はそれぞれの行動を起す。それには大抵、パターンがいくつがある。

まずはパターンその一。『勉強をする』だ。当然だろう。なにしろテストなのだから。学生の本業は勉強。もはや現代の子供達にはそれが本能と化してしまっている。しかし、このように優々と勉強をするような奴らは普段から勉強を行っているいわゆる勝ち組だ。心底腹が立つ。いや、自業自得なんだけれども。

そしてパターンその二。『慌てふためいて勉強する』。このタイプのヤツ等は大抵テスト一週間前から慌てふためいて勉強を始める羽目になる。普段から勉強をしていない、日頃のツケ、というヤツだ。

因みに俺は、後者だ。

俺はみんなの期待は裏切らないぜ？ この俺がみんなのように普段から真面目に勉強するわけ無いじゃないか。最近はガッツリP3を楽しんでるよ。いやあ、ネットにつないで知らない人と対戦出来たり、パーティを組めるなんて便利な世の中だ。

．．．．おかげで俺は、期末テスト一週間前になって慌てふためいているわけだが。

自業自得だ。

それは解っている。だからこそ、俺は今この危機的状況から脱出する為に、最大限の努力をしている。

勿論、日本が誇る立派な文化、『DOGENZA』という名の努力だ。

「お願いします。勉強を教えてくださいとありがたいです。彩様（土下座）」

「自業自得よバカ」

.....そう。自業自得だ。

「いや！ 本当にすみません！ 次からはちゃんと勉強しますから！」

「アンタさあ。前々からよく私にテスト前になって勉強を教わりにくと思ったたら、家でゲームして勉強してなかっただけじゃないのよ！」

ついにバレた。

中学の時から俺はこうして土下座して彩に頼み込んでいるのだが、「なんで勉強してないのよ？」みたいな質問が来ると、なあなあではぐらかしてきたのだ。しかし、現在は同じ家で生活している状況。俺のテスト前の実状がついに発覚してしまったのだ。

「自業自得ね」

「お願いします」
「.....」

でも今回ぐらいは仕方が無いじゃん！ だって少し前まで沖縄旅行に行つてたんだから、時間が無かつた事は明白じゃん！

因みに、今こうして美少女の幼馴染みに土下座をして頼んでい
るわけだが、プライドもクソも無い。

しかしテストの前のこの危機的状況に関して、プライド等と言う
ちっばけな物は捨て去ろう。男には、やらなければいけない時があ
る。

「……………はあ、仕方が無いわね。解つたわよ。教えてあげる
わよ」

「あ、ありがとうございます！」

やった！ 俺が今まで平均よりも少し上の成績を維持出来たのは
彩のおかげだ。今回も、そんな彩の力を借りる事が出来るのなら完
璧だ。

今回の一件失つた物は俺の男としてのプライドぐらいだ（いや、
もう前から失つてるけど）。これぐらいはいくらでもくれてやろう。
プライドを失つた今、もう他に失う物は何も無い。

「ついでに、あのゲーム機も売ってくるから」

さよなら。俺のPS3。

「さ、勉強を始めるわよ」

「お、おう」

ドサツ、と彩が全教科の教科書を机の上に置く。壮大な光景だ。壮大すぎて吐き気がしそうだ。因みに今、俺達が居るのは一階のリビング。

俺の部屋の机では二人で勉強するには少し狭い。というわけで、家のリビングのテーブルでやろうという事になったのだ。

「まずは国語ね」

彩が俺の隣に座り、教科書とノートを開く。

「テスト範囲は確か、四十五ページから六十五ページまで。じゃあまずは一気に五十ページまで勉強を進めるわよ」

「お願いします」

テスト勉強モードの俺は、基本低姿勢。まあ、教えてもらう身で上から目線だったら、彩でなくても怒るだろう。

彩は俺のノートに書いてある問題の答えを見る。

「じゃあ、ここの問題一の答え合わせからね」

「そこは結構自信あるんだよ」

「本当に?」

彩が怪しそうな目で俺を見る。

「失敬な。それでも国語は得意な方なんだ。あとでほえ面かくなよ?」

低姿勢モードがあっさり解ける。それだけ、問題一の答えに自信があると思っただけ。

「ふーん。ま、アンタは確かに国語は得意な方だしね。じゃ、まずは答えを見てみましょうか」

問題一は、文章についての問題。その場面の主人公の気持ちを書け、みたいな問題だ。

「『問題一。場面一の、”大切な人と一緒に居る時の主人公”の気持ちを答えなさい』。幸助の答えは……ん？」

彩が表情を変える。フツ。俺の答えがあまりにも完璧すぎて言葉を失ったか。

「幸助。これ、本当に自信があるの？」

「へっ？」

「なんで答えが『今日の晩御飯はなんだろう』なのよ！」

「え？ だってその場面は”夕食前”って書いてあったから妥当かなと思っただけ」

「妥当？ 駄答の間違いでしょ!？」

酷い言い草だ。

「第一ねえ、こういうのは大抵文章中に答えが……って、

ちょっと待って。自身のある国語の一番最初の問題からこれじゃあ、他の教科は………」

「………」

そこからだ。

彩が超スパルタ家庭教師モードに入ったのは。

「じゃ、とりあえずココまでね。今から私、夕食作るから」

「あ、ありがとうございます………」

燃え尽きたぜ。真っ白にな。

なんとか国語の勉強が一区切りついたのだが、それでもまだ国語の全部の範囲が終わったわけではない。それに加えて、他の教科も残っている。

「果てしなく遠い道のりだ………」

「日頃からちゃんと勉強していないからよ」

彩があきれたように声をかけてくる。

「夕食を食べたらまた、再開よ」

「やっぱり」

ガクツ、と俺は頭を垂れる。前までは、俺が彩の家に行ったり、彩が俺の家に来たりして勉強を教えてもらってたけど、それでも晩御飯時になると帰るし、そこからは俺一人で勉強だ。

しかし、今は違う。

共同生活、という状況の為、一日中彩と勉強する事となる。

「なあ、彩」

「何？」

「確かに勉強を教えてもらうのはありがたいんだけどさ、この後もやるんだよな？」

「そうよ。言うておくけど、逃げようだったってそうはいかないんだからね」

「違う違う。そうじゃないんだ。別に勉強を教えてもらうのは良いよ？ 前よりもかなり勉強する事になるし。けどさ、お前はいいのか？ もっと自分の事に時間を使ってもいいんだぜ？ 何も俺なんかと付つきりで居なくても」

ぴたっ、と彩の夕食の準備を進めていた手が止まる。

「彩？」

「……わよ。別に」

「？」

「いいわよ。別に。……好きでやってるんだし」

一瞬、沈黙が訪れた。

彩の手は止まったままだ。そして俺も。

そして、理解した。

「なるほど……」

「ッ!? な、ななな、何が!？」

彩の言った事が一瞬、解らなかった。

しかし、完全に解った。

「勉強が好きって、変わってるな」

返事の変代わりに、鍋とヤカンが飛んできた。

現在、龍神と愛は幸助達と同じように、家のリビングのテーブルで、共に勉強していた。龍神はこうしていると、あの共同生活が決まった日に行った『勉強会』の事を思い出す。

あの時はやけに愛が龍神にくっついてきた。

と、思っただけで愛を見てみると、今日に限っては少し距離をとっている。普段の勉強の時もくっついてこようとするのだが、今回は違った。

(まあ、こっちの方がやりやすいからいいんだけどね)

しばらく勉強を黙々と進める二人。
そこで突然、愛がピタリと手を止めた。

「？ どうしたの愛ちゃん？」

「りゅーじん……………」

愛が龍神の目を見つめる。

その目が少し悲しげになっているのを、龍神は見逃さなかった。

「いつまでも、友達で居てね？」

「愛……………ちゃん？」

いつもなら、『彼女』とか、『お嫁さん』とかまでのレベルの事を言うのだが、今日に限っては『友達』だった。

愛の言った意味が解らず考えていると、愛はそのままパタパタと二階へと上がって行ってしまった。

リビングには、一人ワケの解らずに居た龍神だけが取り残された。

「終わった……………」

ようやく、期末テストが終わったのだ。振り返ってみると、地獄だった。しかし、彩のおかげで、今回のテストの出来はかなり良い。なんと言っても、学年で十一位の成績だ。因みに他のメンバーは当然のごとく十位以内。神戸さんは一位、それに続き龍神が二位。彩が三位で、紙絵さんが四位。嵐は七位。

しかし、俺にしては今回はかなり頑張った方だろう。

あとは、目前に控えた夏休みを迎えるだけとなった。そんな俺は現在、生徒会室に向かって歩いていく。なんでも、紙絵さんから大切な話があるとかなんとか。俺だけでなく、彩、龍神、嵐も呼ばれている。このメンバーでなぜ神戸さんが居ないのか気になったが、まあそれは話を聞けば解るだろう。

軽い足取りで、生徒会室のドアを開ける。そこには、既に俺以外の全員と、祭さんと明さんも居た。

「来たか。幸助」

「おう」

「それじゃあ、みんな揃ったから話すね」

紙絵さんは、見てみると、その表情は険しい。これはただ事では無さそうだ。

「そういえば、神戸さんはなんで呼ばなかったんだ？」

「その事も含めて、だけど……まずは率直に言っよ」

紙絵さんは意を決したように、言う。

「愛が、居なくなるかもしれない」

第二話 好きになれてよかった

「神戸さんが．．．．．転校？」

「うん」

紙絵さんが険しい表情を変えずに言う。

「どこに!？」

「ニューヨーク。今日、出発だって」

「そりやまた遠い所だな。しかも今日か」

嵐がため息をつきながら言う。というより、遠すぎるだろ。もはや国外じゃねえか。

「でも、どうして突然．．．．．」

彩が理由を聞き出そうと紙絵さんに尋ねる。それはみんなが思っていた事なので、俺も含めた皆が紙絵さんの言葉に耳を傾ける。

「家の事情、ってやつなんだけどね。実は愛の実家財閥の契約先の人、是非愛を家の息子の嫁につて．．．．．それが出来なければ契約を切るつて。その契約先に契約を切られると結構厳しいらしいから。その契約先の会社、ニューヨークにあるらしいから愛も向こうに行かなきゃいけないし」

「何それ!？」

彩が激怒する。確かに、そんな理由は納得できない。

「いわゆる『政略結婚』ってやつだろーな。それに、その情報は確かだ。愛の実家^{アイツ}、少しばかり調べてみたが、その契約先に支えられている部分大きい。切られると確かに厳しいだろうな。そういうのって、一度崩れると、立て直すのは難しいもんだし」

祭さんが大体の事情をまとめる。

「龍神はいいのか!？」

「何が？」

きよんとした顔の龍神。今の話を聞いても何も動じていない。

「神戸さんが居なくなるんだぞ!？ あんな脅迫じみた理由で! ムリヤリ婚約までされるんだぞ!？」

「それがどうしたんだ？ 僕には関係無い。それに、選んだのは愛ちゃんだ」

「龍神ツ!！」

ガツ！ と俺は龍神の胸ぐらをつかむ。

「ち、ちよつと!！」

彩が俺を止めようとするが、それでも止まる気は、俺には無い。それに俺には解らなかった。なぜ、龍神がこの件に関して冷たいの

か。いつもの龍神なら、愛ちゃんの事を大切に思っている龍神なら、こんな事は普通言わないだろう。

「だって……仕方が無いじゃないか」

「……?」

「僕に一体、何が出来るって言うんだ？ 別にお金があるわけじゃない。何か特別な事があるわけじゃない。ただ自分の理由で、わがママを叫んだって、愛ちゃんの家の事情が変わるのか!? 愛ちゃんが幸せになれるのか!? こうするのが一番良いに決まってるだろ!?!」

「……」

俺はそっ、と手を離す。

そっか。

ようやく理解した。

龍神^{コウジン}は、寂しいわけじゃない。神戸さんが居なくなっただけじゃない。引き止めたくないというわけじゃない。理不尽な理由に納得しているわけじゃない。

本当は、寂しくて、悲しくて、引き止めたくて、納得していない。

でも、神戸さんがどうすれば一番良いのか、龍神なりに理解しているんだ。

自分のわがままで、神戸さんの幸せを壊すわけにはいかない、って思ってるんだろう。

.....けどな。

「いや、お前は何も解っちゃいねえ」

「.....?」

「確かに神戸さんは、家の事を考えてそうしたんだろう。自分の家族の為に、そうしたんだろう。けどな、本当はお前の事を待ってるんじゃないのか？ 本当は引き止めて欲しかったんじゃないか？ 自分ではどうしようも無いから、だからこそ、龍神オメエになんとかして欲しかったんじゃないか!？」

「.....けど、僕のがままで、勝手な理由で、止めるわけには.....」

「通せよッ!！」

「っ!?!？」

「たまには自分のわがまを！ 勝手な理由を！ 通せよ!！」

しばらく、生徒会室に沈黙が訪れた。

「龍神」

嵐がポツリと、その沈黙を破った。

「お前が知ってる通りに幸助はバカだからな。バカで、おせっかいだ。……だからそろそろ、諦める」

嵐が苦笑しながら言う。おせっかいの部分は否定しないが、誰がバカだ。誰が。

しばらくうつむいていた龍神が、そつ、と顔を上げる。何かを決心したような目だった。

「愛ちゃんって、今何処に……」

「この時間帯だと多分、もう空港に向かってると思う。荷物は既に今日の学校がある時に運び込んでもらって言うてたから」

「……ごめん。僕、少し行く所があるから」

そう言いつつ、龍神が生徒会室を飛び出そうとした。その時。

外からバババババババババババババババババツ、と激しい音が響いてきた。その音のする方を見てみると、なんと外にヘリコプターが舞い降りてきた。

「なあっ!？」

驚く俺達をよそに、祭さんが窓を開け放つ。外から、激しい音と共に風が、生徒会室になだれ込んでくる。

このヘリコプターは、祭さんが呼んだ物だったのだ。

「乗れよ龍神^{おみ}。お姫様を追いかけるんだろ？」

まったく。この人にはいつも驚かされる。

愛が今乗っているのは、愛の実家の契約の八割を占める契約先の、『城咲財閥』のリムジンの中だ。

荷物は、龍神の家から指示した物を既にニューヨークに送るよう
にされている。

このリムジンも、現在は空港に向かっている。そこにある専用の
家用ジェットに乗って、ニューヨークまで一直線だ。

これで、お別れ。

学校の方にはもう転校するように届け出を出してある。先生にも、
唯一この事を知っていた莉子にも、黙ってくれるように話してある。
幸助達にも勿論、一緒に暮らしていた龍神にまでも秘密だ。

涙は出ない。出てもいいのに。

お別れもせずに、みんなと別れたおかげだろうか。何も感じなか
った。いや、本当は色々と思う事が、感じる事があったけど、もう
心を閉ざそうとしたからなのかもしれない。

最初は、こんな申し出断ろうと思った。しかし、契約を切られれ
ば、困るのは自分ではない。自分をここまで、必死に育ててくれた
父親だ。

父親は別に契約を切られても良いと言っていた。しかし、それは
ダメだ。自分のわがままで契約を切って、会社が潰れれば困るのは
愛達だけではない。社員全員だ。

愛は父親も、父親が営み、育ってきた会社も、その社員もみんな
好きだった。

だからこそ、この申し出を受けた。

リムジンが止まった。

今度は家用ジェットが見える。これに乗れば、もう完全にみん
なとはお別れだ。

歩を進め、扉を開け、自家用ジェットの中に入ろうとした。その時。

「愛ちゃん!」

声が聞こえた。普段聞きなれた声。一番大好きな人の声。

「……………りゅーじん?」

後ろを振り返ると、そこには、龍神が居た。居るはずだ無いのに。

「どうして、ここに?」

「紙絵さんから全部聞いた。そして、祭さんにここまで運んでもらった」

龍神の更に後ろ。そこに、なぜかヘリコプターが一台着陸していて、幸助、嵐、彩、莉子、祭、明の姿が見えた。

こちらに向かって走ってくる。

「……………そう」

「本当に、これでいいの?」

「……………うん。これで、いいの」

嘘だ。

この最期の最期で、ぼろりと、涙があふれ出てきた。うれしかった。閉ざそうとした心が再び開いていく。みんなとの思い出が、流れ込んでくる。

これが、愛が自分の心に嘘をついている事の証明だった。

「愛ちゃん……僕は、君に……」

「りゅーじん」

龍神の言葉を遮った。これ以上聞くと、戻ってしまいそうだから。決心した心が、揺らいできそうだから。

「今まで、ありがとう。私、龍神を好きになれて良かった」

目にいっぱい涙を浮かべて、それだけを言い残し、愛は自家用ジェットの中に消えていった。

「愛ちゃん！」

龍神の言葉もむなしく、そのまま自家用ジェットがニューヨークに向けて飛び立ってしまった。

空港には、納得の出来ない者達だけが残された。

次の日。

俺と彩は、重い足取りで教室へと赴いた。この教室にはもう、神戸さんの姿は無い。

「愛、どうしてるかな」

「さあな。もう向こうの家にでもついたらんじゃねえのか？」

その後、嵐と紙絵さんも教室に到着し、いつものメンバーが教室に集合した。しかし、龍神だけは居ない。愛ちゃんの事がショックで家に居るのだろうか。

「菅田、やっぱり来ないわね」

彩が不意に言うと、ガラリと教室に祭さんが現れた。祭さんは教室を見渡し、俺達を見て、にっ、と微笑んだ。

俺達は生徒会室にまた集合した。集まったのは昨日のメンバーに龍神を除いたメンバーだ。しかしなぜか、直ちゃんまで居る。

「な、直!？」

嵐が驚く。この反応を見る限りでは、直ちゃんが来ていた事を、嵐は知らなかったようだ。

「ま、事情は後回しだ。まずは一つ伝える事がある」

「伝える事？」

「龍神の事でな」

祭さんは一言間をあけた後、再び口を開いた。

「今日、龍神は公欠アイツで休んでる。表向きは『生徒会業務』ってしてあるけどな」

「表向き？」

嵐が眉をひそめる。

「そつ。表向き。本当は龍神アイツは、……………昨日からニューヨークに行っている」

「ニューヨーク!？」

来ないと思つてたら……………そういう事だったのかよ。全く。シヨックで家に居る、なんて言つてた自分が恥ずかしい。

「なんか頼まれてな。可愛い後輩の頼みだ。無下にも出来ないだろう? で、お前らに集まつて貰つたのは、聞きたい事があつたからだ。さて、お前等はどつする?」

その時、朝の授業の始まりを告げるチャイムが鳴つた。今から戻つても授業には間に合わないだろう。しかし、そんな事は関係ない。

「……………行くツ!!」「……………」

どうやら今日は、公欠が増えるようだ。

丁度その頃。ニューヨークのとある場所で、ある日本人の少年が、高く聳え立つあるビルを見上げていた。

そのビルには『城咲財閥』と英語表記で書かれている。しかし、その少年はそのビルの中に入るわけでもなく、ただじつと見つめていた。

今ただ無闇に入ろうとしても門前払いされるのがオチだ。どうに

かして、その中に入る方法を見つけなければならない。

「愛ちゃん……………待ってて」

少年はビルに背を向け、ニューヨークの街の中を歩き出す。

今は背を向ける。しかし、いずれ、背を向けずに、向き合つ事になるだろう。

少年の背中からは、固い決意が感じられた。

大切な人を助け出す、という固い決意が。

第三話 変な所で凄いわね（前書き）

一応『』の部分には本当は英語です。翻訳されている物として
ください（笑）

第三話 変な所で凄いわね

大変だった。

いや、何が大変かって言われると、まずは学校を速攻で抜け出して、旅たつための準備に追われて、その後速攻でまた空港にヘリコプターで飛んで、そこからまた祭さんの家の物凄い速さの自家用ジェットでニューヨークまでなんと一時間で一つ飛びですよ？ そりゃあ疲れますって。

と、言うわけで、もう現地に着いた頃には身も心もボロボロなわけですよ。つーか、龍神が一体何処に居るのかも解らないし、そして見つけても何がしたいのかが解らない。

しかも現地に着くや否や祭さんに適当な資金を纏めて渡されて、「ここからは別行動な〜」とか言われて勝手に明さんと一緒にあつという間にどこかへ行ってしまっし。

と、言うわけで、俺達は現地で途方にくれている状況だった。

現在時刻は午後十三時。日本との時差は十四時間だから、日本はたじろ今、午前三時ぐらいだろう。ニューヨークに着いたのは確か、こつちの時間で言うと大体午前三時。早すぎるので、さっきまでは祭さんの家が経営するホテルで休んでいた。(つーかあの人の家は一体何やってるんだよ……………)

「……………どうする？」

「どうしよう？」

いやあ、その場の雰囲気ですぐに行動を起すもんじゃないな。今それをひしひしと実感している。そもそも今居る場所も場所だけでも一番問題なのはここは日本とは勝手が違う。そりゃ町並みもそうだ

けど、そもそも言葉が通じない。

「さて、まずは情報収集だね。」

紙絵さんのんきに言う。相変わらず、この人はいつでもどこでもマイペースだ。

「情報収集つつたつてな。まず何処に行けばいいんだ？」

「決まってるじゃん。愛の引越し先。確か、『城咲財閥』ってところだったよ？」

「にしてもその情報をどうやって収集するんだ？　そもそも言葉も通じないし……」

「城咲財閥という所を探しているのですが、何が知りませんか？」

「……は？」

「城咲財閥？　ああ、それなら知っているよ。この大通りを進んで右に曲がってしばらく行くととても大きなビルが見える。そのビルが城咲財閥だよ。ここらじゃ有名なんだ」

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

ぺこりと目の前の男の人に丁寧に頭を下げる紙絵さん。

「よし、城咲財閥の居場所は解った！　レッツゴー」

「ちよつと待て！」

「はい？」

「メチャクチャペラペラじゃん！」

「そりゃあ情報収集にはまずは現地の人と話せないといけなからね 他にはあと中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語も話せるよ」

いや、前々から凄いのを知ってたけどこんなにハイスペックだとは思わなかった。これならこの異国の地に立たされてもなんとかやっていけそうだ。

「アンタって、前々から思ってたけど、変な所で凄いわね」

「お褒めの言葉、有難う」

褒めてるのか？ いや、微妙だ。

「でも、場所は解つてもどうするんだ？ 行つても門前払いがオチだろーな」

と、嵐がもつともな意見を言う。その通りだ。いくら俺達が今行つても何かが出来るわけじゃない。

「チツチツチツ。行くのは入るためじゃない。菅田君を探すためだよ。菅田君は一足先にNYニューヨークに着いてるんだよ？ そのビルに入るために情報収集をしているはず。だから少なくとも、ビルの周囲には

必ず立ち寄ってる。だから誰か覚えている人が居るかもしれないしね。それにまずは全員が揃わなきゃ」

もう紙絵さんは記者じゃなくて探偵にでもなっってしまった方がいいんじゃないかな。と思った二千十一年夏。innY

俺達はそのから言われた場所へと歩き出した。まあ当たり前というかなんというか、日本人の子供がこうやってぞろぞろと歩いていると、やはり周囲の注目を集める。

異国の地で、外国の人の視線を多数感じるのはなんとというか慣れない。言葉も通じないのだからなおさらだ。(いや、紙絵さんは通じるか)

因みに今俺達が居るのは、ミッドタウンというニューヨーク市マンハッタンの地区の内の一つらしい。多くの事務所や高層建築物と専門店等があり、商業活動が活発である。グランドセントラル駅・ペンシルベニア駅の二大ターミナルが都市交通の中心として機能している、と今手に持っている携帯の画面に表示されているwikipediaに書いてある。

大通りを進んで、最初の角を右に曲がる。そしてしばらくあるくと、周囲の建物よりもひときわ大きいビルが聳え立っているのが見えた。その丁度真下に『sirrosaki building』とご丁寧に描いてある。

そして、入り口にはいかにも屈強そうなガードマンが二人。これはムリヤリ入ろうとしてもまあ無理だな。ある程度の喧嘩けんかを積んだ俺でも五秒で瞬殺される自信がある。というより最早あの二人は完全にゴリラだ。

なんか不用意に近づくと一瞬にして肉塊にされそう。外国人って怖い。(いや、これは俺の勝手なイメージだけれども)

「それじゃあ情報収集つと」

トトロと可愛らしい美少女が、ゴリラのような男達へと無邪気に歩いてゆく。見ていてとても不安だ。

『お尋ねしたい事があるのですが』

『何だ?』

紙絵さんはカバンから一枚の写真を取り出し、ゴリラ、じゃなくて、善良な警備員(と信じたい)に見せる。見せたのは恐らく、龍神の写真だろう。

『この写真の男の子を知りませんか?』

『男の子?知らないなあ』

言葉は俺には解らないが、どうやらあの反応は知らないのだろう。しかし、もう一人のゴリラ(もとい、善良なる警備員)が

『この男の子なら知ってるよ』

『本当ですか?』

『今日の早朝ぐらいかなあ。このビルをじっと見つめていたよ。やたらじろじろと見るから覚えてたんだ』

『どこに行ったか解りますか?』

『この大通りをそのまま進んで行ったよ。それ以外は解らないんだ。ごめんね』

『ありがとうございます』

『どういたしまして』

そして紙絵さんが再び俺達の所へと戻ってきた。

「うーん。ハッキリとした事は解らなかったよ。せいぜい、この大通りをそのまま進んで行った事ぐらいかな」

「どうしましょう。確か菅田さんって、携帯にかけてもつながらないのですよね？」

「ああ。ついでに神戸のヤツもつながらねえ」

ここで完全に情報が途絶えてしまった。もう探しようが無い。

「とりあえず、この大通りを行きながら情報収集をしようか。ここですじつとしても始まらないし」

紙絵さんを先頭に、俺達はニューヨークのミッドタウンの街中を歩く。見慣れない異国の地。俺ならみんなといなければ不安に駆られるだろう。しかし、龍神も今は恐らく一人だ。こんな所で一人で居て、どう思っているのだろうか。

その後、しばらく歩き続けた、道行く人に聞いてみたりもしたが、結局龍神についても、また、神戸さんに会うためのめぼしい情報も得られなかった。

「とりあえず、休憩しようか」

紙絵さんの意見にみんな同調し、俺達は近場のカフェへと入った。

「あゝ涼しい」

彩が言い出したくなるのも当然だ。外は結構暑い。これも地球温暖化の影響なのだろうか。店内は当然の如く涼しい。俺達は二階の空席を見つけると、そこに座った。

「それじゃあ、注文しに行ってくるけど、みんなのオーダーは？」

とりあえず、みんなはエスプレッソを注文した。紙絵さんは席を立ち、注文をしに行こうとする。正直、女の子一人に注文を任せるのは情けないと思ったが、このメンバーでまともに英語を話せるのは紙絵さんぐらいだし、仕方が無い。

と、いうよりぶっちゃけ歩きすぎてヘトヘトだ。

「全く。張り切って無駄に走り回ったからだ」

俺の心中を察したのか、嵐が鋭いツツコミを入れる。因みに俺はこの中で一番英語が話せないの（俺以外のメンバーが紙絵さん程じゃないにしろ英語をそれなりに話せるのには驚いた。直ちゃんなんてまだ中学生なのに・・・）、せめて足で稼ごうと暇そうな人を引っ張り出してきては（本当にごめんなさい）また探しに行く、という事を繰り返してた。

まあ、全くの無駄だったけど。

「あはは。いいよ別に。私一人でもだいじょーぶ」

そのまま元気に紙絵さんは一階のカウンターへと向かった。

一階のカウンターに、莉子が向かおうとすると、ふと見てみた店の外に、一人の小さな女の子が居た。その女の子はなにやら一人で泣いている。髪の色と、泣きながらも話している言葉が日本語だったので、莉子は旅行中の家族からはぐれたのかなと推測し、店の外に出て、その女の子に話しかけてみた。

「どうしたの？」

「うつつ。ぐすつ。．．．．．？ おねえちゃん。誰？」

顔にいつぱいの泣き顔を莉子に向ける。

「おねえちゃんは『莉子』って言うの。あなたの名前は？」

「ぐすつ。風花。」

「風花ちゃんね。一人？」

「うん。お兄ちゃんとお散歩をしてたらはぐれたの」

「そっか。とりあえず、おねえちゃんが飲み物おごってあげるからおいで？」

「．．．．．うん」

莉子はその女の子の小さな手をとって、再び店内へと足を踏み入れていった。

第三話 変な所で凄いわね（後書き）

以外（？）と莉子はハイスペックです。

第四話 家族みたいだな

紙絵さんがエスプレッソを持ってきたと思ったら、なんか子供もセツトで着いてきた件。

．．．．．いや、どういう状況!?

「いやあ。店の外で一人で泣いていてさあ。ほっとけ無いじゃん」

「うっ。まあ、そりゃそうだけど」

多分俺でも紙絵さんと同じ行動を取ると思う。それに見た所、觀光に來た日本人の女の子っぽいし。こんな異国の地で一人で泣くのも多分相当寂しい物があるだろう。

ぶっちゃけ俺でも寂しい。

「名前は？」

と、彩が優しく問いかける。今こそ優しい顔をこの小さな女の子に向けている彩だが、この子が彩の本当の顔を知った時にはどんな顔をするのだろうか。

「本当の顔って何よそれ」

「いや、だからその顔．．．．．ぐぼえっ」

隣の彩から俺の顔面にエルボーが飛んできた。つーか久々だな。心の中読まれるの。それにしても最近、共同生活を始めて彩の攻撃を受ける回数が増えてきた所為か、段々彩の暴行にも慣れてきてる

ぞ。

慣れって恐ろしい……………

「……………風花^{ふうか}」

ぎゅっ、と紙絵さんの手を握ったまま風花ちゃんが答える。

「風花ちゃん、か。良い名前ね」

「うん。ママがつけてくれたの」

「そっか」

彩が優しい顔で風花ちゃんの頭をなでなでする。うん。こっちはつてると彩も可愛いんだけど、なにしろその本性がな。

「本性が、何？」

「いえ別になにもございませ……………ぶあつ！」

今度は右ストレートが飛んできた。NYに来ても絶対調だな。コイツ。

「なんか、一緒に散歩をしたお兄ちゃんとはぐれちゃったんだって」

なるほど。どうしてこんな小さな小さな子供がこんな所で一人で居たのかと思っただらそついう事だったのか。

「そのお兄ちゃんって、どんな人なのですか？」

直ちゃんが風花ちゃんに優しく問いかける。そして風花ちゃんはすっ、と俺を指差して、

「このお兄ちゃんよりもずっとずっとカッコイイ人」

風花ちゃんが良いヒントをくれた。それなら結構限られてくる。風花ちゃんのお兄ちゃんを見つけるのも時間の問題だな。

「えっと、風花ちゃん。そいつはちょっと多すぎて解らないな」

嵐。殺されたいのか？

「ごめんね。もう少し解りやすく言ってくれない？」

「あはは。仕方が無いよ彩。まだ子供なんだし。にしても、どうしようか。そんな人、吐いて捨てる程居るし」

「範囲が広すぎて解りませんね」

「・・・・・・・・やだなあ。泣いてないぜ？」

「？ どうした幸助。何泣いてるんだ？」

「は？ 泣いてねえし。コレはただ目の涙腺から体液が分泌されるだけだし」

「・・・・・・・・それを涙って言うんだけどな」

泣きたくもなるよ。そりゃ。

「とりあえず、菅田君は見つからないんだし、今日は風花ちゃんのお兄ちゃんを探す?」

「そうね。そうしましょう」

とりあえず、今日の所は龍神探索&情報収集を一旦中断し、風花ちゃんのお兄さんを探す事にした。探すと言っても、俺達ちっぽけな人間にしてみればこの大都会であるNYのミッドタウンは広い。何か手がかりが無いと探しようが無い。

子供のあんな残酷な発言は手がかりとは認めない。絶対にだ。

「そつだ。風花ちゃん。苗字はなんて言うの?」

「みよーじ………言っちゃダメって。パパが」

「言っちゃダメ? どうして?」

「知らない。でも、知らない人の前でみよーじをなのるなってパパが言ってた。お兄ちゃんもその方がいいって」

苗字を名乗ってはいけない? どういう家庭なんだこの子は。

とにかく、苗字が解らないのなら何か他の手がかりが必要だろう。

「えーっと、だったら何処から来たとか覚えてる? 泊まってるホテルとか」

「ううん。解らない。ここ、あんまり来た事無いし、はぐれちゃって今も何処に居るのか解らないから」

困った。

手がかりが無いのでは探しようが無い。

「しょうがない。それなら、街を歩いて地道に探すしかないね。そのお兄ちゃんの方も、今頃は風花ちゃんを探してるハズだし」

とりあえず、俺達は、俺、彩、風花ちゃんと、嵐、直ちゃんと、そして紙絵さんの三つのグループに分かれる事にした。

俺達はそれぞれ風花ちゃんの写真を紙絵さんから手渡され、その写真を道行く人に見せながら、そのお兄ちゃんを探す事にした。

とりあえず、俺達は店の外に出て、三方に分かれる。準備の良い紙絵さんからミッドタウンの地図を渡されてるし、迷う事は恐らく無いだろう。二時間後にはこの店の前で落ち合う予定になっている。

俺達は辺りを適当に風花ちゃんと歩きながら、風花ちゃんのお兄ちゃんを探していた。周りは体格の大きいアメリカ人ばかりなので、せめて風花ちゃんが少しでも見えるように俺は現在、風花ちゃんの肩車をしてあげている状態だ。

「別に写真を見せなくても、こうして肩車してれば、まだ少しでも見つけてもらう可能性が上がるよな」

「そうね。私達はあくまでも、見つけてもらわなきゃいけないんだし」

そうだ。俺達が見つけるのでは無い。向こうが見つけるのだ。

こっちは顔も解らない相手を探さなければいけない。しかし、向こうは風花ちゃんの事を良く知っている。顔だってそうだ。

だから、向こうが見つつけやすくする方が風花ちゃんが家族の元へ帰る事の出来る可能性は大きいだろう。

ただ、この肩車、結構疲れるんだよな……………

「ホラ。頑張りなさい。風花ちゃんも喜んでるわよ。アンタの肩車」

「……………そりゃ何よりだ」

そういえば最近旅行ラッシュだな。沖縄の次はNYかよ。いや、これは旅行目的で来たんじゃないけど。

「愛、大丈夫かしら……………」

不意に、彩が呟く。

「さあな。でも、なんだかんだで元気にやってるだろ。一応」

そう。一応。

けど、あの別れ際の涙を見る限り、それは本心では無いようだが。

「俺達が今ここで悩んでも仕方が無いだろ。それに、今は愛花ちゃんの兄ちゃんを探す方が先だ」

「……………うん。そうね。そうよね」

彩も少し元気が出てきたようだ。

「それに、せつかくこんなNYに来たんだ。ここは観光気分で楽しみながら探そうぜ。暗い雰囲気を探してても、疲れるだけだ」

「そうね。せっかくだから楽しみましょ」

「たのしもー」

俺の頭の上で元気になった風花ちゃんが笑顔で騒ぐ。

うん。確かに女の子は笑顔が一番だと思う。けどももう少し静かにしてくれるとありがたい。

．．．．．それにしても、小さな女の子を肩車して女の子おやと並んで歩く。この状況はまるで、

「なんかこうしていると、家族みたいだな」

「ふえっ!?! ど、どどどど、どうしたの急に!?!」

急に慌てふためく彩。

一体どうしたんだコイツは。俺がそんなに、何か変な事を言ったのか?

「い、いや、なんかこの状況的に、日曜日によく見かける家族連れみたいだなーって」

「そ、そう。．．．．．そうね。似てるわね」

「俺も将来子供を持つとしたら風花ちゃんみたいな元気な子がいいな」

子供は元気が一番だ。少なくとも、俺はそう思う。ただ、元気すぎるのもちよっとアレだけど。

「そ、そうね。元気が一番よね。(わ、私が頑張って元気な赤ちゃん

んを産まなきやいけないわよね。やっぱり……」

「？ 悪い。最後の方が聞こえなかったんだけど」

「い、いいのよ！ 聞こえなくて！」

「お、おう。そうか」

その後も、俺達は風花ちゃんのお兄ちゃん探しを続けた。
結局、彩は最後に何を言ったんだ？
それだけがなぜか気になる。

第五話 ミッドタウンプリンセス

それぞれ風花の兄を探すために、探索を開始している頃。莉子は着々と情報を集めていた。道行く人に風花の写真を見せながら、尋ねていくと、「風花を探している少年が居る」という情報を入手した。

しかし、どの人もその少年が何処に行ったかまでは解らなかった。しかし、莉子はそのまま同じ方法で探索を続けた。こうして風花の写真を見せながら探していけば、いずれその少年に出会うかもしれない。そうして一つ。

莉子には気になる点があった。

(探索を開始してから今で大体一時間半、か。風花ちゃんが一人で居た時の時間を考えると、そろそろもう少し風花ちゃんを探すための大きな動きがあってもいいんだけどなあ。警察とかさ)

しかし、そういつた警察等の動きが一切感じられない。こうして写真を見せて探していけば、いずれ警察の方からコンタクトをとってくるかも知れないと踏んだのだが。

(うーん。苗字も名乗らなかつた事を考えると、こりゃ普通のご家庭じゃないのかもねえ。それに今は……)

チラリと莉子は気づかれなないように背後の様子を伺う。

丁度、莉子を尾行するようにぴったりと後ろをついてきているスリ姿の男が二人。周囲とは明らかに浮いていて、不自然だ。

(さっきから着いてくるあの尾行者ストーリーカーの方が気になるしね)

一般の通行人を装ってはいるが、その鋭い目で莉子をにらみつけている。しかも日本人だ。なまじ周囲に溶け込めていない分、日本人ときているので更に浮いている。

（日本人、か．．．．．こんな所でわざわざ日本人^{わたし}を尾行しているのは興味を魅かれるけど、今は撒いておこうかな？）

まだミッドタウン全てを知り尽くしているわけでは無いが、この辺りの地形なら全て頭に叩き込んでいる。

周囲に尾行者を撒くのに使えそうな通路なら頭の中に何種類かリストアップされている。

莉子はタイミングを見計らって走る。同時に、後ろのスーツ姿の男も走ってきた。

（やっぱり尾行してたか）

確信を得る莉子。

すぐに角を曲がり、そして曲がってすぐの所にある裏路地に身を潜める。

しばらくすると、尾行していたスーツ姿の男達は莉子のすぐ側を走り抜けていった。それを確認すると、すつ、と路地から顔を出す莉子。

「成功つと」

その後も、スーツ姿の男達に見つからないように気を配りながら搜索を進める莉子。しかし、これといったためばしい情報はつかめなかった。

「うん。本当に、何処に行っただろう？　ここで諦めるわけにもいかないし」

小さな女の子を一人にはしてられない。別に自分が家族が来るまで面倒を見てもいいのだが、できるだけ早く家族に会える方がいいに決まってる。

もうすぐ、約束の二時間が来てしまう。そろそろ集合場所の店に戻ろうと決めた所で、

「あの、少しよろしいですか？」

日本人の少年から、声をかけられた。

嵐と直も探索をしていた。道行く人に写真を見せて、この女の子を捜している人を見なかったか、と尋ねる。幸い、嵐も直もそれなりに英語を話せるので、探す分には困らない。

しかし、一向に見つからない。

「どこに居るんでしょうかね？　風花ちゃんのお兄さん」

「さあな。けど、こうして探し続ければいつかは会えるだろ。こうして俺達が探し回っている事がその兄ちゃんにも伝わるハズだろ」

こうして探し続けてかれこれもう一時間経つ。一時間探し続けても見つからない、と直は少し疲れ気味だったが、嵐は元々これぐらいの時間で探せるとは思ってはいなかったものでこれぐらいでは疲れない。

その時だ。

嵐が、背後から尾行されている事に気づいたのは。
直にも、そして後ろから尾行しているスーツ姿の男に気づかれな
いように、後ろの様子を伺う。

(二人．．．．．しかも日本人か。一体どういう事だ?)

今気づいたばかりなので嵐と直を尾行している、と完全に言い切
れないが、何度か曲がり角を曲がったりしてもびったりと着いてく
る。

(どうして俺達を?)

その疑問については答えが出なかったが、とりあえず尾行されて
いて良い事は無い。というより、気づいてしまった今では良い気が
しない。

とにかく。

「直。少し走るぞ」

「えっ?」

直にはお構い無しに嵐は直の手を取り、走る。

嵐と直が走ると同時に、背後のスーツ姿の男達も走る。

「チツ。やっぱり追いかけてくるか」

「あ、あのっ。追いかけてくるって?」

「説明は後だ。とにかく走るぞ」

莉子のようにこの辺りの地形を完璧に頭に入れていたならば簡単に撒けただろうが、残念ながらそんな事は嵐には勿論、直にも出来ない。

(な、なんか．．．．．こうしてると．．．．．)

直はぎゅっ、と握られた手を見つめる。嵐の発現からするに、自分達は追われているのだろう。そして追ってからこうやって手を握って逃げる自分。

(お姫様みたい．．．．．)

「？ 直、顔が赤いぞ。疲れたか？」

「い、いえっ！ が、頑張って走ります！」

「お、おう．．．．．？」

嵐には直がなぜ顔が赤いのか、知る由も無かったがとにかく今は(なぜか)尾行してくるスーツ姿の男を撒く事が最優先だ。

(それに、直の顔も心なしか赤いしな。直はああ言っていたが、多分疲れが溜まってるんだろう。急いでケリをつけねえと．．．．．)

未だ勘違いしている嵐。

(わ、私がお姫様なら嵐さんは王子様．．．．．)

未だ（色々と）暴走する直。

（チツ。少し荒っっぽいが、仕方がねえ。直の体調も良くなさそうだし、強硬手段に出るか）

「直。その路地裏に入れ」

「はっ？？」

ハッ、と夢から覚めたような様子の直。

「え、えっと、嵐さんは？」

「いいから」

直を路地裏に先に行かせる嵐。自分もその後続く。そしてスーッ姿の男達も追って入ってくる。

（かかった）

嵐は走るのを中断し、急停止する。その反動を利用してぐるりと一回転する。

「「ッ！？」」

男達もあわてて止まるが、急には止まれない。

「悪いな」

嵐は急停止して体勢の整えられない、無防備な二人の男の内、一

人に右ストレートを放つ。見事にヒットした右ストレートは、すぐさまスーツ姿の男の内の一の意識を失わせた。そして、右ストレートを放った反動で、再び一回転。足を大きく蹴り上げ、回転の反動を利用してもう一人の男に一撃与える。その男も、意識を失った。

「あ、嵐さん!？」

「さ、今の内に逃げるぞ」

再び嵐は直の手を取り、逃走を開始する。

ミッドタウンの街中を、王子様とお姫様が駆け抜ける。

とあるカフェの一角。

莉子は、見知らぬ日本人の少年と共に居た。

「で、話、と言うのは?」

一応聞いてはいるが、莉子にはおおよその見当がついていた。もう集合時間は過ぎてているが、目の前の少年を無視するわけにはいかない。

なぜなら。

(もし、私の予想が当たっていれば恐らくこの人は……………)

少年はエスプレッソを一口飲むと、しばらくして口を開いた。

「えっと、まずはどこからお話すればいいのか……………」

「この写真の女の子に関係がるんじゃないですか？」

すっ、と莉子はテーブルの上に、風花の写真を置く。それを見た少年はピクツ、と眉をかすかに動かした。

(ピンゴ……かな)

自分の予想に確信を持つ莉子。

「そう。この写真の女の子……いえ、風花は、」

そして、一つ間を置いて、少年は再び口を開いた。

「僕の妹です」

第六話　こーすけはバカだね

「妹、という事は、アナタが風花ちゃんのお兄さんですね？」

「はい」

やっぱり、と莉子は自分の予想に確信を持つ。ワザワザこの場で見ず知らずの日本人に話しかけてくる日本人は、風花の家族以外には考えられなかったからだ。

「それでは、さっそく風花ちゃんを呼びましょうか」

と、莉子はポケットの中から携帯を取り出す。そしてキーを操作しようとした時、

「いえ。それはまた後で。．．．．．少々、お話しませんか？」

「お話、ですか？　風花ちゃんが心配では無いのですか？」

意外な少年の言葉に、莉子は少し眉をひそめる。

「心配でした。．．．．．さっきまでは」

「さっきまでは？」

「はい。実はですね、僕がアナタを見つけたのは十分程前なんです
「よ」

「だったら、どうして真っ先に声をかけなかったんですか？」

「いえ、その……こちらにも少々事情がありまして……」

ここで、言葉をにじらせる少年。莉子はここで深く追求するのをやめた。誰にでも、言いたくない事の二つや二つはあるだろう。

莉子は気になる事を質問した。

「ならどうして、私に話しかけてきたんですか？」

「信頼出来ると思ったからです」

ニッコリと微笑みかける少年。パツと見はまさしく爽やかな青年、という所だろうか。

「僕は見えました。必死になって見ず知らずの風花の為に、僕を探しているアナタを。だからこそ、信頼出来ると思い、声をかけたのです」

「……そうですか」

信頼、と言うが、それは恐らく本当だろう。しかし、莉子が気になるのは、どうして信頼するまで声をかけなかったのか、だ。

莉子が、少年に会う三十分前。

幸助と彩、そして風花は、集合場所の店の近くまで来ていた。

.....最悪だ。

何が最悪かって、もうまさしく今の状況の事だ。

そんな今の状況をかいつまんで説明すると、何やら日本人のスーツ姿の男二人が目の前に。

そして俺達に「そのお方を返せ」とかなんとか言ってくる。実に怪しい。しかし無駄に体がガツシリとしてるのが少々問題だが。

「風花ちゃん？」

「なーに？ こーすけ」

こんな小さな女の子にすら呼び捨てだ。泣けてくる。最早年上の威厳もクソも無い。

「えっと、お兄ちゃんってかなりガツシリした体つきだね？」

「？ これ、お兄ちゃんじゃないよ？」

「えっ？ そうなの？」

「うん。お兄ちゃんはもっとカッコよくて優しいもん。こんなに「ぶさいく」「じゃないよ」

なんだろう。心なしか目の前のスーツ姿の男が二人が涙目になってるような気がする。.....気持ち解る。子供って残酷だよな。

「こーすけはバカだね。こんな「ぶさいく」をお兄ちゃんと間違え

るなんて。バカすぎるよ。「ぶさいく」だし」

別にこれは涙じゃないぜ？ 目から出た汗だぜ？ 決して涙じゃないんだからなあああああああああああああああああああああああああああああああ！！

「アンタ達．．．．．なんで泣いてるの？」

「女には解らない．．．．．男の泣ってヤツだ」

もうやめよう。この争いは不毛にも程がある。

「と、とにかく、風花ちゃんのお兄ちゃんじゃねえのならこれにて退散．．．．．」

「待て。見逃すと思ってるのか？」

「ですよー」。

涙目となったスーツ姿の男達が、俺達にじりじりと詰め寄る。とか風花は一体何者なんだ？ こんな涙目のガツシリしたヤツ等に「そのお方」って呼ばせるなんて。

それにこんな大の男三人を（俺含む）涙目にさせるなんてかなりの実力を持っているしな．．．．．！！

「で、どうするの？ 素直に渡す？」

「バカ言え。こんないかにも怪しい涙目のヤツ等に渡せるかよ」

「それを言うならアンタも十分怪しいのだけど．．．．．」

「は、はあっ!? アンタが早く走れって言ったんじゃない!」

「出来れば合わせていただくありがたいですうつつうつつうつつうつつうつつうつつうつつうつつ!」

彩は本当に足が速い。普通に勝負したとしても負けるだろう。ましてや、

「こーすけがんばれー!」

俺の頭の上できゃっきゃっと騒いでいる風花ちゃんを肩車しながらだとかなりキツイ。そして、なんやかんやで俺のペースにあわせてくれる彩には感謝だ。

「で、どーするのよ!??」

「とにかく逃げろ!」

「倒せないの!? アンタ、中学の頃結構喧嘩してたんでしょ!?? 強いんじゃないの!??」

「三人ぐらいなら俺一人でもなんとかなるんだが、それはあくまでも不良とやった時の話だ! あんなガツシリしたヤツ等は規格外だ!」

事前に気づいていたのならばある程度の対処法を考えていたのなら、それも今となっては無理だろう。

「そ、そうだ! 良い事を思いついた!」

「何!？」

「あっちは風花ちゃんを狙ってるんだよな!？」

「そうね」

「それを逆手に取る! とにかく俺に任せろっ!」

「そうだ。今思うとあっちの狙いは風花ちゃんだ。だったら、それなりの対応策はある。」

「わ、解ったわ。期待してるわよ」

「おう!」

ざっ、と俺は急停止し、回れ右する。追いかけてくる涙目スーツ姿の男は止まらずに追いかけてくる。(いいかげん涙拭けよ……)

「お前ら! 止まれ!」

「「ッ!？」」

俺の掛け声に、涙目スーツ姿の二人も止まる。隣では彩が「どうするの?」みたいな目で俺を見る。周囲の通行人も、日本語だけでなく俺の大声に驚いたのか、チラチラと俺達を見る。

「お前らあ! 『このお方』がどうなってもいいのかあ!」

俺は肩車から風花ちゃんを降ろし、パンツ、と前に突き出す。風

花ちゃんはワケが解らないと言った表情だったが、「どーなってもいーのかー」と笑顔で騒いでいる。

「ただの脅迫じゃないっ!!」

ばごんっ、と彩が俺の頭を殴る。メチャクチャ痛い。そうか。俺がバカなのって彩に殴られまくったからなのかもしれない。

「いや、だって仕方がねーじゃん!？」

「アンタを信じた私がバカだったわ」

それにしても、ここがNYでよかった。もしも日本語が通じていたら俺もただの脅迫者にしかならなかつたからな。

もしくは、ただのロリコン変質脅迫者というところでもないレッテルを貼られる所だった。

「このロリコン」

「彩!? 違うからな!? 言うておくけど俺はロリコンでも幼女大好きでも無いからな!？」

いや、確かに幼女を両手で持ち上げてドヤ顔しているとそう思われても仕方が無いのだけれども。

「よーし、そこを動かすなよー。動けば彩の鉄拳「ペッが来るからな? マジ痛いんだぞコレ。これを何発もくらった所為で俺の頭がおかしくなってバカとかなんとか言われるようになったんだからな?」

「何私の所為にしてるのよ」

ドゴムツ、と俺の腹部に彩の拳が突き刺さる。風花ちゃんが「いーぞーもつとやれー」とか言っている。一体どこで覚えたんだ。そんな言葉。

じりじり、と俺と彩は後ずさる、はたから見たら「何事だ」とか思う光景だが、そんな事を気にしていられない。

その後、なんとか俺達は逃げる事に成功した。

まあ後で冷静になって考えてみると、なんとも外道な作戦だったのだが、まあ仕方が無い。我ながら危機回避能力は高いと言える。

そして俺と彩は、なんとか集合時間ギリギリに元のカフェへとやってきた。

しかし、なぜか紙絵さんだけは居なかった。

第七話 直感ですけどね

「少し話しが長くなりましたね。そろそろ、風花の所へ行きましようか」

「そうですね。風花ちゃんも喜ぶと思います。心配だったでしょう？」

莉子はポケットから携帯電話を取り出す。風花を預かっていたのは幸助だったので、アドレス帳から幸助の名前を見つけ、メール作成画面へと入る。

「ええ。けど、アナタのお友達に良くして下さいてるでしょうから、きっと大丈夫でしょう」

「あはは。確かに、預けてる人がちゃんと可愛がってくれてるハズで……」

ピタッ、と莉子の手が止まる。それを見た少年が「どうかしましたか？」と声をかける。

「どうして……今、『風花ちゃんを私の友達が預かってる事を知っている』のですか？」

「……」

少年は答えない。しかし、莉子は続ける。

「私は、風花ちゃんが誰かに預かってもらってる、という意図を匂

わせるような発言はしましたが、『友達が預かっている』とは一言も言ってません」

「これは……僕のミスですね」

少年は観念したように言葉を紡ぐ。

「まさか、さっきのスイツ姿の男も……」

「はい。僕の部下、とでも言いましょうか」

「部下……?」

莉子は眉をひそめる。あのスイツ姿の男とこの少年がなんらかの関係にあるとは思ったのだが、まさか『部下』と『上司』の関係だとは思わなかった。しかし、この少年の方が立場が上らしい。

風花が苗字も名乗れなかったのを考えると、かなりの家柄だと考えられる。

「そうです。僕があの人達に風花の搜索を頼んだのです。因みに、彼らとは連絡も取り合っていました。しかしどうやら、アナタのお友達に事情を説明する前に逃げられたみたいですが」

少年は苦笑する。対して、内心「さすが」と呟く莉子。それは勿論、幸助達に向かってだ。

「話の腰を折るようですが、少し悩み聞いてもらえませんか?」

「……どござ」

周囲に莉子に危害を加えるような人影は見当たらない。それを確認しての返答だった。そして、少年の話が始まる。

「まず結論から言うと、僕、結婚させられちゃうんですよ」

「け、結婚？」

突然の言葉にあっけにとられる莉子。対する少年はそのさわやかな笑顔を保ったままだ。しかし『させられる』と言っている以上、それが望まぬ物だという事が。

そこで不意に、愛の顔を思い出した莉子。あの少女を救い出す、とはいかなくても、せめて話し合いの場だけでも設けたい。

「はい。なんでも父が見つつけてきた人らしいんですけどね。父もとても気に入ってる方で、強引な手段で連れて来たみたいです」

そういうような話は、愛の件があつて身近に感じられる莉子。同時に、ある可能性に行き当たった。

「その人と一度実際に会つてお話したんですけど、とても綺麗な方でした。礼儀も良かったですし」

「それでは別に悩む必要など無いのでは？」

「そうですね。そうかもしれないですけど、実際に会つてみて、その人と僕は結婚してはいけないな、つて思つたんです。その人の中には常に別の人が居ます。僕じゃなくてね。だからあの人は、その人と結ばれるべきなんです。．．．直感ですけどね」

ははは、と少し微笑みながら言う少年。少年の『直感』という言葉

葉に親近感を覚える莉子。

「直感、ですか。解ります。私も、直感は信じるタイプですから。そつだ。よろしければ名前を教えていただきませんか？ 差し支えなければ、苗字も」

もしも名乗るのならば、確かめる事が出来る。莉子の『直感』が当たっているのかどうか。

「苗字、もですか．．．．．．そつですね。アナタになら、名乗つてもよさそつですね。僕の直感を信じましょうか」

少年が、口を開く。

「あ、あれ？ はあつ、はあつ、か、紙絵さん．．．．．．は？」

「どうした幸助。随分息が切れてるが」

「ち、ちよつと、な．．．．．．変なヤツ等に追い掛け回されて．．．．．．」

あの涙目スーツ姿の男達は勿論『変なヤツ等』にカテゴリされても問題無いだろう。

「変なヤツ等？ もしかして、そいつらはスーツ姿の日本人か？」

「？ そつだけど。どうして嵐が？」

「実はな、俺と直もそいつ等に追い掛け回されてたんだよ。何とか倒したが」

「ええっ!？」

嵐と直ちゃんも同じように追い掛け回された事には驚いたけど、嵐があんなガツシリした筋肉質のヤツ等を倒した事にも驚く。

「よくあんな体つきがガツシリしたような涙目変態男達を倒せたな」

「は？ ガツシリ？ 涙目？ 別に体格は普通だったが？ それに涙目ってなんだよ」

「．．．．．どうやら俺達は知らない間にとんでもない貧乏くじを引いていたようだ。隣の彩も苦々しい顔をしている。」

「で、結局莉子は居るの？ 姿が見えないけど」

「そ、それが．．．．．」

直ちゃんが言いづらそうにしている。まさかとは思うが．．．．．

「実はな、まだ紙絵の奴は来ていないんだ」

「なっ!？」

紙絵さんは時間はしっかりと守るタイプだ。今まで、遅刻はおろか、ギリギリのタイミングで登校、という所も見た事が無い。

原稿の入稿も新聞部では一番早い。『神速入稿の莉子』とまで呼ばれるぐらいだ。

「まさかとは思いますが……莉子さんも……」

紙絵さんを一人にしたのがまずかった。せめて誰か一人ぐらいついて行くべきだった。

「急いで探そう」

俺達は、紙絵さんを探すために動き出そうとした。するとその時、俺の携帯のポケットからメールの受信音が鳴り響いた。

紙絵さんからだった。

「か、紙絵さん!？」

全員の視線が、俺の携帯に集まる。俺は急いで携帯のメールボックスを開いた。

みんなへ。

風花ちゃんのお兄さんを見つけたよ

今、一緒に居るから、風花ちゃんを連れて来てね。

下記の場所に、みんなで集合してください。

「よかった。無事みたいね」

彩がほっ、と胸をなでおろす。本当によかった。無事で。それにしても、さすが紙絵さん。まさか本当に風花ちゃんのお兄ちゃんを見つけ出すなんて。

メールはまだ続いていた。下にスクロールすると、今度はその集合場所が書かれていた。その集合場所に、みんな目を見張る。

「こ、こいつて……」

俺の頭上で、風花ちゃんが何も知らずに楽しそうに、無邪気に笑っていた。

「それでは行きましょうか」

「はい。ああそうだ。アナタのお名前をお聞きしてもよろしいですか？」

「私の名前ですか。紙絵莉子、と申します」

「あはは。そう固くならなくてもいいですよ。莉子さん」

「そうですか。そう言っていたかとありがたいです」

にこっ、と莉子は微笑む。

そして、その少年の名を口にする。

「城咲『風人さん』」

集合場所は、城咲ビルだ。

城咲財閥は、昨年、拠点を日本からNYへと移した。そして城咲ビルのあるフロアには、ホテルのような部屋がいくつもある。これは城咲家の者の部屋だ。しかし、リビングや大広間のような所もある事を考えると、ホテルというより家という方が近いのかもしれない。

そしてその内の一室に、愛は居た。

未だ日本に居た頃の学園の制服を身にまとっている。

日本ではもうすぐ夏休みだ。

夏休みと言えば中学の頃、よく龍神と一緒に図書館で毎日勉強してた事を思い出す。

高層ビルの窓ガラス越しに、ミッドタウンの風景を眺める。この城咲ビルはミッドタウンの中のどの高層ビルよりも、大きく、高い。

(りゅーじん……)

まさか、あんな所まで駆けつけてくるとは思わなかった。

けど、こんどこそ、本当にお別れだ。

NYにまで、自分は来てしまったのだから。

あの頃が、あの声が、急に懐かしく感じる。

でも、もう、あの頃には戻れない。

あの声を聞く事も出来ない。

コンコン、と、背後のドアからノック音が聞こえる。

こっちに来てから、愛はずっと部屋に閉じこもっている。食事は部屋に運ばれてくるようになっていたので、また食事か何かなのだ

ろうと思った。

けど、今はどうにも一人で居たい。せめて会う事が叶わないのなら、あの頃の思い出を思い出していたい。

「すみません……………今は一人に、させてください……………」

「

それだけ言うと、また愛はあの頃の思い出を、龍神の声を思い出そうとする。

しかし。

「愛ちゃん？」

「……………ッ!？」

声を思い出すまでも無かった。

ドアの向こうに、その人が居たのだから。

第八話 助けてあげる

龍神が祭の助けを借りてNYに着いた時にまず始めたのは、情報収集だった。どうすればあのビルの中に入る事が出来るのか、そして、愛は現在何処に居るのか、だ。

観光客を装い、あの城咲ビルについての情報を集めていくと、どうやら城咲財閥はNYに拠点を移したのは昨年の出来事らしい。そしてその跡取り息子の嫁を、父親がムリヤリ連れてきた、等、めばしい情報^{ウロサ}は集まった。しかし、さすがにどうすればビルの中に入る事が出来るのかは解らなかった。

しかし、今日、突然祭が龍神の前に現れた。用意されたホテルには全く戻っていない。どうやって位置をつかんだのかを聞くと、どうやら衛星から見つけた、らしい。そして話を聞いてみると、幸助達も駆けつけてきた事を知った。

驚く龍神に、ただ祭はだまってビルの中に入る手引きをした、というわけだ。現在、『ビルの中を見学する見学者』という形でなんとか中に入り、愛の部屋の前までは行き着く事が出来た。しかし、本来ならばこのフロアは見学者が居るべき所では無い。

そして声をかけようと一度ドアをノックすると、愛の声が返ってきた。

「すみません．．．．．今は一人に、させてください．．．．．」

たった一日声を聞いていないだけなのに、随分久しぶりに聞いたように感じる。やはり愛は、ノックをしたのが龍神とは気づいていないらしい。

そして久しぶりに聞いた声は心なしか、悲しげに感じた。何か、自分の心を押し殺しているかのような声。

何を話しせばいいのか解らない。
けど、それでも。

龍神は自然に、口を開いた。

「愛ちゃん？」

「……………ッ!？」

驚いている。

当然だ。一度は「さよなら」をした相手が、まさかこんな所まで
追いかけてくるとは思わないだろう。

「りゅー……………じん? どうして、ここに……………?」

「話をしに来た」

そうだ。自分は、話をしに来ただけなのだ。……………いや、
それは違つのかもれない。ただ、あままで別れるのはただ単に
納得が出来なくて、嫌だったからなのかもしれない。

「幸助達も来てる」

「……………」

ドアの向こうの愛に返事は無い。しかし、かまわず龍神は言葉を
紡ぐ。

「僕は、あのまま愛ちゃんと別れる事なんて納得が出来ない。た
しかに家の事情もあるのかもしれない。だけど、納得出来ないんだ」

龍神は、愛に向かって話しかける中でいつもの自分らしく無いな、
と思っていた。それは龍神の中で自分が知らない間に起こった変化
(幸助の所為だな。こんなムチャクチャな、理屈も無い事を言い出
したのは……)

これは龍神のわがままだ。

それは、龍神自身が理解している。けど、それでも、言い出さず
にはいられない。このまま「さよなら」なんて嫌だった。

「愛ちゃん。僕と、僕達と一緒に、帰ろう?」

嬉しかった。

龍神が自分の為にこんな所まで駆けつけてくれた事が、嬉し
かった。

そのキモチは否定しない。

「愛ちゃん。僕と、僕達と一緒に、帰ろう?」

今までの龍神と、今、愛の目の前に居る龍神は明らかに依然とは
違う。たった一日会っていないだけなのに。

龍神は、基本的には他人へは無関心だ。仲の良い幸助や嵐の事に
関しても、無関心とは言わないが、どこか馴れ合う所を恐れている
感じがする。

自分の意見を強く主張する事もあまり無かった。そしてその数少
ない『自分の主張』も、自分が他人と距離を置く為の物だ。

出来るだけ、人とは関わらず。

出来るだけ、人と関わろうとしない。

出来るだけ、自分の主張は避ける。

それが、愛の見てきた龍神だった。

愛には、どうして龍神がそうなってしまったのかを知っている。それは、自分が、愛自身が一番よく解っている。

龍神は、孤児だった。

生まれてきて両親は交通事故で他界。引き取られた親戚の家では周りになじめなかった所為なのか、親戚の者達もそんな龍神を鬱陶しく思い、施設へと入れた。

龍神はその親戚という環境に馴染もうとした。親戚の面々を信頼していた。ただ、元々内気な性格だった所為かその事を感じ取ってもらえず、実質的には捨てられた。

そこからのだろう。龍神が周囲に関心を置かなくなった。例えば関心を持って、信頼しても、いずれは居なくなる。捨てられる。そう思っているのだろう。

愛が龍神と出会ったのは、その孤児院でだった。元々父が支援をしていた孤児院だ。愛もよく孤児院の中の子供達と遊んでいた。

そんな中、ある日龍神と出会った。その頃の龍神は、今よりもっと周囲に関心が無かった。人とは一切関わらなかつた。関わろうともしなかつた。話をする事すら、恐れていた。

愛は、出会った時になんとか解っていた。

(この人は、ただ失うのが怖いんだ)

と。

周囲に関心を持てば、いずれは裏切られるかもしれない。いずれは、失う。

自分の信賴する者が、大切な人が、自分の前から居なくなるのを、極端に恐れていた。

だから本を読む。本を読んでいると、自分だけの世界に浸れるから。他人と関わる必要が無いから。もう何も、失わなくて済むから。そして愛は、本を読み続けるだけの龍神の前に現れた。そして、手をさしのべてこう言った。

「私が、助けてあげる。だから、大丈夫。もう恐がる必要なんて無いよ」

その時龍神は、そつ、と、顔を上げた。

そこから龍神は少しずつだが、徐々に他人へと興味をよせるようになった。今でも他人への興味はそれほどあるとは言えないが、これでもかなりマシになった方だ。

そして、龍神の目に少しずつ輝きも戻ってきた。愛は、龍神と一緒に居る時間が長かった。自分を、大切に思ってくれているのが解った。そして愛も、いつの間にか、自分を大切に想ってくれている龍神の事を好きになっていた。

好きになった理由なんて要らない。ただ好きになってしまったのならそれでいい。

そんな龍神が、他人との関わりを避けようとする龍神が、自分の意見を主張しない龍神が、愛が大切に想っている龍神が、愛にこう言ったのだ。自分の意思で。初めてのわがままを。

僕達と、僕と一緒に帰ろう？

「どうして……?」

愛は必死に言葉を搾り出した。嬉しかったからだ。自分の為に、わがままを言ってくれた龍神が。そして、本当に自分を必要としてくれていると解ったからだ。今にも泣き崩れてしまいそうだ。しかし、こらえる。ここで崩れてしまうと、決心が鈍ってしまう。

「今度は僕の番だから。僕が助けてあげる。だから大丈夫。もう、苦しむ必要なんて無いよ」

「……………ッ!」

愛は今、気づいた。

自分が苦しんでいる事に。

今までは自分の気持ちを押し殺していたから気づかなかった。けど、龍神と会話をして、その押し殺していた気持ちが一気にあふれ出した。

自分は、苦しんでいるのだ。

龍神と別れる事に。友達みんなと別れる事に。

「りゅーじん……………私、は……………」

「ちっ」

俺達は現在、城咲ビルの目の前に来ていた。どうやらまだ紙絵さん達は来ていないようだ。待ち続ける俺達に対して、俺達にはやるべき事があった。

「どうする？ 嵐。風人とかいうやつ。縛り上げる？ それともコングリ詰め？」

敵の親玉的存在がワザワザ出向いて来るんだ。こんなチャンスは滅多にない。さっさと脅迫して神戸さんと龍神を連れて帰ろう。

「その前にアンタを縛り上げるわよ」

ドゴムツ、と俺の腹部にNYでも絶好調の右ストレートが飛んできた。なんだか心なしか、最近彩のアバスペパワーが上がってきているような気がする。

「誰がアバスペだって？」

「相変わらず勘が鋭（鋭い）．．．．．げふんげふん。誰も彩だなんて言っつてな．．．．．ぎゃあああああああああああッ！！」

周囲の通行人がなにやらこっちに熱い視線を向けている。それだけならもうこっちに来て慣れた。しかし、周囲の人間が『オー！ ジャパニーズ』スモウ』！』とか言っている。

『スモウ』とは恐らく『相撲』の事だろう。

けど違う。俺の知っている相撲は頻繁に右ストレートで顔面を殴

り飛ばしてきたり、関節をぶった切ったり、足を複雑骨折したりはしない。

これは『相撲』なんかじゃない。一方的な虐殺だ。それも理不尽な。

「おいおいお前ら。程ほどにしておけよ？　後で飛び散った血を処理するのはこの町の人なんだぞ？」

そんな注意をする前にまずは血が出る事を阻止して欲しい。

「みんなー。お待たせー！」

俺の意識が遠のく中、紙絵さんの声が聞こえてきた。見てみると隣にさわやか系イケメン男子が居る。

どうやらあれが……

「城咲風人、か」

隣で嵐が呟く。そして風人は俺達を見ると、一礼する。

「こんにちは。城咲風人です。風花を預かっていただいて、ありがとうございました」

うっ。礼儀正しいやつ。血まみれになった俺の側に居た風花ちゃんが「お兄ちゃん！」と言ってトタトタと走ってゆく。風人にだきつく風花ちゃん。

「ごめんね。風花。僕が目を離したばかりに」

「ごめんなさい。私が勝手な事したから……でも大丈夫だったよ。こーすけ達と一緒にだったもん」

「そうか。よかったな」

にこっ、と微笑む風人。これで俺達の役目は終わりだ。

「みなさん。風花を保護してくださってありがとうございました。……突然で申し訳ございませんが、少し僕に協力してくださいませんか？」

「協力？」

嵐が風人の言葉に反応する。

「はい。簡単に言いますと、」

風人は、なんの悪気も無く、にこっ、と微笑む。

「僕の婚約発表を、ぶち壊して欲しいんです」

第九話 大きく出た方がいいよな

俺達は、祭さんの会社が経営するというホテルへと向かった。今日は体を休めよう、という事になったからだ。

さすが祭さんの会社が経営するホテル、という所だろうか。まさしくその設備は高級ホテルで、中はとても豪勢に作られていた。

俺達は、男子と女子の二つの部屋に分かれて入った。．．．．．因みに、途中で祭さんと一緒に現れ、合流した龍神も一緒に居る。龍神が俺達の前に現れた時には神戸さんの姿は．．．．．無かった。

まず、俺達は龍神に事情を聞く事にした。急にNYまで飛んだ事では無い。龍神が神戸さんに会って来た事は解っている。だから、神戸さんとの話の中で何があったのか、だ。

そして、龍神が話し始めた。祭さんの手引きで城咲ビルの中に入った事。神戸さんと話をした事。そして、その結果．．．．．

「愛ちゃんは、帰りがっている」

龍神が言った。

「本心はそうだ。．．．．．だけど今の状況ではそれが出来ない」

それが、答え。

だけど、自分の本心を抑えなければいけない状況に神戸さんは置かれている。だから、一旦龍神は帰ってきたのだろう。

「『神戸家が婚約から手を引けば契約を打ち切る』。それが城咲財閥の要求だ。だからどうやって手をつてばいいのか解らないんだ．．

「.....」

空気が重くのしかかるような気がした。.....でも。

「その件だが、方法が無いわけでもない」

嵐がその重苦しい空気を断ち切るかのように言った。龍神が、嵐の言葉に反応する。

「ッ!？」

そしてその龍神の反応を見た嵐は、言葉を紡いだ。

「俺達は今日、その城咲財閥の、神戸の婚約者に会ったんだ」

今度は俺達が説明する番だった。俺達が龍神を追ってNY^{ここ}まで来た事。そしてひよんな事から城咲財閥の娘の風花ちゃんと出会った事。そして風人と会った事。そして、自分の婚約発表を潰してくれと頼んだ事。

「つまり風人は、こんなムリヤリな婚約は認めてないんだ。だからまだ希望が消えたわけじゃない。神戸を連れ戻すチャンスはまだ消えていないんだ」

「.....まさか、君達がそんな事になっていたとはね。それにその悪運も、驚嘆に値するよ。.....いや、悪運が強いのは僕の方かな？」

ニコリと龍神が微笑んだ。合流してから龍神が初めて見せた笑顔だった。

「で、その婚約発表は何時いつなんだい？」

「明日」

「早ッ!？」

うん。俺達も聞いた時には驚いた。だって急すぎるって思ったし。しかも笑顔でニッコリと「ぶち壊してくれますよね？」って言い切ったしな。

「ど、どうする気なんだい？」

「作戦はあるにはあるが、お前がやるかやらないかだ」

「?」

嵐がにやりと、いたずらっぽく微笑んだ。

「どっつするのかしら……」

「どっつするのでしょうか……」

「どっつするのでしょうか……」

はあ、と三人の少女はため息をつく。現在女子の部屋に居るのは彩、直、そして明だ。

「そういえば明さん。祭さんは？」

「何やら難しそうな顔をして電話したりパソコンに向かっていたりしてました」

「……………祭さんが難しそうな顔？」

彩が顔をしかめる。

「はい」

直は、今まで見てきた祭を思い出す。
そしてその結果。

「なんだかイメージできません」

「できないわよね」

「……………お気持ちは解りますが」

明も苦虫を噛み潰したような顔をしている。現在、三人は浴場から上がった後だ。パジャマに着替えてはいるが、まだ若干顔が火照っている。

「けど本当に難しいような顔をして、何をやっているんでしょうね？」

「あはは。私の察する所では無いですから解りませ……………」

明が、自分の事をじーっと見てくる直の事に気がつき、質問する。

「明さん、大きいですね……………」

「お、大きい？……………つつつ！」

自分の胸をあわてて隠す明。現在顔が火照っているのは風呂上りのせいではない。

「そ、そ、そ、そんな事無いですよ！？ 私なんてそんなに大した大きさじゃ……………」

「明さんで大した大きさじゃないなら私は……………うつつ」

直は若干涙目だ。

「……………明さん。そのパジャマ、サイズ合ってますか？ なんだかとてもギリギリそうですけど」

ゆらりと何かのダメージを受けた後のように立ち上がる彩。

「あつ。はい。そうですね。前まではそうでもなかったんですけど最近はどうも……………特に胸の辺りがキツく……………あつ……………」

明はあわてて口を防ぐがもう遅い。直がゆらりと立ち上がる。

「どつりでそのパジャマ、さっきからボタンがギチギチと言ってますね……………」

「い、いえっ。言ってますんよ!？」

ぶつちやけると、それは直の被害妄想だったのだが、確かにパジヤマは苦しそうだ。

「……………」

「……………」

その後、明に向かって二人の少女が襲い掛かってきた。

俺はある目的でホテルの中を散歩する事にした。（さすがに外は危ない）このホテルは、外の景色も見える大ホールのような所もある。俺が散歩をしながら向かっているのはそこだ。

「彩」

「？ 幸助」

ホールの中は人が少ない。今は遅い時間帯だからだろう。

「どつしてここに？」

「お前が居ると思ってな。お前、悩むといつもぶらぶらと散歩するからな」

「そ、そう……………」

ぶいつ、と彩はそっぽを向いてしまつ。うん。こういつ時の彩

は基本こんな感じだからな。なんだかもう慣れた気がする。

「何に悩んでるんだ？」

「へっ？」

「………って決まってるか。神戸さんの事だよな」

「えっ？ う、うん。そ、そうよ？（それもあるけど、別の事もあ
るのよね………）」

彩はなぜか自分の胸をチラリと見てからはあ、とため息をついた。

「どうした？」

「いや………どうして神様ってどうしてあんな胸ぐいきを人に授け
たのが解らなくてね………」

「お、おう。そうか」

正直意味不明だ。

というより、俺は元々明日の事を彩と話に来たんだった。嵐が作
戦を立ててくれていたとはいえ、こっ、なんか、心境的な事を話し
合いたいと思っただだよな。

うーん………やっぱあの作戦って今考えると無謀な気もす
る。それに嵐も言っただけど不確定要素も多い。それに問題は、俺
達が臨機応変に対応出来るのか、という事だ。

「こ、幸助は………やっぱり女子って、む、胸が大きい方が

第十話 ちゃんと睡眠はとっておきたまえ

「もしもし」

「パパ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・愛か」

愛は、龍神が去った日の夜。また、婚約発表の前夜。城咲ビルの一室で、父に電話をかけていた。

「すまん」

「・・・・・・・・?」

愛が何かを言う前に、父親の方から謝ってきた。

「私が、ふがいないばかりに」

「パパの所為じゃないよ。私は大丈夫」

「いや、大丈夫じゃないはずだ。お前は・・・・・・・・あの子と・・・・・・・・龍神君と一緒に居たいのだろうか？」

「・・・・・・・・うん」

嘘をつくつもりはなかった。一度龍神に会った事で、もう愛の心の中の整理はついていた。だからこそ、もう全てを受け入れた。

「だけど、ホントに大丈夫。私は、パパの事も大切だから」

「一応言っておくが、いつでも会社を畳む準備は出来ているぞ」

「ふふっ。バカな事言っただけで、これからもお仕事頑張っただけ」

そして愛は通話を切った。もうこれで完全に心の中の整理は済んだ。もう大丈夫。

愛はそう、自分の心に言い聞かせた。

社長室のデスクで、愛の父はただ通話の切れた電話の受話器を置いた。

ぎしっ、とイスをきしませる。

「……龍神君。頼んだぞ」

彼は、龍神達が何をしてくれるのかを知っているわけではない。ただ、なんとなく、神戸を救い出すのは龍神だと、彼は思っているのだ。

いや、思っているのではない。それは、確信だった。

もう、彼の覚悟は決まっていた。

どんな事があってもいい、という覚悟が。

そして、その結末を受け入れる事も。

朝が来た。

窓から入ってくる朝日が、俺達の顔を照らす。俺はなんとなく、早起きしてしまった。よって、そのまばゆいばかりの朝日をモロに顔に受けている。

「……………寝れたか」

「……………いや」

早起き、というよりは、寝れなかった、に訂正しよう。俺もそうだが、嵐の目の下にもクマが出来ている。……………同士よ。

「君達。なんだい？ その無様な目の下のクマは。ちゃんと睡眠はとっておきたまえ。今日の行動に支障が出たらどうするんだい？」

俺の隣では龍神がテキパキと着替えを終えていた。

「「龍神」」

「なんだい？」

「「クマ」」

やっぱり龍神も寝れなかったようだ。

その証拠である、『無様な目の下のクマ』が龍神にもあった。

「お早うっ！ 野朗共ッ！」

「朝っぱらからテンション高いですね……………」

祭さんが食堂で俺達にむかって笑顔のあいさつを振りまけてくる。相変わらず、この人はどんな状況でも元気だな。

でも、だからこそあんなムチャクチャな学園で生徒会長をしているのかも知れない。いや、この人も十分メチャクチャだけどさ。

「よし、作戦の確認だなっ！」

祭さんがワクワクしながら俺達の朝食が並ぶはずのテーブルの上で長い筒状になっていた紙を広げる。

その紙の一番上には、『真実の愛を取り戻せっ！！ チキチキ！ Let's 誘拐大作戦』とデカデカと書かれている。宝探し大会の時もそうだったけど、この人はいちいちこうして紙に書かないと気が済まないのだろうか。

「こうして見てみると、俺達は本当に悪人だな」

しみじみと嵐が感慨深そうに言っている。そりゃそうだ。そもそもしつかりと、『デカデカと『誘拐』って書いてあるし。』

「いやいや。あなた達は『魔王に捕まったお姫様を助け出す王子様』のポジションですよ」

その自称『魔王』が俺達の朝食の席に顔を出す。それは、風人の姿だった。今回の協力者、とも言える。

「あれ？ ^{パーティ} 婚約発表の方はいいのか？」

「ええ。まだ時間があるんですよ。とは言ってもまあ会場に向かう前に立ち寄っただけですが」

「この作戦は、成功しても後が大変なんだよな。その辺のフォーロー。頼んだぞ？」

「はい。解ってますよ嵐さん。言ってみれば、僕の父は確かに『ああ言いました』からね。僕が出来る限りのフォーローはします」

そして風人はチラリと紙絵さんの方を見る。当の紙絵さんは現在は忙しそうにもきゅもきゅと朝食を口につめている。紙絵さん。確かに紙絵さんは綺麗だけど、もう少し女の子らしくした方がいいよ？

「それでは僕はこれで。後は、頼みます」

「おう。任せろ」

「ちゃんとぶち壊してくださいね？」

にっこりと微笑む風人。

「お、おう………」

嵐も少し怯んでいる。うん。確かに怖い。

その後、風人は出て行った。食堂は一階で、俺達の集まっている食堂は道路側に面しており、壁はガラス張りになっている為、風人が車に乗る様子まで確認する事が出来た。車に乗る前に、なにやら風人がせかされている。どうやら本当に忙しい中来てくれたようだ。

「にしても、一体何しに来たのかしらね？」

彩が不意に咳く。うん。確かにそうだよな。実際には顔出しだけだったし、そんなに会話もしていない。

「さあな。誰かさんの顔でも見に来たんじゃないのか？」

と、嵐がやれやれと言った様子だ。

「なあ？ 紙絵」

「ふも？」

呼びかけられた紙絵さんは、口いっぱいにパンケーキをつめていた。そしてその表情はきよとん、としている。

対して、祭さんは真剣な表情をして遠くを見つめているような目をしている。この人も、こんなにも真剣な表情をする時があるんだな。正直、驚いた。

「さあいくぜ。お前ら」

鋭い瞳を向ける。その瞳は、一体何処に向けているのか。今日の祭さんは、いつもとは違う。

「『真実の愛を取り戻せっ！！ チキチキ！ Let's 誘拐大作戦』の始まりだ」

「祭さん。雰囲気台無しです」

やっぱりこの人はいつも通りだった。

婚約発表の会場は、城咲ビルの最上階で行われる。そこに入る事が出来るのは招待された名だたる富豪たちと、料理を担当するシェフやウェイター。もしくは、会場を警備するガードマンだけだ。

「だから俺達はそのガードマンを狙う」

「『狙う』じゃなくて『襲う』の間違いだろ？」

「まあ否定はしない」

あつさりと言い放つ嵐。

「アンタ達．．．．．本当にあの方法でそう簡単に入れるの？」

「出来るだろ。ようするにこうだろ？ まず俺達男子組は手始めに手近なガードマンを襲う。次に身包みをひっぺがす。そして最後に奪った服で変装して、会場に侵入完了。ガードマンは適当な所に押し込める」

「無・理・が！ あるでしょうがっ！！」

「ちょっと待て！ これを考えたのは俺じゃなくて嵐と祭さ．．．．
．．．ぎゃあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああっ！！」

NY（に）に来て（に）も本当に彩（サイ）のする事は変わらない上に、俺のされる事も変わらない。

正直、そろそろ変わって欲しい。でないと俺の身が日本に帰る前に滅びる。いや、マジで。

「そろそろ幸助の断末魔も聞き飽きたな」

「そうだね」

こいつ等は本当に俺の友達なのかと時々疑いたくなる。

「そついえば女子組はどうやって侵入するんだ？」

「私達は祭さんや明さんと一緒に入るわ。祭さんの所にも招待状が来てるのよ」

「はあっ！？ ち、ちよつと待て！ だったらなんで俺達も一緒に連れて行けないんだよ！？」

と、俺は当然の抗議を入れる。すると紙絵さんがこつ、と微笑みながら答えた。

「その招待状さ、招待客を含めて一緒に入る事が出来るのは五名までなんだよね」

となると、招待客である祭さん、付き添い人として一緒に入る事が出来るのは明さん、彩、直ちゃん、紙絵さん。なるほど。これで五人だ。

「ってちよつと待て！ それなら明らかに彩の方が潜入向けだろ！

普段俺をサンドバッグにして鍛えまくっているその右ストレートを有効活用すれば『そんなに死にたいの？』彩。招待状があるからって油断するな。気をつけるよ？（キリッ）」

これは一種の脅迫だろう。いや、完全なる脅迫だ。

「と、まあ話も纏まった所で、潜入してからの事だが……これは龍神。お前にかかっている。覚悟は、あるな？」

「はい」

祭さんの言葉に、龍神がうなずく。そうだ。この作戦はあくまでも、最後に龍神自身がなんとかしなければならぬ。そもそも、この作戦のラスト、最も重要な部分は不確定要素しか無い。神戸さんをどうやって連れ戻すのかも、龍神に任せてある。全ては、龍神にかかっている。

「よしっ！ 意思確認も出来た事だし、行くかっ！」

バンッ！ と祭さんが立ち上がり、俺達も席を立つ。

「『真実の愛を取り戻せっ！！ チキチキ！ Let's 誘拐大作戦』の始まりだ」

「祭さん。マジで雰囲気読んでください」

第十一話 綺麗だな

城咲ビルの最上階。そこでは、城咲財閥の婚約発表のパーティが行われていた。メインの婚約発表まであと一時間。

そして、城咲ビルの真下。地上では、ある一人の少年が、二人の警備員に向かってなにやら話しをしている。

『すみません。パスを持っているのですが、見学者としてビルに入ってもよろしいでしょうか？』

『解った。だけど、見学は最上階以外のフロアに限定するよ。今、最上階では大事なパーティが行われているからね』

『解りました。ありがとうございます。ああ、それと』

『なんだい？』

『風邪をひかないように気をつけてくださいね？』

ニッコリと、少年 菅田龍神は微笑む。

『？ 風邪？ 今はそんな時期じゃな 』

二人の警備員の背後から、二人の少年が襲い掛かる。

成功。

俺と嵐は、最早残骸と化し、地面に無様に倒れ去っている警備員の真上ですががしい顔をしていた。いやー。何かをやりとげると実にすばらしい。

「さあて、後は身包みを剥いで……………」

俺達はビルの裏に警備員二人を運ぶ。幸い、祭さんが手をまわしてくれたおかげで一通りが少なくなっているので見つかる心配は無い。(一体何をしたのかが気になる)

ビルの裏で外国人の人の身包みを剥ぐ。気分はまるでモンスター素材を剥ぎ取るハンターの気分だ。

「つーかサイズがデカイな」

「まあ元々大人用だしその上、俺達とアメリカ人じゃあサイズが違うからな」

城咲ビルの中では、IDカードが必要となる。フロアによってはIDカードが無いと入れない場所もある。だからとりあえずはこの警備員の身包みを剥いで、侵入出来る様にしなければいけない。

「警備員けいび員どうする?」

「放置」

俺は一生忘れない。この人達の笑顔を。どうか、安らかに。

「言っておくけど、死んでないからね?」

祭達は既に、パーティ会場へと足を運んでいた。祭は勿論、明、彩、直、莉子までもがドレスアップしている。

「う．．．．．やっぱりドレスってなれないわね．．．．．」

「そ、そうですね。なんだか恥ずかしいっていうか」

「あはは。ドレス姿の彩も可愛いね」

「皆さん。お綺麗ですよ？」

ニコリと明が微笑む。

しかし本来の目的は愛の婚約を阻止、のハズなのだが、正直にいうと彩達にあまり出番は無い。全ては幸助達にかかっているのだが．．．．．

（な、なんか落ち着かない．．．．．あーもう！早く来なさいよっ！）

俺達は、なにやらじろじろと俺達を怪しい目で見ると、受付をなんとか通り過ぎ、（服がぶかぶかだから仕方が無いけど）最上階までいっきにエレベーターで昇る。しかしやはり、扉の前には二人の警備員が居た。

今度は背後から襲つ、という事は出来ない。俺達は引き返し、一応はその下階へと戻る。そこはホールのような場所で、ビルの関係者達が休憩を行う為の場所のようだった。

しかし今はパーティが始まっているので誰も休憩等行っていない。

忙しいのだから当たり前だろう。

「さて、どうしようか」

「正面からは無理ってんなら、裏口から回り込むしかねえな」

「裏口？」

「最上階には調理場も設けられているんだよ。だから調理した料理を運んだりするための扉もあるし、関係者用の扉もある。そのどれかから入るしかない」

恐らくもう神戸さんは最上階の所に居るのだろう。もう、裏口から忍び込むしか方法が無い。

「裏口へ行くための通路は解ってるのだが、問題は今の服装だよな」

「え？　なんで？　問題ないじゃん」

「…………お前、今すぐトイレに行って自分の姿を鏡で見ても」

確かに、よく自分の服装を見るとぶかぶかで全然サイズが合っていない。はたから見ると確かに不自然極まりない。

「どうする？　手近な人でも見つけて身包みでも剥ぐか？」

「もうそれしかねえな」

「君達、本当にためらいが無いね。立派な盗賊になれるよ」

なりたくはない。

そして、俺達がうーん、と頭を悩ませていると、上の階から三人の若者がやってきた。

『はあ。本当にしんどいよな』

『まったく。社長のわがままにも困ったものだ。急にこんなにいそがしくなるとはな』

『サボって正解だよな!』

『『全くだ! H A H A H A H A!』』

龍神と嵐から会話の内容を翻訳してもらつと、要するにサボっている、と。

.....

「幸助。皆が忙しく働いている中サボっている若者に天誅を下さなきゃいけないと思わないか?」

「そうだな。.....あと、意外とあいつ等小柄だから服のサイズ、俺達でもあまりぶかぶかにならないで済むかも」

「はいはい。襲撃理由を正当化したんだつたら、早く行ってきて」

ハンターと化した俺達が、若者に鉄槌を下す為に動く。べ、別に身包みが欲しいわけじゃないんだからねっ!?

その後、背後から襲撃された若者達の断末魔が響いた。
素材スーツゲット！

「……………?」

「どうかしましたか？ 彩様」

「あつ。明さん。なんか、そこかで叫び声が聞こえたような気がして……………」

「叫び声、ですか？」

きょんとする明。彩はあわてて否定する。

「い、いえ。気にしないでください。空耳です。空耳」

「そ、そうですね……………あつ。もうすぐ発表が始まりますね」

彩がステージの方をみるとスーツ姿の男達がせわしなく準備の方を始めている。本当に、もうすぐ始まる。始まってしまつ。

「うっ。遅いわね……………」

「そうですね……………」

彩に反応して、直も心配の声をあげている。

「嵐さん達、上手く入り込めたのでしょうか？」

「そこが一番怪しいのよね。大丈夫かしら？ あのバカ」

その時、彩の肩を誰かがトントン、と叩いた。

なんとか尊い犠牲のおかげで、俺達は苦も無くパーティ会場に潜入する事が出来た。祭さんから貰ったグラスンで目を隠したおかげだろうか。受付の時とは違い、こんどはあっさりと会場内に侵入する事が出来た。

グラスンパワー、偉大なり。

様々な人が行きかう会場で、俺と嵐は彩達を探す。

「幸助。見つけたぞ」

嵐が視線を向けた方向には（グラスンで隠れてイマイチ解らなかつたが）、イライラした表情の彩が居た。

「イライラしてるな」

「ご愁傷様」

「………なんでそんな事を言うんだよ」

この作戦の後に俺を待ち受けている運命が決定したような気がした。

そして彩の方を見てみると、相変わらずイライラしている。これ以上放置しているとヤバそうだ。俺と嵐はとりあえず、近づいてみる事にした。

後ろに近づいていみても彩はまだ気づかないのでトントン、と軽く肩を叩いてみる。

「彩？」

「ひゃいつ!？」

ビクッ、と彩が驚いたようにビクッ、と肩を震わせる。

「幸助？」

「よっ」

「来るのが遅いのよこのバカっ!!」

ドゴムッ、と彩の必殺右ストレートが俺の腹部に命中する。しかしここで騒いでは全てが水の泡だ。

「う………ぐうおあ………」

なんともいいがたい声しか出ない。

「で？ 他に何かいう事は？ 謝罪とか、謝罪とか、謝罪とか」

「まずは謝罪以外の選択肢をくれ」

なんとか痛みがおさまってきたころ、彩の機嫌も少しずつだが直ってきたようだ。

「うっつ。こっちだって色々と苦労したんだよ」

身包みを剥いだりとか、身包みを剥いだりとか、身包みを剥いだりとか。

「・・・・・・・・そう」

ぶいつ。と彩はそっぽを向く。・・・・・・・・それにしても、彩のドレス姿なんて初めて見る。そもそも、ドレスを着るような所に一緒に行った事が無いから仕方が無いが。

「彩」

「？ な、何よ」

「なんだかんだで彩のドレス姿って初めて見たけど、綺麗だな」

元々美人だし。ドレス姿も似合う。

「つつつ！？ ななな、何を急に言ってるの!？」

「い、いや。率直に感想を述べただけなんだけど・・・・・・・・」

「うつ・・・・・・・・そ、そう」

なぜだか解らないが機嫌が直ったようだ。少し嬉しそうな顔をしている、ような気がする。とりあえず、機嫌が直ってなによりだ。

そして、フツ、と会場の明かりが消える。

会場の視線が一齐にステージに集まる。

ステージの下には、城咲財閥の会長と思われる人物が、スタンドマイクの前に立っている。

『え、このたびはお忙しい中、城咲財閥のパーティーにお集まりいただき、ありがとうございます』

発表が、始まった。

まずは龍神がなんとかしなければいけない。

俺達が動くのは、その後だ。

第十二話 受け売りなんだけどね

愛はステージの裏で、ただひたすらその時を待ち続けていた。発表されると同時に、愛はステージから風人と共に現れる手筈となっている。そしてその肝心の風人は、さつきからステージ裏から姿を消している。

すると丁度その時、コンコン、と軽くドアをノックする音が響いた。ステージ裏の前にはちよつとした部屋のような物がある。そこからのノックなのだろう。

「神戸さん？」

「……………はい」

「スペシャルゲストを連れて来ました」

「えっ？」

愛が容量を得ない、と言った表情をするのと、ドアが開かれるのはほぼ同時だった。そして外から現れたのは、

「りゅーじん……………?」

「愛、ちゃん……………」

愛は目を丸くしている。そしてドアの向こうの風人が「頑張ってください」とだけ言って姿を消した。

どうやら、愛には解らないが、龍神と風人にはなんらかの接点があるらしいと予測する愛。そして、愛の第一声は決まっていた。

「ごめんね。りゅーじん。私、戻る事は出来ないの」

本心は戻りたい。

だけど、戻れない。

「うん。解ってる。愛ちゃんは戻る事が出来ないって事ぐらい」

「……………うん。ありがとう」

ステージの方から、パチパチと拍手が沸き起こる。どうやら、もう発表が始まるらしい。

「じゃあ、行くね……………」

その時。

「まって」

どこか遠くへ行ってしまいそうな愛の手を、龍神がつかむ。もう、逃がさないと叫んでいるかのように。

「愛ちゃんに行かせない。だから今、連れて帰る」

「……………りゅーじん？でも、だから……………」

ついさっきと言っている事が違う。しかし、龍神は違わないと言つて、首を横に振る。

そして、

妻が死んだ。

それは、息子である風人が十二歳の頃だった。

そこから、なんとか子供達二人を育てようと必死だった。元々、大きくなりつつあった自分の会社。次々と契約を取り付け、いつしか大企業と呼ばれるまでにもなった。

そして、そんなある日。

ある契約先に行った時の事だ。

その契約先の社長は、早くに妻を亡くしたそうさ。大切な人を失ったという点と、子供を必死に育ててきたという点が似ていたせい、すぐに気の合う仲となった。

つい最近、その社長の娘を一目見せてもらった事があった。

どういう偶然か、その娘は若かった頃の妻に少し似ていた。面影もあった。そして、とても懐かしい気分になった。

そこからは、我ながらとても無茶をしたと思う。だが、それでも早くに母を亡くした子供達の心の隙間を埋めてやれないかと希望を抱き、その娘と息子の婚約を結ばせた。

これで、自分が子供達に出来る事は出来たのだろうか。

その代償として、親しい友人との信頼関係も崩れてしまったのだが。

しかし、今まで自分が埋めてやれなかった子供達の心の隙間程では無い。

そして、今日、ようやく婚約発表までこぎつけた。

後はその娘の名前を呼んで、その娘が出てくれば全てが上手くいく。

ハズだった。

「……………っ!?!?」

ステージの上に、誰も出ない。愛の方ならまだ解る。しかし、なぜ風人も出ないのか。城咲財閥の会長、城咲源五郎しろうさきげんごろうは驚きの表情を露にした。

ザワつく会場。しかし、自分にも何がなんだか解らなかった。

「お父さん」

「……………風人」

今、ステージに立っていないなければいけないはずの風人がなぜか、自分の目の前に居る。

「ごめんなさい。せつかくのパーティを台無しにしてしまった」

「……………どういふことだ」

とりあえず、理由を聞かなければ解らない。

「お父さんが僕達の為にこんな事をしているのは解ってる。だけど、このやり方は違う」

「……………」

「それに、お父さんがつきだした条件なら、あの人はちゃんと守ってるよ?」

「どういう事だ？」

それこそ、意味が解らなかった。
そして、風人はにこりと微笑む。

「だってお父さんが言ったのは、『愛さんが婚約から手を引いたら契約を切る』、と言ったけど、『第三者によって無理矢理婚約から手を引かされたら契約を切る』とは言っていないよね？」

「なっ……………！」

口をあんぐりと開けたまま固まる源五郎。

対して、風人は悪びれもせずニコニコと爽やかに笑っている。
源五郎は、その笑顔からとても息子が楽しんでる印象を受けた。

「こんなとんでもない無理矢理な作戦、実はある人からの受け売り
なんだけどね」

「くしゅんっ！」

「風邪ですか？（か、可愛いくしゃみ……………）」

「……………ん」。誰か噂してるのかな？」

「祭さんなら誰が噂してるのか把握しきれませんね」

「ん？ そうか？」

「自覚してください」

「あはは。いつもなんか悪いなあ。明」

「い、いえ………」

「相変わらず、祭さんの考える事は豪快だよね」

「………うん」

愛は、龍神に手を引っ張られながら廊下を走る。
メチャクチャな理屈なのは解ってる。

ドレスのままだと走りづらいし、本当にこれが正しいのか解らない。
い。

だけど愛は今この瞬間を、龍神の手を、離したくないと思った。

第十三話 また今度

ステージから神戸さんの姿が見えない。

つまり、龍神はなんとか神戸さんを連れ去った（こうい言う言い方は悪いが）という事だ。

あとは、なんと逃げ切れればいいだけだ。

不確定要素満載の「もうどうにでもなぐれ」という声が聞こえてきそうな作戦（？）もなんとかで出しは順調みたいだ。（いや、人を連れ去っておいてなんだけど）

「さて、もうこんな所には用は無い。龍神と神戸の所へ急ごう。あいつ等だけじゃあ逃げ切るのには無理がある」

嵐が言った言葉の通り、もう用はないといわんばかりにざわつく人々のわきを通り、スタスタと会場を後にしようとドアに向かって歩く。

折角こんな所に来た（それまでに何人かの犠牲を払ったが）のだから料理の一つや二つ食べても……

「ほら、さっさと行くわよ」

ぐいつ、とドレス姿の彩に引きずられるようにして俺は会場を後にした。

俺が仕方がなく彩に従って移動したのも、何かを食べる前に彩の右ストレートを食す事になるからだ。

『全く、何処に行ったんだ？』

『早く探し出せ!』

物陰から、愛を探し出そうとやっきになっているスーツ姿の男達の様子を、龍神と愛はひっそりとうかがっていた。

「こつちもダメか……………」

「りゅーじん。この後の展開はちゃんと考えてたの?」

「……………」

龍神は「うっ」、「とだけ小さく呟くと、それいこう何も言わなかった。

愛にはようするに、「何にも考えていませんでした」という事が解った。

「……………考えてなかったんだね」

「ごめんなさい」

龍神は素直に謝った。

正直、何とかして連れ出そうとする事で手一杯だったので、連れ出した後の事は頭がまわらなかった。

「ふふっ」

「? 何がおかしいの? いや、そりゃ確かに後の事は考えてなかったというのはおかしいけど」

「りゅーじんが後の事を考えてないって、めずらしいから」

「まあ、普通の道は通らないだろうな。逃げてるんだし」

「それは龍神も探す方も解ってるだろ。だから普通の通路にはあまり人は配置されてないからな」

「よし、それなら俺達も出来るだけ見つからなさそうな道を探そうぜ」

「いや」

嵐が俺の言葉を遮る。

「だからこそ、普通の通路を探す」

「はあ？」

「相手は見つからなさそうな通路を全てマークしてるだろう？ あつちの方がこのビル構造には詳しいわけだしな。だからこそ、普通の、逃げている人が通るはずの無い所は手薄になる。今は忙しいパーティの真つ最中だったわけだし、まだそんなに人員も配置されていないはずだ。だったら、龍神はそこを通るだろう」

「な、なるほど」

言われてみればそうだ。さっきから一般客の人達が集まっているような所には追っ手が居ない。

「それにしても、やっぱり慣れないとドレスって走りづらいわね・・・」

パタパタと彩がいつものスピードとはかけ離れた速さで走る。

「んー。龍神達あしちには同じドレス姿の神戸も居るからなあ。ゆっくりとはしてられないな」

今龍神は何処に居るのだろうか。どんな状況にいるのか解らないから携帯は使わない方がいいだろうし………

「……………つてあれ？」

「どうした幸助」

「祭さんと明さんは？」

「？」

振り返ってみると、祭さんと明さんが居ない。

「莉子も居ないわよ」

ああつくそつ！ いつものまに消えたんだあの人はっ！

「今は探している暇はねえ。とにかく龍神達を探す事に専念するぞ」

その後、俺達は男子と女子に別れ、俺と嵐はエレベーターで一気に入一階へと直行した。もしかしたら、もう龍神達は一階に逃げ込んだのかもしれないと思ったからだ。

龍神と愛は、一般客用の通路を通り、なんとか一階まで到達する事に成功した。しかし、不運な事に途中で見つかってしまった。

「愛ちゃん、頑張って」

「……………うん。あつ」

途中で、愛が転んでしまった。運動神経や体力はそれなりにある方だが、今は慣れないドレス姿での逃走だ。転んでしまったのは仕方無い事だ。

ただし。

この状況下においては、決して好ましいとは言えない。

「あ、愛ちゃん！」

龍神が愛の体をなんとか支えるが、そのタイムロスが致命的だった。追っ手は、二人の目の前へとやってきてしまった。

(しまった……………!)

「りゅーじんは先に逃げて」

「……………嫌だ」

愛をかばうように、龍神は愛の前へと進み出る。

しかし、だからと言って状況が良くなる、というワケでも無い。それでも、龍神は諦めなかった。最後まで、自分のわがままを通そうとした。

そして、そんな二人の前に、ある二人の少年が現れる。

「見つけた！」

俺は一階のエレベーターから飛び出した直後、龍神と神戸さんを見つけた。しかし、二人の目の前には追っ手が迫っている。

「ちっ。行くぞ幸助！」

「お、おおっ！」

もうとやかく言ってる暇は無い。

こういう時は大きく出た方がいいんだ…….と思う。

『さあ、見つけました…….』

「ラダーキック」

『よおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!?!』

嵐が追っ手その一にラダーキック、もとい、ドロップキックを背後からくらわせた。(それはラダーキックとは言わないんじゃないかな)

っーか大きく出すぎだろ!

「ええいくそっ! こうなりゃやけくそだ!」

俺も嵐にならって背後からドロップキックをお見舞いする。見事

にその追っ手は崩れたが、向こうもプロだ。すぐさま体勢を立て直してくる。

「龍神！ 早く行けっ！」

「．．．．．ありがとう」

それだけ言うと、龍神は神戸さんの手を取って走り出した。

光のさす出口へと神戸さんの手をとって飛び出す。

早く逃げ切ってくれ。龍神。

『おのれら．．．．．殺るか？』

『ガキの癖に調子にのりやがって．．．．．』

俺達も早く逝くからよ。

その後は大変だった。

突如追跡をやめた追っ手達に驚きながらも、祭さんが用意してくれた車に乗り込んで（運転は勿論別の人）なんとかホテルまで逃げ切った。

そして、風人が約束どおり『フォーロー』をしてくれて、俺達はお咎め無し（襲撃した人達には悪いが）で、神戸さんとの婚約の件も無かった事になった。

それから一日はここでゆっくりと過ごす事にした。

次の日には日本に帰る準備を始め、そして、結局日本に帰国するのは龍神が神戸を連れ戻してから三日目となった。

そして、今日がその三日目。

俺達は、空港へとやってきていた。

「皆さん。有難うございました」

ペコリと風人が空港で頭を下げている。

「いや、礼を言うのはこっちの方だよ」

「そうだな。結局はパーティをぶち壊しただけだし」

しれっ、と嵐が言う。

まあ、実際はその通りだ。

「そうそう。こんなバカ共にお礼なんていらんわよ」

「酷いっ！」

「いえ。父と真剣に話せる機会を下さったのは皆様です」

「？」

俺にはなんだか解らないが、どうやら向こうは向こうで何かあったらしい。

まあ、俺達に関与する所では無いが。

「あの……」

神戸さんが申し訳無さそうにしている。

「ごめんなさいって、貴方のお父さんに……」

「あはは。気にしないでください。父も解ってくれましたから」

ニコニコと笑う風人。

ま、コイツのこういう寛大な所は嫌いじゃない。

「そろそろ時間ですね。それでは皆さん、さようなら」

「ああ。また日本こっぴにも来いよ」

一緒に過ごした時間は少ないが、なんだかんだで『友達』、だしな。

「ええ。また今度」

ニコリと風人が笑う。ええいくそつ。この爽やかイケメンめ。こういう奴だけは内の学園には来てほしくないな。女子人気独り占めされてしまう。

「ばいばいこーすけ」

「ああ。じゃあな風花ちゃん」

風花ちゃんが俺に与えてくれた心の傷は一生忘れない。

そして、俺達は見送る風人達に向かって背を向け、祭さんと明さんの待つ自家用機へと歩を進めた。

「
また今度。近い内に、ね」

第十三話 また今度（後書き）

これで「政略結婚編」は大体終わりです。次はエピローグの後にSを挟んで、新章に入ります。

エピソード

NYから帰国してから、三日後。

莉子は、取材で得た様々な人物とのつながりを持つ携帯のアドレス帳から、ある一つのアドレスを表示させる。そこには、『城咲風人』と書いてある。

電話番号を呼び出し、そのまま風人に向かって電話をする。コール音が二回響いて、風人が通話に応じた。

「もしもし」

「久しぶり、ですね？」

「いいですよ。敬語じゃなくても。それとも、まだ僕は敬語を使うような人にカテゴリされてますか？」

苦笑する風人。対して、莉子も苦笑する。

「そーだね。それじゃ、そろそろ別に敬語じゃなくてもいいかな？」

「そうしてもらえると嬉しいです」

この電話の向こうでは風人はニコリと微笑んでいるのだろうと予想する莉子。その予想は間違っでは居ない。

「で、どうして電話を？」

「その事なんだけどね。改めてお礼を言おうと思って」

「お礼はこちらからしたい方ですよ。父と落ち着いて一緒に話す事が出来て、父一人で抱え込まないように出来ましたから」

「ありがとう」

「.....」

一方的に莉子がお礼を言っただけなのだが、風人は黙った。その一言にどれだけの思いがこめられているのが解り、それを踏みこむ事はしたくないと思ったからだ。

「んっ。そんで、あとついでなんだけども、『アレの件』は何時になるのかな？」

「ああ。『アレの件』でしたら近々。多分、そっちが夏休みに入った頃にはね。夏休み明けには幸助さん達はビックリすると思いますよ」

「ふっふっふっ。まあそりゃそーだろーね。幸助君は鈍感だから」

「あ、そうだ」

「ん？」

「その、今度、一緒に遊園地、という所に行きませんか？」

「ゆーえんちねえ.....んー。オッケー　いいよ」

「ほ、本当ですか？」

「うん。彩達も一緒に誘っちゃうけど、いい？」

風人は一瞬ふっ、と微笑み、そして、

「はい。大勢の方が楽しいですものね」

「そーそー。そんじゃ、それだけ。ばいばい」

「はい」

そして風人は通話を切るうとするが、莉子のあわてた声が聞こえてきたので、通話を切るうとするのを止める。

「っと、言い忘れてた」

「？」

「またね 今度会う時を楽しみにしてるよ」

「……………っ。はいっ」

それだけ言うと、莉子は通話を切った。

こうして、二人の会話と共に、NYでの出来事は終わりを迎えた。

エピローグ（後書き）

ついに「政略結婚編」が終了！

最後は駆け足でまとめた感がありますが、ご容赦を。

最初はこの章はやらない方がいいんじゃないかと悩んだのですが、この作品の幅を広める、と言った意味でも一応やってみるか、と書いてやってみました。

いきなりの急展開にしてしまってもうしわけありませんm（　）
m

この章では龍神と愛の関係を少し進展させたのと、二人の新キャラを登場させたという所に意味があります（多分）

それでは、次は恒例のSSシリーズ。

まだ何を書くかは決めてないっ！（　これでいいのか作者）

更新が少し遅れ気味ですが、なんとかついて来ていただければなと思っております。

それでは、また。

出合いの春、言つなければそれがファーストコンタクト、パターン？

出合いの季節、春。

俺はこの春、高校一年生となった。

受験、という物を人生で初めて経験して、地獄を見た（割とマジで）。

志願した高校は、なんでも生徒のやる気を向上させるために色々イベントを盛りだくさんとしている楽しげな学園で、実際には倍率は高かった。

しかし、親がこの学園の卒業生だったので魅かれなかった、という嘘になる。しかし俺の成績的にはギリギリで、必死の猛勉強が必要だった。

龍神や嵐、神戸さん、彩はともかく、俺はとにかく必死に勉強しなければならなかった。

いや。それにしても、人間頑張ればなんとかなるもんだな。彩にこれを聞かれれば「私達のおかげでしょ」とか言つて殴られそうだが。

勉強を教えてくれたみんなには感謝だ。特に彩は泊りがけで教えてくれたし。

今、俺はその幼馴染の彩と共に桜並木の中を歩いている。ひらひらと舞い散る桜はまさに幻想的で、俺の、いや、俺達の入学を祝ってくれているようだ。

「ついに入学かあー。なんだか感慨深いな」

「本当に、私達の頑張りが無にならなくてよかったわ」

彩も喜んでるようだ。

やっぱりコイツもなんだかんだで楽しみだったんだな。

「アンタが落ちたら、完全に無駄になる所だったわよね。私達の家庭教師も」

「そこかよっ！」

うん。まあ確かに彩は成績的には余裕だったわけだが。

「そういえば、おじさんとおばさんもこの学園の卒業生なのよね？」

「ああ。互いにこの学園で出会って一目惚れだったそうさ。そして駆け落ちの如く卒業後にボランティア活動に勤しみ始めたらしい」

「アンタの両親見ると、『バカップル』っていう単語がなんだか親しく感じるわ」

気持ちは解る。

何しろ三十六歳となった今でもあの二人はラブラブだ。たまに『彼氏イナイ暦』自分の年齢』の俺にとって家の中でイチャイチャしているのは非常に腹立たしい。(しかも二人ともそれなりに容姿は若々しいからなおさら腹が立つ)

しかもボランティアばかりしているし(どうやって収入を得ているのかは桐山家七不思議の内の一つ。俺も解らん)家にあまり帰ってこないのは当たり前だったし、昔彩が俺の両親を目撃出来たのはレアな体験だっただろう。

「朝からラブラブだなあ。お二人さん」

こんなぶしつけな声を背後から急にかけてくるのは、

「嵐か」

「だっ、だだだ、誰がラブラブのバカップルよっ!? 別にイチヤイチャなんてしてないからね!？」

「……………別にそこまでの事は言っていないんだけどな。っと、よっ。幸助、天音」

「直ちゃんは?」

「今朝早くに出てったつておばさんが。アイツの場合は進級だし、一年生を迎える立場にあるからな。入学式の準備とか、色々忙しいんだろ」

進級、という事は三年生だ。直ちゃんももう受験を受ける学年に来たか。まあ俺と違って受験で苦労する事は無いだろう。結構成績は良いみたいだし。

「と、いう事は来年は後輩か」

「つつても、中学の時とあんまり変わんねえだろ……………おっ。龍神と神戸じゃねーか? あれ」

「おっ。確かにそうだな」

確かにあの入学式初日から手をつないで（拘束されて、という風に見えなくも無い）イチヤイチャと（強制的に?）一緒に歩いてい

周りの友達はこの学園に入れるほどの学力は無かった為、まだこの学園での友達には居ない。

まあそれでもいいだろう、と莉子は思っていた。

孤独を恐れているは何も出来ない、というのが莉子の考え方だ。カバンの中には何気にカメラも忍ばせている。

(面白い取材対象にでも会えたらなー)

『新聞部』という所に入ったら、すぐさま記事を書けるように何かネタは無いかなと辺りを見回す。そして真つ先に見つけたのは、

「ったくよお！ 中学の時からイチャイチャと！ 羨ましすぎるんだよ！」

「だったら君も人の事言えないじゃないか！（羨ましいとかは別にして）」

「はあ！？ 俺は『彼女イナイ暦』自分の年齢『なんだぞ！ お前の目は節穴かつ！』」

「……………なんかさ、『鈍感』って、罪だよね」

「りゅーじんも人の事言えない」

「愛ちゃん？ 僕が一体何をしたんだい？」

「……………別にいい」

「ちょっと待って。龍神。何その哀れみの目？ えっ？ 神戸さんはおるか、嵐もどうしてそんな目を!？」

「いやあ。そいつは自分の胸に聞いてみる、としか俺の口からは言えないな。そうだよな？ 天音？」

「い、いいからっ！ さささ、さっさと行くわよっ！ 余計な事言っ
てないで！」

「???？」

周りの目も気にせず、ぎゃあぎゃああと騒ぐ五人組。大方中学時代からの友達関係だろうが、莉子にはそれが新鮮に思えた。

(ふふつ。面白い人達。しばらくはあの子達にくつつ
いてみるかな?)

何しろ、鈍感な男の子達に、その気持ちに気づいてもらえない女の子達。中学時代にはこんなに個性的で面白い人達は居なかった。莉子は入学する前から、この学園に来てよかった、と思い始めていた。

(特にあの胸の発育の良いツンデレな女の子 特に入念に取材しない
とね)

パシャッ、と、俺と龍神の論争に仲裁を入れるように、カメラのシャッター音が響いた。わざとなのかそうじゃないのか、フラッシュ

ユが俺と龍神に向けて光ったので、それが俺達を撮っている写真、
だという事が解った。

「あはは。仲がいいねえ。もう一枚、撮らせてくれる？」

と、にこやかに告げるのはカメラを構えた一人の美少女。
初めて見る顔だ。

制服が真新しい事を見ると、この女の子も新生生だろうか。

「誰？ アンタ」

「紙絵莉子。よろしくね」

「っ??? は、はあ」

一応確認しておくが、俺達とこの紙絵莉子、という子は初対面だ。
.....それなのになんだ！ このテンションの高さはっ！

「それでは取材開始」

「し、取材？」

「そうだよー。だって私、この学校の『新聞部』だもん」

へえー。新生生なのにもう部活動に入ってるんだ。早いな。

「未来の」

「だったら今はただの部外者じゃないのよっ！」

「取材強行」

「つきゃあああああああああああああああああ！！ どんどんどこ触ってんのよー！！」

「あっはっは 逃がさないぞお」

今度は彩が騒ぎはじめの番だった。

紙絵さんの取材（という名の胸揉み）は、入学式直前まで続いた。

今思うと、それが俺達と紙絵さんとのあわただしいファーストコンタクトだった。

「ニヤニヤしてないで助けなさいよっ！」

「ぐはっ！」

顔面に真新しいカバンが激突するとは、ほんとうにあわただしい。

出会いの春々言つなればそれがファーストコンタクト々パターン？

ぎゃあぎゃああと騒ぐ彩と、紙絵さん。

まあ、彩にしてはこの反応はそれなりに仲良くなった証拠だろうか。

それに、なかなか良い物も見せてもらったし。

「……………(イラッ)」

とかなんとか考えてると、顔面にカバンが飛んできた。

「この変態」

そう呼ばれても仕方が無いのでここはあえて黙っておこう。

「変態？」

「ねえ。今、変態って聞こえたけど……………」

「あの男子よね？」

「そういえばさっきもニヤニヤしてたわよ？」

「恐いわね……………」

前言撤回。

「いやいやいや！ 俺は別に変態でもなんでも無いからな!？」

このままだと俺の学園生活がメチャクチャになってしまおう！
それどころか、この学園で彼女が出来なくなってしまう!!
ここは話題を変えよう。

「そそそ、そういえば、直ちゃんももう中学に着いたかな
!？」

「ちょっと……あの男子今『中学』って……」

「今は入学式の季節だし、まさか……」

「小学校から中学上がったばかりの女の子を狙う気なんじゃない
……もしかして」

「ロリコンなんだ……」

ぎゃああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ!

このままでは俺の青春が終わる！ 始まる前に終わってしまったっ
!!

「ほら、さっさと行くわよ。まずは入学式の前にクラスを確認しなくちゃ」

「待って！ 誤解を解かないまま行くのは嫌だあああああああああああああああ！！」

ずるずるとそのまま俺は彩によって学園の校舎内へと引きずられていった。

恐らく、俺の花の学園生活は、入学式を終える前に終了しただろう。

女子達のひそひそ話と共に。

「四組か」

俺はなんとか心を落ち着かせて、なんとかクラスの振り分け表が貼り付けられている掲示板の前までやってきた。

俺は一年四組だった。

「嵐と龍神は？」

「俺も四組」

「同じく、だね」

おおつ。中学の時から『同じクラス』という所は全く変動しない。一種の『腐れ縁』、というヤツだろうか。いや、嵐の時の件で喧嘩三昧の日々をおくった経験があるので、『戦友』、いや、それも少し違う気がする。『悪友』という言葉が良く似合うような気がする。

「彩は？」

「四組よ」

「りゅーじん。私も四組」

これは綺麗に揃った物だ。

「あはは。因みに私も四組です」

．．．．．本当に綺麗に揃った物だ。

「．．．．．そ、そう。よろしく、ね」

彩にとっては厳しい一年が始まるだろう。

気の毒に。ただ、俺には出来る事は何も無い、というか何も出来ない。あんなテンションの女子を俺が止められるわけが無い。

後には入学式が控えている。

そろそろ入学式が行われる体育館に急がなければならぬだろう。

しかしこのタイミングで、ある事件トラブルが起こる事となる。

「．．．．．」

入学式が行われる体育館は、予想通り人でごった返していた。

俺達がクラスを確認した時点でそれなりにギリギリの時間だったので、体育館前は直前まで子供の晴れ姿を写真に収めようとしてい

た両親や生徒達でいっぱいだ。

しかし、なぜか彩の表情が冴えない。

「どうした？ 彩」

入学式の前に倒れたら大変だ。

とりあえず、体調だけでも把握しておきたい所だ。

「ん。何も無い……………」

「嘘つくな」

即答。

これが嘘だつていう事は、長年幼馴染をやってきた俺にとっては丸解りだ。

そもそもいつものコイツなら「別に何も無いわ」ぐらいに言っているハズだ。

「何よ。別に何も無いつて言ってるでしょ!？」

元気に嘸み付いてくるようになったが、それでもバレバレだ。

完全に何かを隠してる、いや、言い出せずに居る。

「お前の幼馴染を何年やってると思ってるんだ？ それに、お前が倒れてもしたら困るのはこっちなんだよ」

「……………別に体調が悪いわけじゃないけど」

これは多分……………本当だろう。

俺の、幼馴染としての直感だが。

「失くしたの……」

「失くした？ 何を？」

「えっと、その、それは言えないけど」

「言えない？」

俺に言えない物を失くした？ 一体どういう事だ？

「すまん。よく解らない」

「うう。と、とにかく言えないのよっ！」

「うう言い出したらもうその失くした『何か』を引き出すのは難しい。

せめて、形とか、そのぱつと見が何かという情報ぐらいは引き出さなければ探すのは難しい。

「ええっと、せめてどんな形だとか教えてくれないか？」

「うう。……アンタに言う時点でかなりギリギリなんだけど……ええっと、これぐらいの長さの青い袋よ」

彩が手で表したのは、長さ七センチぐらいの細長い長方形の形だった。

「……それ、お前にとっては大切な物なのか？」

「え？ んつと……うん。そうよ」

それだけ確認できれば十分だ。

「解った」

「つて、何処行くのよ!？」

体育館の逆方向に駆けだす俺を、彩が引き止める。

けど、止まるつもりは無い。

彩の声を振り切り、そのまま走る。

「探してくるっ！」

それだけ言うと、俺はそのまま走り続けた。

ああ、多分入学式は欠席だな。こりゃ。

けど。

今の俺にとっては、入学式よりも彩の失くした、大切な物ものの方が大切だ。
今アイツの俺にとっては、入学式よりも彩の失くした、大切おとしな物の方が大切だ。

「なあ、明」

「はい？」

「暇だ」

「あの、それは入学式直前に言うセリフでは無いような気がするの

ですが……………」

入学式開始十分前。

生徒会長、祭盛人は副会長のメイドさんと共に校門の所で桜を眺めていた。

今年晴れて生徒会長を務める事となった祭は、入学式には壇上に上がり、新入生歓迎の挨拶を述べなければならない。

のだが。

「マジで暇だ」

「そろそろ入学式が始まりますよ？」

「暇だ」

「それでは行きましょう」

ガシツ、と無理矢理制服をつかまれた祭は引きずられる形です。ずると体育館へと向かう。

「ああー。今年の新入生はどんなのが入ってくるんだろーな」

「さあ。ただ、先ほどの辺りで新入生が騒いでいたようですよ？
なんでも変態だとか」

「へえー。そりゃ面白そうな奴等だ。近々家に招待したいぐらいだ」

「変態を家に呼び込むのは止めてください」

「そんな事言うなよー。対話は大切だぜー?ん?」
祭はふと、地面に『青い何か』が落ちている事に気がついた。
新人生の落し物だろうか、と思って手に取る。中身を見る、なん
て無粋なマネはしない。

「? なんですかそれ」

「落ちてたんだよ。多分新人生だろーな」

「どうでしょう?」

「んー。とりあえず預かっておくか」

と、祭がそう結論付けた瞬間、フツ、と祭とめいの側を真新しい
制服に身を包んだ三人の新人生が通り過ぎた。

走っていると、後から嵐と龍神の二人が追いついてきた。

「嵐!? 龍神!? なんで」

「愚問だね」

「今更お前と何やるうが、別にどうって事ねえよ。入学式に遅れよ
うとな」

「.ああ。サンキュー」

落としたのは恐らく、込んでいた正門辺りだろう。
走りながら見渡してみるが、見つかったのは通りがけに見た学生
二人。

正門にたどり着いたが、そこに彩の落し物は見つからなかった。

「やべえな。誰かが持っていったのか？」

「いや、もしかしたら別の所に落ちているのかもしれないね」

「とりあえず、探してみるか」

チラリと校舎の時計をしてみるが、もう入学式は始まっているな。
彩のヤツ、大丈夫か？

「んー……………」

祭は遠目から三人の新生の様子を観察していた。
どうやら何かを探しているようだ。それはめいにも察しがついた
ようだ、

「もしかして、『それ』を探しているのでは？」

「みたいだなー」

もう入学式は始まっている。

生徒会長の出番はまだ後だからギリギリセーフだが、主役である
新生はもう間に合わない。

しかし、それでも、あの三人の新生は人生で一度きりの高校の入学式よりも、後で探してもよかったこの落とし物を優先したのだ。すると、その新生の内一人が、息を弾ませながらこちらへとやってくる。

そして開口一番、

「すみません。あのっ、この辺りでこれぐらいの大きさの、青い袋を見なかったですか？」

目の前の新生が手でどれぐらいの大きさを説明する。それはまさしく、祭の持っている青い袋と同じぐらいの大きさだった。

「もしかして、コレか？ この辺りに落ちてたんだけど」

「それっ！ 多分それですっ！ いやあ、よかったあゝ。見つかって」

とりあえずその青い袋を渡した所で、祭は一つ質問する。

「なあ、お前、新生、だよな？」

「？ はい」

「入学式はいいのか？ それぐらい、後でも探せたハズだぜ？ 他人の為に、どうしてそこまで必死になる？」

「ああ、はい。それは解ってるんですけど。それに、それは確かに俺じゃない他の人の為でもあるんですけど、俺の為でもあるんです。だって

「

新生、桐山幸助はニコリと微笑む。

「これが無いと、元気を失くすヤツが居るんですよ。俺はそいつのそんな顔を見たくない。だから一刻も早く見つけたいじゃないですか」

思わず、「入学式を欠席してまでする事かよ」と、小さく微笑みながら呟いてしまった。

「そうか。だったら早く行ってやれ。そいつも待ってるんじゃないか？」

「はいっ。ありがとうございます！」

後から二人の友人と思われる新生も追いかけてきた。

三人は入学式が行われている体育館へと続く桜の花びらが舞い散る道を走ってゆく。

「もうすぐ出番か。そんじゃあ明、行くぞっ」

「……………はいっ！」

明はニコリと優しく微笑むと、祭の後をついていった。

「結局、入学式には遅刻したわね」

「……………悪い」

あれから結局入学していきなり先生に怒られてしまった。
入学式早々、しかも学園の中にいながら遅刻とは、恐らく学園史
上初の出来事ではないだろうか。

「それで、中身はちゃんと入ってあったのか？」

「えっ。うん……………」

「ふーん。それならよかった」

現在は嵐達とも分かれ、俺と彩は二人きりで家への道を歩いてい
る。彩とは家が近いので、中学に引き続き、大体登下校はこれから
一緒になるだろう。

「……………あの」

彩はぎゅっ、と俺が手渡した袋を軽く握る。

「これっ!」

ずいつ、と、その袋が俺へと差し出された。

「へっ?」

「入学祝よっ! 受け取りなさいっ!」

「お、おっっ」

結局俺への物だったのか、と思いながら受け取る。
入学祝ならばここは素直に受け取っておこう。

「開けていいか？」

「好きにきなさい」

袋の中を開けてみる。中に入っていたのは、イルカの携帯ストラップだ。

「携帯ストラップ？」

「な、何よ。何か文句でもあるの？」

「いや、文句とかそうじゃなくて、これ確か、お前の携帯に付いてるのと同じじゃつだよな？」

「ち、ちちち、違うわよっ！ ホラ、よく見なさいっ！ 私のはピンクでしょっ！ アンタのは青色っ！」

彩が携帯にぶら下がっているピンク色のイルカのストラップを見せる。

「っーかただ単に色が違うだけで、結局は同じなんだよな。」

「べ、別に一緒にの付けたいとかそんなんじゃないから」

「この彩の言葉は嘘だ。」

なんとなくそう思ったただけだが。

「ありがとな、彩」

「……………べ、別に……………」

ぶいつ、と彩はそっぽを向いてしまった。

あれ、俺何か怒らせるような事を言ったか？

とりあえず、俺はさっそく自分の携帯に貰ったばかりのストラップをつける。なかなか可愛いストラップだ。

「んー。それならこっちも何か入学祝をしなきゃいけないなー」

「別にいいわよ。アンタじゃ、たかがしれてるだろうし」

「言ったな！？ よーし、それなら物凄い入学祝をくれてやるっ！」

「……………自分でハードルを上げるの止めなさいよ。どうせ自爆するんだから」

「う、うるせえっ！（泣）」

俺達は、共に歩を進める。

俺と彩のカバンのポケットに入れた携帯から顔を出したストラップが、同時に春風によってかすかに揺れていた。

まるで互いにお礼を言うように。

ありがとう、と。

出会いの春々言つなればそれがファーストコンタクト々パターン？（後書き）

これは一応祭との最初の出会い（ファーストコンタクト）を描いたつもりだったので、なぜか最後は幸助と彩メインに（笑）

次からは新章開始です！ 乞うご期待（？）

第一話 強制入会／そしてそれがプロローグ

俺達が再び学校に通い始めた瞬間、俺達は衝撃の事実を目の当たりにした。

そもそもその事実というのは、俺達が日本を、いや、学園を離れた時点で事は始まっていたのだ。

現在俺と彩が居るのは、学園の掲示板の目の前。

この学園の掲示板というのは、この学園の様々な連絡事項が掲示される。

そして、その掲示を見て、俺と彩は固まっているのだ。

「何よこれ……………」

「そんな事は俺が聞きたいんだけどな……………」

↳連絡事項↳

本日付で以下の者を生徒会執行部員に任命する。

一年四組

・桐山幸助

・天音彩

・白上嵐

・菅田龍神

・神戸愛

・紙絵莉子

生徒会長、祭盛人

「一体、どういう事ですか」

ホームルームの前の時間を使って、俺達生徒会強制任命メンバーは、生徒会室に抗議しに行った。

そもそも生徒会、なんていう役回りには一年生の俺達には荷が重過ぎるし、正直出来る気がしない。

「ん〜？ いやあ、お前達をNYに飛ばせる時に欠席扱いにするのも少し可哀想だな〜って思ってたな。公欠扱いにする為にはこうするしか無かったんだよ。ホラ、生徒会の活動の一環として俺も協力出来たわけだし」

悪気も無くニヤニヤと笑う祭さん。

確かに龍神はそういう事を気にするヤツだからその措置は正しいと思うけど、俺は別に皆勤賞はどうでも良いと思っていたので生贄は龍神だけでよかったのに。

「なんだか今、とても聞き捨てなら無い心の声が聞こえたような気

がしたんだけど」

「聞こえてないなら気のせいだろ」

どうして俺の心の声はこうも駄々漏れなのか。

結局、その後はなんだかんだではぐらかされて生徒会室を後にした。

まあ、生徒会の仕事なんてそんなにする事はないだろう、と思っていたのだが俺の（というより俺達の）意志とは裏腹に、すぐに生徒会としての仕事が舞い込むようになる。

俺達は放課後、一応生徒会の一員として任命されたのでしゅしゅ生徒会室へと赴いた（紙絵さんは『THE・NEWS』の編集で新聞部へと向かった）。

そして、扉を開けるとそこには既にめいさんと、生徒会室のイスに座ってくるくると回る祭さんが居た。その顔はなにやらニコニコとしている。

「ああー．．．．．なんか、これは危険な笑みだな」

「幸助さん。なかなか解つてきましたね．．．．．」

めいさんが苦笑いをする。

まあめいさんが言うなら俺もそれなりに祭さんの事を解つてきたのだろう。解つててもこの人の前では意味は無いが。

「ふっふっふっ。喜べ新入り共」

「無理矢理ですけどね」

彩がトゲのある言い方をするが、祭さんは気にしない。というより、気にもとめていない。

「なんと！ さっそく仕事が来たぞ！」

「うわあ．．．．．」

ただの仕事ならいい。別にいい。

そもそも生徒会に入ってた、というだけで経歴として入るからそれはいいのだが、面倒な依頼だけは避けたい。

特に祭さんが喜ぶような依頼だけはなんとしても避けたい。

「なんと！ 映画研究会から映画の製作協力依頼が来たぞ！」

そもそもの発端は、俺と嵐の裏工作が元で製作された映画研究会の映画、『消えてゆく友人達』だ。

これは一度公開され、大好評を博し、映画研究会の第二弾の映画の製作が発表された。（因みに映画鑑賞料は有料で、五百円かかる）

「ようするに、『一度作った映画が成功して調子にのって第二弾を作って更に大もつけしちゃうぜ』って話だろ？」

「人聞きの悪い事を言うなっ！」

と、俺に向かって叫ぶのは映画研究会の部長、ともえかずき巴和樹だ。

この前は密かに襲撃してしまってすまないと心の中で謝っておこ

う。

「で、どうして俺達に依頼したんだよ。そもそも前の映画はちゃんとお前らだけで製作出来てただろうが。なかなか面白かったぞ」

「その件だが、実は今度撮る映画は、『幼馴染との同居生活』がテーマなんだ」

「『却下だつ!!!』」

俺、嵐、龍神が己を守る為に即座に却下を入れる。

こんなドストレートなタイトルは完全に嫌がらせとしか思えない。

「そこを何とかっ！ 今回ばかりはキャストが明らかに足りないんだっ！ 特にヒロイン！」

巴が頭を下げる。

そういえば前回のキャストは全部映画研究会の部員だったな。あのホラー映画ならヒロインは居なくてもなんとかなっただろうが（それでもヒロインが居ないのは映画としては痛いハズなのによくまああれだけの反響を呼んだ物だ）、今回のテーマばかりはヒロインが居なくてはとうしようもないだろう。かといってまたヒロイン無しの映画に青春を捧げる野郎共ばかりがキャストではかなりキツイ（特に見る側の男子が）。

「気持ちは解るんだけどな.....」

嵐が渋った顔をする。

確かに前回襲撃してしまった身としては出来るだけ協力してやりたい所だが、さすがに今回のテーマばかりは今の俺達にとって危険

満載だ。

しかもドストレートな分。

「いいじゃん。協力してやれば」

さらりと祭さんが言う。

いや、そりゃ祭さんはあんまり関係無い（事も無いけど）から良
いけど、俺達にとってはこの学園の男子生徒全員から命を狙われる
かどうかの境目にワザワザ自分達から踏み込む事となる。

出来れば今回の依頼は避けたい。

が。

「よしっ！ 決定だ決定！」

「ええっ！？ ちょっと、まだ何にも話し合ってな……」

「困った生徒を助けるのが生徒会の仕事だっ！」

祭さんには関係ないようだ。

隣の嵐を見てみると、はあっ、とため息をついている。完全に白
旗だ。

それにしても、たまには祭さんも良い事を言うな。

「ワクワクが止まらねえなあ。映画撮影とか面白そうじゃんっ！」

「あ、ちゃんと生徒会長の出番もあるのでご安心ください」

………前言撤回。

やっぱり自分が楽しいからみたいだ。

こうして、俺達が無理矢理入会させられた生徒会での初仕事が始まるつとしていた。

．．．．．何も起こらなきゃいいんだけどな。

第二話 スタンバイ

結局、依頼を受ける事になり、それから生徒会のメンバーは巴から受け取った台本を読み込むように生徒会長である祭さんに言われた。

明後日から夏休みが始まる。そして克蘭クインは夏休み開始同時、つまり明後日からだ。

そして要約するに巴の要求は「明後日までにさっさと台本覚えて始めるぞ」という事だ。

鬼か。お前は。

しかもロケ地（と言うのだろうか）は当日まで秘密らしい。

なんという鬼畜仕様なのだろう。なんでも巴が言うには「ただでさえ時間が無いからな。余計な事を考えないようにする為だ」らしい。

俺としては、『余計な事を考えざる終えないようなロケ地』になるような気がしてならない。

まあ、何はともあれ時間が無い。

と、言うワケで、俺と彩は家に帰宅するなり、夕食の準備を一緒に終えてから（最近では俺も手伝うようになった）、台本を覚えるために猛特訓中だ。

「それにしても、本当にヤバイわね」

「ああ。本当にやばい」

この映画のテーマもそうだが、一番マズイのは、

「」どうして俺（私）達が主役なんだろう………」

という事だ。

俺と彩があせって猛特訓を開始しているのもこの為だ。

そもそも俺は幼稚園の頃からこう言った演劇系（巴が聞いたら怒るかもしれないが）みたいな、『演じる』といったタイプの事が苦手だった。

だから幼稚園でのお遊戯会とかも大体自分から進んで『木Aの役』とかも自分から進んで立候補していた。

対する我が幼馴染の彩はというと、幼稚園（中学校にかけて大体『お姫様』とかそんな感じの役ばかりだったような気がする。まあ、要するにヒロインが多かった、って事だ。

よって、今の俺と被って言った彩の発現は間違いと言える。

数々のヒロインをこなしてきた彩がヒロインをするのは当たり前なのだ。

「つーか、彩の場合はなんだかんだでこなせそうだよな！。対して俺はこういう役（しかも主演）なんて初めてだし」

「アンタは昔からやろつとしなかつただけでしょ。ほら、練習続けるわよ」

「へいへい……」

「映画、ですか？」

「ああ。ホラ、中学の時には巴和樹ってヤツが映画を撮ってただろ？。今回はアイツの撮る映画に俺達が参加するって話になった」

「へえー。それは面白そうですね」

直はカチャカチャと夕食後の食器を片付けながら嵐の話に耳を傾けていた。実際、直も中学時代には嵐や幸助達と共に時折公開される和樹達の映画を見た事があった。一応、嵐達を通じて和樹とも面識はある。

「そういえば中学の時に見た映画も凄かったですもんねー。映画が出来たら見せてくれるのでしょうか？」

「何言ってるんだ？ お前も参加するんだぞ？」

「へっ？」

きよとんつ、とする直に、嵐は苦笑しながら続ける。

「なんでも、お前にも参加してほしいそうさ。何しろキャストが足りないって嘆いてたからさー」

「そ、そんな事急に言われても……」

「ちゃんと役まであるんだぞー。何でも、俺がお前の彼氏役だってよ」

「え、ええ　　！？」

つまり、直は嵐の彼女役だ。
衝撃の役を与えられた直は、へなへなと床に崩れ落ちた。
そして悩んだ末、引き受ける事にした。

(かかか、彼女……あ、嵐さんの彼女役……うっ。今から緊張してきました……)

「りゅーじん」

「何？」

夕食を終え、リビングで読書に勤しんでいる龍神に、台本を持ってちよこんと龍神の隣に座る愛。

「この役なんだけど……」

「ああ、その役の事が」

龍神は少し苦笑いをする。

と、というのも、その台本に書かれた役のせいでもあった。

・菅田龍神 長瀬藤次役。村野の彼氏。

・神戸愛 村野明美役。長瀬の彼女。

「なんて役を放り出してきたんだ……巴は……で、愛ちゃん。それがどうかしたの？」

「この役に意義を申し立てたい」

「えっ？」

以外だな、と龍神は思った。

そもそも、愛の場合は「私達にピッタリの役」とかなんとか言ってくるのだと龍神は思っていたからだ。それが、この役に意義を申し立てるとは思わなかった。

そして、龍神が何か言おうとする前に愛が言葉を紡ぐ。

「この『彼氏役』、『彼女役』の部分を、『夫役』、『妻役』に変えるべき」

「そこ！？ 気にしてたのそこなの！？ 明らかに違っでしょっ！？」

しかし、愛は真剣な表情をしていた。

「あれだけの事があつたのだから今の私達の愛は夫婦と呼べるぐらいに生まれ「わーわー！！ それは無し！ あれは忘れて！！」……りゅーじんの分からず屋」

龍神は「何が分からず屋なの………」と言いながら、顔を真っ赤にしていた。今思うと、あの時の自分はどうかしたと思う。

(でも……)

チラリ、と龍神は台本を眺めてブツブツ何か言っている愛の方を見る。

(連れ戻せて、愛ちゃんが側に居てくれるようになって、良かった、かな)

そして龍神は、読みかけていた本を閉じ、手元に置いてあった自分の台本を手を取った。

翌日。

俺達の学園は、終業式を迎えた。

クラスメイト達とは夏休みの間はお別れだ。

しかし、俺はのんきに夏休みを楽しむ暇は無い。(そもそも、夏休みがあるのかどうかも解らない)。

学園の売店では、新聞部の特設スペースで紙絵さんが元気に『THE・NEWS』を売りさばいている(裏アンケートはなんでも最近web配信にしたらしい)。

紙絵さんは新聞部の仕事もこなしながら台本を覚えて映画の撮影だなんて、スケジューリング的に大丈夫なのだろうか。

俺は購買により、『THE・NEWS』を一部購入した。

「毎度あり」

と、紙絵さんの元気な声を背に、新聞を開く。

一面には大きく『今年度の映画研究会製作映画第二弾タイトルは『幼馴染との夏休みの同居生活』に決定!!! 一部では期待の声も高まりつつある』と、デカデカと赤い文字が紙面上で踊っている。

こうして見てみると、本当に映画を撮るんだなあ、という実感もわいてきた。

しかもご丁寧にかスタで俺達生徒会のメンバーも書かれてある。これは多分紙絵さんの差し金だろう。

『監督からのコメント』という欄があったので、見てみる事にした。

（監督を務める巴和樹さんからのコメント）

今作は、前回よりもキャストを豪華にしてお送りします。前作はヒロイン不在というところでもない映画でしたが、今作は学園でも評判の美少女キャストを取り揃えておりますので、楽しみにしてください。さっている方々も多いと思います（笑）

スケジュールにはかなりキツイですが、この夏休みからクランクアップして、なんとか始業式後の上映に間に合わせたいと思っております。

皆様のご期待に添えるようにキャスト、スタッフ一同、励んでいこうと思っております。

と、監督である巴さんは意気込みを語った。

前作を超える質の映画を製作する、と張り切っている。

映画研究会の新作に期待しよう。

また、生徒会全員の参戦とあって、生徒会長の祭盛人生徒会長の参加も明らかになっている。

これはますます目が離せない。

この記事を書いた人の名前は明らかになっていないが、これを書いたのは恐らく紙絵さんだろう。

俺は高校生が製作したにしてはクオリティの高い学園の新聞をくしゃっ、と思わず力強く握り締める。

「・・・・・・・・ハードル上げすぎだろ」

自然と、ため息と共に言葉が漏れた。

「何してるの幸助。早く帰るわよー」

と、俺の現在の心境を知ってかしらさずか、彩が校門の前で元気に手を振っているのが見えた。

映画製作初日。

記念すべきクランクアップ当日の集合場所は、なんと祭さんの家だった。

しかも今回は祭さんが機材等の援助をしてくれているそうで、使う機材も本格的だ（というより本当に映画製作で使ってる物なのかもしれない）。

そして、俺達以外にもキャストは居た。

『彼女イナイ暦』自分の年齢』のむさくるしい男子集団、『男の友情は永遠だぜ！』のメンバーの長谷川、小林、竹川だ。

「あれ？ お前ら、確か五人組じゃなかったか？」

と、俺が疑問を投げかけると、

「は？ 五人組？ 何ワケの解らん事を言ってるんだ」

「俺達は元々三人組だしいい？ ただのトリオだしいい？」

「幸助。お前幸せ過ぎて記憶障害でも起したか？」

どうやら他の二人はめでたく卒業したみたいだ。

因みにこいつ等の役柄は『イチヤイチャする人達を妬む役』らしい。

こいつ等は映画フィクションの中でも現実ノンフィクションの自分達を演じなきゃいけないのか。最早哀れすぎて泣けてくる。

「よし、全員揃ってるな」

巴が帽子にメガホンといういかにも監督だ、というような姿で祭さんの屋敷いえの庭で指揮を取る。

「それじゃあ、準備、始めるぞー」

巴の合図と共にそれぞれの準備を始めた。

ついに、映画製作がスタートする。

……俺達の共同生活がバレずに無事に乗り切れるのかが心配だ。

第三話 クランクイン！

ついに、映画製作が始まった。

最初のシーンは、俺が演じる主人公である『幸田圭亮』^{こっただけいすけ}と、彩の演じる圭亮の幼馴染の『早河香』^{はやかわかあり}が、屋敷の庭を歩くシーン。

これはどういう経緯でこのシーンになっているのかというと、どうやら祭さんの演じる天才生徒会長（演じる、というよりそのままの役）の家に招待されて、庭を一緒に歩いている、という事らしい。

「行くぞ〜」

巴が俺と彩に呼びかけている。

行く、というのは解ってはいるが解っていても緊張自体は止まらない。

対して、隣の彩はというと「こんなの慣れてるから」といった感じで、凜としている。

コイツも『映画製作』という事は初めてのハズなのだが、やはり『木Aの役』ばかりしてきた俺とは今までの経験^{キャリア}が違う。

「よ〜い、アクションッ！！」

巴の合図と共に、ついに最初のシーンが始まった。

カメラがまわっているのを意識しつつも、台本どおりに演じる（正確には演じようと努力した）。

まずは、香（彩）と共に庭を歩く。

……今ふと思ったのだが、『幼馴染との同居』がテーマなのに最初が散歩シーンはどうかと思う。

「ねえ」

彩がセリフを言ってきた。っと、次は圭亮（こいち）の番だったな。

「なんだ？」

オーケーオーケー。出だしは順調。

「き、今日、ひ、久々に、ッ」

．．．．．あ。噛んだ。

「カット！ カット！ どうした天音？ いきなりNGなんて」

「う、うるさいわね。ちちち、ちょっとミスしただけよ！」

それをNGと言うんだけどな。

紙絵さんがあははと笑う側で、彩が台本を片手に再びセリフを再確認する。

（うう．．．．．だめだ．．．．．幸助（コイッ）がこんなに近くに居るなんて．．．．．！ 間が保たないっ………！）

彩が顔を真っ赤にしている。

どうやらさしもの彩も映画撮影ともなるとやはり緊張するらしい。内心、緊張してたのは俺だけではなかったようだとホッ、とする。そして、テイク二。

「ねえ」

「もう我慢ならねえ！」

「イチャイチャイチャイチャ！　もうこれは殴るしかねえだろお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおー！」

「ちょっと待て！　これは演技だろうが！　映画製作だろうがああ
ああああああー！」

結局、その後は三バカトリオを鎖で縛り付けて、物置に閉じ込め
てから撮影が再開された。

撮影は、最初の三バカトリオの暴走以外は順調に進んで行った。

そして、次は嵐と直ちゃん達のシーンだ。

この二人は恋人という設定。

今から撮るのは一緒にデートをしているシーンだそうだ。

．．．．．羨ましい。

「何デレデレしてるの」

「してねえよ。ただちょっと役の違いを悔やんでいただけだ」

「へえ。そんなに私と一緒に演技するのが嫌だったの？」

「？　違うって、だから．．．．．え？　ちょっと待って。なん
でじりじりと近づいてくるの？　それにその拳の意味は？」

とかなんとかしている間に、撮影が始まった。

場所は祭さんの屋敷の前の道路。

この辺りは、普段は日曜日ですら一通りが少ないので撮影に支障は出ないだろう。

因みに三バカトリオは未だに物置に封印中。

こんなシーンを撮ると聞いたら必ず暴走を始めるだろう。女子に飢えた男達は本当に怖い。

「よーい、アクションッ！！」

もう何回も聞いて聞きなれたその撮影開始の合図が響き渡る。

同時に、嵐と直ちゃんなちちゃんの撮影がスタートした。

因みに嵐が演じるのは『藤岡篤』ふじおかあつし。直ちゃんが演じるのは『森岡奈津美』もりのなつみという役だ。

「なーちゃん。今日は何処に行く？」

「あ、あーちゃんは何処が良いですか？」

うわあ．．．．．今なら三バカトリオの気持ち解るな。

なんかこういうバカップルって端から見ると、独り身の俺としては物凄くぶちのめしたい。(気のせい)
物置からドンドンと激しく三バカトリオが暴れる音が聞こえる)

しかも名前で！ しかも『あーちゃん』とか『なーちゃん』とか！
聞いてるこっちがむずがゆいわっ！！

嵐は何事も無く淡々とセリフを言い続ける。

「そんじゃ、とりあえずは一緒に遊園地にでも行くか？ デートしようぜ」

今度のシーンは龍神と神戸さんが一緒にお昼ごはんを食べるシーン。

台本を見てみると、思わず台本を握りつぶしたくなるほどのイヤイヤっぷりだ。というかこのシーンは本当に必要なのか、と疑問を常に持ち続けている。

恐らくこの映画が無事に完成しても、男共のギリギリという歯軋りぐらいしか聞こえないのではないのだろうか、と思いたくなる。

場所はまたもや祭さんの屋敷だ。因みに屋上。

祭さんの家の屋上は学校の物とあまり大差無い。だから十分、学校で撮った物だとごまかせるだろう。

本当は学校の屋上に行つて撮りたい所なのだが、その場合機材の持ち運びに時間がかかる。それに今行っている撮影と平行して準備等をはじめの事が出来る。

「よーい、アクションッ!!」

巴の元気な声が青空に響き渡る。

屋上の床で龍神と神戸さんが仲良く並んで座っている。その目の前にはお弁当箱。

これは神戸さんの演じる明美の作ってきた手作り弁当、という設定なのだが、実際には神戸さんが作った弁当だ。

なんでも神戸さんが自分から「作りたい」と言ってきたらしい。

「そ、それじゃあ、そろそろお昼にしようかな?」

龍神は少し警戒気味に神戸さんの方を見る。

「私、お弁当作ってきたの」

そう言つて、神戸さんがパカッ、とお弁当箱のフタを開ける。

中に入っていたのは、豪華なおかずの数々。神戸さんの気合の程がうかがえる。それにおかずだけじゃなくて、その見た目を綺麗だった。

これを神戸さんが作ってきたのを龍神は知っているハズ（まあ同じ家に住んでるんだし）なので、それだけにこの弁当のクオリティに少し目を見開いた。

「すごい。美味しそう」

これは台本のセリフと同じだが、龍神の本心だろうか？

「本当？」

神戸さんがいかにも嬉しそうな表情を見せる。

「うん」

「じゃあ、食べさせてあげる」

……チツ。おもしろくねえ。

「はい。あーん」

「あ、あーん」

神戸さんの持つ箸によって、龍神の口にエビフライが運ばれる。ぱくつ、と龍神はそのままエビフライを咀嚼する。

「美味しい？」

「う、うん。美味し……」

チツ。気に食わないが、まあなんとか珍しく順調に終わって……

「りゅーじん」

「……あ」

……あ。

「はいカットおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！
！ 神戸さん！ 駄目だよ！ 本名を言っちゃあー！」

「どづしてっ？」

「どづしてって……ちゃんと台本に書いてあるじゃないです
すかっ！」

「でも、りゅーじんはりゅーじん」

「……いや、だからそういう事じゃなくて……」

「？」

「……いや。やっぱりもういいです」

結局、特別に龍神と神戸さんの役名は二人の本名そのままにした。
しかし、なんだかんだで、撮影初日は順調な滑り出しとなった。

ま、この調子で今後も上手く撮影が進めばいいんだけどな。

第五十部記念SS 龍神VS莉子!?(前書き)

祝、第五十部達成!

今回のSSは第一章の第二話と第三話の間の話です。

第五十部記念SS 龍神VS莉子!?

現在、龍神は授業前だということにも関わらず、廊下を走っていた。走り去る側で何人かの生徒が野球部が部室に打ち上げ花火を溜め込んで怒られていたとか、昨日駅前に有名タレントが居たとか、そんな他愛の無い会話をチラリと聞きながら、ひたすら走り続ける。その理由として、今朝、愛と登校してきた龍神だったのだが、かくくしかじかで愛と手をつないでいた龍神と愛の姿を、莉子に撮影されてしまった。

これでは恐らく学園の新聞の記事にしたてあげられてしまう。よって、それを阻止するために龍神は莉子を追っている、のだが

.....

(は、早すぎるっ!!)

正直、龍神は運動が苦手、というワケではない。中学時代の喧嘩の日々でそれなりに体力と走力は鍛えられていた(喧嘩、と言っても主に逃走が重視だったため)。

そのおかげか、脚力もついていて、運動にはさほど困らない。しかし、目の前のカメラを持ってキラキラとした瞳で走る莉子に一向に追いつけない。それどころか、どんどん引き離されている。

(ど、どうして僕の周りにはこんなハイスペックな女の子達しか居ないんだっ!!)

心の中でグチを零すも、龍神はひた走る。

なぜならもしもあの写真が次の『THE・NEWS』の一面に載った暁には、もれなく学校中の男子から命を狙われるという副賞がもらえるからだ。

そもそも、愛は学校中の男子から人気が高い。隠れファンも大勢居る。手を繋ぎたくても繋げない普段から殺気を溜め込んでいる純情野郎共にしてみれば、すぐにでも龍神を抹殺したくもなるだろう。それを防ぐためには。

(紙絵さんの行く所は解っている……だつたら新聞部の部屋に先回りしてやればいい……!)

現在走っているのは二階の廊下。新聞部の部室は校舎の外だ。現在、莉子は龍神の前を走っている。どうにかして先回り出来ないかと策をめぐらせていると、龍神が行動を起す前に、莉子が行動を起した。

「ほいつ！」

「ええっ!?!」

莉子は何の迷いも無く、『窓から飛び降りた』。啞然として見守る龍神だったが、莉子はストンツ、と華麗に地面に着地した。

「成功」

「っていうか、制服って確かスカートだよな!?　そこは女の子としてどうなの!?!」

「大丈夫大丈夫　見られても減るもんじゃないし、気にしない」

「そこは気にしてよ!　女の子として!」

「あはは！ 心配してくれてるんだ 因みに、中はスパッツだから大丈夫だよ」

綺麗にウイंकして、そのまま莉子は走り去ってしまった。どうやら足に異常は無いようだ。

「っ！ こ、このっ………！」

イラッときたのは否定しないが、今はそんな事を気にしている暇は無い。

「ええい！ くそっ！」

龍神は覚悟を決め、だんっ！ と窓から飛び降りた。

地面に飛び降りたと同時に地面を転がって、なんとかして衝撃を逃がす。

足に痛みや異常は無い。

(よし。足は問題無い………！ 痛いけど………)

龍神はじんじんと痛む足を押さえながら、莉子を追いかける為に走り出した。

「龍神、行っちゃったな」

「まあ当然だろうな」

確かにあんな写真を撮られたら龍神でなくとも追いかけるだろうな。

さて、嵐も落ち着いてきたようだし、疑問解消作業に入るとしよう。

「それにしても嵐、お前朝から様子が変だぞ？」

「（ピクツ）な、何が、だ？」

「んー。なんか、『絶対にバレてはいけない秘密を隠してる』、みたいな感じがする」

「………勘が良すぎるだろ、お前………」

「？」

「いや、なんでもねえ」

まあ、『絶対にバレてはいけない秘密』、ならば昨日俺もできてしまったのだが。

はあつ。彩との共同生活が紙絵さんにバレたら、俺も龍神みたいにしなきゃいけないんだろうな。

と、その時。

一時間目を知らせるチャイムが鳴った。

「「あつ」

結局、龍神と紙絵さんは一時間目の授業には間に合わなかった。

「はあっ、はあっ、はあっ」

龍神は新聞部の部室へと向かっていたが、結局莉子は既に見失っていた。

「こ、このままじゃ、ま、間に合わないかも……………」

莉子の入稿を防ぐのにはどうすればいいのか。

それだけを頭の中で考える。

(どうすれば……………多分距離的にまだ部室にはたどり着いていないはず……………でもあの脚力ならもうすぐ入稿される……………あんな写真を撮られたんだから、また別の事件でも起きなきゃ……………)

ふと、何かが引っかかる。

そして。

それはあつ一つの答えへとつながる。

(そうだ……………もつと何か別の事件を起せば、紙絵さんの足はそっちに向く?)

思い出したのは今朝聞いた生徒の会話。

そして、龍神はすぐさま野球部の部室へと行き、ドアを開けて、

(鍵はかけていなかった) 中から花火セットを引っ張り出した。

そして焼却炉の炎から打ち上げ花火に火をつける。

打ち上げ花火は全部で十個。それが、学園の上空に打ちあがった。

新聞部の部室の中でパソコンのキーボードを叩く莉子。
そしてふと、学園に響き渡った轟音。
その音のした方角に、七色の花火が打ちあがっていた。

莉子が打ち上げ花火の上がった方向に向かっていると、目の前の
角から龍神が現れた。

「ふうん。なるほどね。怪しいな」とは思ってたけど、やっぱり菅田
君だったか」

「知ってても来るとは思ってたよ。全く。まさか授業を休むはめに
なるなんて……」

「んー。欲しいのはこれでしょ?」

莉子は手の中のSDカードをもてあそぶ。

「……うん。出来ればそれを渡してくれると助かる」

今思えば、どうやって莉子からデータを取り返すのかを計算して
なかった。

そもそも、素直に莉子が渡してくれるのかどうかも解らない。

「いいよ?」

「そつだよな。駄目だよな。でも……えっ？」

「いいよー？」

「……………えっ、あ、そう。それじゃあ……………」

龍神が莉子の手の中のSDカードに手を伸ばすが、その手を莉子はすっ、と避ける。

「でも、一つ答えてくれるかな？」

「……………何？」

「あはは　ま、そう警戒しないで　質問はいたって簡単だから

「……………で、質問って？」

龍神が思うに、莉子が出すのは『簡単な質問』でも、『えげつない質問』に来るに違いない。

「愛ちゃんの事、どう思ってるの？」

(やっぱりえげつない質問だ……………)

そもそも、龍神は愛の事をどう思っているのかが解らない。

ただ一つだけハッキリしているのは……………

「僕は愛ちゃんの事をまだどう思っているのか解らない。だけど…

「.....」

「だけど?」

「とても大切な人、という事だけはハッキリしている」

莉子がニッコリと微笑む。

「なるほどね。それじゃ、約束通り、これね」

「っ」

ひゅっ、とSDカードを投げる。そして龍神はそれをキャッチした。

「それじゃ、私はさっさと戻りますかねっと。授業もあるし? それに、欲しい物ももう撮れたしね」

そういい残しながら、莉子は校舎の方へと戻っていった。
何か腑に落ちないで居る龍神を残して。

放課後。

龍神は愛と共に下校していた。龍神は朝の追跡で体力を消費していた為か、少し疲れが溜まっている。

「りゅーじん。大丈夫?」

「うん。なんとかね」

そう言っ て龍神は苦笑いを浮かべる。

「そういえば、朝花火が打ちあがったんだけど、りゅーじんも見た？」

「……………うん。結構近くで見たよ」

よりいっ そう苦笑いが広がる龍神。

その後、ふらふらと龍神は自分の部屋へと上がっていった。そして愛は、一階のリビングで龍神が二階に上がった事を確認すると、携帯のメールボックスを開く。

莉子から来たのは二通のメール。

一通目には、今朝の莉子が撮影した龍神と愛のツーショットが収められていた。

これは今朝、新聞部の部室からパソコンでこっそり莉子が送ってきてくれた物だ。

そしてもう一通には、

「そっいえば愛ちゃん。言い忘れてたけど今日の晩御飯は……………」

「.

』愛ちゃんの事、どう思ってるの〜?』

「……………え”っ?」

「りゅーじん?」

「愛ちゃん……………それは……………」

テーブルに置かれた携帯から、愛の大切な人の大切な言葉が、
ピングの中に響き渡っていた。

第五十部記念SS 龍神VS莉子!?(後書き)

第五十部までなんとか続け来られてきました!

みなさんありがとうございました!

第四話 あーん

午後一時。

撮影は一時中断し、昼休み休憩となった。

そして、肝心の撮影の進行状況はと言うと、まだ二十分の一程度らしい。

しかもワンシーンワンシーン、NGが入ったりする時もある上に、場面等の都合上、『朝だけ撮れるシーン』とか『昼だけ撮れるシーン』とかもあつたりするので、その限られた時間の中でどれだけ進む事が出来るのが力ギだ。

よって、昼の休憩もそんなに長くはとってられない。せいぜい小一時間程度だろう。

しかし、次は撮影場所を変えるそうなので、一応進んでいる、という事だろうか。

因みに、昼食の弁当は映画研究会の費用でまかなわれない。

確かに前回、映画研究会は大成功を収めたのだが、前は無料の上映だったので、結局は赤字。よって、節約しなければならぬのだ。

結局は、各個人個人で昼食を持ってくるように言い渡されている。

「ああ、腹減った……………」

俺と彩は主役（これも未だに納得していないが）なので、当然その出番も多い。それに加えて、『木Aの役』ベテランの俺からすれば精神的疲労も半端では無い。

とりあえずは、みんなでそのまま祭さんの屋敷いえの庭で昼食をとる事となった。

明さんが用意してくれた物凄く広いレジャーシートの上に俺、彩、

嵐、直ちゃん、龍神、神戸さん、紙絵さん、祭さん、明さんの計九人で座る。

三バカトリオは依然として物置に封印中。

映画研究会はなにやら次の撮影の準備に余念がないらしい。

一度昼食をとったかどうかと勧めてみたが、断られた。まあ、あいつ等はいいつ等で楽しんでいるようなので、そっとしておこう。

「彩」

「ん？ 何？」

「その………昼食、は………」

俺はボソボソと周りに聞こえないように彩に小声をかける。

そもそも、共同生活の事を知っているのは俺、嵐、龍神だけだ。女子メンバーは知らない。なので、一応は警戒しつつ声をかける。

「はい、「コレ」

「さんきゅっ」

出来るだけ見られないように、こっそりと弁当を受け取る。

が。

「あれ〜？ 彩、今幸助君に何を渡したのかな〜？」

目撃者が居た。

しかもよりにもよって好奇心旺盛で、新聞部部长という厄介な肩書きを持つ紙絵さんだ。

状況的には、とてもヤバイ。

とてつもなく、ヤバイ。

どんな些細な事がキツカケで紙絵さんに俺達の事がバレでもしたら、瞬く間に新聞に書かれて、確実に俺は学校中の男子達に命を狙われる羽目になるだろう。

そうなれば俺の命は明日まで保もつか解らない。

．．．．．もしも本当にはれたら、嵐と龍神のヤツも道連れにしてやるう。

「り、莉子！？ ベベベ、別に何も渡してないわよ？」

「ホントかな？ 今、絶対渡したよね？」

駄目だ。今の紙絵さんの追撃を振り切る事は不可能か？

「とつっ！」

「うおっ！？」

いきなり俺の方を向いたと思ったら、すぐさま俺の手から弁当箱を奪い去る。

し、しまった．．．．．！

「お弁当箱？ ふっふっふっ。そういう事かあ。まさか、」

ば、バレた．．．．．？

「彩が幸助君にお弁当を作ってあげてたとはね？」

．．．．．一応間違いは無い。と、いうより、それだけ、か？

「ちちち、違うわよっ！」「コイツがどうしてもって言うから作ってあげただけよ！」

「なあっ！？俺は自分で作るって言っただじゃねえかつ！ただお前が作るっていうから作らなかつただけで……」

そもそも、朝食だって昼食だって夕食だって、俺が作るうとしても彩が「私が作るから」という理由で彩が俺の家に来てから俺は今まで作らせてもらっていない。

「ほほう？」

紙絵さん。そうやって顔をニヤニヤするのは止めてくれ。

彩が余計に凶暴化するから。

「誰が凶暴よっ！」

「やはりっ!？」

右ストレートが俺の顔面に綺麗にヒット。

嗚呼^{ああ}。どうして俺の心はこつこつと読まれるのだろうか。

結局、プンスカと怒り、何処かへ行ってしまった彩を俺は追いかける羽目となった（勿論弁当は手放さない）。

諸悪の根源の紙絵さんは「頑張れ」と言ってニコニコ笑顔で送り出していった。

「おっ。やっぱりここか」

結局、彩を見つけたのはさっき撮影をした、屋上だった。

「彩」

「……………何よ」

俺は屋上で一人黄昏ている彩の後ろ姿を見つめる。

「……………どうしてここが解ったのよ」

「ん？ えっと、彩って怒って居なくなる時は大抵高い所に行くから今回もそうかな？ って」

「ふ、ふーん。そ、それが？」

「それが、って……………お前が聞いてきたんじゃないか」

そして彩はくるっ、とこっちを振り返る。

「で、何しに来たのよ？」

俺は手に持っている弁当をすっ、と差し出す。

「昼飯。まだ食ってないだろ。一緒に食おうぜ」

「……………解ったわよ」

しびしび、と言った様子で俺の所に来る彩。そのまま二人で屋上の床で弁当を広げる。

そこで、彩は俺のある重大なミスに気がついた。

「……………ねえ」

「ん？」

「アンタが持ってきた弁当って、一つだけ？」

「……………あ」

俺は彩を追いかける際に、普通に、俺だけの弁当を持ってきてしまった。

無論、彩の分の弁当を忘れてきたのだ。

俺と彩の間を挟むようにして、ちょこん、と弁当が一つ置かれている。

完全に俺のミスだ。

「……………」

「……………」

一瞬の沈黙。

「あ……………俺、下まで行って彩の分の弁当、持って来るな」

どうせ彩は下には戻る気無いだろっし。

「待つて」

立ち上がるうとする俺の手をぎゅっ、と彩の手がつかむ。

「別に……いい。このままでも」

「ストン、と立ち上がるうとする俺は彩がつかむ手によって座る事となった。

「そ、そうか……」

今も彩は手をつかんでいる。

彩の手はなんていうか、こっ、温かい。

これが人のぬくもり、というヤツなのだろうか。それになんか小さくて可愛らしい手だ。女子だからだろうか。やっぱり男の物と比べるとなんだか華奢で、やわらかくて、やっぱり温かい。

なんていうか、ドキドキ、する……？

「……っ！」

「彩があわてて手を離す。

……なんかこっちも照れくさい。

今思えば、幼馴染として長年一緒に居たけれど、手を繋ぐ（この場合は繋ぐとは言わないのだろうか）という事は随分久々だったよ
うな気がする（拳ならよく当たってるけど）。

あれ？ いつからだっただけ？

「そういえば、最後に手を繋いだのって、いつだったっけ？」

「え、ええっ!?!」

いかん。なんとなく頭に思った事がつい口に出てしまった。
なんか今の彩だと怒りそうで怖い。

まもなく右ストレートordロップキックが飛んでくるだろう。

「わ、悪いっ！ つい口に出てしまっ……………」

「……………」

「……………た？」

あれ？ 何も、無い？

「……………小学校一年生ぐらい、かな……………」

「？ そ、そうだったかな……………」

そうだ。思い出した。確か、幼稚園の時と同じような感じで一緒に手を繋いでいると、クラスの男子共にかわられたんだっけ。
よくある話だ。

結局、それ以降同じく小学生のガキだった俺と彩は照れくさくて手を繋ぐ事は無くなった。

とは言っても、別に何か変化があった、というワケでは無い。
そもそもその時手を繋いでいたのだから、集会後の教室までの道
のりで、学校中の生徒が廊下で混雑している中、はぐれないように
手を繋いだだけだ。

特にこれと言った理由は無い。ただ、それだけだった。

と、いう事は、本当に久しぶりだったんだな。彩の手を握るのっ
て……………なんだか、温かかったけど。というより、彩もよ

くそんなに昔の事を覚えているな。

「って、こ、こんな事をする為に居るんじゃないでしょ。早くお昼食べちゃわないと、時間が無くなるわよ」

「お、おお。そうだったな」

そして床に置かれた弁当箱に手を伸ばす。

直後、同じく手を伸ばそうとした彩の手がぶつかりそうになった。

「.....」

「.....」

思わず手を止めてしまった。

いや、いつもならこんな事のためらったりはしないのだが、なんか、久々に手を繋いだからだろうか。

思わず、本当に思わず、止めてしまった。

俺がためらっている側で、彩が少しぎこちなく弁当箱を広げ始めた。

「は、早く食べなさいよ」

「お、俺！？ いや、あ、彩が食べるよ。元々忘れたのは俺だし」

それに今は落ち着こう。とりあえず落ち着く事が大切だ。うん。

「私！？ いや、私が勝手に飛び出して行ったんだし.....」

ええいくそっ！ どうして今日に限ってこんなに素直なんだっ！
いつもならもっとう、
「当然よ。アンタが忘れたのがいけない
んだからねっ」とかなんとか言いそうなのにつ！

「……………だ、だったら……………」

「？」

「い、一緒に、食べる？」

「……………い、一緒？」

イマイチ要領を得ない俺をよそに、彩がやはりぎこちなく箸を持つて、
適当なサイズにミニハンバーグを箸で切つて、一つまみする。
そしてミニハンバーグをつまんだ箸をそのまま俺に向ける。

「ほ、ほら。食べなさい、よ……………」

「……………!!」

ぐあああああ！ 止めてくれ！ 今の俺にそれはヤバイ！ か
なりヤバイって！ しかも元が可愛い分、上目遣いの威力が半端な
い！ なんか、こう、理性を失うっ！

「……………お、おう」

「はい、あ、あーん……………」

そのままミニハンバーグを口の中に持っていかれ、咀嚼。

「お、美味しい．．．．．?」

これは冷凍の物ではなくて、彩が朝作った物、なのだが、緊張感が最大にまで到達していてもはや味が感じられない。

「あ、ああ。お、美味しい．．．．．」

美味しい、ハズだ。

さつきも言ったが、味が感じられない。

というか、どうしてこんなに俺は緊張しているんだ? 彩と二人きりでご飯を食べる、なんて今まで何度もあつたし、そもそも最近
は朝食と夕食なんかずっと二人きりじゃねえかつ!

落ち着け! 俺! 手を繋いだけで緊張するなんて、どんだけ
純情なんだよつ!!

「も、もう一つ何か、食べる?」

「もう一つ!」

いや。ヤバイ。もうただでさえ緊張感がMAX状態なんだ。ここ
でもう一撃受けるのは状況的に良くないって!

な、何か言わねえと．．．．．!!

「い、いやっ! 今度は俺が食べさせるからっ!」

．．．．．ん?

「え、ええっ!」

あれ？ 俺今なんて言った？

「そ、そ、そ、それなら……………」

彩が箸を弁当箱の上に置く。

……………これって、まさか、やっぱり……………

……………失言だ。

「お、おお」

もはや「お」しか言葉が出ない。

俺は箸を持ってさっき彩が半分にしたミニハンバーグをさらに半分にして（女子ならこれぐらいのサイズだろうか）箸でつまむ。

「じ、じゃあ、行くぞ……………」

「う、うん……………」

何やってるんだろ。俺。

「あ、あーん？」

もうこれは言わなければならぬのだろうか。

そのまま彩の口に箸を運ぶ。

彩は顔が真っ赤だったが、真っ赤になりたいのは俺の方だ。

「……………」

「……………」

もくもくとゆっくりと彩はそれを咀嚼するが、その間の俺はとうとうもう正座して固まっている状態だ。

……………正直、今の俺はどうかしてる。

なんか、いつもと明らか違う。彩だっていつもより数倍素直だ。なんだ？ コレ。なんなんだ？

「そ、それじゃあ次はまた私が……………」

と、彩がまた箸を手にしようとしたその時、屋上のドアがバンッ！ と開いた。

「幸助ー。天音ー。そろそろ時間だぞー？」

巴が、撮影の準備を終えたのか、屋上にやってきた。

た、助かった……………正直これ以上続いていれば俺の頭は完全にどうかしたのかもしれない。

「ごめんねー。彩。行かないようにって言ってたんだけどね。どうしても聞かなくてさ」

巴の後に続いてやってきた紙絵さんを皮切りに、そろそろと屋上に撮影メンバーがやってきた。

「ったく。巴のヤツも空気読めよな……………ってどうした幸助。やけに疲れた顔してるが」

「……………気のせいだろ」

そのまま、俺と彩は急いでミニハンバーグしか減らなかった弁当箱を片付けてみんなと一緒に下に戻った。

途中、チラリと彩の顔を見てみたが、なんだか真っ赤に染まっただけで、うつむいていた。

「それじゃー次の撮影場所を発表するぞー」

「「おー!」「」

と、元気に言うているのは紙絵さんと祭さんだ。

こっちは心なしか疲れてそれどころではない。

というかもうさっさと発表してくれ。

海でも山でもどこへでも……………

「次は主人公とヒロインの同居のシーンだから……………幸助の家だなっ!」

なん……………だと……………?

第四話 あーん（後書き）

そろそろ五十話も越えた、という事なので、幸助と彩の仲を少しだけ進展（？）させてみました。

第五話 緊張

なんというか。

俺の家は呪われている。と、いうより、俺自身が呪われているのかもしれない。

どうしてこいつ等は俺の家に来たがるのだろうか。そもそも俺の家は現在、出来るだけ誰にも立ち入って欲しくない。

なぜなら俺と彩の過こした生活の痕跡のような物が残っている。

こんな状況の中で映画研究会こいつらを放り込めばどうなるのか？ そんな事は決まっている。

．．．．．死だ。

俺達は、祭さんの家から俺の家へと移動を開始した。機材は自分で持って移動する。幸い、荷台等は映画研究会が用意していた。

「．．．．．あ、彩」

「．．．．．何よ」

「．．．．．どうする？」

「．．．．．私に聞かないでよ」

だめだ。

目を合わせられない。

つかか徐々に手を繋いだ（というよりつかまれた？）だけでこれだけ照れるってどれだけ俺は純情なんだよっ！

．．．．．いや、あの今思い出しただけでも恥ずかしいような

昼食の後だからかもしれないが。

しかも俺と彩の間の距離もなんか心なしか、広い。

なんだ。この息が詰まるような感じは。

胸もさつきからドキドキキドキ言っただけ落ち着かない。

ええい！ 収まれ！ 俺！ 落ち着け！ 俺！

結局、俺が一人もやもやとしている内に俺の家の目の前までやってきてしまった。

俺はみんなを（というより嵐、龍神以外の）説得し、ひとまず軽く片付けをしてから家の中での撮影を始めるように約束させた。

俺はひとまず、家の中へと入り、玄関の鍵をかける。

ガチャツ、というロック音を耳で確認し、とりあえずは一安心・・・もしていられない。

まずはリビングの中を見渡す。

現在、彩の部屋として使っている部屋が二階にあるのだが、そこは立ち入り禁止にしてしまえばいい。うかつに入って漁りだすと後でリアルで現実の死が待っている。

だからまずは、一階の部屋の証拠隠滅（というより証拠移動？）を行う事にした。どのみち二階までやると時間がかかって不自然だ。

まずは台所の洗ってかわかしている途中の食器を全て棚へと移す。

彩と一緒に使っている為に自然と台所の食器の数が増えているので、不自然にならないようする為だ。

後は、忘れてはいけけないのは脱衣所の洗濯籠だ。

前回紙絵さんに彩のブラウスが見つかってしまったので、今回は同じテツは踏まない。・・・あれのせいで俺はしばらく女装趣味のある変態扱いされたからな。誤解を解くのに二週間かかったからな畜生。

洗濯籠を二階の彩の使っている部屋へとダッシュで持っていき、一気に中身も見ずに放り込む。（中身は見ないほうがいい。俺の命

の為に。それ以前に俺の鼻から赤い液体が出てきそうだ)

あとは何かあったか．．．．あ、そうだ。確か今朝、彩が洗濯物を二階のベランダに干してたっけ。

さすが俺。危機察知能力が高い。ナイス判断だ。
もう女装趣味のある変態扱いされるのは嫌だからな。マジで。

俺は一気に二階のベランダへとかけあがり、ガラリと窓を開け放つ。

そして俺の眼前に飛び込んできたのは、．．．．女物の下着の数々。

それと、離れた所に俺と彩のTシャツ等が干されてある。

「．．．．なん．．．．だと．．．．!」

な、なんとトレットいう罫．．．．!

普段は彩が洗濯物も担当している。下着等の関係もあるので、ここは大人しく譲った。

さすがに高校一年生の男の子が女子の下着を選択するのは色々almazだろう。

ただ、今回の場合は完全に不意をつかれた。

証拠を隠滅する事に必死で完全にその事を忘れてた。

「落ちて着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ちつ．．．
．．．ゴフツ」

一応言っておくが吐血ではない。ただの鼻血だ。
しかしどうしたものか。

このままでは再び俺に女装趣味の容疑がかかってしまう。かと言

って、彩の下着を手づかみで移動させたと知られば、命の保障は無い。
ガシャンッ、と俺の中で女装趣味の容疑か、命の保障かの天秤がかけられる。

．．．．．そりゃあ、命の方が大事だよな。

天秤はいとも簡単に命の保障へと大きく傾く。

というより、今の俺にこれはハードルが高すぎる。

しかもなんだか心なしか、^{ブラジャー}下着のサイズも大きいような気がする。
(他の人のサイズを知らないが。つい知ってたら彩にぶっ飛ばされる)

．．．．．

駄目だ。鼻血の流れが加速してきた。

このままでは出血多量であの世行きなので、俺はひとまず玄関へと待避する事にした。

「なんとか片付いたぞ〜」

俺はあの後、玄関で一先ず呼吸を整えてからリビングに戻り、紙にペンで『この部屋は立ち入り禁止！』と書いて、色々と押し込んである彩の部屋のドアへと貼り付けた。

これで一安心．．．．．でも無いんだけどな。

紙絵さんは一番注意して監視しなければいけない人物No.1だ。

その後、彩が入ってくる。

「ただい……………っ！」

「ッ！ バカツ！」

俺はあわてて、彩の口を手で塞ぐ。

「んぐっ!?!」

今絶対『ただいま』って言おうとしたっ！ 絶対言おうとした！ 危ねえ……………今日の俺は結構注意力が良いから助かった。

「ん？ 『ただいま』？」

「そそそ、そんな事は言っていないぜっ!?!」

俺が彩の口を押さえたままあわてて訂正するが、さすがにキツイか？

いや、そりゃあ今のタイミングで『ただい』まで言っちゃったらもはや残すところは『ま』だけなので『ただいま』になるのは解る。

「んーだったら今の『ただい』は何を言おうとしたの？」

「うぐっ……………」

……………駄目だ。

俺には良い考えが浮かばない。

というか、今の俺の状況がヤバイ。

なぜなら手で口を押さえているので彩のやわらかい唇の感触が手から伝わってくるからだ。

このままだとアレだ。色々と理性が吹っ飛びそうだ。割とマジで。

「紙絵ー？ 巴が何か話があるって言うってたぞー？」

「んっ。わかりましたあー」

そのまま紙絵さんはリビングの方へとすっ飛んでいった。

あの声は嵐か？ 助かった。

俺はそっ、と彩の口元から手を離す。

「. な、なんか悪かった」

「. 別に。こつちが悪かったんだし 」

未だにあの手に彩のやわらかい唇の感触が残っているので、ドキドキしたままだ。顔が火照っていないか心配だ。

だあああああああああ！ なんなんだ今日の彩はっ！
素直すぎるっ！

しかもやけに今日は なんとというか、か、可愛い。いや、元々顔は可愛いのだが、性格とていかなんというか、『女の子』っぽい。 いつもこつちやって素直でいてくれたら可愛いんだけどな。

「. (イラスト)」

そう思っていた矢先。

突如、彩がげしっ、と俺の足を蹴る。

「いたっ!? なぜに!?!」

「……………べ、別に。なんとなくよっ!」

まさかまた心の中を読まれてたとは。おそろるべし。彩アンテナ。そのまま彩はスタスタとみんなの待つリビングへと行ってしまった。

玄関に取り残されたのは俺一人だった。しかし、俺はなんだか今のいつもにしてはやや弱めな彩の一撃でなんだか気分的にいつも通りに戻ったような気がして、軽い足取りでリビングへと向かった。

そして、次のシーンの撮影が始まった。

なんとか二階は立ち入り禁止にして、そして紙絵さんと祭さんは俺の目に付く所に居るように言い聞かせておいた(これぐらいである二人が大人しく言う事を聞くとは思えないが、祭さんは明さんが居るので安心だ)。

そして、その撮影シーンというのが……………

「それではよゝい、アクションッ!」

「……………」

「……………」

一緒に勉強をするシーンだった。しかも彩の真隣で。

「カットおおお! ちょっと待て待て! なんだか二人とも表情が

「固い！」

そうは言われても今のこの距離はキツイ。なんだかさっきから緊張しっぱなしだ。しかもなんか良い匂いもするし……………

「お、おう……………」

「それではよい、アクションツ！」

俺と彩は適当にノートにシャープペンシルを走らせる。まずは彩が俺に問題の答えを教えるシーン。セリフは俺から始める。

「なあ、香^{かおり}」

「な、何？」

「この問題を教えて欲しいんだけど……………」

「そ、そこね。ええつと……………」

彩が俺のノートの上にシャープペンシルを走らせる。そこで、

「カット！ 天音。そこはもう少し幸助に寄ってくれ」

「え、ええっ!？」

なんていう事を言っただ巴^{「バ」}は……………
と、思っていたら今度は嵐が俺の方に近づいてきた。

「あれ？　そういえばあの三バカは？」

「そういえば物置に封印しっぱなしだったな」

．．．．．あ。忘れてた。

第六話 気づけた事

撮影初日は終了した。

明日も朝から始めるらしく、今日はせっかくなのでみんなで祭さんの家に泊まっていこう、という事になった（というより祭さんに強制された）。

俺が部屋に入るや否や、既に龍神は隅っこの方で本を読んでいた。嵐の姿は無い。

「今日は、こっ、なんか、色々と疲れた……………」

「まあどうして『色々』と疲れたのかはあえて聞かないが、それでも疲れた理由は聞きたいね。あくまでも色々の中の一つとして」

と、龍神が前回泊まった部屋の片隅で、『吾輩は猫である』を読みながら言った。

「撮影」

「却下」

「移動」

「却下」

……………どうして却下されなきゃいけないんだ。

そんな俺の心中を察したのか、ふう、とため息をついて龍神がパタンと本を閉じる。

「僕が君に聞いている『疲れ』というのは身体的な疲れじゃなくて心体的な話。どこか今日の君は心が疲れきっている」

まあ、そりゃ自分でも何がどうなっているのか解らないようなキモチがあれば疲れるだろう。

ガラにも無く一人で考え込んでいるのがいけない、というのは解ってはいるが、しかしこのキモチは他の人には教えたくない。主に龍神と嵐には。

「まず、君は何か話したくない事がある」

当たり。

「そしてそれが今の君の悩みだ」

これも当たり。

「そしてその悩みは君の心体的な疲れに直結していて、やはりそれを君は僕に話すつもりは、無い」

またまた当たり。

「だったら、どうしてその悩みを僕に、僕達に話せないかを考えれば、君の悩みは解決するハズだ」

まるで俺が知らない回答を持っているかのような目で俺を『我輩は猫である』ごしにじつと見据える龍神。

「どづいづ.....」

「そろそろ夕食だね。食堂に行こう」

パタン、と龍神は『吾輩は猫である』を閉じてから、スタスタと部屋の外へと出て行ってしまった。アドバイスを貰ったようなのだが、しかし依然と、俺の頭の中で悩みは消えないままだった。

夕食が始まった。

これも前回と同じバイキング形式。しかし、食事中ずっと俺は上の空だった。

龍神との話でなんだかもっともやもやとした感じがするようになった。

気分を変えようと思ってこっそりと食堂のテラスへと出てみた。テラスはある程度の広さを保有しており、そこらへんのマンションのベランダよりかは数倍広い。

そしてそこには、じっ、と外を眺めている紙絵さんの後姿が在った。

俺の気配に気づいたらしく、フッ、と明るい笑顔を見せる。

「おやあ〜？ 夕食中に抜け出して、こんな所に来て。まさか卑劣な行いでも私にするのかな？」

「………何そのぶつとび発言」

おかしい。今日の紙絵さんは、というより『今の』紙絵さんはおかしい。主に発言が。

「なんてね 冗談冗談。今来たばかりの幸助君が私にここに居たのを知るわけ無いしね」

「女子がそういう事言つと冗談が冗談でなくなるからカンベンしてください」

「んー。なんか、ちょっとした悩み？ っつやつがあつてね。．．．
．．．いや『悩み』なんて物は本当は無くて、『解らない』つてだけなのかも」

「それを『悩み』つて言つんじゃないのですか」

「いやいやいや。『悩み』と『解らない』のは違つよ。『悩み』つていうのは『知っている』から悩むのであつて、『解らない』ワケじゃないよ」

「意味が解らん」

「解る必要は無いけどね」

「だつたら俺の今の状態も『悩み』ではなく、ただ単に『解らない』だけなのかもしれぬ。」

「．．．．．やっぱ解る気がする」

「この優柔不断男め」

ほつとけ。

「で、何が『解らない』のですか？」

「何？ 相談にのつてくれるの？」

「聞ける範囲でなら。こっちの気分転換、もしくはヒントになるのかもしれないし」

「ふーむ。まあぶっちゃけて言っちゃおうと」

さて。どんな爆弾発言が飛び出してくるのやら。

「恋に落ちちゃったかもしれない」

これは処理班が必要なくらいの超ド級爆弾発言がやってきた。

「ピーピー。これ以上は桐山幸助の容量では受け止め切れません。代わりの人材を探してください」

「自分から相談にのるって言うっておきながらそれは無いよねー」

俺が食堂の中へと避難する前に襟首を掴まれてしまった。しかも凄い握力だ。

「……………こいつのは俺じゃなくて彩の方が適任では？」

「あはは。まあそうかも知れないけど、親友に聞かれない秘密つてのもあるよ」

それはそうだろう。

しかし、これは果たして俺に対して適任では無いような気がする。いや、マジで。

俺はしぶしぶ続きを聞く事にした。

「で、相手はどんな男？」

幸せ者だろうな。その男は。紙絵さんも全体的に見ればかなりのレベルの女の子だろう。そんな美少女に恋に落ちられるとは。羨ましい事この上ない。

「まあ、名前は言わないけど最近知り合って、ちよくちよく連絡はとるんだけど」

「ほう」

「最初はぶっちゃけ普通ぐらいだったんだけど、なんかその人には妹が居てね。その妹と居る時に見せた優しい笑顔がなんか、こっ、魅かれちゃう？ っていうのかな？」

まあ、紙絵さんは実際人を見る目はあるし、それは確かに優しい男なのだろう。

「まあ、あっちもこっちに気があるのは解ってるんだけど」

「カップル成立おめでとー」

なんだ。相談という程でも無いじゃないか。

「いやいやいや。ところがどっこい。それがどうにも『解らない』んだよね」

「何が」

「私がその人を好きかどうか」

そう言った時の紙絵さんの横顔はどこか、悲しげだった。

「私、人の事を調べるのは大好きだけど、自分の事になると解らないんだよ。人に対してどんどん入り込もうとするけど、その分自分に関して無関心になっていったというかなんというか。まあともかく、自分の気持ちが解らなくなっちゃったんだよ。．．．．．いや、自分の気持ちを『忘れた』と言った方が正しいのかな」

相手の気持ちを知りたくて。知りたくて。

そして知って。

代りに自分の気持ちを忘れてしまった。

『解らない』。

これを俺が相談にのるのは．．．．．重過ぎる。特に、今の俺には。

自分の気持ちもロクに解らないのに。

だから。

今から言うのは、紙絵さんに向けてじゃない。

俺に向けてだ。

「忘れたなら思い出せばいい。今の自分の気持ちを」

つまり。

今思っている事が自分の気持ちであり、心であり、感情なのだ。

そして今思っている事が自分の思っている事なのだ。

何も、難しいなんて事、無かった。

『解らない』なんて事無かった。始めから『解っていた』んだ。

「だから紙絵さんが今思った事が、そいつに向けて思っている事なんだよ」

そうか。

俺が今思っている事が、俺が彩に対して思っている事なんだ。

「ふーん。ま、幸助君にしては良い事言うね　中身は簡単シンプルだけど」

だからほつとけ。人の知能の低さは。

「けど。おかげで自分の気持ちは『解った』かな。私はその人の事が好き。それでいいじゃん」

ぐっ、と背伸びをして、そしてくるりと俺に背を向け、食堂の方を振り返った。

「私の『解らない』事はこれで『悩み』になったけど、幸助君の方はどうかかな？」

「……俺も、『悩み』になった」

「そう。それならいいけど？」

それだけ言い残して、紙絵さんは食堂へと消えていった。
テラスには俺一人が残されていた。

思う事はある。今、思っている事。

俺が今日昼休み以降緊張していたのは、彩が居たから。

今までただの『幼馴染』としか考えて居なかった彩が。

小さな頃からの『幼馴染』だった彩が。

今はもう立派な高校生で、綺麗で、少し乱暴な所はあるけれど、本当は優しくて、可愛くて、そしてとても魅力的な『女の子』になっていた、という事。

そもそも龍神達になぜこの事を話せなかったのかを考えてみると、ただ単に『恥ずかしかった』からに過ぎない。丁度俺のようなガキにはありがちな感情だ。

一人の可愛い女の子に対してどう思っているかなんて。

それにようやく、気づいた。

もう今までの、あの頃の『幼馴染』じゃ無い。

異性として。

一人の綺麗で優しくて、可愛い『女の子』として俺の隣に居てくれている。

だから俺は『女の子』の彩に対して緊張していたし、ドキドキしていたんだ。

今、気づいた。

ようやく、気づけた。

だけど。

「はあ。だけどここからが『悩み』だよなあ」

もう一人の可愛い女の子として、異性として意識してしまった彩に対して、果たして俺は今まで通りに接していけるのか、また、どうやって接していけばいいのか、これからの『悩み』だった。

そんな俺を励ますかのように、季節にしては少し涼しめの風が、俺の頬をなでた。

第七話 クランクアップ！

この夏休みは、まあ、それなりに有意義だったと思う。
小学生、中学生を含めた夏休みをトータルしても。

高校一年生のこの夏休み。

その殆どをこの映画製作に使ったのだが、それはそれでまあ、楽しかったし、元々祭さんが勝手に受けたこの映画製作協力依頼だけでも。

今はやって良かった、と思ってる。

それに、何も今までずっと映画製作ばかりやってた、というワケでも無い。

一日だけだったけど、ある人物達と再開して、一緒に遊園地にも行ったのだが。

まあ、それはまた別の話だ。

そしてまあ、なんとか撮影は進みまして。

夏休み残り一週間。

とうとう、ラストシーンの撮影を迎える事となった。

「.....」

俺は撮影の準備に追われる映画研究会の部員をよそに、一人ポツンと自分の家のリビングで座り込んでいた。

そして、チラリと少し離れた所で台本を読みふけている彩の様子を見る。

「.....」

彩は依然として、台本を読みふけたままだ。
俺が彩を気にかける理由として、まあ別の理由もあるのだが。
それはまあともかくとして。
今朝の事がどうにも気になって仕方が無い。

しかし、まずはラストシーンの説明をしなければいけないだろう。
おおまかな流れとしては、まずは俺と彩で普通に同居生活の様子
を撮影したのち、幼い頃よく一緒に過ごした、という設定の公園。
そこで、彩が俺に告白して、俺がそれをオーケーして、ラストシー
ン終了。

と、言った物だ。

.....

なぜに彩からの告白？

普通逆じゃね？ 普通主人公が告白するのが普通だろ。それがな
ぜにヒロインから主人公へ向けての告白？

それを巴にぶっちゃけて質問してみた所、なんでも「だって主人
公からなんてありきたりだろ？ それに主人公は鈍感男って設定だ
し、そういう設定じゃなきゃ同居生活なんて出来ないよ」だそうだ。

そしてそんなラストシーンの撮影を控えた今朝から、彩は俺にち
つとも顔を合せてくれない。

それどころか今朝、バツタリと祭さんの屋敷の（結局、夏休みの
大半は祭さんの屋敷で過ごした）廊下の曲がり角で会った瞬間、踵
を返してダッシュで逃げられた。

まあ、俺ごときでは彩の脚力に追いつけるワケもなく。

結局そのままなのだが。

というよりも。

これは。

やはり。

間違いなく。

．．．．．嫌われてる？

そうでなければ避けられるハズが無い。

俺はこの夏休みに、彩が『綺麗で優しくて可愛い女の子』という風に、意識始めた。

しかし、そんな『綺麗で優しくて可愛い女の子』からこつも避けられると、どうにも。

．．．．．凹む。

だってそうだろ？

可愛い女の子から避けられる、っていうのはなかなか辛い。それがましてや彩だったら。

というか、どうして俺は避けられてるのか。

彩とは長い付き合いで。

そして右ストレートやらドロップキックとかやらを喰らってきてはや十六年。

それらを考慮した上で考えてみると。

．．．．．ダメだ。心当たりがありすぎて逆に困る。

しかし。
それでも。
やはり。

(傷つけちゃった かな)

チラリと、幸助を盗み見る彩。

その表情はとても悩んでいるようで、彩にとってはその表情を見ると心がチクリと痛んだ。

(. うう やっぱり撮影前に謝っておこうかしら で、でも)

いつもの元気はどこへやら。

純真乙女モードへと入った彩はそれから撮影開始直前まで悩み続け、結局は謝る事が出来なかった。

「よーい、アクションッ!!」

監督である巴の明るく元気な声が、俺の家のリビングに響く。

撮影が、始まった。

確かまず、とりあえずは。

普通の生活シーンからだ。

「香。部屋の掃除は済ませておいたぞ」

「有難う。あつ、洗濯物と夕食の準備、済ませておいたわよ」

「サンキュー」

と、言ったような会話が続く。

しかし所々に互いに意識したりするシーンが入る。

因みにこの終盤のシーンでは。

もう鈍感主人公である圭亮が既に香の事を意識しているのだが、それはまるで今の俺のようだった。いや、俺が勝手にそうだと思うた。

そして最後に香役である彩が「散歩に行かない？」と言って、そのシーンは締めくくられる。この散歩で公園まで行く算段だ。

「はいカット！ いやあ。良いねえ」

巴の機嫌がすごくぶる良い。

「なんか、家での生活シーンはメチャクチャ息が合うんだよなあ。まるで慣れてるみたいに」

.....いかん。これはいかんぞ。

「もしかして、リアルで同居生活をしてたりして？ なんてな」

「「そんなワケないだろ（でしょ）！！」」

危ない！ 今のは相当危ない！

「.....」

「.....」

気がつけば、思わず彩と顔を見合わせていた。
思わず照れてしまって、顔を少し逸らしそうになったが、じつ、と見つめる。

その顔は相変わらず素直な感じはなくて、でもなんだか懐かしくて。綺麗で。

そして 可愛かった。

「……………っ!」

ダメだ。もう限界。息が保たない。
思わず、顔を逸らしてしまった。

ああ。畜生。改めて意識するとやっぱり可愛いじゃねーか。
気がつけば彩もなんだか顔を逸らしている。

……………傷つけてしまったか。やっぱり。
そりゃ向かいあった女の子に対して急に顔を逸らすのは、やっぱりというかなんというか。……………ダメだろうな。

本当に。俺はバカだ。
でもその気持ちよりも先に。
久しぶりに見たような感じがした、その可愛い顔が見れて、なんだか少しホツとした。

次はようやく。

ラストシーンだった。

ぶっちゃけて言うと、この撮影に。

今日の撮影に映画研究会、つまり、撮影スタッフ以外のメンバーは参加していない。

多分俺達が演技をする際にやりづらいつか、そこら辺を考慮して

くれたのだろうか。しかし嵐の方は「ま、上映当日になれば解る事だしな？」と言ってたが。

「…………それはそれで。ありがたい。」

こんな照れくさいシーン。あまり見られながら撮影したくないから。

夕方の公園に並び立つ二人。夕方という時間帯の所為なのか、俺達の他に人は居ない。

ここで、思い出話が入る。

「この公園。子供の頃に一緒に遊んだの、覚えてる？」

彩がふと、言った。

しかしそれは。

『台本のセリフでは、無い』。

そうか。

そうだったな。

この公園は。

俺達が小さい頃に、一緒に遊んだ公園だった。

巴がこのシーンを選んだのは、そりゃ偶然かもしれないが。

俺達にとっては、本当に思いのある公園だった。

巴はカットを入れずに、そのままカメラを回してる。

続けても、良いんだよな。

「……………ああ。覚えてる」

忘れられるハズが無い。

「ここでどれだけ。彩と遊んだか。」
一緒に遊んで。一緒に泥だらけになって。仕事で親の居ない俺に代って。彩のお母さんが俺をしかってくれた。
今思うと、彩が少しばかりやんちゃ（オブラートに言葉を包めば）になったのも、俺の所為なのかも。

「一緒によく、ブランコをして遊んだよね」

「そうだな」

「一緒によく、滑り台で遊んだよね」

「そうだな」

俺って、本当にアドリブには弱いな。もう「そうだな」しか言っていないじゃねーか。

「……………一緒によく、過ごしたよね」

「……………そう、だな」

彩は。

何を言おうとしているんだろう。

台本から外れた言葉。

シナリオ外の言葉。

ココから先は、何が、どうなるのか、解らない。

「ねえ、覚えてる？ 小さい頃はよく、「私が一生アンタの面倒見てあげる」って言ったの」

「覚えてる。今思うと、そりゃこっちのセリフだよな、って思うな」
まあ、小さい頃にはよくある「お嫁さんになる宣言」というヤツだ。

実際に、俺は本当に小さい頃に彩コイッ言われたんだけど。
まさか覚えてたとはな。

「……………そうよね。あの頃とは違って、今はそんな事言えな
いけど」

でも、と、彩は俺の方に振り返る。
俺に背を向けていた彩が、俺を見てくれた。
夕日のせいか、頬が真っ赤に染まっている。

「私は、アンタの事が好きよ。今も。昔も。これからも」

その言葉を言った彩の顔はとても綺麗で。優しくて。可愛くて。

……………あれ？

これは……………台本通りのセリフ。
アドリブじゃ、無い？

「あ、えっと、え？」

「カットおおおおおおおおおおお！ ちょっと待って幸助！ せっかく良いアドリブだったのに、台無しだろお！？」

「え、いや、今のくだりだと最後のセリフが……えっ!？」

撮影しなおしたのは、その後の俺のオーケーをするシーンのみ。

あのアドリブのシーンはなんでもとても出来がよかったようで。そのまま使う事になったそうだ。

こうして。

映画製作はめでたくクランクアップを迎えた。

第七話 クランクアップ！（後書き）

次が「映画製作編」最終話です。

第八話 本当のクランクアップ/そしてそれがエピソード

夏休み残り一週間弱。

まあ、色々はこの高校一年の夏休みはかなり俺にとって多大なる変化を与えてくれた。

それが幸か不幸かはまだ解らないが。

それでも今はまだ『幸』かな。多分。

だがしかし。

俺は映画製作に意識を向けすぎていたせいで、とてつもなく重大な事に気がついた。

そもそも、夏休み、とは学生に与えられる長期休暇なのだが、俺達は教師という存在から休みと共に貰っている物がある。

それこそまさに。

THE・宿題。

.....この俺がやっているワケなど、無かった。

「と、いうワケでお願いします彩！ いや、彩様あああああああああああああああああああ！！」

プライド等捨て去れば、人間なんでも出来るもんだ。

土下座ごとき、いくらでも出来る。(悲)

「.....で、私にどうして欲しいワケ？」

「いやあ〜。ご察しの通り、宿題を手伝ってもらえればな、と」

まあ、ここでいつも通り却下、が入ってくるのだが、そんな事でへこたれない。俺の戦いはまだまだこれからだ！

「……………良いわよ」

ぼそっ、と彩が呟いた。

「……………へっ？ 今なんて？」

「だ、だから！ 手伝ってあげるって言ってんの！！」

まさかまさかの展開で。

まさかまさか手伝ってもらえるとは思ってなくて。

それでも今の俺にとっては嬉しいわけで。

「あ、ありがとう彩 ……！！」

「ただしっ！！」

ビシッ！ と俺を指差す彩。

「条件として、夏休み最後の日。私と二人で遊園地に行きなさい」

「遊園地？ それは前、あの時に行ったじゃん。夏休み中盤辺りに」

「違う！ だから言ったでしょ！ 二人で、って！ 行くの！？

行かないの！？」

うーん。今の俺からしたら選択肢は無いのだが。
しかしそれでも。
例えば仮に俺の宿題が終わっていても。

目の前の『綺麗で優しくて可愛い女の子』が誘ってくれているの
で。

断る理由なんて、あるわけ無い。

「……………解った。そんじゃあ、行くか」

「約束よ?」

「約束する」

夏休み最後の日に。

二人だけの思い出を作っておきたいから。

『幼馴染』としてではなく、『天音彩』という女の子と一緒に。

「なあ、彩」

「何?」

「映画製作の時のあの最後のアドリブなんだけどさ」

「……………何よ。何か可笑しかった?」

「いや。そうじゃなくて、途中までアドリブだったのに、どうして最後は台本通りだったんだ？」

「……………」

そして彩はじつ、と俺を見据えて。

「だって、本当に伝えたい言葉って言うのは、映画製作という場じゃなくて、本当に伝えたい場で伝える物でしょ？」

……………は？

一体全体、どういう意味だ？

そして彩は「勉強道具を取りにいつてくるわ」とだけ言って、二階に姿を消した。

彩は二階の自分の今使っている部屋の前で。
そっとドアノブに手を置いて。
小さく、呟く。

「だって『告白』って、台本の言葉じゃなくて、自分の言葉で伝える物じゃない」

それはつまり要するに。

本当に好きな人に対して『好き』という事は。

告白という事は。

台本の言葉じゃなくて。

映画製作という場を借りていう事じゃなくて。

自分の意思で。

自分の思いを伝えたい時に。

自分の言葉で伝える物だという事だ。

世界全体で見ればとてもちっぽけな夏休みだったけど。

幸助と彩にとっては、大きな意味を持つ夏休みだった。

二人の夏休みは、これでようやく。

本当の意味でのクランクアップを迎えたのだった。

第八話 本当のクランクアップ/そしてそれがエピソード(後書き)

映画製作編、これにて完結です。

この映画製作編は、ある意味大きな変化を迎えた所ですね。

描きたかったのは『幸助と彩の距離を縮める事』だったので、他メンバーの出番は少なめ。

そして幸助と彩だけでなく、この夏休みで密かに一気に距離を縮めたカップルが。

そのカップルが『距離を縮めた』という描写は書いてませんが。ど
のカップルかは勘付いている人いると思います。

そして次のSSにてそのカップルがいかにして距離を縮めたのかを
描きたいと思います。

そしてこの作品初、メインメンバーからのカップルが誕生！(予定)

.....なんだか最近恋愛増量展開だなあ(しみじみ)

次は恒例SSシリーズ！

夏休み中盤の遊園地。

少し久々のあの二人が幸助達の前へとやってくる！

そして遊園地では.....ある二人が結ばれる！？

乞うご期待！

夏休みの遊園地 part?

これは、夏休みの中盤に起きた、大事件であり、祝福すべき事であり、そして意外性たつぷりな出来事であった。

まあ、夏休み中盤、という事は絶賛映画製作中の期間だったので。

しかしその日はなんでも休憩日だったので。

よってお言葉に甘えて俺達は遊園地へと遊びに行く事になった。

と、言うのも。

そもそもそれこそ遊ばば。

紙絵さんの一言がキツカケだった。

「ねえねえ。みんなで遊園地に行かない？」

みたいな軽い一言。

しかし今から思えば。

それは紙絵さんから俺達へのサプライズであり。

サプライズという事は仕組まれた事であり。

仕組まれた事の裏には。

紙絵さんの自分に対する正直な気持ち、が隠されていた事には。

俺は今更ながら気がついた。

久々に再開したあの二人と、そして紙絵さんについての大事件。

それは遡る事、八月十七日のとある遊園地にて。

「うー……………あちい……………」

み〜んみんなみ〜ん、と、夏休み恒例、アニメやゲームのBG
M等にも良く使われるようなセミの鳴き声が俺の鼓膜を刺激する。

このセミの鳴き声は最初の方は「ああ、夏休みが来たなあ〜」な
んて思わせてくれる一面もあるが、油断してはいけない。

奴等は時としてとても邪魔な存在に変貌する。まあ、それは誰も
がある経験なので置いておこう。

こうやっていちいち語りだすのも、暑さの所為だ。

そうに違いない。

「本当に熱いわね」

パタパタと、俺の隣に座っている彩が服で自分を仰ぐ。

……………なんか、エロい。

しかもノースリーブの服を着てるから、肌の露出度が増えている
のでなおさらだ。

「？ 何」

「う、あ、べ、別に？」

「そう？ なら、いいけど……………何かいやらしい事でも考え

てないわよね?」

「別にかんぎゃえてにゃい」

「……………日本語で話さないよ」

そっだ。

暑さの所為だ。

俺が健全なる男子高校生目線で彩を見ていたからって黄金の右ストレートが俺の頬を撫でた（緩和的表現）のは。

俺達が現在居るのは、巨大アトラクションが満載の大規模遊園地。
『ウインド・パーク』という所だ。

これは県内一の規模を誇る遊園地で、その名はいまや全国に轟きつつある。

そして俺と彩は、待ち合わせの為にこの入場してからすぐの所にあるベンチで一緒に座っているのだが。

……………うん。まあ、なんとというか。やっぱり暑かった。

「ていうか。そもそもこれは莉子が言い出した事なのに、どうしてその当の本人が来ていないワケ?」

「そんな事俺に言われてもなあ。そもそもまだ集合時間の三十分前じゃねーか。早めに出ようって言ったのは彩の方だぜ?」

「そ、そうだったかしら!？」

「そうだったけど」

まあ、俺としては、今回ばかりは結構身だしなみには気をつかったつもりだ。

一応まがいなりにも途中までは彩と二人つきりなワケだし。そしてもしかしたら彩と二人（だけ、というワケではないが）で行く遊園地だし。

楽しみじゃない、と言ったら嘘になる。

それは当然であり、必然でもある。

なぜなら彩は、可愛い。幼馴染の俺が言つのもなんだが可愛い（乱暴かどうかはさておいて）。

そんな可愛い女の子と途中までとはいえ、他の友達も居るとはいえ、頑張つてカッコつけようと思うのは当然だろ？

そもそも、カッコをつける、というのは可愛い女の子に対して行う物だ。

それを行つてまず何が悪い？ と、「カッコつけー！ ダッセエ〜！」とかなんとか言っているであろう小学生のガキに言っておこう。特に男子。

まあ、俺がそう思ったのも。

俺が彩を『幼馴染』としてではなく、『綺麗で優しくて可愛い女の子』という風に認識し始めたのは、夏休み初日の事だった。

それは本当に些細な出来事だったけれども。

しかしそれは本当にドキドキとした出来事であった。

あの瞬間は多分、俺は一生忘れないだろう。多分。

二十分後。

ちらほらと、他のメンバーが集まり始めた。そして残るは紙絵さんだけとなった。

集合時間十分前に紙絵さんが居ないのは珍しい。

時間に関してはかなりキツチリしてるから（他の点についてもキツチリとして欲しい。女子として）。

「それにしても、紙絵のヤツ、遅いな」

と、嵐が携帯で時間を確認しながら言う。

「まあ、まだ十分前だしなー。俺も委員会の集まりはよく十分後行動を心がけてるし」

「十分後行動！？ 十分前じゃなくてですか！？」

この人が委員長で本当に大丈夫なのかと、時々思う。

「常に心に余裕を持たせておく事は、大切だぜ？」

「アンタの場合は持ちすぎだ！」

「大丈夫だ。最初の十分間はおろか殆どの議事進行は明に任せてるから」

「大丈夫じゃねえ！」

「つーか俺が来る十分の間に半分は進んでるんだよな」

「明さんスゲエ！」

「ははっ。そう褒めるなって。照れるじゃねーか」

「アンタじゃねえよ！」

「……ダメだ。この人とこんな話し合いをしても勝てる気がしないし、意味を持っている気がしない。」

「むしろマイナスだ。俺の場合は無意味なやり取りと暑さで体力がドラクエの主人公が毒に侵されているかのごとくじわじわと減っているが、対する祭さんは疲れるどころがむしろ元気そうにあっはっはっと笑っている。」

時折、この人にはGNドライブが搭載されているのかと勘違いしてしまいそうになる。

「はあ……早く来ないかな……」

ぶっちゃけもう紙絵さん以外のメンバーは揃っていて。

そして紙絵さんが来ればもう出発出来る状態であって。

しかし、逆に言えば紙絵さんが来なければ動けないのであって。

そして、俺の呟きに反応してか、一応人は来る、のであった。

「こーすけ　　！」

盛大な、ドロップキックと共に。

「ぐほあっ！！」

そんな事を紙絵さんがするわけもなく。

そしてその声からして、一体誰なのかについては心当たりがあっ

ただが。

しかしその人物は日本「ひなとこ」に居るとは考えづらい。

「げほっ……お、お前、」

俺はそのドロップキックの主の方へと振り返る。
そこに居たのは。

「久しぶりっ！」

城咲風花、だった。

「相変わらず、ぶさいくだね！」

まぎれもなく、な。

「ふ、うか？」

「うんっ！」

「お前……どこでそんなプロレス技を覚えてきたんだ？」

「……先に聞くのはその事なんだね。相変わらずこーすけはバカだねっ！」

笑顔で返された。

しかもバカと。

フツ。こんな五歳児に心を乱される俺ではない。
大人の対応ってヤツを教えてやらなくちゃな。

「おいおい。バカなのはお前だろ？ あんまり大人をからかうもん
じゃないぜ？」

「バカって言った方がバカなんだよ？」

「……………えっ？ 俺今五歳児にバカって言われ
た？」

しかもきよとん、と、「何言ってるの？」みたいなノリで。

「『どろっぶきつく』は彩お姉ちゃんのマネしたのっ！」

子供って吸収力が良いからな。

しかし何もこんな人生において対して役に立たないであろう技は
吸収しないでよかったのに。

「……………」

「彩？」

「……………」

「何で目をそらすんだよ」

「べ、別に？」

「あ、お前罪悪感感じているんだな？ やっぱりお前、罪悪感感じ

てるんだな？ あんな純真無垢な幼女にあんな技を発現させた事に
っ！」

まあ、俺でも罪悪感を感じるだろう。普通。

「おっ。みんな揃ってるねー」

その時。

俺は少し忘れていた。

そもそも、風花ちゃんが一人で日本に来る事などない。通常ならば付き添いの人物も居るだろう。そしてその人物に適切で、可能性
がある人物。

それは、兄妹。

兄。

「ふっふっふっ。懐かしい人物がお目見えだぜ」

「僕はそんなにみなさんの記憶から薄れていますか？」

苦笑しながら紙絵さんと共に俺達の前に現れたのは。

城咲風人、だった。

夏休みの遊園地 part?

城咲兄妹が日本に帰国したのは、丁度、日本でいう夏休み初日の事だったらしい。

一先ずはホテルにチェックインし、久々の日本を少し楽しんだ後、サプライズとかなんとかで遊園地に俺達を呼び出して登場、という事だったらしい。

まあ、それも紙絵さんの提案だったらしいのだが。

「あつはつはつ。どうせ会うならみんなを驚かせた方がいいと思つて」

「あー。それで遅かったんですね。納得」

時間厳守が基本の紙絵さんがどうして集合時間ギリギリに来るのかと思つたら、そういう理由だったのか。これで合点がいった。

「風人。久しぶり」

「お久しぶりです」

「元気そうでよかったよ。二人とも」

「こーすけー。ばかのこーすけー。久しぶりー」

「……いや。出来れば少しくらい落ち込んで欲しかったな」

「あはは……」

相変わらず俺は幼児からバカにされるような頭らしい。それとい
うのもこうやって風花ちゃんか俺の頭を叩きまくるからなのではな
いのだろうか。

「家でもこんな感じだと、お前も苦労するな……」

「いえ。家では結構大人しくはしゃいでますよ。ただはしゃぎ方が
違うだけで」

結局はしゃいでいるのかよ。

「違うって……どう違うんだよ」

「言うなればその違いはTV版ジャイアンと映画版ジャイアンの違
いですよ。因みに今がTV版」

「うわ！ 映画版の優しいジャイアンの方がよかったなあ！」

確かにそれは大きな違いだ。

TVジャイアンはやりたい放題してる割りに映画版になると手の
平を返したように優しくなるんだよな。特に後半。

アレは最早『ジャイアン』ではなくて『ジャコウ安』だ。

というか、前から疑問に思っていたのだが、映画版のドラえもん
のメンバーはTV版とキャラが違いすぎるだろ。ありえねえよ。

TV版ではいつもいじめられているのび太が映画版になるとめち
やくちや頼もしくなるもん。

何あの、のび太無双。

「こーすけーこーすけーこーすけー」

いつの間にか俺の肩に風花ちゃんが乗っていて、ばしばしと俺の頭を叩いている。痛い。もう痛すぎて痛みが消えてきた。

「風花ちゃん。そんなにこーすけこーすけ言ったら下駄ルト崩壊するぞ」

「ゲシユタルト崩壊、ですか？」

そつとも言っ。

いや、そつとしか言わん。

「コークスコークスコークス」

「それは石炭を蒸し焼きした燃料だ」

「コークスクリューコークスクリューコークスクリュー」

「それは主にプロボクシングに用いられるパンチの一種だ」

「コルクスクリューコルクスクリューコルクスクリュー」

「それは主にワインの瓶の口に栓されたコルクを引き抜くための道具だ！ もう崩壊どころじゃねえよ！ 粉々だよ！」

「つーか誰だ！ こんな純真無垢な幼児に物騒なパンチやコルクを引き抜くための道具を教えたのは！」

「嬉しいのですよ。幸助さんの事ですつとはしゃいでましたからね」

にこにこと風人にそう言われれば黙らざる終えない。．．．．．
ていうか、まあちょっとは覚えていてくれてたみたいで嬉しい。

「そうか。覚えててくれてたんだな」

「うん！ パパやみんなにこーすけがバカだつて教えてあげてたもん！」

「はっはっはっ！ そいつはありがたいや！」

駄目だ。もう泣きそう。泣いていい？

しかもみんなって、一体どれだけの人に俺がバカだという事を広めたんだ。この小さな悪魔は。

そろそろ俺の頭も痛みが感じられなくなってきたので、とりあえずは移動する事にした。

そういえば、頭って叩くと脳細胞が死ぬとかなんとかを聞いた事があるような気がする。一体俺の頭の脳細胞はどれぐらいの数が死んだのだろうか。

「第一回く。チキチキ！ パシリは誰だ？ 決定せけん。わくパチパチパチ」

唐突に。

パシリを決めるイベントとやらが始まってしまった。

まだ何も遊んでいないのに。

一人祭さんが騒いでいる。

「まあ、この遊園地は県内でも最大の規模を誇る遊園地だっていう事は知ってるよな？」

「はい。まあ、一応」

「そういえば、前にＴＶで特集された事もあったよ」

「それだけにかなり広い。アトラクションを楽しむには時間が足りない。そこで、だ。アトラクションを効率良く遊ぶためにはパシリが要る」

「パシリって．．．．．それだけで随分不吉な響がしますね」

「ん？ まあそつだな。具体的に仕事内容を話すとすれば、まあ他のアトラクションの順番待ちをしたり、飲み物を買ってきたりとか。ああ。勿論後でまた順番は決めなおすけど」

．．．．．まあ、確かにこれだけの規模のアトラクションを効率良くまわるにはそついった役割も必要だろう。
それに後でまた決め直すらしいし。

「で、どうやって決めるのですか？」

「しりとり」

「．．．．．」

いや。

確かにジャンケンだと苦手な人とかへの配慮が出来ないからしりとりはそりゃあ良い案だと思うのだが。しかしこれはこれで時間が

かかるような気がする。

そして、なんだかんだでしりとりが始まった。

順番は彩、神戸さん、直ちゃん、嵐、龍神、風人、風花ちゃん、明さん、祭さん、紙絵さん、俺、という順番だ。

「りんご」

「じじら」

「らっぱ」

「パイヤ」

「ヤクルト」

「トキ」

次は風花ちゃん。

風花ちゃんは少しの間うーんと悩んでから、

「気象庁」

「……うん。まあ、いいだろう。」

どうしてそんな単語知っているのか解らないけど、
というか一人だけ漢字だったぞ。

「う、う、う……」

明さんは意外と悩んでいる。
しりとりは苦手なのだろうか。
するとしばらくしてから、

「う、う、．．．．．ウルトラマン」

「アウト」

「え、ええ！？ どうしてですか！？」

「しりとりは『ん』がいたら終わりなんですよ．．．．．明さん」

苦手以前にルールを理解していなかったようだ。

「それに『ん』から始まる言葉なんてありませんし．．．．．」

「ン・ダグバ・ゼバ」

「あるのかよ！ つーか何だ！ それ！」

因みに『ン・ダグバ・ゼバ』、というのは仮面ライダークウガに出でくるラスボスの名前だそうだ。

というか、明さんが『ウルトラマン』に行き着いたのも祭さんの影響だと信じたい。

で、次は紙絵さんと。

「バカとテストと召喚獣」

．．．．．アリなのか。

これはアリなのか。
いいのか。色々。

「次は俺か。ってまた『う』じゃないか」

『う』か……………う、う、う……………

「ウイニングイレブン2012」

「……………」

……………何この沈黙。

「それは卑怯だろ幸助」

「ええ！？ 何処がっ!？」

「あちゃー。やっちゃったね幸助君。しりとりにおいて『の

』とか『その二』みたいな事はやっちゃいけないんだよ」

「うっ、じ、じゃあいいよ『2012』は無くしても……………
あっ」

それだとウイニングイレブンの『ン』で俺の負けじゃないか。

と、気づいた時には既に遅し。

俺はパシリ第一号となったのだった。

ミッション：十人分のジュースを購入せよ！

と、言うわけで、俺はそんなミッション・イン・ポツシブルに挑むべく、売店へと向かった。

近くに自動販売機があつたのだが、この遊園地の中にある自動販売機は外にある物よりも値段が割高というなんと鬼畜な仕様となつているので、とりあえずは売店へ。

一度に十個も持つ事は不可能なので一回で五つだけ持つ事にする。一度に半分だから二往復か。距離は少し近めだが、やはり二往復はキツイ。

しかも一往復目はまだ売店のおばちゃんも優しい目をしてくれたのだが、二往復目は俺の事を哀れみのこもった目で見ていたので、色々と精神的にきつい。

おばちゃん。

優しさは時として残酷にもなるんだぜ？

「つ、疲れた……………」

「はいはい。おつかれおつかれ」

嵐がとてつもなく感謝のこもっていない声でぐびぐびとジュースを飲んでいる。

アトデブットバスゾコノヤロウ。

とりあえず、俺は自分の分のジュースを買いに、三往復目の売店へと向かい、ジュースを購入。

立ち飲みをしながらまたみんなが集まっているテーブルへと向かう。

「りゅーじん。その紙コップ、貸して？」

「これは僕のなんだけど．．．．．あれ？　なんでストローなんか刺してるの？　それもなんで二本も刺してるの？」

「こっやって二人でジュースを飲むのが夢だった」

「とてつもなく簡単な夢だね。それ」

「だからりゅーじんには私の夢を叶える義務がある」

「無いよ！　それにそんな義務、たった今知った所だよ！」

「遠慮しないで？　はい」

「ち、ちよつと待って！　こんな大勢の前でそれは無理！」

「だったら別の場所ならいいの？」

「．．．．．」

．．．．．うわあ。

なんか見えててムカつくな。あの光景。

思わず手の紙コップを握りつぶしてしまいそうだ。

ああ。俺にも春が来ないかなあ！。

こっ、突然誰か可愛い女の子が俺の背後からやってきて。俺に突然告白してくれたりなんか．．．．．

「ち、ちよつと、」

「？」

後ろを振り返って見ると、そこには彩が居た。

「どうした？」

「ち、ちょっと話があるんだけど。こっちに来なさい」

そのまま俺は彩に手を引っ張られて、どこかへ連れて行かれる事となった。

このタイミング……まさか、な？

夏休みの遊園地 part?

「で、用って？」

「うっ、えっと、ね」

「? やけに歯切れが悪いな」

「なんか……. 莉子の様子がおかしくて…….」

「様子がおかしい？」

別に普通だと思うのだが。

今は普通にみんなとしゃべってるし。
楽しそうに。

「普通だろ？」

「おかしいわよ！ だって……. 今日会った時に何も無かったもん！」

……. 何も、無かった。

彩が大体紙絵さんと会った時は、紙絵さんが彩に何かしらのアクションを起すはず……. 。
ん？

そう考えればおかしい、な。

紙絵さんが彩と会った時は普段の学校生活しかり、大体カメラを構えてたり、胸を揉（ry
げふんげふん。

それを考えてみると。

「…………た、確かにおかしいな」

「カメラも構えてないのよ!? 撮影してこないのよ!? 病気が何かよ! 絶対!」

「落ち着け! お前は一体紙絵さんを何だと思ってるんだ!?!」

いや、解るけど!

確かに普段の行いがアレだから解るけど!

「そ、それに今日はなんか普段と違っていつもより可愛い服着てるし……………」

だってワンピースだもの。

いつもはなんか、こう、動きやすい格好をしてただけだな(まあ可愛いかったが)。

そもそもワンピース姿の紙絵さんなんて見た事無いぞ。

「うん。まあ。いつもとは違うな。服装が。でも、可愛いからいいんじゃないの?」

「……………そういう目で見てたんだ。莉子の事」

「うおっと!? 違う違う違う! そんな目で見てないって! だからその物騒な凶器凶器を降ろせ! 足もだ!」

そのままだと彩も彩で今はスカートなのでこのまま足を上げれば大惨事になるからな。主に俺が。

「チッ」

「今舌打ちが聞こえたんだけど!？」

でも確かに、今日の紙絵さんはおかしい。見た所はカメラを持っていないが。

「でも待て。どこかにカメラを隠してるかもしれないだろ？ 例えば体のどこかに隠してるかもしれない。暗器みたいに」

「……アンタも莉子をなんだと思ってるの？」

ジャーナリスト。

忍者。

百合(?)。

e t c . e t c

「とにかく、確かめてみないと解らないだろ？ とりあえずは確認してくるよ」

「もしもカメラ、取材道具一式を持ってなかったら即座に救急車にぶち込んでね」

「解ってる」

それぐらいは心得てるよ。

全く、俺を誰だと思ってるんだ？

病人の対処方法ぐらい心得てるよ。

そして、さっそく俺は病気の疑いのある紙絵さんの元へと近寄り
て見る。

現在風人と楽しそうに話す紙絵さん呼び止める。
診断開始。

「えっと、紙絵さん。ちょっといいかな？」

「ん？ いいよー。何かな？」

「今日は、カメラ、取材道具一式持ってきてる？」

「無いよ」

「.....」

これは重症だ。

「あれ？ どうしてそんな重症患者を目の前にした医者のような顔
をしているの？ ていうか、なんで急に携帯を？」

TO:彩

題名:無題

重症確定

送信つと。

「ん？ メール？」

「いやあ。何でもありませんよ」

「ふーん。あ、もしかして彩かな？」

「そんな所です」

「ふっふっふっ。仲が良いね」

「えつと、まあ」

と、その時着信音が鳴り響いた。
彩からの返信だ。

from: 彩

題名: 無題

とつとと救急車にぶち込みなさい

了解。

「彩？ えっ？ なんていきなり足を持つのか？」

「幸助。アンタは両腕を持って。あと、救急車呼んで」

「解った」

「おゝい！ 私は別に病氣じゃないよゝ！」

その後、なんやかんやで救急車を呼ぶ事は阻止された。

「いやあく参った参った。カメラと取材道具を持ってきてないだけでこれだと、一体私は何だと思われてるのだろうね」

「ジャーナリスト。忍者。百合。etc. etc.」

「あはは。最初と最後は否定しないよ」

「否定しなさいよ。特に最後は」

彩が自分の胸を腕で隠しながら言った。

な、なんて事だ。紙絵さんは百合属性だったのか（ゴクリ）。

「そういえば、他のみんなは？」

「嵐さんと直さんは一緒にどこかのアトラクションへ行きました。

風花は祭さんと明さんと一緒にどこかへ連れて行ってもらってるみたいですね」

「さんきゅー風人。．．．．あれ？ 龍神と神戸さんは？」

「確か龍神さんは神戸さんに白いハンカチを鼻に押さえつけられて気を失ってどこかへ連れて行かれてましたよ」

それは世間一般で『拉致』という事を、風人は知っているのだろうか。

使ったその白いハンカチは多分クロロホルムだろう（何処で手に入れたのかは定かではないが）。

「今頃は多分ジェットコースターに拘束されている事だろうな。龍神の奴。その後はお化け屋敷に強制的に連れて行かれて「きゃーこわい」とか言って抱きつかれるだろうな。リア充め。爆発してしまえ」

「そこまでの確に予測できるなんてある意味凄いですね。探偵になる事をオススメしますよ」

「いや。同じようなパターンを何度も見てるからな。どういう末路になるのか大体解る」

「．．．．．龍神さんに同情します」

俺だって同情するよ。これは流石に。

爆発しろと言っただけ。

「うつふつふつ。そうかそうか。彩はそんなに私の手が恋しかったのか」

「へ、変な勘違いしないでよ!」

「待て〜」

「く、来るなああああああああああああ!」

あっちはあっちで彩に同情するとしよう。

「……………幸助、さん」

「んー?」

風人がめずらしく()というほど会ってないが()少し、何か言いつらそんな顔をした。

まるで、何か、悩んでいるような、顔。

何かを、聞いたそうにしている顔。

「少しつかぬ事をお聞きしますが」

「お、おう」

そして風人は少しだけうつむいて、そして意を決したようにその優しく、整った顔を俺に向ける。

「り、莉子さんの魅力って、どんな所だと思います?」

「……………は?」

夏休みの遊園地 part?

意味が解らん。

なぜに風人が急にそんな事を？

何の前触れも無く急にこんな事を言われても対応に困る。

「うーん……………そうだな……………」

ふと、こんな会話をした後で彩に殴られるようなそつでないような。

「えつと、すみません、なんか、その、急にこんな事言われても困りますよね？」

「まあ、困っているという事は確かだが、でも、そうだな……………紙絵さんの魅力、魅力な……………」

改めて言われると、魅力と言えばそのキャラクターじゃないのだからか。

誰とでも仲良くなれるような性格？

活発で明るいキャラクター？

……………それともその女の子にはありえないようなオーバースペックとか？（マジで凄いから。あの人）

「……………色々あるな。本当に色々と」

色々……………とな。うん。

「はあ。まあ、そうですね」

「なんていうか、紙絵さんって色々とおバースペックすぎるくらいだし。何しろ陸上部からスカウトを受けたとか、柔道部の主将を投げ飛ばしたとか。色々と言は耐えないからな。色々（・・）」

「あ、あはは。本当に凄いですね」

「『凄い』なんて梓に収まればいいけどな」

でもまあ、おバースペック過ぎる方が紙絵さんらしいといえはらしい。

「そもそも『魅力』っていうのも、紙絵さんの場合は魅力がありすぎて解らないんだよ。多分」

「例えば？」

「強いてあげるなら活発な所とか優しい所とか誰とでも仲良くなれる所とかおバースペックすぎる所とか可愛い所とか綺麗な所とか胸がデカイ所とかその他諸々」

「最後の方から色々と言助さんがどんな目で莉子さんを見ているのが解ったような気がします」

「それは誤解だ！」

本当に。

「まあ、それはともくとして、とりあえず紙絵さんは魅力と言える所が多すぎるんだよな。つまり」

「うーん。やっぱりそうですよねえ」

「というよりも、なんで急にそんな事を聞くんのだ？」

「……………えつと」

「なんだかお前がまるで紙絵さんに気があるみたいだな」

「……………」

「で、どうしてこんな事を？」

「えつ……………」

なんだろう。

物凄く「どうして解らないんだ」みたいな表情を風人がしている、
ような気がする。

「あの……………なんだか、彩さんがとても可哀想に思えてきました。これだけのレベルだと」

「どつという意味だそれ!？」

なんで勝手に俺が遠まわしにバカにされなくちゃいけないんだ！
彩が会話に出てはいるけど、俺がバカにされている事だけは解るぞ！

「一応幸助さんを傷つけないように言いますが、はつきり言って幸助さんは「鈍」から始まって「感」で終わる人ですよ」

「言っちゃった！ 思いつきり言っちゃったよコイツ！」

思いつきり傷つけてるよ！

鈍感って言っちゃったよコイツ！

「俺のどこが鈍感なんだ！ 俺ほど察しのいい奴はそうは居ないぞ
！？」

「……………そうですね」

なぜか哀れみの目で見られた。

なぜか、だ。

畜生。

「解った。俺が「鈍」で始まって「感」である男は認めよう」

「是非とも認めてください。「鈍感」だと。幸助さんの為ですよ？」

「俺が出来るだけ直で言わないようにしてるのにどうして言っただ
！」

本当に容赦無いなコイツ！

「うん。まあ、それは認めるとして、一体どうしてこんな事を聞いたか、だ」

そもそも話がズレ過ぎているんだよな。

その所為で俺のガラスのハートが粉々だ。

「まあもう思いつきり言っちゃいますが」

「おう」

「僕、莉子さんに告白しました」

「ちょっと待て」

.....。

よし。

「嘘だろ!？」

「本当です」

「ふ、ふーん。そそそ、そうなんだ」

「メチャクチャ動揺してるじゃないですか。どうして幸助さんが動揺してるんですか」

「こ、ここういう事には慣れていないからちょっと動揺してるだけだ
」!

いやあ。確かに紙絵さんはモテる。

だってあの容姿だし、可愛いし。

同時に、そりゃ告白する男は沢山居る、が。

噂によると今まで紙絵さんは誰とも付き合った事が無いらしい。

玉碎した男も数知らず。

そいつらは本当にお気の毒だ。

「ででで、で、どうだった？」

「さあ」

「さあってー！」

「返事は保留かどうかも解らないんですよ」

「保留かどうかすら解らない？ どういう意味だ？」

これは、終業式の日のことだった。

一度、日本に帰国する目処がたったので、それを莉子に報告する為に連絡をとった。

そしてその時に。

思い切って。

NYからずっと思おつと思っていた言葉をついに、口にした。

「莉子さん。もしよければ、僕とお付き合いをしていただけませんか？」

と。

そして帰ってきた返事が、

「ん。じゃあ、私の何処が好き？」

だった。

そしてそのまま通話は途切れた。
正直、とつさに答える事が出来なかった。

私の何処が好き？

(何処が．．．．．莉子さんの．．．．．何処が、どの部分が、僕は好きなんだろう?)

元々。

一目ぼれ、だった。

必死に。

赤の他人であるハズの風花の為に自分を探す莉子。

その必死な姿を見ていたら、気がつけば、好きになっていた。

そして一体自分は莉子のどの部分が好きなのか、解らなかった。

結局、答えが出ないまま今日を迎えた。

何事も無かったかのように接してくれる莉子。

答えはまだ、見つかっていない。

「と、言うわけです」

「お前も思い切った事するなあ」

そんなドストレートに。

俺なら言えん。

「だから魅力がどうのこうのと」

「はい。でも僕は何度考えてみても、解らないんですよ。何処が好きなのか」

「ふーん」

「……でもまあ。

なんとなくだけど。」

「でも俺には、なんとなく解る気がするけど」

「？何を？」

「お前が、紙絵さんの何処が好きなのかと、どうして紙絵さんがそんな返事をしたのか」

「……嘘はいけませんよ」

「そんなに俺が信用出来ないか！俺が！」

「いや、多分「鈍感な俺が気づくのに、どうして風人しづみが気づくワケない」って思ってるだろうな！」

「ならまあ、冗談はさておき」

「冗談でもかなりキツイぞ。今のは」

「何せガラスのハートだからな。」

「教えてください」

「脚下」

即答。

微塵の迷いもございません。

「・・・・・・・・・・」

「どうしてですか」

「なんつーか。これは、あれだ。自分で気づくべき事なんだよ。多分」

「・・・・・・・・・・」

風人は、何も言わなかった。
しかし、それでも無視して俺は続ける。

「前に、紙絵さんが言ってたんだ。好きな人が居るって。で、結局紙絵さんはこう言った。「私はその人の事が好き。それでいいじゃん」って。だから、つまりは、『そういう事』だ」

「？」

「俺が言えるのは、そこまでだ。ギリギリでな。俺から答えを言うても、それはお前の答えじゃなくなる」

「・・・・・・・・・・そう、ですね」

風人は少し、ほんの少しだけど、なんだか、何かを見つけたような顔をした。

それが俺の見間違いじゃなければいいけど。

「それでは今日、もう一度、莉子さんに告白します」

それだけ言って、風人は彩を追い掛け回す紙絵さんの方に視線を移した。

「ぜえっぜえっ………本当に、しつこいんだから………」

「お前今かなり怖い顔してるぞ」

割とマジで。

「し、仕方が無いでしょ。莉子がどこまでも追いかけてくるんだから………なんだか今日の莉子はやっぱりおかしい………いつもより元気がありあまっているっていうか………なんと
いうか」

確かにどこかはしゃいである、っていうか、いや。

はしゃいである、というよりはまるで何かを紛らわしているような
………。

「なあ。彩」

「な、何よ」

「もしも好きな人と一緒に遊園地に行けたら、どんな気分になる？」

「え、ええっ!?!」

彩がいかにも驚いたような顔をする。

うん。そりゃ解る。

女の子にこんな質問をした俺が悪かったのかもかもしれないな。

「あ、やっぱいい。別の人に聞いてく……………」

「う、嬉しい、と思う」

彩が、顔を真っ赤にしながら、そう言った。

「好きな人だったら、嬉しいと思う」

「……………そうか。そりゃそうだよな」

普通は、そうだよな。

誰だってそうだ。

好きな人だったら、たとえ遊園地だろうが学校だろうが、どこだって楽しいハズだし、嬉しいハズだ。

それはきつと、紙絵さんだって例外じゃあないハズなんだ。

楽しくて、嬉しいハズだ。

いくら可愛くて、綺麗で、優しくて、オーバースペックでも、普通の女の子。

好きな人だったら、楽しくなるのも、嬉しくなるのも、そしてつい照れちゃって親友の女の子を追い掛け回してしまうのも無理は無い。

「何か、あったの?」

彩がまだ顔を真っ赤にしたまま、問いかけてくる。

「まあな。両思いバカップルの相談にのってやった所為なのかもな」

「？」

彩は意味が解らない、といった顔をしていた。

「よし、それじゃあ帰るか」という祭さんの一言で。

今日は解散する事となったのだが。

風人は紙絵さんと一緒に観覧車の方へ行つた。

多分、別の場所で、今日言った『告白』をするつもりなのだろう。

……頑張れよ風人。

じゃないと紙絵さんが報われない。

せつかく好きなのに。

お前が自分の気持ちを本当に、『ちゃんと伝えられない』のなら、紙絵さんが可哀想だ。

「こんな所に連れ込んで、まさか私に卑猥な事をしようと企んでたりするのかな？」

「いえ。そんな事はしませんよ」

観覧車のとある一室。

二人きりで、乗り込んだ。

風人が、連れ込んだ、と言った方が正しいのだろうか。

あれから。

考えた。

ずっと。

そして、ようやく、答えが出た。

自分なりの。答えが。

それが正解か、解らないが。

「本題、です、が……………」

「うん」

「その……………」

「？」

チラリと、風人は隣に座っている莉子を見る。

今日は以前見た活発な動きやすいような服装ではなく、ワンピース。

可愛い、と思った。

「莉子さん。前に、言いましたよね」

「うん。私の何処が好き？ って」

「全部です」

即答した。

これが答えであり、全てだった。

「莉子さんの全部が好きです。何処とかそんなんじゃないで、全てです。莉子さんの全てが大好きです」

言い切った。

いや、風人の中では「言い切ってしまった」という表現だが。

我ながら、今思うと、とてつもない事を言ってしまったている気がした。

そうだ。

風人は、莉子しづみが好きなのだ。

それ以外理由は無い。好きだから。

何処が好き、というわけではなく、どういった所が好き、というわけでもなく、全部が、好きだから。

「.....私ね」

「は、はい」

「最初の告白は正直、ガツカリしたんだ。だって、『好き』って言うってもらえなかったんだもん」

自分は好きだけど。

それでも、相手が自分を好きかどうか解らない。

ただ「付き合ってください」というだけでは。自分を好きなのか、それともただ付き合いたいただけなのか。

どっちか解らない。

好き、と言って欲しかった。

「……………だから今のは嬉しかったかも」

「そ、そう、です、か。それは、よかった、です」

「返事、だけど」

「……………」

風人しづんが言いたい事は全て言った。言い切った。
後は、待つだけ。

莉子は相変わらず、前をただ見据えているだけだ。

風人には、時間がゆっくりと、スローペースで進んでいるような気がした。

一秒が十秒に感じた。

それぐら、長く感じた。

やがて、莉子が再び口を開いた。

「返事」

「……………」

「私、話すのは好きだけど、自分からこうして気持ちを伝えるのって苦手だから、こうするね」

「……………？ それってどういっ……………」

「えいっ」

「……………!」

簡単に言えば。
言葉の代りに。

風人の唇に莉子の唇が重なった。
いや、重ねられた。

それが、莉子なりの返事だった。

「……………で、結局付き合う事になったと」

「はい」

結局あれから報告があったのは、その日の夜だった。
これでめでたくカップル誕生というワケだ。
羨ましいなコノ野朗。

「あーあ。これで学園の華が一人憎き美男子のリア充の手に墮ちたのか」

「そういう言い方は一応褒め言葉として受け取っておきましょう」

「くそ。皮肉すら通じないのかよ」

「今は幸せいっぱいですからね」

「ち、畜生！……………で、何の用だ。ただの自慢話なら切るぞ」

「言え。お礼を言おうと思って」

「お礼？」

俺、そんな事言われるような事をしたっけか？

普段逆の事しか無いから全く心当たりが無いんだよな。

「そんな礼を言われるような事、したか？」

「……………ホント、自覚が無い所がなんだか、僕から言わせてもらえば憎たらしいですね」

「悪かったな」

俺から言わせてもらえばお前の方がよっぽど憎たらしいわ。特に今回の件。

「ありがとう」

「……………切るぞ」

そのまま。

俺は電話を切った。

……………なんか、こつこつ事を普通に言い切ってしまうのがアイツの長所というか短所というか。

「ま、お幸せに」

俺が言えるのはこれだけだ。

あくまでも主役はあいつ等だ。

脇役は黙って、主役を祝福してやるとしよう。

夏休みの遊園地 part? (後書き)

SS? 終了です。

今回は、この物語初(?)のカップルを誕生させてみました。

これからはこの二人のバカップルっぷりを見てもらえればなと思います。

この物語の最後については、まず最初に言っておくと、一応はハッピーエンドにしたいと思っています。

しかし果たしてそこまで行くのにどれぐらいの時間がかかるのやら。とりあえずはこれからも、幸助達の物語を見守ってくれればな、と思います。

左リユウ

第一話 委員長

体育祭。

それは毎年二学期最初のイベントとして、我が学園で行われるイベントだ。

勿論、我が学園は『遊ぶなら思いっきり遊ぼうぜ!』がモットーだ。

よつて、そんじょそこらの高校の体育祭とは一味違う。

何処が違うのかと言えば、商品が出る。

それは毎年違う物らしいのだが、今年はまだ検討中らしい。

因みに去年は優勝したクラスのメンバーには食堂の食券一年分が授与されたらしい。

この学園の食堂の料理は結構美味しいので、それはそれは好評だったそうだ（この食堂のレベルは俺が入学する前の年に飛躍的に上昇したそうだ。丁度祭さんが入学した時なので、祭さんの家が関与していないか疑わしい所だ）。

それゆえに、体育祭は毎年、盛り上がるそうだ。

「さて、ここで、我が一年四組の戦略について話し出す前に、ある一つの重要な案件がある」

と、黒板前でみんなに向かつて演説を繰り広げるのは、夏休みにめでたく彼氏が出来た（チツ）紙絵さん。

重要な案件か。

重要な案件ね。

一体そんな事あったのか？ 体育祭の戦略を決める事よりも大事な案件が。

「このクラスは、まだ委員長が決まっていないわ!」

言い切った。

.....。

そういえば。

「あー.....確かに、そうだった気がするわね」

彩も思い出したようだ。

そういえば、そうなのだ。

この一年四組は未だ委員長が決まっていない。

というより、必要としなかった。

何しろその紙絵さんのリーダーシップがみんなを自然と引っ張って行っていたからだ。

しかし。

「へえー。委員長が決まっていなかったんですね。このクラス」

因みに俺の目の前の席に居るのは、風人だ。

なぜかというと、それはまあつまり、簡単に言えば。

今朝、転校してきましたとさ。

急に。

突然に。

そういえば、急に日本が夏休み真っ盛りに帰国してきたのも不自然だった。

このため、だったのだ。

「まあな。これまでは紙絵さんが自然とみんなを引っ張って行っただけだ」

そもそも最初のイベントの時に祝勝会をよりもよって俺の家で

やるつなんて言い出した事、忘れてないからな。

「だったらどうして委員長をしないんでしょうね？」

「ある意味、お前の所為だ」

「？」

というか。

紙絵さんも元々決まらないようだったら自分がする、みたいな事を言っただけだが、というよりそこはまあ、彼氏の出来た女の子。

委員長になるとどうしても忙しくなる。

それよりも彼氏とデートなりなんなりして、一緒に過ごしたいだろつ。

紙絵さんはそういう人、だと思っから。

「そんじゃあ、決めていくぜ！ 誰か、やりたい人！」

シーン。

まあ、手が上がるはずも無いよな。

委員長なんてめんどくさい仕事。

「んー。他に手を上げる人が居ないのなら、もう決定だね」

.....ん？

「それじゃあ委員長は嵐君に決定だぜ」

気がつくのと、俺の隣の席の嵐が手を上げていた。

「なら、こつからは俺が仕切るな」

「オツケー」

紙絵さんと入れ替わるようにして、嵐が黒板前の教卓に立つ。

うーん。なんだか妙に不自然だ。

違和感しかねえ。

「それでは、今更だが今年一年、俺がクラスの委員長を務める事となった。副委員長の幸助と一緒に頑張っていくからよろしく頼む」

おい。

今なんだか勝手に副委員長にされたかのような言葉が聞こえたぞ。

「嵐。悪い。聞こえづらかったからもう一度言ってくれないか？」

「副委員長りゅうせき。お前は本当にバカでどうしようも無い奴だな」

「副委員長と書いて『こつすけ』って呼ぶな！俺は副委員長になった覚えはねえぞ！」

「決定事項だ。さつさと座れ副委員長りゅうせき」

駄目だ。このままでは俺の名前が桐山幸助きりやましんすけから桐山副委員長きりやましんすけになっ
てしまいそうなのでここは大人しく引き下がろう。

というか、なんとも今年はメチャクチャな一年になりそうだ。生徒会に勝手に入会されてたり、副委員長に勝手に選ばれてたり。

……俺に決定権や拒否権は無いのか。おい。

「さて、まずは体育祭についての戦略会議を行うー！」

「ん？ そりゃ勿論、体育祭の為だ」

「……………それだけ？」

「勿論。それだけの為だ」

嘘じゃ、無い。

それだけはなんとなく、解る。
しかし。それゆえに。

「嵐」

「なんだ」

「お前、バカだろ」

「……………自分の顔を鏡でよく見てみる」

それはつまり俺の顔がバカって事なのか？ そうなんだな。そう
なんだろう。

そう言われるのはもう慣れたよ畜生がああああああああああ
あああああ！！

「……………それで、どうして体育祭の為なんだ？」

「そうだな。まあとりあえず、バカな副委員長こしやんせにも解るように教え
てやるっか」

ぐあっ！ 副委員長の事は忘れてたのにつ！

「この学園の体育祭は、基本的にはクラス対抗だが、最終的点数換算による順位付けは全ての学年、クラスも含めた物だ。つまり最終的には学年やクラスも関係無く、この学校全体としての点数を競う事が出来る。つまりだ……」

そして、嵐はニヤリと楽しそうに、微笑んだ。

「祭さんと戦える、って事だろ？」

……。

その為だけに、委員長になったのか。このバカは。

「まあ駒の性能はこっちの方が低いが、それは戦術とやらで埋めてやるさ」

今コイツ、思いつきりクラスメイト達を（俺含め）駒扱いしたぞ。しかも性能が低いとか言い出したぞ。

「駒の性能の違いが、戦力の決定的差ではない事を、教えてやる」

「お前の頭の性能の低さは致命的だ！」

色々と！

考え方が！

「でも、なんだか祭さん相手じゃあ勝てる気がしないわよねー」

彩の言う事ももっともだ。

そもそもあの人も委員長だろうし、勝てる気がしない。

つーが無理だろ。
シャアがアムロに勝つぐらい無理だわ。

「あれ？　そういえば紙絵さんは？」

「莉子なら、さっき、風人と一緒に帰った」

と、神戸さん。

あのバカップルめ。憎たらしいぐらい羨まし．．．．．くなんか無いんだからなあああああああああああああああああああああああ！！

「今朝デレデレしながら話してくれたけど、帰りにデートでもしていくんじゃないかしら」

「俺ちよつと出てくるわ」

「．．．．．何処に行くのよ」

「まずは家庭科室から包丁を数本調達してからだなホームセンターに駆け込んでシャベルとビニールシートと丈夫な紐を調達してから．．．．．」

「一体何に使う気なのよ!？」

くそつ。

さすがに紙絵さんに手を出す気は無いが、風人ぐらいなら殺れると思っただけだな。

「さて、競技の確認でもするか」

嵐がごそごそと学生服のポケットの中から一枚の紙を取り出す。これは、体育祭の種目が書かれてある表のような物だ。

第一種目は障害物競走。

第二種目は二人三脚。

第三種目は借り物競争。

第四種目は棒倒し。

第五種目は校内騎馬戦。

心なしか走る種目が多いが、なんでも今年の競技は第五種目以外は全て祭さんがアマダくじで決めたらしい。

そして第五種目のこの校内騎馬戦は少しルールが変わってる。

厳密には、騎馬戦、ではない。

そもそも騎馬を作るのは大将の一騎だけ。これで騎馬戦と称しているのだから笑い種だ。

まずクラスの委員長が一人だけ、鉢巻をつける。

あとは簡単。

他のクラスメイトからその鉢巻を奪い取られればそれで終わりだ。しかもフィールドが校内全てなので、ゆえに。校内騎馬戦と呼ばれる。

この第五種目は伝統の競技らしい。

そしてこの第五種目の競技は全学年、クラス入り乱れての大乱闘だ。

それに嵐と祭さんが大将をする、というのだから一体どうなるの

か解らない。

さて、果たして今年の体育祭はどうなる事やら。

第二話 お前の事が好

「なあ、彩」

「何？」

「どうしてこんな事になったんだろうな？」

「そんな事、こっちが聞きたいんだけど」

まずは現在の周囲の状況を説明しよう。

放課後。

嵐の指示により、俺、彩、龍神、神戸さん、紙絵さん、風人で教室に集まった。

何でも、体育際についての作戦会議があるのかなんとか。

というより、体育際までまだ一ヶ月もあるのに、どうしてこんなに早い段階で集まるのだろうか、と疑問をお抱いたが、とりあえず気にしない事にした。

そして、嵐が教室に入ってくると同時に、俺と彩の手を手錠でがちやりと拘束。

他のメンバーは一気に「さようなら」と言い放ち、教室を出て行った。

俺（と彩）の現在の状況。

放課後の教室で手錠で繋がれたまま二人つきり。

.....

「ありえねえよ！」

「うるさいわね！ もう少し静かにしなさいよ！」

「静かに！？ そんな事を言ってる状況かコレ！？ そもそも『お前等は二人三脚にも出るが何しろ息を合わせられるかどうか不安だからそうしてる』なんてアバウトな説明で拘束とがありえねえだろ！」

^{おまえ}嵐はどれだけ祭さんに勝ちたいんだよ！

つまりアイツの言いたい事はこうだ。

手錠で繋がったままで生活しろ。そうすれば二人三脚で完全に息が合っから。

だ。

「ここまで二人三脚に情熱を注ぐ男子高校生はこの世に嵐以外いねえよ！ しかも情熱を注ぐ所が間違ってるしよおおおおおおおおおお！」

しかも「手錠は何処から持ってきたんだ！」というツツコミをする暇すら無かった。

「………騒いでも仕方が無いでしょ。なんとかしてとりあえずは家に帰りましょう」

「なんだ？ やけに今日は冷静だな」

「そ、そんな事無いわよ！」

「しかも心なしが顔が赤いぞ。熱でも出たか？」

「は、はあっ！？ 別に出てないし！？」

お、おう。

まあ彩が言うんならそうなんだろう。

ていうか、この状況は俺も落ち着かない。

そもそも近いんだよ。彩との距離が。

なんかいい匂いもするし。

最近風呂上りの彩からはシャンプーの匂いがしてドキリ、とする事があるけども、それとはまた別の緊張感だ。

．．．．．女の子、って、こんないい匂いがするんだな。

なんでだろう。

今が手錠でつながれているなんていう異常な状況が無かったら確実にドキドキしてただろう。

マジで。

「それにしても．．．．．あの手錠はどこから調達してきたんだろっな」

「そこ、ツッコむのが遅くない？」

「必殺、時間差ツッコミだ」

正直ツッコむ暇が無かったのは内緒だ。

「ツッコミに時間差は致命的だと思うのだけれど」

「．．．．．その発想は無かった」

いや。本当に。

「．．．．．とにかく、今はこの危機的状況をなんとか脱出しなきゃならねえな」

そもそも二人三脚で手錠を付けられた事なんてバカな話があるか。メチャクチャ過ぎるわ。特に展開が。

「そ、そうね」

彩と同時に立ち上がる。

そして教室の扉へと向かおうとした所で、

「ぐあっ!?!」

「きゃっ!?!」

びたんっ! と、俺も彩もそれぞれ違う方向に歩き出した為に、手錠に引っ張られて教室の床に倒れてしまった。

「あ、彩、大丈夫か!?!」

「う、うん。平気、だけど．．．．．」

今更気がついたが、なぜか足も手錠によって繋がれていた。

手に付ける錠だから手錠なんだぞ! なんて足にも付けるんだよ

!?!

「い、いつの間に付いていたんだ……」

「莉子の仕業ね。多分」

あの忍者ジャーナリストめ！

「多分、紙絵さんが付けたのも嵐の指示だな。嵐が手錠を手につけて気を逸らしている間に本命の足にもがちゃり、という寸法だ」

ていうかさつきまで全く気づかなかつたぞ。スゲエ。

「……と、とにかく、今は教室のドアにたどり着く事が先決だ」

俺と彩はとりあえず、二人でタイミングを合わせて文字通りの二人三脚で教室の一番前の扉へと進んでいく。

「ダメだ。外から鍵をかけられているみたいだ」

その後、なんとか後ろにある扉も確認してみたが、鍵が無理矢理取り外されていて脱出が不可能となっていた。

完全に、詰みだ。

「ありえねえ……」

嵐アイツのやり方が。

「つか出るの二人三脚だけじゃないんだけどな……」

ていうか、全部の競技に出る。

勿論、彩は運動神経が良いので主戦力だ。

この状況からはいつ解放されるのだろうか。さすがに明日までこのまま拘束されたまま、というワケにもいかないだろうが。そんな事になったら俺の理性が保つか解らないからな？
そしてしばらくしてから、

「おーっす」

教室の鍵の壊れていない方の扉から、突如嵐が教室に入ってきた。同時に殺意も俺の中に入ってきた。

「殺sざwえsr d c f v t g b yふnツツツ!!!!!!」

「日本語を話せ。日本語を。最早人の話す言葉じゃなくなってるぞ」
なんも言えねえ。

「良い物を持ってきてやったぞ」
そついう嵐が持っていたのは、一つのスーパーの袋。
中には何かが入っている。

「なんdaそre?」

「まだ若干言葉が荒れてるな」

誰の所為だ。誰の。

そして嵐は袋の中から、ゴソゴソとある物を取り出した。

「テレレツテレー。手錠の鍵」

「殺すッ！..!」

「.....お前、今『殺す』って言ったよな？」

「ちゃんと言ったさ。『よこせ』って。」

「で、どうすればいいの？」

俺とは違って、彩の反応はなかなか冷静だ。

ただまあ、このストレスは後に俺へと向くのだが。

このレベルのストレスだとそうだな。俺に来るのはアッパーカットとドロップキック。それと右フックが二発、って所か。

かなり中身はかなりムカついてそうだし。

「この教室は校舎の四階だったよな？ だから一度一階まで降りてからここまで上がって来い。二往復な」

「ちょっと待て！ 他の生徒に見つかったらどうするつもりだ！」

「だから他の生徒が校舎に入らないような時間まで教室に閉じ込めてたんだろ？。二往復したら解放してやる」

それだけ言って、嵐は教室の扉を開けたまま、出て行ってしまった。

「どうやら本当に二往復するしかないようだ。」

「.....行くか」

「……………そうね」

俺と彩は二人三脚をしながら、たどたどしい足取りで廊下を歩く。既に外は夕日で紅く染まっている。

それにあわせて、隣の彩の顔も紅く染まっていた。

こうして見てみると、やっぱり可愛い顔してるよな。彩って。

ただまあ、中身が少し暴力的なのが少し残念だ。

とかなんとか考えていたら、隣の彩から鳩尾を喰らったので黙ってしよう。

「うーうーふう……………」

「変な声を漏らさないでよ。気持ち悪い」

「一体誰の所為だ！ 誰の！」

横暴だ！

理不尽だ！

そして、しばらく歩いていると、最初はぎこちなかった足の動きも少しずつ、少しずつだがよくなってきた。

途中、階段の所は危なかったが、なんとか彩が転ばないように切り抜ける事が出来た。

最悪、彩が転んでも俺が止めれば良いワケだし。

まあ、その逆のパターンの方がはるかに確率があるので恐いが。

ただ、そうした事は皮肉にも、嵐が強制的に行わせたこの二人三脚の特訓の成果、という事だ。

「ね、ねえ……………」

ようやく二往復目の、四階の廊下。

つまり教室まであと教室を四つ程の間がある所で。

急に彩が立ち止まった。

同時に、転びそうになったが、なんとか踏みとどまる。

「うおっ、と。ど、どうした？」

「あの、こうやってあたしとこんな事するの、って、やっぱり嫌だった？」

「？」

質問の意図がイマイチ読めない。

「い、いいから答えなさいよ」

「うーん。別に？ 俺はまあ気にしてないけどな。むしろ、お前だよかった、みたいな」

「わ、私でよかった？」

「ああ。お前ならまだ息も合わせやすいし、やりやすいし」

「そ、そう。それなら、いいんだけど」

「それにしても、なんで急にそんな事言ったんだよ」

「……別に。さっきからなんか少し不機嫌そうだったから」

「急に手錠かけられたら誰だって不機嫌だろ」

普通は。

「……………そ、そうよねっ!」

「?????」

(よかった……………別に嫌だったワケじゃ、なかつたんだ……………)

なんだか彩がほっ、とその大きな胸をなでおろしているようだが……………本当に一体、なんだったんだろっ。

「それじゃあ、さっさと終わらせるわよっ!」

「なっ!?! ち、ちよっと待っ……………!」

しまった、と思った時にはもう遅かった。

そもそも、俺がぼーっと考え事をして、そして彩が急なタイミングで進もうとしたからだろう。

俺と彩の片足を拘束している手錠(この場合は『足錠』と化しているが)に俺の足が引っ張られて、必然的にバランスが崩れてしまった。

グラリ、と。

倒れる

「……………ッ!」

体勢をなんとか倒れる途中で調整し、なんとか彩は廊下の床に倒

れる、という事はなくなった。

そして俺はというと、彩の体をかばうために、彩の真下に倒れた。平たく言うと、俺は彩を片手で抱きかかえるようにして床に倒れた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ダメだ。体が熱い。あとなんか顔も熱い。

「・・・・・・・・だ、ただだ、大丈夫か？」

「・・・・・・・・う、ん・・・・・・・・」

なんだこの緊張感。

ああ、しかもなんか柔らかい二つの大きなカタマリが体に当たってる。

この事については考えてはダメだ。

考えるな。考えるな。考えるな。考えるな。考えるな。考えるな。

考えるな。考えるな。考えるな。考えるな。考えるな。考えるな。

考えるな。考えるな。考えるな。

考えたら全てが終るぞ。特に俺の理性が終っちゃうぞ。

「考えるな。考えるな。考えるな。考えるな。考えるな・・・・・・・・」

「な、何ブツブツ言ってるのよ・・・・・・・・」

「りりり、理性を保ってるんだよ」

「保ててないじゃない……………」

「もつともだ。」

そ、そうだ。さつさと彩の体を起さなきゃ

「待って」

俺の手を、彩がそつ、と遮る。

……………えっ？

「もうちょっとだけ、このままで、いさせて……………」

ベタなセリフ程、その破壊力は高い。

ていうかどうしたんですか彩さん ! いつものキャラじ

やないですよね! ? いつもならここら辺で既に制裁の二つや二つは入ってますよねえええええええ! ?

「……………それは、その……………」

「だ、だめ?」

やめるその上目遣いッッッ!!

ていうかアレだ。

やっぱりいい匂いがする。しかもさつきよりなまじ距離が近い分、さらにいい匂いがする。

……………女の子の体って、その、柔らかいんだな。うん。

手錠の方の手もなんだかんだで繋いでしまっている。

．．．．．これは理性どつこのじやないんじや、ないかな？

「あ、彩．．．．．」

「な、何？」

この時。

なぜか先日、風人が行った『告白』という単語が頭に浮かぶ。

告白。

まさか今が．．．．．人生最大の好機？

「お、俺．．．．．」

「．．．．．」

「お前の事が好」

きだ。

「何やってるんだ？」

「．．．．．ッ！！」

気がつく。

俺の目の前に、俺を見下ろすように嵐が立っていた。

「あ、らし？」

「いつまで経っても戻ってこないと思ったら、まさか廊下でイチャイチャしてたとはな」

「待て待て待て！ 違う！ これは事故だ！」

「そそそ、そうよ！ そうよ！」

「あつそ。ほら、鍵」

嵐がぼいっ、と投げた鍵をなんとかキャッチして、手錠を外す。
これで完全に自由の身だ。

「.....」

「.....」

ダメだ。彩と目をあわせられない。

「さて、これで今日は終わり。明日はまた別の事するから。じゃあな」

まさにその名前の通り、嵐のように去っていった。

下校中。

やはり、まだ顔を合わせられない。
でも家も一緒なんだよな。

この状態でどうやってこれから過こそうそう……。

「ね、ねえ」

「お、おう」

突然、彩の方から話しかけてきた。

「正直、嬉しかったんじゃない？」

「……はい？」

「だってこんな可愛い女の子の体に触れたんだから。本来ならお断りよ？ 体全体が触れる、なんて」

「可愛くねえっ！」

自分で言うか普通！？

いや、まあ嬉しかったのは本当です。はい。

「だから」

すつ、と、彩が自分の右手を差し出してきた。

「今は、手だけなら許してあげる」

「……」

不意打ちだ。畜生。

やっぱり可愛いじゃねえか。

「そつだな」

俺は彩の差し出してくる手に、そつ、と手を繋ぐ。

手はやっぱりあの時のように柔らかくて、綺麗だった。

そのまま俺は、手を繋いだまま、彩と一緒に家に帰った。

第二話 お前の事が好

(後書き)

なぜか恋愛パートは長文になる法則。

第三話 パパ&ママ

「体育際？」

「うん。一カ月後ぐらいにあるみたい」

「いやあー。楽しみだなあ。あの学園の体育際ってかなり面白いし」

直は中学校での昼休み。

友人の齊藤明子さいとうあきこと共に昼食をとっていた。机の上にはパンと弁当箱が並んでいる。勿論、直の方は弁当だ。

「そうなんだ。去年はどうだったの？」

「あれ？ 嵐さんと一緒に行ったんじゃないの？」

去年というと、嵐達は三年生。つまり受験生だ。高校受験を控えているので、進学する為の学校選びを行う必要があるのだ。

よって、進学を希望する為の学園候補として見学もかねて、体育際に見学に来てもおかしくはないのだ。

「えーっと。確か『別に合格が決まっている学園の見学なんか必要ねえな』とか言ってたような」

「うわ。凄い自信。あの学園って、確か物凄い倍率だったよね？」

「うん。でも頭良かったから」

「キャラと頭の中があまり合っていないよね。あの人」

「あはは．．．．．」

直でもそれは思う時があるので（慣れてはきたが）少し苦笑いする。

「それにしても．．．．．よくまあ、幸助先輩って合格出来たよね」

「ああー。確かに」

「正直、私は出来るとは思わなかったなあ」

あはは、と笑う明子。

「くしゅんっ」

「？ どうしたの」

「．．．．．いや。なんか今、物凄く後輩にバカにされたような気がする」

「気のせいでしょう。さっさと帰るわよ」

「だ、だめだよ。そんな事言っちゃあ」

「ごめんごめん。で、話って?」

「あ、いや。よかつたら一緒に体育際見に行かない? って誘おうと.....」

「行く行く行くっ! 超行きたいっ! いやあ。あの学園の体育際さあ、人気が高くて招待券とかがないと入れないんだよね」

その招待券も勿論直は嵐から貰っていたのだが、この招待券は二人までなら一枚で入場出来る物だ。イベント性の高い体育際の為に、その人気もかなりあるので、こういった招待券が作られたのだ。

「さすが持つべきものはツインテールの友達だねっ!」

「ツインテール関係ないでしょっ!??」

大変な事が起こった。

というより、ありえない事が起こった。

学園側の事情により、俺達は午前で授業が終ってしまったので、普段ならば昼食をとっている時間だが、俺達は帰宅していた。

「これは.....ありえないッ.....!!」

「た、たしかに.....」

場所は俺の玄関。

今現在、俺は彩と共に帰宅した所だ。

そして俺の目の前、というよりも玄関には、靴が二足。

一応説明しておく、俺達は玄関に無駄な靴を出さないようにしている。学園に登校する時も朝、ちゃんと靴を閉まっている。よって、学園から帰ってきた家には基本的に靴があるわけではないのだ。

そして、ここは我が桐山家だ。

玄関には靴が二足。

これが意味するのは、

「まさか……あの両親が……帰ってきたのか!？」

因みに俺の親はどちらも現在三十六歳。ラブラブだ。腹が立つぐらいに。

いつもはボランティアばかりして世界中を放浪しているクセに、なんで、どうしてこのタイミングで帰ってきたのか。

「パパ。紅茶を淹れたわよ。」

「おっ。やった。ママの紅茶は世界で一番美味しいからなあ。」

「もうっ。パパったら。」

「……うわあ。死ねばいいのに。」

ワリとマジで。

あーあ。誰かこのバカップルを止めてくれないかな。

「い、行った方がいいんじゃない?」

「いやだ。行きたくない。俺はあんな耳も塞ぎたくないようなあまあまな空間に飛び込みたくない。死にたくない。」

早々あまあまな会話をかもしだしてるんじゃないねえ！ 全身の血液が逆流するかと思っただわ！」

「はっはっはっ。まあそう焦るな焦るな。ほら、紅茶でも飲め」

「飲むかつ！」

「何を怒っているんだ？」

「.....」

じ、自覚してねえ.....。

あれだけ鬱陶しい会話をしていたクセに、自覚がねえ.....

！

こういう無自覚なバカップルはかなりやっかいだ。

何しろ自覚しないままに所かまわずイチャイチャしたすのだから。

俺が証人な。

「あら彩ちゃん。いらっしやい」

「えっ、あ、その.....」

「いいのよ。彩ちゃんは幸助の幼馴染なんだから。入って入って」

「は、はあ。お邪魔、します」

どうやら玄関でどうしようかと突っ立っている彩が見つかったらしい。

さて、こうなったらこのバカップルは一体何をしに帰ってきたのか、問いただしてやるうじやないか。

「で、なんで戻ってきたんだバカップル」

「おいおい。バカップルは無いだろう？ 我が息子よ。お前達の学園の体育際を見に来たんじゃないか」

しれつ、とした調子で言う父さん。

「体育際を．．．．見に来た？」

「勿論さ。今まで一応はお前のそういう行事は見に来たじゃないか。運動会しかり、文化祭しかり、音楽会しかり。その他諸々」

ああ。そういうえば今思い出すとそうだな。

なんだかんだで来てたような気がする。

ただ、人の前でイチャイチャするのは止めて欲しかった。

「それにパパとママにとっては思い出深い学園だしねー。ママ」

「そうよねー」

「「ねー」」

ダメだ。

聞くに堪えない。

いや、ここは耐えよう。

「思い出深い？」

「ああ。そうさ。だってあの学園でパパとママは出あったんだぜ？」

「……………ああそういえばそういう設定だったな。」

「あれ？ 言っていなかったっけ？」

「言っていねえよ！……………そもそも、そんな話をする時間すら、無かったじゃねえか」

実は知っていて、一応は皮肉をこめたつもりだったのだが、どうやらこのバカップルには全く効いていないようだ。

「そっちなあ……………パパとママが出会ったのは、確かあの頃……………」

「効いてねえっ!？」

そしてなにやら勝手に過去編に突入してしまった。

第四話 パパとママの出会い

さて、これから嫌々ながらも、俺の両親の事を突然だが、語ろうと思う。

いきなり本編を無視しての過去編だが、俺の両親が無理矢理語らせてくるので、我慢していただきたい。

俺の両親、桐山幸一と、桐山綾子が出会ったのは、高校二年生の秋だったそうだ。いや、まだ結婚はしてなかったのでその時俺の母親、桐山綾子は音咲綾子という名前だった。

その出会いは、たいそう甘い（笑）物だったのかどうかと言われれば、そうでは無かったらしい。

まあ、この辺りから語っていきこう。

俺の父、桐山幸一は学園のいわゆる悪ガキ的な存在だったらしい。無茶な事を繰り返しては先生から指導を受けて、そしてまた懲りずに無茶を繰り返していたらしい。この点はまさに、反省しない問題児、といった所だろうか。そもそも、指導をしっかりと聞いていないからだったのだろう（因みに俺はちゃんと指導を聞いている）。そしてその日も、何やら悪事（本人に言わせれば人助けらしい）を働かして、そしてその後、しっかりとみっちり先生からの指導を受けて、ようやく解放された時の放課後。

俺の父と母は出会った。

「桐山君」

「ん？」

放課後の、夕日の差した廊下。

二人は、廊下で、出会った。

当時、二年生ながらにして生徒会長だったのは俺の母で、クラスは違いながらも生徒会長としての義務がそうでないのか、父の方の動向は気にかけていたようだ。

勿論、この時は恋心どうのこうのは無かったらしい。我が母いわく、「今では考えられないわ〜」なんて言っている。正直イラツときた。

「また、先生に指導されたの？」

「誰？」

当時我が父は、正直全く母の事を知らなかったらしい。父いわく、「今では信じられないな〜」らしい。アホか。さて、話を戻そう。

「せ、生徒会長の音咲綾子です」

「セイトカイチヨウ？」

「なんでカタカナ言葉なの．．．．．っていうか、生徒会長って言葉ぐらい知ってるでしょ！？ 普通！？」

「ああー。そんな物がいたな、確か。火星辺りに」

「人を火星人が何かと間違えてない！？」

当時の我が父なら間違えていただろう。多分。

めた。

話を聞いてみると、この時の我が母の気迫はそれはもう凄まじかったという。「あの頃のママは恐かったけど可愛かったなあ〜」「もうっ。パパったら」「死んでしまえバカップル。」

「そうじゃなくて！ 私の質問に答えてよ！」

「質問？」

「……………もういい。もう一度質問するから……………桐山君。また先生に指導されたの？」

「おっっ！」

「そんなに元気に答えられても……………」

バカだ。相変わらず我が父はバカだ。

もうバカ過ぎて語ってやってるこっちが恥ずかしいわ！

……………さて、こうやってツッコんでいてもキリがないのでそろそろ話を戻そう。

「……………今度は一体何をしたの？」

「放課後の補習をサボった」

「えっ。それはダメだよ。先生だって時間を作ってくださいってるんだから……………」

「十回程」

「十回！？ そりゃ指導も受けるよ！ どうしてそんなにサボったりしたの！？」

「さあ」

「さあ、って……」

これが、この二人の最初の出会いだったそうだった。つまりファーストコンタクト。

なんとも今のラブラブっぷりからすればいかにも考えられない事だろう。

しかし、この出会いをきっかけに二人はそれ以降、ちよくちよく話し合うような仲となっていた。主に先生に指導された幸一を、後から綾子が説教する、という仲だが。

そしてそんな仲が近づいたある日。

俺達と同じように、体育際の季節がやってきた。

生徒会長である綾子は当然、体育際の準備に明け暮れており、そして幸一はそうでもなかったようで、イラッ、ときた綾子が無理矢理、幸一を体育際の準備に連れ出したそうだった。

この頃には既に、互いに下の名前で呼び合う仲にまではなっていたそうだった。

そして、綾子は生徒会長であり、当時の学園でのアイドル的存在であり、その隣に立つために幾多の男が努力を重ね、影で散っている中、突如、そして急に現れた幸一がその隣に立ちはじめたそれはもう嫉妬の視線が集中していたという。「ママは美人さんだったからなあ」。今も昔も「あーやだ。パパったら。もう」。黙れ。バカップル。

げふんげふん。話を戻そう。

そして迎えた体育際当日。

この頃には友達を通り越した関係が芽生え始めていた。

まあ、この日が、二人の言う、運命の日、だったらしい。

その運命を作り出した競技が、借り物競争。

幸一の居るクラス、一年四組の借り物競争のアンカー、幸一に当たった借り物のお題の内容は、

大切な人。

だったらしい。

そしてそのお題を見るや否や、すぐさま幸一は綾子の居る一年三組の陣地へと突入。

呆然と、そしてあたふたと、目の前の展開についていけない綾子をお姫様だっこして一気に駆け抜け、ゴール。

見事、借り物競争で一年四組が一位となった。

そしてそれは同時に、二人のカップル成立のゴールと言っても過言ではなかった。

後から知った事らしいが、幸一のお題は、綾子のファンである男子が仕掛けた物で、綾子を選ばない事を願っていたらしい。そして選ばなかった場合に、色々とかかしようと画策していたらしいが、皮肉にも、そのお題が二人を結び付けてしまった、というワケだ。

「じ、幸一、くん」

「お、おう」

体育際後の帰り道。

二人はドキドキしながら会話したという。

……まあ、そりゃあんな事をしてしまえば、な。

「あ、あのっ、ききき、今日の事、なんだけど、そそそ、その、あれって……………」

「そ、そうだよ。俺は、お前の事を大切な人だって、思ってる」

「そ、それって……………」

「あ、綾子!!」

ビクッ、として幸一の方を見つめる、綾子。

「俺は、お前の事が、好きだ!!」

何のひねりもない、ストレートな告白。

それだけで、綾子はもう完全に落ちたという。

「幸一さん、ったら、あんな大声を出して。恥ずかしかったんだから。もうっ」

「今思えば、我ながらとてつもない事をしたなあ〜うん」

「それにあの補習をサボったのも、近所の小さな子供達の面倒を見てたんでしたっけ。親の都合でしばらく家に子供達だけだから、っ
て」

「そんな事あったっけな〜」

「もうっ。とぼけちゃって」

「はっはっはっ」

「……………もういいや。好きにしてくれ」

昔からそうだが、こうしてこの両親バカップルのでれとした会話を聞いていると耳が溶けてきそうだ。

俺は彩と連れて、とりあえず二階に上がる事にした。

……………それにしても、近所の小さな子供達の面倒を見るのだったら、自分の息子の面倒も見て欲しい物だ。いや、『だった』。今はもう、それほどそうとは思わない。

なぜなら、俺の両親はそういう人達だと、俺はもう解っているからだ。

それを、それぐらいを理解するぐらいには、俺はもう成長しているつもりだ。

本当に俺の両親はどうしようもないバカップルだけでも、だけどそれと同時にどうしようもない人助けバカだという事を、俺は知っている。

今でも時々、というよりも毎日、両親助けられたと思われる人達からの手紙等がポスト一杯に届いてくる。何処かの子供達からの感謝の手紙や、子供達が一生懸命に作ってくれたと思われる様々な折り紙で作った鶴等の作品も、届いてくる。

小さい頃は時々、両親は俺の事なんかどうでもいいんだ、って思っていた。

だけど、誕生日はいつも俺や参観日、運動会等の行事はいつも一緒に過ごしてくれた。

確かに普通の親にしてみれば放任主義すぎるだろうが、俺はそれでもいいと思っっている。

ボランティアー人助けに世界中を駆け巡る両親バカップル。

自分達の大切な物を守り続けている両親バカップル。

俺はそんな、俺の両親を誇らしく思う。

「本当に、あの頃のパパはとても輝いていたわ」

「ママこそ、綺麗すぎるぐらいだったぞ」

「……もう少し自重してくれば、俺ももう少し素直になれるだろうが。」

それに。

「？ な、何見てるのよ」

「いや。なんか、子供の頃の事を少し、思い出してな」

俺にも、大切な物があるから、だから、それを守りたいという気持ちは、なんとなく解るような気がする。

そしてその守りたいと思う気持ちは、俺は子供の頃からなんら、変わらない。

俺の両親バカッブルの過去編を語ったついでに俺と彩の過去編も語ろうとは思ったが、しかし今回は一応見送ろうと思う。

それを語るには少し俺にも心の整理が必要だと思っから。

だからそれはまた、別の機会に語ろうと、思う。

第五話 同盟

「嵐」

「なんだ」

「一体何処に向かっているんだ？」

俺と嵐は現在、放課後の帰り道を二人で歩いている。因みに彩には先に帰ってもらった。なにしろ嵐のする事だ。^{コイツ}

めんどろな事だろうと思われたからだ。

そして、つい二、三行前に「放課後の帰り道」という表現をしたが、これは、厳密に言えば、違う。何しろ俺達は自分達の家に向かっている（嵐の場合は直ちゃんの家だが。羨ましい事この上ないぜ畜生）。

むしろそれとは逆方向。

「何処も何も、お前もよく知っている家だ。夏休みによく行っただろっ？」

夏休み、といえは、まさかとは思つが……………。

「こじだ」

「……………おお」

俺と嵐の目の前には豪邸、もとい、祭さんの家、だった。今の俺達の状況からすると「敵大将の自宅」なのだが。

……………なんでコイツこんな所来てんの？ それは俺にも言

える事だけど。

「何？ お前祭さんに頭でも下げに来たの？」

これには精一杯の皮肉をこめたつもりだったのだが、

「ああ。まあ平たく言えばそうだな」

と、なんともあっさりとスルーされてしまった。

やはり俺ごときの皮肉ではどうもしないか。

「おいおい。結局降参かよ。あの時の『祭さんと戦える、って事だろ？』(キリッ)『はどこに行ったんだ？』」

「.....(ゴスッ)」

「うぐふうおう.....」

入った。鳩尾に。

しかも嵐の足のつま先がモロに。

「俺、何か間違いを言ったか？」

「言った。俺は確かに頭を下げに来たが、別に降参するワケじゃあ、無い。それに(キリッ)とか勝手につけん。明らかな事実の捏造だ」

「どづいつ事だよ.....?」

「行けば、解るぞ」

それだけ言うと、嵐はそのまま屋敷の庭へと足を踏み入れた。通いなれてきたこの庭（というよりも門から家までの庭だが）も、やはりこの広さにはまだ慣れない。

それにしても、一体嵐は何の用があるというのだ。

ここは言うなれば敵の本拠地なのだ。

嵐がインターホンを押すと、すぐに明さんが出てきた。

「すみませーん。祭さんに用があつてきたんですけど」

「あ、はい。少々お待ちください」

トタトタ、と、明さんが祭さんの元へと駆けていく足音がインターホンから聞こえてくる。祭さんは近くに居たようで、その足音もすぐに止んだ。

『ま、祭さん、嵐さんと幸助さんがいらっしやいましたよ？』

これは、明さんの声だろう。

インターホンを通じて声が聞こえてくる。

『んー。解った。ちょっと待っていてくれ。今ガンダムアストレイブルーフレームセカンドLを塗装している所なんだ。もう少しでタクトイカルアームズの色が完璧に塗れそうなんだ』

『あ、あのっ！ 二人とももう外で待ってますから！』

あの人の中での優先順位はどうやら、

ガンブラの塗装>>>>越えられない壁>>>>俺達のよ
うだ。

『待つて！ あと少しだけ！』

『だ、ダメです！』

頑張れ明さん！ 祭さんの『あと少しだけ』は結構長いって、この夏休みで嫌という程思い知ったから！

『ちよっ！ タンマ！ すぐ終わらせるから！』

どうやら明さんが優勢のようだ。

これなら結構すぐに祭さんも出てくれハズだろう。

『だからその頭上に振り上げている消火器を下ろしてくれ！』

.....あれ？ 明さんは一体何をしてるんだ？

『全く。早くしてください』

『うっ。明。お願いだ。頼むっ！』

甘いぜ祭さん。こんな事で仮にも立派な巨乳美少女メイドである明さんが揺らぐと思ってるのか？ そんな事はないぜ？

『.....はっ。可愛い.....ま、負けました。まったく。それじゃあ、すぐにしてくださいね？』

っつおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおい!?

『あ、あのう……』

少ししてから、申し訳無さそうな声をした明さんの声が、インタホンの向こう側から聞こえてきた。

どうやらさっきの会話が筒抜けである事を知らないようだ。

『祭さんは、そのつ、すつつつごく、大事な用があるので、少しだけ、中で待っててもらえませんか?』

ツッコんでやると、明さんが不憫なのでこのまま俺達は大人しく従い、中で待つ事にした。結局、祭さんが俺達の前に姿を現したのは、その一時間半後の事だった。

「いやあ〜。大事な用があつて遅れた遅れた」

「嘘つけ!」

明さんにこんな事を言うわけにもいかないのです、思いっきり俺達は祭さんに叫んでやった。

「で、用ってなんだ?」

スルーかよ。

「……まあ、今日は祭さんに提案があつてきた」

嵐が少し出ばなをくじかれたようにして、話題を切り出した。
今の状況的には、完全に祭さんのペースだ（本人はガンプラを塗装してただけだが）。

「提案？」

祭さんがキラリ、と目を光らせて、面白そうに嵐の方を見た。
ていうか、祭さん。人と話をする時はちゃんと手に持っている塗
装用のマーカーなりなんなりを閉まってください。あと、せめて顔
を洗ってください。顔が塗装の後でチラホラと色んな色がついてま
す。

携帯を片手でいじるのも止めてください。

「そうです。体育際についての提案です」

「そりゃ面白そうだ。話を聞かせてくれよ」

「はい。第五種目の校内騎馬戦についてですが、同盟を結びませ
んか？」

「同盟？」

「ど、同盟？」

祭さんが声を上げると、俺が驚きの声をあげるのとは同時だっ
た。

以前と、祭さんの手は携帯をいじるのに夢中となっている。
ちゃんと聞いているのか。この人は。

「ああ。全学年、クラスが一斉に行うのは第五種目だけだったな。

確か。だから同盟か」

「はい。残りクラスが俺と祭さんのクラスだけになるまでは同盟を
組みませんか」

なるほど。

嵐が言っていた、頭は下げるが降参はしない、という事はこうい
う事だったのか。

確かに、校内騎馬戦は複数のクラスを全て敵にまわすとやっかい
だ。

物量、数の差で一気に決められてしまう。

これは紙絵さん情報なのだが、競技中の最初の方の立ち回りで手
ごわいクラスを見つけてから、各クラスで密かに同盟を結び、一気
にその手ごわいクラスを集中的に潰す、という作戦らしい。

しかし、それはあくまでも、競技中に結ばれる同盟だ。

そしてその同盟も、『手ごわいクラス』が無ければ成立しない。

だがしかし、その『手ごわいクラス』が祭さんのクラスになる事
は最早解りきっている事だ。何しろ去年の優勝クラスは、祭さんの
率いたクラスだったそうだからだ（これも紙絵さん情報）。

そして、競技が始まる前に同盟を結び、そして競技開始直後に一
気に攻め込めば？ これならば、後は最初のスタートさえ上手くい
けば、一気に他のクラスを潰せる。

「……………なるほど、ね。良いぜ」

同意を得られた、という事は同盟成立か。これで第五種目は少し
安心できるだろう。

「ただし」

ピツ、と祭さんが人差し指を上げる。

「裏切った場合のペナルティを儲けたい」

「はい。解っています」

ペナルティ、か。

確かに。口約束だけでは、ペナルティなり紙面上でなりそういう事を儲けておかなければ不安だろう。

「裏切った場合、裏切った方のクラスの生徒を半分、自軍のクラスとして参加させない事」

それはつまり、戦力半減を意味する。

騎馬を作る人数の事も考えれば、これはかなり手痛い。

「裏切りの判定は、そうだな。自軍の生徒が同盟を結んだクラスの生徒を攻撃した場合、にするか。そして、裏切った場合に除外させる生徒も記入しておこう。ついでに、詳しいルールも書いておくか」

そして祭さんと嵐はスラスラと手近な紙に同盟について書き込んでいく。

これで、同盟が成立した、という事か。

「よし、この会話は録音してるからな」

カチツ、と祭さんの携帯から電子音声が鳴り響いた。

ああ、携帯をいじっていたのはそういう事だったのか。

その後、俺と嵐は祭さんの家を後にした。

「同盟、か。まさかこんな事考えてたなんてな。倒そうとする相手とあえて手を組む、か」

「まあな」

「それにしても、とりあえずはゼツタイに裏切れないよな。ペナルティがあるし」

まあそのペナルティも、最後に俺達と祭さんのクラスだけが残った場合に破棄されるが。

「はあ？ 何言ってるんだ？ 裏切るに決まっているだろ？」

「はあああああ！？」

何言ってるのこイツ！？

「そもそも、例え最後に残ったとしても、真つ向勝負じゃあ、俺達は二年には勝てない。体格差違う」

「だ、だったらどうするんだよ」

そして嵐は俺の方をじつ、と見据えて、

「いいか？ 幸助。この同盟はな、『裏切ってはいけない』、のではなくて、『いつ、どのようにして裏切るのか』、が問題なんだよ。

どうにか同盟を結んでいる内に、相手がうかつに裏切れない内に俺達が裏切れなきゃ、俺達は祭さんのクラスには勝てない」

「……考えてみればそうだよな。」

確かに、例え最後に俺達一年のクラスと、祭さん達二年のクラスが残っても、明らかに体格差が違うので、負ける。

だから、隙を見て、裏切って、そして、倒さなきゃいけない。

「って、それじゃあ後の事はどうするんだよ？ 裏切れば同盟で戦力半分だぜ？」

「は？ あれはどちらのクラスも生きている場合だろ？ だから、相手が脱落してしまえば同盟もクソもねえよ」

「うわあ……」。

「ま、とりあえず、その事は向こうも読んでるだろうし、こりゃ他にも対策を練らないとな。だが、作戦の第一段階はとりあえずは成功だが」

嵐の打倒、祭さん計画の第一歩がこの同盟というワケか。

果たして上手くいくのか？

第六話 役割

祭さんの所属するクラス、二年四組との同盟が正式に決まり、そしてそれが我が一年四組のクラスメイトにも正式に発表されたのは、あれから二日後の事だった。

そしてここからが、本当の体育際の、準備が始まる。

「ここからは情報戦だ」

放課後の、クラスメイト全員が集まる教室。そこで、嵐が皆に同盟についての正式発表を行った直後に、そういった。

「俺達はなんとか祭さんのクラスとの同盟を結ぶ事に成功はしたが、しかし他のクラスもなんらかの策を練ってくるハズだ。何しろ今回の優勝商品が優勝商品だからな」

クラスメイト達がゴクリ、と喉をならす。

そう。もう既に、体育際の優勝商品は決定している。

それが発表されたのは、今朝だった。

『おはよう！ 俺の愛する学園の生徒達よ！ 今日重大発表をしにきたぜ！』

相変わらずのテンションで、放送のスピーカーから祭さんの声が響いてきた。

『体育際の優勝商品が決まった！ それはコイツだ！』

祭さんが言うや否や、ブツッ、と突然各教室に設置されているTVが点いた。そして画面に表示されたのが、

体育際の優勝商品 副生徒会長のグラビア写真集

「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおっ！！！！」「」

．．．．．マジかああああああああ！！

『優勝商品はなんと！ 副生徒会長、如月明のお宝グラビア写真集だ！』

『きゃあああああああああああああああああああ
』！』

スピーカーの向こうから、明さんの悲鳴が聞こえてきた。多分、今頃は顔が真っ赤になっている事だろう。

それにしても、これは学園史上、最大の優勝商品じゃないだろうか。

男子共のテンションも感極まっている。

何しろ明さんは美人な上にあれだ。胸がデカイからな。

男子共にとってはまさに一生のお宝となるであろう。

『ままま、まっってください！ 私、そんなの撮ってません！』

『さらにここでしか見られない、あんなポーズや、こんなポーズ、
も撮影予定だ!』

『予定!? 今後撮るんですか!? しかも、あんなポーズやこんな
ポーズ!? だだだ、ダメです! ゼツタイ、だめええええええ
ええ!』

直後、ゴツ! ドガツ! という物音が聞こえた後、祭さんの声
がよつやく聞こえてきた。

『……………がふっ。げふっ……………し、写、真……………
集……………と、いうの、は冗談、で……………』

あれ? なぜだろう。心なしか重症のような感じがする。

『本当は……………十一月行わ、れる……………文、化祭……………
……………の……………クラ、ス予……………算の増額、百万円を……………
……………がくっ』

ブツツ、とそのまま放送は途切れてしまった。

まあつまりまとめると、非常に残念な事に明さんのグラビア写真
集ではなくて(あれ? 彩になぜか睨まれてる)、十一月行われる、
文化祭のクラス予算の増額、という事か。

確かに明さんのグラビア写真集は非常に、まことに残念だが(な
ぜか彩に弁慶の泣き所を思いっきり蹴られた。超痛い)、文化祭の
クラス予算の増額は嬉しい。

なぜならそれで文化祭で色々な事が出来るし、なにより出来る事
の幅は広がる上に、予算を気にしなくていい。

それになにより、売り上げや余った分はクラスで分ける事が出来

るのだ。

しかも百万円だしな！

と、いうワケで、朝から学校全体のテンションは、高い、という事だ。

「さて、それで、今後の対策だが、まずは他クラスの情報収集から始めよう。ライバルの動向は探っておきたいからな。バカップル！」

因みにこの場合のバカップルとは紙絵さんと風人の事だ（俺の両親の事ではない。俺の両親は両親だ^{バカップル}）。

最近は昼になると一緒にご飯を食べて、あ〜んまでやってるらしい。

羨ましい事この上ないぞ。

つーかそんなキャラじゃねえだろ！ お前等！

「ほ〜い」

「はい。なんででしょう？」

通じてるよ。

しかもバカップルでいいのか。バカップル。

「お前等は学園全体のクラスの情報収集だ。頼んだ」

「おっけー まかせといて」

「はい。解りました」

紙絵さんの情報収集能力は知つての通りとして、風人はその人柄か、それなりに情報収集は行いやすい。

まさに情報収集コンビ。いや、カップルか。

「そして龍神」

「ん？」

「お前と神戸は競技の対策案を練ってくれ。俺も出来る限り参加する」

「解つた（なぜ、愛ちゃんと一緒なんだろう？）」

「わかつた（りゅーじんと一緒．．．．．嬉しい）」

龍神が図書室に通っているので、自然と神戸さんも最早図書室の常連だ。これは図書館コンビか。

この学園の競技はもはや伝統となりつつある。

今までいくつかの競技が存在したが、毎年その中から四つだけ、選び、決めなければならぬ（ただ、祭さんはアミダで決めだが、こんなにもアツサリとしてよいのだろうか？）。

その競技の記録は、この学園の図書室に保管されている。

それを調べ、対策を練るのが仕事だろう。

ただ、それを知っているのはあまり居ない。少し調べれば誰でも解る情報だが、しかしそうして調べようとする物は少ない。

俺だつて嵐から聞いた情報なのだ。

「そして幸助」

「お、おう」

来た。

嵐の事だ。

きつとロクでもない事を押し付けてくるに違いない。

「お前は偵察だ」

「偵察？ 他クラスののか？」

「そうだ。他クラスの情報、というよりおおまかな動きを見て欲しい」

うわあ。これってなんだかんだで危険なんじゃないか？

体育際が近いせいか、他クラス間とは少しばかりギスギスとした関係となっているし。

「いや、偵察、とはまあ最初の仕事だな。お前は俺の判断で常時臨機応変に動いてもらう。まあ、言うなれば駒だな」

「嫌な言い方だなあ！」

「平たく言うなら捨て駒だ」

「捨てるな！」

「さて、みんな聞いてくれ」

「無視すんなや！」

本当に嵐は俺をなんだと思っているのだろう。
言っておくが、俺は一応副委員長だからな？

「動くのは少数の方がいい。あまりクラス全体で動くと怪しまれるからな。後は、みんなは体作りなりなんなりして頑張ってくれ。文化祭の増加予算百万円は、俺達が貰うっ！！」

こうして、それぞれの役割を与えられたまま、解散となった。

「幸助。早速動いてもらっぞ」

「さっそくかよ……………」

一体何をするんだ。

「まずは、さっきも言った通りの偵察だ。尾行と言ってもいい」

「尾行？」

「そうだ。いくら祭さんのクラスと同盟を結んでいるといっても（裏切る予定だが）、まずは他のクラスを倒さないと話にならない。そこでまずは同じ一年の最も強敵とされるクラス、一組の委員長、おおたたいせい太田大成の尾行を行ってもらっ」

「ええー……………」

太田大成、というヤツは知ってる。

確か、サッカー部の期待の新人だったはずだ。

最近はなぜか図書館通いをしているとの噂だ。

「なんなら天音もつけるぞ。これなら『二人つきり』だ」

「いや、そういう問題じゃなくてだな」

「それじゃ、行ってくるわね」

「って彩！？　なんで!?!」

じゃあな、と手を振る嵐を睨みつけながら、俺は彩にずるずると引っぱられて行った。

なんか、嵐の策にはまったような気がする（なんの策かは解らないが）。

いや、そもそもはまったのって俺じゃなくね？

図書室に来てみると、放課後とあって既に人が何人か居た。その中には、太田も居た。

「あら。宝探しの時の一年生じゃない。今日は二人？」

俺と彩が図書室に入ると、カウンターをしていた図書委員長、めがさ書葉子先輩しんじに声をかけられた。因みに、初書先輩は二年生だ。初

「あつ。初書先輩。こんにちは」

「こんにちは。珍しいわね。あなた達が図書室なんて」

「まあちよつとした調べ物がありました」

あながち嘘ではない。

太田を調べに来ただけなのだから。

「そう。それじゃ、頑張つてその調べ物をしてね」

「はい」

それだけ言うと、俺と彩は太田の席の真後ろの席へと移ろうとした。

その時、

「ねえ、ちよつと」

「どうした、彩？」

「あれ……」

彩がそう言って指し示した先に居たのは、太田だった。

いや、それだけではない。

なぜか太田は、俺の方をじつ、と見つめていたのだ。

「……」

俺達が太田を偵察しに来たのが、バレた？ いや、そんなハズはない。何しろ俺だつてついさっき聞いたばかりの事だし、それに俺と太田は面識が無い。

図書室に入ってから俺がした事といえば、せいぜい初書先輩と話していた事ぐらいだろうか。

その後俺達は適当な本を手に取り、太田の席の真後ろに座り、偵察を開始した。

ふと疑問に思ったのだが、・・・・・・・・これは本当に体育際、関係あるか？

第七話 尾行

図書室で太田を見張る事約一時間。

席を五冊の本を持ったまま立ち上がった。そして持った本の内三冊を本棚に戻すと、その後、二冊の本を抱えて、図書室のカウンタ―へと向かい、本を借り、少し初書先輩と談笑した後、図書室を後にした。

俺は、既に図書室に待機して調べ物をしていた龍神と神戸さんにチラリと目配せをし、同じく図書室を後にした。

ただ、彩には太田が読んでいた本と、借りていった本を調べてくるように頼んだので、尾行は俺一人だ。

太田はその後、本を鞆の中に押し込み、つかつかと規則正しい足取りでサッカー部のグラウンドへと向かった。

俺はなんとか、ここそと自分なりの尾行で太田の後をつけた。その後、サッカー部の部室に入った太田はしばらくすると、練習着に着替えて、部室から出てきた。制服のズボンで見えなかったのか、足首には包帯が巻かれている。

そのまま、現在、というよりもとくに練習が始まっているグラウンドへと駆け足で急ぐ。

「キャプテン。遅れてすみませんでした」

「太田か。どうした？」

「はい。少し、保健室に」

保健室？ さっき行ってたのは図書室じゃないか。どうして嘘をついたんだ？

「そうか。確か、足を捻ったんだってな。自主練もほとんどしとけよ。どれくらいで直る？」

「そうですね。医者からは体育際前くらいには直る、と言ってました」

「大会はその更に一カ月後だからな。よかったな。練習は参加しなくていいから、とりあえず足に支障が出ないくらいには、体をほぐしとけ」

「解りました」

そしてそのまま、太田は「捻った」と言っている右足をかばいながら、グラウンドの隅へと歩いていった。

サッカー部はというと、クラス間の体育際によるギスギスとした殺伐とした雰囲気は感じられず、集中して練習している。

正直、見事、と言う他なかった。

しかし、こういう風に纏めるのも、ある意味サッカー部の負担だろっな。

確かにこの学園のイベントは楽しいっちゃあ、確かに楽しいけど、部活動ではこういう負担があるのかもしれない。

と、その時。

俺のポケットにしまっていた携帯から、着信音が響き渡った。

あたふたと、俺はサッカー部に見つからないようにとっさに身を隠し、携帯の着信に応じる。

くそっ。マナーモードにしてなかったなんて、俺はバカか！

「は、はい、もしもし」

「アンタ、その慌てようじゃ、もしかしてマナーモードにしてなかったんじゃないでしょうね？」

「・・・・・・・・・・はてさてなんの事やら？」

「凶星ね」

エスパーか。お前は。

いや、この場合俺がアホなだけなのかもしれないが。

「それはさておき、太田がどんな本を読んだか、解った？」

「っていうか、そもそもどうしてこんな人の読んだ本をチェックしなきゃならなかったのよ。関係あるの？」

「知るかよ。尾行前に嵐に一応太田の読んだ本、借りた本もチェックしとけ、って言われたんだから仕方が無いだろ」

「はあつ。私、ワザワザ借りた本をチェックするために本まで借りたんだから」

「へー。どんな本？」

「なっ！ い、言えるわけ無いでしょ！？ バカっ！」

借りた本を聞くぐらいでどうして俺が怒られなきゃいけないんだ。しかし、ここは話を進めよう。

「で、どんな本を読んで、そして借りてたんだ？」

「そ、そうね。確か、」

彩が言ったのは、ぶっちゃけて言うと、ジャンルがバラバラだった。

文学書だったり、歴史物だったり、ノンフィクションだったり、推理物だったり、はたまたライトノベルだったり。まさに様々。

「今、何処に居るの？」

「グラウンドの近く。丁度、正門がすぐ側にある辺り」

「解った。私もそっちに行くわ」

それだけ言い残すと、彩はブツツ、と携帯を切った。

相変わらず、太田は一人黙々とストレッチを続けている。

真面目なヤツだなあ。．．．．成績の方は芳しくないみたいだけど。

ていうか、本当に体育関係あるのかこれは！？

そもそもこれって、ただ単に人の弱みを握ろうとしてるだけじゃねーか！

その後、俺が真面目にストレッチをし続けている太田を観察していると、彩がやってきた。

「おまたせ」

走ってきたみたいだが、息はまったく乱れていない。さすがだ。

「で、どうなってるの？」

「んー。別に。ずっとあの調子でストレッチを続けてる」

真面目なヤツだ。

「ふーん。これ以上いても収穫なさそうだし、そろそろ帰る？」

正直、かれこれ三十分以上はこうして歩き回ったり外にいたりして疲れていたの、その意見には賛成だった。

これ以上いると、俺がまるで太田に興味をもっている『あっち系の男と間違われてしまう。』

『あっち系』がどっち系なのかは読者の想像にお任せするとしよう。

と、言うわけで、俺達は嵐が対策を練っているという（本当かどうか定かでは無いが）教室へと戻る事にした。

「なんだか疲れたな。今日は」

動き回ってたし。主に尾行という動機で。

「そうね。でも、久しぶりね。アンタと一緒に図書室に入るなんて」

「あー。そうだったか？」

そもそも、図書室、という場所に縁が無い為、最早、前回はいつ入った等の記憶が曖昧だ。今日初めて、この学園の図書室に入った気がする。

「前はいつ入ったっけ？」

「アンタはあんまり図書室には行かなかったから。前は……」

中三の時の、受験前ぐらいじゃない？」

「あー．．．．．あんまり思い出したくないな。その頃は」

毎日が地獄だった。勉強漬けで。

「あの時は苦労したわね。アンタが急にこの学園に行きたい、って言う物だから、図書室と一緒に勉強を」

「やめろ！ 俺の傷口をいじくらないでくれ！」

もうあの日々に戻るの嫌だ。嫌なんだ！

「幼稚園ぐらいの時は．．．．．」

ポツリ、と彩が呟いた。

「一緒に、よく．．．．．て、手を繋いで歩いていったわよね。図書館に」

「そ、そうだったか？」

覚えて、ない、ような、気がする。

図書館、か。

確か今でもあるはずだ。

何しろ大きな図書館だし、龍神も休みの日には神戸さんと通っているらしい。

俺は元々そんなに本を読むようなヤツではないので、もうそれぐらい小さい頃にしか、その図書館に行った事が無いような気がする。

それにしても、手、か。

小さい頃にはよく、繋いでたっけ。

今と変わらず、元気で、明るくて、優しくて、可愛くて。

ただ、今も昔も同じ彩だからこそ、昔、あんな風になったのかも
しれないが。

.....いや。

あの頃の彩が泣いていたのは、彩の所為じゃない。仕方が無い事
だったけど、周りが、そうしたのだ。

ただそれを、俺には、今の俺にはもう仕方が無い事だと言う他無
いのだ。

俺が彩の手を繋ぐ事は小学生以降、なくなったのだが、久しぶり
に繋いだのは、夏休みの時。

今でもその感触が手に残っている（気がする）。

なんか子供の頃と違って結構ドキドキするというか、柔らかい
というか、なんというか。

.....

思えば。

その手が、今、目の前（というよりも隣）にあるんだよな.....

「？ な、何よ」

「あ、いや、その、て、手を繋ぐなんて、本当に久しぶりだったよ
なあ、って」

いかん。声が裏返っている。

「……………つ、繋ぎたいの？」

「……………」

別に繋ぎたくなんかねえよ。

なんて言つと嘘になる。

繋ぎたい。超繋ぎたい。

だってアレだぜ？ 誰だって可愛い女の子となら手を繋ぎたい、
って思うだろ！？ 普通。

「べべべ、別に良いわよ！？ て、手を繋ぐぐらい！ー！」

お、おお。声が物の見事に裏返っている。

彩の方は本当はどんなだろう。

俺の方はそりゃもちろん大歓迎だが。

「……………じ、じゃあ……………」

「……………」

ぎゅっ。

と、俺と彩は、互いに互いの手を、握った。

そのまま、教室前まで一緒だったのは、嵐には絶対に知られたくない事だった。

第八話 愛、駆ける

ついに、体育祭当日がやってきた。

この日まで、俺と彩は尾行なる物を続けてきたが、まあ、あの日と、最初に尾行を始めた日となんら変わらない行動を大田は繰り返していた為、特に成果は無く、あとは他の対策に追われていた。

「さて、とうとう、体育祭当日がやってきた。みんな、今日までよく頑張ってくれた。思う存分、俺たちの力をみせつけてやるう」

嵐の委員長らしい激励と共に、オオー！ というクラスの掛け声がかかる。

いやあ〜。嵐の奴も委員長らしくなってきたじゃないか。

「……………なんて事は正直どうでもいい。微塵も考えてはいない。俺たちが求める物は百万円だ！ 文化祭の為の資金だ！ 邪魔をする他のクラスは全て血祭りに上げる！ 文化祭の為の資金、百万円は俺たちが全ていただく！！」

「……………うおっしゃああああああああああ！！」「……………」

嵐にプライスレスという言葉を教えてやりたい。

あと、クラスの連中にも。

「おい嵐」

「なんだ。副委員長」

「ぐあっ…！」

くそっ！ こいつ、覚えてやがった！
俺の忘れかけていた立場を！

「．．．．．お、お前さあ、もう少し他の言葉は無かったのか？
そんな金、金、って言っていないでさ、もう少し他の言葉とか無か
ったのか？」

いくらなんでも学生が金だ金だと言って激励するのはちょっとア
レだと思う。

俺達の青春って一体何なんだ。

「例えば？」

「そ、そうだな．．．．．愛とか勇気とか．．．．．」

「愛？ 勇気？ あー。はいはい。それなら知ってるぞ。どこの
アンパン男の友達だな。全く。何を言うかと思えば。それが今、こ
の状況で一体何の役に立つんだ？ それで文化祭の資金が確保出来
るのか？」

文化祭の資金は、争奪戦だ。

各クラス、一定の資金が振り分けられるが、しかし、それでもこ
の学園の規模を考えると足りないくらいだ。

よって、毎年壮絶な資金争奪戦が繰り広げられていると聞く。

「そもそも、あのアンパン男って孤独すぎるだろ。何だよ。愛と勇
気だけが友達、って。それただ単に友達が居ないだけじゃねえか。
友達が居ないという現実から逃げるために愛と勇気が友達と謳って
るだけじゃねえか」

「お前は一体アンパン男に何の恨みがあるんだ！」

これじゃあ、自分の顔面を引きちぎって空腹の子にアンパンを分け与えてやっている孤独な（孤独って言っちゃった）アンパン男が報われなさ過ぎる。

この学園の体育祭は、高校が行う体育祭にしては規模が突き抜けている。

例えば、その設備を見てもらえばその説明が納得すると思う。

校舎に設置された、大型スクリーンモニターが数台。

売店。

競技用の設備。

その他諸々。

そして、この学園の体育祭は体育祭でありながら、文化系の部活の貴重な活動の場でもある。

なぜなら、文化部、例えば、紙絵さんの所属する新聞部では体育祭特集号を売りまくっているし、美術部は、体育祭をテーマに作品の展示を行っているし、祭さんの部長を務めるP研（パソコン研究会の略称）は、体育祭をテーマとしたコンピュータゲームを作って、誰でも遊べるように展示してある。

文化系の部活は、この体育祭という場で、体育祭をテーマにさまざまな活動を行っている。

そして、その大型スクリーンモニターには、第一競技である障害物競争の選手達が映し出されていた（因みに俺は出ていない）。

「さあ！ もうすぐ、体育祭第一種目である、障害物競争が始まる

うとしています！ 体育祭の競技実況はこの私、まきのやちよ牧野八千代が務めさせていただきます！！」

放送部のエース（放送部にエースとかがあるのか？）、牧野さんが元気な声で実況を行う。

「第一コーナー、一年一組、」

牧野さんが次々と一年生の部の障害物競走の選手を紹介していく。そして、

「第四コーナー、一年四組、神戸愛さん！」

直後。

学園中から、在校生の男子共の歓声が巻き起こる。というよりも、女子の歓声の数も多いような気がする。

忘れかけていたが、神戸さんは学園の二大アイドルの一人（もう一人は彩らしい。新聞部調べ）だった。

本当に忘れかけていた設定だったが、それは在校生の心の中で行きつづけていたらしい。

「愛〜！ 頑張れ！ パパは応援しているぞ〜！」

「し、社長！ お静かに！」

……何やらどこぞの親バカが騒いでいるが、まあ、おいて置こう。

というよりも、問題は神戸さんと共に走る、第一走者のメンバーだ。

神戸さん以外、全て陸上部で固められている。
やはり、最初のスタートダッシュを取りに来たか。

「それでは、各選手、スタート位置についてください」

審判を務める先生が、競技用のピストルの銃口を晴れ渡った空へと向ける。

「さあ、各選手、スタート位置につきました！ これから、体育祭、最初の競技が始まるうとしています！」

観客のテンションも、徐々に上がっていくのが解った。
そして、

「位置について、よいい、」

パァンッ！ と、轟音が鳴り響いた。

同時に、選手が一気に飛び出す。

さて、ここでまず、この障害物競走について説明するでしょう。

この障害物競走は、まず第一走者が一周二百メートルあるグラウンドを一周し、その後校舎の外を、リレー方式で周っていく、という物だ。

そして用意された障害物は全部で四つ。

それを四人で渡りぬぎ、そして最初にゴールしたクラスがポイントを獲得する、という物だ。

「可哀想だな……………」

俺は思わず、そんな言葉を漏らしてしまった。

ただ、勘違いしてもらっては困るが、これは神戸さんに対して、ではない。

今神戸さんと走っている、陸上部に向かっただ。

「おおーっと！ 速い！ 一年四組神戸愛さん、とてつもなく、速い！ 他のクラスと約五十メートル程の差をつけて走っております！」

まあ、なんという事でしょう。

あっという間に陸上部員が涙目です。

「速い！ 速すぎるうううううう！！ そのまま二百メートルを走破！ そのまま第一障害物へと突入だああああああああ！！」

そして、神戸さんが、応援席の俺達の側を走り抜けて行った。

「障害物競走で一位を獲ったら、りゅーじんとデート……………」

ぼそつ、とそれだけ言つて、そして頬を少し紅くしながら、神戸さんはそのまま走り抜けていった。

「「は???」「」

俺と龍神があっけにとられる中、嵐だけがそっぽを向いていた。そしてそれだけで全てを理解した龍神は、

「嵐いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！?」

「俺じゃない。どっかの委員長が勝手にセッティングしただけだ。」

それに神戸の方は快く引き受けたそうぞぞ」

「嵐ざwせxdrctfvgybふんじmkツツ!!」

言語バランスが完全崩壊した龍神を知ってか知らずか、神戸さんは駆ける。

そして、ついに最初の障害物へとたどり着いた。

「四組の神戸さんがついに第一障害物へとたどり着きました！ 第一の障害物、それはズバリ、『瞬間計算』!! ランダムに三つの数字と、その三つの数字の間に、+、-、×、÷、いずれかの数字がランダムで表示されます！ それを三十秒以内に解いてください！ もしも三十秒を過ぎればリセットされますので、ご注意ください！」

因みに、この障害物は全て事前に各クラスの委員長に知らされている。

あとは、どのような性質の生徒を配置するだけなのだが、この最初のスタートダッシュの鍵を握るこの障害物は、まさに運動も出来て、学年一の成績を持つ神戸さんにピッタリの障害物だった。

そして、神戸さんの目の前にあるモニターに計算式が表示される。

三百十六×四百六十七-百六十四〃？

.....難ッ!!

「十四万七千四百八」

「正解!!」

「速ッ!!」

ちよつと待て! まだ計算式が表示されてから十秒も経ってないぞ!?

「そのまま神戸さんが第二走者へとたすきを渡す　　ッ!　一年四組、現在はぶつちぎりのトップだああああああ!　おつと、第二走者の紙絵莉子さんが走り出したああああああ!　つて速い!　神戸さんに負けず劣らずの速さでぐんぐん、他クラスとの差を広げていく!」

「.....なあ、嵐」

「なんだ?」

「俺達のクラスって、今思うとなんだかんだで強すぎると思う」

「今更だな」

「なんだか、陸上部どころか他の一年生のクラスが気の毒になってきた。」

「そして涙目の陸上部員三人は現在、第一障害物の所に涙目で到着した所であった。」

第九話 二人三脚

結局、第一種目は俺たち一年四組が、一年生の中でぶつちぎりのトップで勝利した。

俺はおそらく、一生、あの陸上部員の涙目を忘れないだろう。多分。

因みに、二年生のトップは祭さんのクラスだった。

「さて！ 陸上部員が涙を流しているのは置いて、さつさと次の競技に移りましょう！」

牧野さんもなかなかエグイ事を言うな。

「ぶつちやけると、長々と『体育祭編』を進めるのもめんどくさいですし、さつさと次の競技に移りたいのが本音です！」

生々しい事を言うなや！

「第二種目は二人三脚です！ 各選手、次々と準備を開始し始めましたー！」

因みにこの競技に参加するのは、俺、彩、龍神、神戸さん、紙絵さん、風人だ。

互いの相性の良いメンバーを集めた、という所だろうか。

この内、彩、神戸さん、紙絵さんは第一競争の障害物競走に出たので連続となるのだが、体力的には問題は無いそうだ。

因みに、祭さんのクラスで網を潜り抜ける障害物を明さんが行っていた時など、男子のテンションは最高潮だった。だって網がぐるぐると絡まってたし。

なんか、エロイ。

「はあ……………」

神戸さんと足を結ぶ作業を行っている龍神がため息をついていた。

「どうした龍神」

「いや、愛ちゃんと二人三脚の練習をしている時にさ、」

ここで、俺はおもわずあの時の事を思い出したのだが、なんとか表情に出さないようにした。

落ち着け。

あのシーンを思い出せばなんか、あれだ。

色々と終わってしまうぞ。

理性とか。

「れれれ、練習をしている時に、ににに、な、に、が、お、おこったんだ？」

「めちゃくちゃ動揺してるけど、何かあったの？」

「べ、べつにイ」

くそう！ 落ち着けるか！

「で、な、何があったんだよ」

「ああ……………実は君たちと同じように僕も手錠をかけられて、」

「

この二人三脚は、校舎の外を一周する、リレー方式。
順番は、紙絵さん、風人ペア、龍神、神戸さんペア、そしてアン
カーに俺、彩ペア、だ。

他のクラスのメンバーが、陸上部員をぶつちぎった三人が参加し
ているので、少しビクついている。

まあ無理もない。

クラスの観客席の方で障害物競走の時に走った陸上部員がガタガ
タと震えているが、見なかった事にした。
きつと、トラウマになったのだろう。

「第一コーナー、一年一組」

次々とメンバーを発表していく牧田さん。
そして、

「第四コーナー、一年四組、紙絵さん、城咲君ペア！ 因みに二人
はカップルです！」

お、おお……。。
ワザワザこんな事まで言うのか……もはや公開処刑に近
い仕打ちだな。

「えへへ。幸せになります」

「恐縮です」

にこにここと、二人は何事もないかのようにする。
相変わらず、このカップルは相変わらずだ。

心なしか、男子が紙絵さんが風人の物となつて悲しんでいるよう
な声が聞こえてくるが、それも無視しよう。

「それでは各選手、位置について」

それぞれの選手が、ぐぐっ、と走る体勢に入る。

「よい、」

パァンッ！ と、再び、ピストルから轟音が鳴り響いた。

そして、選手達が一斉に走り出す。

しかし、中でも紙絵さんと風人のコンビネーションは絶妙で、ぐんぐんと、他の選手に差をつけ始めていた（現在待機中だが、大型モニターで観戦中）。

．．．．．なんだろう、この感じ。

例えるなら、魔人ブウを倒した時の悟空で初期ヤムチャを相手にしている感じ。

例えるなら、レベル百のミュウツーでレベル二のポップを相手にしている感じ。

例えるなら、ユニコーンガンダム（NTD発動）でザクを相手にしている感じ。

まあようするに、弱い者（他のクラスの方々には申し訳ないが）いじめをしている感じ。

「おおーっ！ 今度もまた、四組が一気に差をつけています！

もうすぐ第二走者の地点まで近づいています！」

．．．．．。

「なあ、彩」

「何？」

「あのさあ、やっぱりさあ、俺達のクラスってさあ、……………」
最強じゃね?」

「……………そうかもね」

だって他のクラスなんかもう、「思い出作りに競技を楽しもう!」
みたいな空気だし。

「ここで、第二走者にたすきが渡りました!」

気がついた時には、既に龍神にたすきが渡っていた。

そして、すぐに走っていく二人。

この二人も息がピッタリだ。

龍神が足を出せば、それに反応して神戸さんもそれに適した足を
出す。

そして神戸さんが足を出せば、また龍神が適した足を出す。

龍神もなんだかんだ言っつて、少し楽しそうだ(神戸さんは言っま
でもない)。

こういう所を見ていると、やっぱり二人は幼馴染なんだな、と思
う(龍神は認めないだろうけども)。

「あー。そういうば、次が俺たちだな。なんか緊張してきた」

なまじ規模が大きく、大スクリーンのモニタに映る分、緊張感が
半端じゃない。

「何緊張してるのよ。これぐらいで」

彩がその綺麗なセミロングヘアの髪を触りながら言う。

今思ったのだが、神戸さんは髪が長いのでポニーテールにして纏めていたが（正直可愛い。あれ？ 何で彩が睨んでいるんだ？ あれ？）彩の場合はセミロングヘアなので、そうする必要が無い。
．．．．．そういえば、昔の彩は、もっと髪が長かったような気がする。

本当に、昔。

小さな、頃。

そういえば、あの頃だろうか。

俺が彩を、女の子としてではなく、幼馴染として認識し始めたのは。いや、認識し始めて『しまった』のは。

「第二走者がもうすぐ、アンカーのペアの元へと近づいていきます
」！

「ちょっと、幸助！」

「ッ。あ、ああ」

「何ボーっとしてるのよ。もうすぐ来るわよ」

「お、おうっ」

いかんいかん。

ここは集中しよう。

思い出を思い出している場合じゃ、無い。

しばらくすると、校舎の角から、龍神と神戸さんが走ってきた。息が乱れていない所は相変わらず流石だ。

「幸助」

「おう。任せろ」

俺と彩は、たすきを受け取って走り出す。

そして、彩が左足（結んでいる方の足）を出し、そして俺が、左足を出した。

「「!!」」

びたんっ！ と、俺と彩は盛大に転んだ。

慌てて俺は起き上がるうとする。

「だ、大丈夫か彩!？」

「大丈夫なワケないでしょ!？ どうしたのよ!？」

あの、辛く苦しい手錠特訓の時にはこんなミスはしなかったのだが……。

「い、いめん……」

「……な、何かそう素直に謝られると、調子が狂うわね……」

「それこそどつという意味だそれ!？」

俺は普段からちゃんと謝ってるつもりだが!？

「バカかお前ら！ さっさと走れ！」

「「あっ」「

嵐の言葉でハッ、とする。

気がつく、もう他のクラスのペアが校舎の角を曲がっていた。

「と、とりあえず行くぞ！」

「それはこっちのセリフよ！」

今度は、ちゃんと、進む事が出来た。

そして次々とリズムにのって足を出して、進む。走る。

「さあ、一年四組桐山君、天音さんペア、最初の不調はどこへやら！
ぐんぐんと後続のペアを引き離していきます！」

俺達はこのまま、この状態をキープし続け（彩はともかく、俺が彩に比べて遅い為、これ以上の差を出せない）、ゴールへと近づいてきた。

「はあっ、はあっ、もう、すぐ……」

「息が乱れてるけど、ゴールまで保つの？」

隣の彩は涼しい顔をして走っている。

相変わらずの身体能力だな。

俺は凡人だから、これだけでもう息が乱れてしまっている。

「当たり前だろ」

でも、それでも、俺は彩の前では、弱音をコイツはくわけにはいかない。

いや、弱音をはきたくない、と言った方が正しいだろうか。
確かにもう全力疾走をしてバテバテだけど（今度からちゃんと運動しよう）、それでも、見栄を張らなきゃな。

「解った。．．．．．頑張って」

「．．．．．ああ！」

ああ、畜生！ お前にそんな事言われたら頑張るしか、ねえだろ！！

彩には俺がもうバテバテだという事はもうバレてるかもしれないけれど、それでも俺は彩に「コイツ」そんなへたれている所を、弱っている所を、弱音をはいている所を見せるわけにはいかない。

アンカーは、一番走る距離が、長い。

他のペアの二倍の距離はあるだろうか。

それもこれも、無駄に学園が広いからなのだが。

「先頭、ゴールまであと百メートルです！」

「もう少し．．．．．ッ!？」

がくん、と。

足が、崩れた。

というよりも、躓いた。

「なッ．．．．．!？」

おそらく、疲れと焦りでつい、躓いてしまったのだろう。

しかし、ここで倒ればおそらく追い抜かされる。

何より一緒に彩が走っているのだ。

俺が倒れてしまえば、彩が倒れる。俺が、彩の足を引っ張ってしまふ。これでは本末転倒だ。

倒れてしまふわけには、いかない。

「このっ！」

ガッ！！ と、俺はなんとか、倒れそうになった彩を支え、左足を体が倒れる前に、踏ん張った。

左足で全ての体重を支える。

「……………ッ！」

なんとか体勢を立て直し、そのまま走り続けた。

彩の足を引っ張らずに、済んだ。

そのままひたすら、走り続ける。

「ゴオ　　ル！！　二人三脚一年生の部、一位は、一年四組だ

！」

「このバカが」

フラフラになって戻ってきた俺に、嵐が盛大な拍手　　ではなく、バカを宣告された。

「最初のあの無駄なロスが無ければ、もっと楽に勝ててたんだぞ？
それに焦りもないまま、躓かずに済んだ物を」

「うっ。すまん」

焦りで躓いてしまったのもお見通し。
さすがに今回ばかりは俺が全部悪いな。

「しかしまあ、なんとか勝てたから許してやろうか。副委員長」

「まだそのネタを使うのかよ!？」

「しかし、お前もお前で体力バカだな。最後のあれだけのコースを
全て全力疾走するとは」

「……どつかの誰かさんの喧嘩に巻き込まれてよく逃げ回
ってた時期があったからな」

「ふん。そういえばそうだったな」

「そういえば、龍神と神戸さんは?」

「あっちだ」

嵐が指差した方向に、龍神と神戸さんが居た。

何やら神戸さんが、龍神にスポーツドリンクを渡しているようだ。

「りゅーじん。はい」

「あ、ありがとう……」

「……」

「くぐく、と龍神はスポーツドリンクを飲んでいく。

「?」ど、どうしたの愛ちゃん

「それ、さっき私が飲んだ分。つまり、間接キス……………ぽっ

「ぶっ!?!?」げほっ、ごぼっ!」

……………ああ、なんか疲れとかそんなを無視して今すぐあの龍神の幸せをぶち壊してやりたい。

対して、紙絵さんと風人は、

「莉子さん。おつかれさまです。どうぞ

「ん。ありがとう。一緒に飲む?」

「はい」

……………畜生! ぜんぜん、羨ましくないんだからな! 別に人前であんな事をさらりとやってのけるあの二人の事なんか、ぜんぜん羨ましくないんだからなあああああ!!

「何、涙目になってるの?」

「別に……………ちよつとな……………」

「そ、そう。……………あの、これ、飲む?」

「……………ああ、サンキュー」

俺は彩が差し出してきたスポーツドリンクを受け取る。

「いいい、言っとくけど、別に私はまだ飲んでないから！ 本当に！ ぜんっ、ぜん、飲んでないから！」

「？ そうか」

それにしても、なぜか蓋がゆるく、中身も少し減っているのは気のせいなのだろうか。

まあ、いい。

俺は彩からもらったスポーツドリンクを飲んでいく。

「……………」

「……………なんだ？」

「べ、別に！？ そ、それっ！ 全部飲まないでよね！ ちゃんと返してよっ！？」

「解ってるって。人のやつを全部飲むほど凶々しくねえよ。ほら」

「……………あ、ありがと……………」

「なんでお前が礼を言うんだよ」

「ななな、なんでも無いっ！！」

そのまま彩は、俺の手からスポーツドリンクをひったくって、駆け出していった。

「（か、間接、き、きす．．．．．）」

駆け出す直前に何かを言ったような気がしたが、気にしないでおくことにした。

まあとりあえず、今回の競技でアイツの足を引つ張らずに済んだのはよかった。

だって、そんな事になったら、それこそ、本末転倒になってしま
うから。

因みにこの後の祭さんと明さんの二人三脚で、走る明さんに男子の目は釘付けになり、当然俺もそうなっており、彩に背後から襲撃されましたとさ。

第十話 借り物競争

第三種目は借り物競争。あの、バカップル両親がバカップルとなった（ある意味）伝説の競技だ。

あの話を聞いた年にこの競技が選ばれるとは（しかもアマミダだし）
もしも、運命とやらがあるのなら俺はその運命を恨もう。
だって、

「お、次は借り物競争か。なつかしいなあ」

「うふふ。あれがなかったら、私達はこんなにもラブラブにならなかったかもしれないわねえ」

「ははは。バカいうなよママ。あれがなくても、俺達はラブラブになっただろうさ」

「もうっ。パパったら」

こうなる からだよッッッ！！

一年四組の応援席にいても、嫌というほど聞こえてくる。

というか、あの二人がなぜこんなにもラブラブになったのか、その経緯を問いたしたい！

因みに、応援席、というのは学園の中の教室にある自分の席の椅子を持ち寄って、適当なスペースにクラスごとに集めた所だ。

よって、壁も何も無いのであの雑音が嫌というほど聞こえてくる。そしてそれはつまり、クラスメイト達にも聞こえる、という事だ。
……いや、まあ、ここは他人のフリをしておこう。

ワザワザこっちから声をかける事もないだろう。

ていうか嫌だ。

「さて、わが息子、幸助はどこかな？」

「さっきの二人三脚、彩ちゃんと息があつてたわねえ」

「ま、俺達ほどじゃないけどな」

「いやだわもう。パパったら」

言っちゃったよ！！ 普通に言っちゃったよ！ あのバカップルが！！

俺はすぐさま、あの両親バカップルの口を塞ぐべく、両親バカップルの元へと走り出した。

なんだかクラスメイト達からの視線が痛かった。

「！！」

なんもいえねえ。

「おお、幸助じゃないか。探したぞ？」

バカップル 両親は、来場者用の席にはいかずに（学園が用意した来場者用の席が数多くあり、早朝に席の確保をしないでも済むようになって）空きスペースにレジャーシートを置いて、その上に待機していた。

なぜかティーセットが展開している。

それが息子を探している親の状況か？

「さつさとその口を塞げこのバカップル！ あとな、もう三十六歳のクセにイチャイチャイチャイチャしてんじゃねえ！ 息子の気持おれちも少しは考えてくれよ！ クラスメイト達の視線が痛かったんだぞ！ もう少いで泣くかと思っただわ！ ていうか、この際だから聞くが、なんでお前らはいつもそうイチャイチャしてるんだ！ 確かに母さんはまだ見かけは若い方がいいけど、って、照れるな！ 父さんも得意気になってんじゃねえ！ 逆にこっちが腹立つんだよ！」

なんか、今のはいつもよりも倍ぐらいはしゃべったような気がする。

逆に言つと、それだけツッコミどころが多いのだが。

「まあまあ。そう怒るな。ほら、麦茶でも飲め」

「お前はその紅茶の事を麦茶と言ってるのか！？ どこの貴族だ！」

「で、お前は次の借り物競争に出るのか？」

き、聞いてねえ……………！！

「……………ああ。一応な」

俺はしぶびぶ、答えた。

因みに俺はさっきの競技と二連続で出る事になっているのだが、体力の方は少しずつ回復してきているので、問題は無い。

というよりも、借り物競争の問題は、いかに早く借り物を見つけてくるかだ。

「借り物競争に出場する選手は、さつさと本部前に集合してください。遅刻したら、クラス委員長が両足を切断して、出場出来なく

「しちゃうぞ」

クラスの代表の手によって選手を一人退場させるといった方法がえげつない。

そもそも、両足を切断したらそれこそ死ぬだろ。

因みに俺がこうやって真剣に考えているのは、嵐アイツならやりかねないからだ。

「つと。んじゃ、そろそろ行ってくるから、頼むから、大人しくしててくれよ。特にその口を」

「ん。頑張つて来いよ」

もはや脅しと化した放送を受け、俺は両親バカップルに背を向けて走り出した。

両親バカップルの姿は人混みにまぎれて、すぐに見えなくなっていった。

「なんとかセーフ」

俺は集合時間ギリギリに、集合場所である本部前へとやってきた。

「ふむ。確かに。集合時間ギリギリ一分前だな」

嵐が腕時計を見ながら呟く。

因みに、嵐はこの競技に出場しない。

ただまあ、あの放送を聞いてやってきたのだろう。

本当に来るか。普通。

「…………チツ。せつかく家庭科室から大急ぎで包丁をパクツて…………げふんげふん。しっけいしてきたのに」

おお…………危なかった。

俺の命があやうく委員長の手によって失われる所だった。

だから嵐のジャージのポケットの中がいびつな形をしてるのか。

そして、他のクラスのメンバーを見渡してみる。

するとそこには、俺と彩が尾行を続けてきた太田も居た。

「あれ？ 太田？ アイツも家庭科室から包丁を……………」

「違う違う。アイツは選手だ」

「なるほどな。嵐のように家庭科室から包丁をパクツてきて準備してたのかと思った」

「あのお、言っとくけどな、俺しか居なかったぞ？ 家庭科室には」

……………それもそれで問題だと思うのは俺だけだろうか。

「えー。それじゃー、皆さん、集まったようですねー」

本部テントの下の影から、牧田さんが俺達出場選手（嵐は違うが。つーかなんで居るんだよ）の顔を見渡す。

「えっと、各選手、まずはコースについて、そのままコースにそって走ってください。コースアウトしてもかまいませんが、ちゃんと自分のコースと同じコースの借り物の書かれたプレートをとってく

「ださいね」

借り物競争は、一クラス四人の選手が出場する。ただし、一回の競争で走るの一人だ。

それを一クラス三回行う。

そしてルールだが、例えば、俺の場合は第四コーナーだから、走った後に第四コーナーの地面に置いてある裏返しになっているプレートを取り、その表側に書いてある借り物のお題を誰かから借りて、そしてそれを持ってゴールしなければならない。

ただまあ、この競技ばかりは運試しの要素が強い。

何せ、その借り物によって勝敗が大きく変わるからだ。

そして、俺達選手は、競技を行うため、グラウンドに移動する。

因みに俺はトップバッターだ。

牧田さんの選手紹介が終わる。

「それでは各選手、位置について、よーい、」

ピストルからの轟音が、青空に響き渡る。

直後、俺達は走り出した。

二人三脚の時の様な条件化での長距離全力ダッシュならばともかく、プレートまでの距離がたった百メートルという短距離ならば、余裕だ。

さすがにサッカー部の期待の新人である太田にはかなわなかったが、他の選手よりも、俺は速かった。

太田がプレートを取った後に、俺も急いでプレートを手に取る。

そこに書いてあった内容は、

お題：バカ。

．．．．．フツ。簡単でよかつたぜ。

俺はすぐさま、自分のクラスの応援席へと移動する。

「おい嵐！ 来てくれ！」

「ん？ 俺か？ なぜだ」

「ああ！ 借り物のお題が、『バカ』だったんだ！」

「バカはお前だろ」

「おいおい。いいんだぜ？ 謙遜しなくても。胸を張れよ。お前はバカだから」

「知ってるか？ バカって言う方がバカなんだぜ？ これぐらい、小学生でも知っている常識なんだけどな」

「いいから来いよ！」

「ふざけんな！ お前がそのままゴールすりゃあいいだろうが！ バカなんだから！」

「あ！ バカって言った！ それさっきのお前の理論で言つとお前もバカじゃねーか！ しかも自滅じゃねーかよ！」

「今、お前もバカって言っただろうが！ お前も自滅だな！ ザマ！ みる！」

「．．．．．！！（睨み合い）」

「おおーつと！ 先程まで快進撃をしていた四組が、バカ二人が争っている所為で、完全にストップ！ これは他のクラスに正気アリか!?」

「誰がバカだ!!」

「ああつと！ 一組の太田君が、動いた！」

「!!」

俺達が騒いでいる間に、プレートを持ったまま突っ立って考えていた太田がついに、動いた。

そして向かったのは、二年生の応援席。

「初書先輩！ 来ていただけじゃないでしょうか！」

「いいけど……お題は？ 何て書いてあったの？」

「……た、『大切な人』、です」

おい。なんか聞いた事あるぞ。そのお題。

「……で、私はあなたにとって大切な人、なのかしら？」

「は、はいっ！」

「そう。なら、行きましょう」

淡々とした様子で席を立つ初書先輩と、緊張した面持ちで初書先輩の手をとる太田。

「なるほどな。太田が仮病をして、更にサッカー部の先輩に嘘をついてまで図書館に通ってたのは初書先輩に会う為だったんだな。これで謎が一つ解決した」

「仮病？ 嵐、どうしてそんな事が解るんだよ」

「お前が言ってたじゃねえか。『つかつかと規則正しい足取りでサッカー部のグラウンドへと向かった』ってな。そもそも、足を怪我している奴が、そんな歩き方が出来ると思うか？」

「ああ。なるほど」

「ゴール！ 一位は一組！ 二位は三組！ 三位は二組です！ 最下位は四組です！」

「「あ……………」」

結局、俺達は二人ともバカだった、という事だった。

第十一話 昼食と味付け

午前の競技が終わり、昼休みが訪れた。

それぞれのクラスメイトが家族の元へと向かう。

俺はどうしようか。朝、母さんが張り切って弁当を作っていたが

(どうやら彩の両親は事前に今の状況を両親に連絡済だったらしい)

、正直俺はあの中に戻りたくない。

正直に言おう。

ぶっちゃけ、恥ずかしい。

今までのあの両親のバカッブルっぷりを見てくれば解るが、正直
恥ずかしい。めちゃくちゃ恥ずかしい。

小学校の頃からどれだけ恥ずかしかったか。

「どうするの？ お昼」

「そうだな……戻りたくないけど、戻らなきゃ弁当にあり
つけないし」

あーあ。今年は来ないかと思ってたんだけどな。体育祭前の連絡
では確かブラジルに居る、って言ってたし。

しかも昼飯は両親の手の内にあるからどうしようもない。

「あー！ でもあそこに戻るのには恥ずかしいんだよなあ！！」

「それは解るけど……」

彩も半ば同情的な目だ。

さすが、今まで俺のあの両親ハカップルの醜態（本人達はそう思っていないのがめんどくさい）を見てきただけの事はある。

正直、結局、どう考えても戻るしかないんだよな。

……いや待てよ。

「いい事思いついた」

「い、いい事？」

「ああ。正直戻らなきゃいけないけど、被害を減らす方法なら、ある」

「？」

俺と、ワケの解らないままであろう彩はさっそく、動き出した。

「一緒に昼飯？」

俺が嵐と、応援に来ていたと思われる直ちゃんと、その友達である斉藤さんを見つけたのは、あれからすぐの事だった。

「ああ。いつももみたいになんかどうかな、って思って。それに俺と彩だけ、っていうのもなんか寂しいしな」

「……今のお前の発言は、お前がかなり空気の読めない奴だという事が証明されたワケだが」

それはどういふ事だ。おい。

「どうする？ 直。斉藤。俺はどっちでもいいが」

「えっと、私は良いですけど」

「私もオツケーです」

なんとか全員分の了承を得たので、今度は龍神達の元へと、みんなで向かう。

龍神に連絡をとつてみると、「こ、幸助！？ 助けてくれ！ 今屋上に居るんだけど愛ちゃんが無理やり……ぐ、ぐあああああああああ！ ブツツ、ツ、ツ、」との事だったので元気にやっているようだ。

二人の邪魔をしてはいけないので、俺達は龍神と神戸さん誘うのを止めて、次は祭さんの元へと向かった。

まあ最初は嵐の「妥当祭さん」宣言があつたのでどうかと思つたが、嵐いわく、「別にいいんじゃない？」という事だったので連絡を取ってみる。

「おおー！ 昼飯か！ 今、明の作ってくれた弁当を食べた所だったんだけど、そっちも美味しそうだから今から行つてみるから！」

明さんごめん。

なんだか邪魔してしまつたみたいで申し訳ないが、しかしこっちも色々大変なので仕方が無い。

そして次は紙絵さんと風人のカップルも誘う。

電話で連絡をとつてみると、「いいよー」とアツサリOK。

現在絶賛ラブラブ中なので正直二人きりで過ごしているのかと思つたのだが、問題は無いようだ。

そして全員、俺の両親バカップルの待つ所まで集合したのは、十分後だった。

この学園の体育祭は昼休みが一時間半と長めにとってあるので、
まだまだ余裕はある。

さて、ここから他のメンバーには俺と同じく、恥をかいてもらおうか。

「幸助」

「どうした嵐」

「テメエ、嵌めやがったなツ……………!!」

「フハハハ！ バカめ！ 今更気がついた所で既に遅い！」

龍神と神戸さん以外のメンバーが集まり、俺達の場所がにぎやかになったのだが、しかしそれに負けず劣らず（？）^{バカッブル}両親も絶賛お惚
気中だった。

正直周囲からの視線がいた痛いのだが、ある程度の人数が揃っている分、俺へのダメージも緩和されている。

しかし素人の嵐達新参メンバーにはキツイようだが。

「つーか文句なら俺じゃなくあの^{バカッブル}両親に言えよ」

「それもそうだが、まさかお前の両親があんなバカッブルだったとは思わなかった……………もつと、こつ、なんか、」

「お前が俺の親にどんなイメージを抱いていたのか解らないが、俺はこんな感じじゃなかったらどうなってもいいよ」

しかし、祭さん、紙絵さん、風人に至っては意気投合している。

「ママは実は学生の頃、丁度この学園の生徒会長でな。そりゃあもう綺麗で可愛くて、それにしっかりと学園を引っ張っていらてな」

「俺も生徒会長をやってるんですけど、その頃ってどんな感じだったんですか？」

「とにかくママが可愛くてな。他の学校でも話題になってたんだぞー。そして体育祭や学園祭ではママ目当てに来る輩が多くて多くてな。しかも色んなイベントを企画してくれたり、あ、そうだそうだな。確か馬拉ソン大会とか企画したりもしたな。確か」

「うふふ。あれはパパが優勝したんだっけね」

「優勝したらママがデートしてくれる、って言うからな。頑張ったよあれは」

「奥さん、愛されていますね」

「わー。憧れるなあ」

なんか、な。

自分へのダメージを減らそうかと思っただら逆にダメージが増えている気がする。

「……………ごめん。なんか、俺の考えが甘かった」

「……………解ればいいんだ」

まさか意気投合するとは思わなかった。

そして、そんな周囲の視線をなんとか耐えながら、昼食を食べる俺達（相変わらず五人は意気投合している）。

「んっ。この料理、美味しいですね」

「本当ですね．．．．美味しい」

メイドさんである明さんと、現在お料理勉強中の直ちゃんがもぐもぐと我が母の作った弁当を食べながら感想を漏らす。

まあ、俺はもう食べなれているが、確かに、美味しいと思う。少なくとも、俺の作る料理よりもレベルは上だ。

「んー。確かに美味しいよなー」

と、気がつけば祭さんももぐもぐと弁当のおかずを咀嚼しながら感想を漏らしていた。

「この味付け、俺の好みかも」と、祭さん。

「そうですね。俺も結構好きですよ。この味付け」と、嵐。

「あの、この料理の味付け、教えてくださいー!!」「」

明さんと直ちゃんが叫んだのは、ほとんど同時だった。が、頑張るなあ。

「うふふ。いいわよ〜」

ニコニコと我が母が答える。

「おいおい母さん。そんな時間があるのか？　そもそもこっちはあとどれくらい滞在するんだ」

「そうねえ。三日後ぐらいにはマダガスカル島に行かなきゃならぬいから……」

「一体何をしに行くんだ!!」

「おいおい。今更何解りきつた事言ってるんだ幸助。ボランティアに決まってるじゃないか」

「ボランティアですか。すげえなー。俺も将来そうやってボランティアをしながら適当に世界を周ろっかな」

「祭さん!?　変な悪影響を受けないでください!」

この人はなまじ金持ちな分(なまじというよりもメチャクチャ金持ちだが)そういう事が簡単に出来てしまっからいけない。

それにしても、人数を集めたはいいが、むしろ状況が悪化してきている上に俺のツッコミ量が増えているぞ。

「なんだか大変そうね」

俺の両親バカッブルの所為で向けられる痛々しい視線に耐える検定一級を持つっている彩は淡々と昼食を食べている彩。

「まあな。でも、もう何時もの事だけだな。お前も知ってるだろ」

「まあね。おかげである程度の忍耐力はついたわ」

苦々しい表情で彩が言う。

「コイツも俺と苦勞を共にしてきたからな……」

「……あの、アンタもやっぱり、こついう味付けって、その、好み？」

「ん？ まあそつだな。一応はこの味で育ってきたわけだし」

「そ、そつ。そつよね」

今更何を言ってるんだ？ 彩は。

「あ、あの、ママさん」

「んー？ どうしたのかしら彩ちゃん」

「わ、私にもこの味付け、教えてもらえませんか……」

「勿論オツケーよ」

体育祭が終わった後も、色々と苦勞がありそつだ。

「青春だねえ」

そんな中、斉藤さんが、ほのぼのと俺達の様子を見守るようにして、昼食を食べていた。

第十二話 交渉

ドタバタ、というよりもお惚気の昼休みも終わり、午後の競技が始まった。

因みに、これまでまだ三つの競技しかやっていないのにも関わらず、「もう昼休み？ 展開速すぎだろ」とか思っている人も居るかもしれないが、実は競技の間には得点には関係無いが、職員演技やPTA演技、そして文化部の宣伝等が挟まれているため、三つしか得点に関わる競技を行っていなくてもこうして昼休みに丁度良い時間を迎え、昼休み自体の時間も余裕を持つ事が出来ているのだ。

その昼休みも丁度、終わった所だが。

そして俺達は、自分達のクラスの応援席に集まっていた。
次の競技が始まるまで、あと一時間はある。

「さて、午後一番の競技は『棒倒し』。これはクラス全員参加型の競技だ。そして、この競技において、俺達が一番不利だという事は解ってるな？」

「えっ。なんで？」

そして嵐は俺に哀れみの視線（この視線はもう慣れた）を向け、ため息をつき、そしてやれやれと言い、その上更にため息を再びつき、「学習能力が無いな」と前置きをして、

「って、長すぎるんだよ！ どれだけ俺をバカにしたいんだ！」

「は？ 別にお前をバカになんかしてねえよ。そもそも俺は、今まで一度もお前をバカにした事なんてない」

お、おお………なんか、少し嬉しい事を言ってくれるじゃねえか………。

「第一、バカにバカと言っても仕方が無いだろう?」

「それをバカにしてる、って言うんだよ!!」

「そうか。日本語って難しいな。そもそも俺、国語が苦手なんだ。この前のテストでも一番点数が低かったし」

確かに嵐の国語の点数は嵐の全開のテストの中で一番低かった。ただし、九十二点だけだな!　なんでその点数で一番低いんだよ畜生!

「つーかお前は見た目と設定が一致してないんだよ!　これまでお前の為にあんまり描写してこなかったけど、お前結構チャラチャラしてるからな!?　今だって、ネットレスしてるし、指輪してるし!　それで頭が良いとか明らかにおかしいだろうが!」

「話を戻すぞー」

畜生!　スルーされた!

「アホな幸助の為に説明するが、この棒倒しでなぜ俺達が一番不利なのかと言うと、確実に俺達が集中攻撃を受けるからだ」

「まだ競技が始まるまで二十分の余裕はあるぜ?　なんでそんな事が解るんだよ」

「今、一年で点数がTOPなのは、俺達だよな?」

とは言っても、借り物競争で他のクラスとの差を縮められてしま
ったが。

「ああ」

「しかしその点数の差もあまり無い。そして次の競技は全クラス合
同で行う物。そうなれば、点数が一番高い俺達を集中的に潰す方が、
効率的に逆転できる」

「な、なるほど。確かに、そりゃそうだよな。で、勿論それをなん
とかする方法は、あるんだよな？」

「は？ 他のクラス全員を相手にして、勝てるワケ無いだろ」

「じゃあどうするんだよ!？」

「だから、競技中にどうあがいても勝つ事は無理だつて。でも、今
ならまだ間に合うかもしれない」

「.....?」

イマイチ、嵐の言っている事が理解出来なかった。

「今から他のクラスの委員長に交渉を持ちかける」

「交渉？ そんな事、上手くいくのか？」

「さあな。ただ、どうせ他のクラスの委員長は俺達を集中攻撃する
事ぐらいは暗黙の了解みたいな様子だったからな。正式な同盟を結

んでいるワケじゃないだろう。それなら、まだ交渉の余地はある」

交渉か。

確かに、次の競技で集中攻撃を受けて最下位で脱落してしまうと、他のクラスに逆転されてしまう。

これでは妥当祭さんどころの話では無い。

それに、今の所、祭さんのクラスが全校でTOPの様だし、恐らく次の棒倒しでもTOP通過だろう。

俺達のクラスは借り物競争で点数を落としている分、ここでまた一位をとり、そして校内騎馬戦で祭さん達のクラスを倒さないと、逆転する事は出来ない（最終競技にはそれだけの点数が加算される）。

「さてと。話も通じた所で、行くぞ。幸助」

「へっ？ 俺も？」

「当たり前だろ。一応は副委員長なんだから。他の皆は競技に備えて、しっかりと準備運動をしていてくれ」

そう言っつて、嵐は席を立ち、俺もそれに続いた。

俺達が向かったのは、一組の応援席。

そして現在一組は、俺達との差があまり無いクラスだ。というか、一年の中では二位のクラスだ。

「何か用か？」

サッカー部の期待のルーキーである太田は、言ってみれば誠実な人柄の男子だ。

同じ委員長でも、どっかの誰かさんとは大違いだ。

「ああ。交渉をしたい」

「交渉？」

さっそく、本題に入った。

ていうか、一組の皆さんの視線が痛い、というか怖いです。

百万円の力って恐ろしい。

「……………いいだろう。で、内容は？」

「簡単だ。これからの競技において、俺達と同盟を組んでくれないか？」

これからの競技、という事は棒倒しだけで無く、最終競技の校内騎馬戦も、という事か。

「同盟？ 内容は」

「もしもお前達一組が俺達と同盟を組み、そして俺達が総合優勝した場合、獲得した賞金の内、三十万をお前達のクラスに寄付する」

嵐の一言で、ザワツ、と一組がザワつく。

因みに、祭さんの言う優勝賞金、文化祭予算百万円は総合優勝した場合の分だ。

そして、各学年においてのクラス優勝をすると、五十万円。

つまり、総合優勝すると合計百五十万円入手する事が出来る、と

いうワケだ。

その内の三十万ならば、まだ交渉として使う分には問題無いだろう。

ただし、これはあくまでも優勝した場合の物なので、相手が乗っ
てくれるかどうかにかかっている。

「俺達は現在、総合で見ると三位だが、次の競技、そして最終競技
で一位をとってしまえば優勝出来る。そして、お前達の協力でもし
もそれが達成出来たなら、三十万をGET、という事だ。あんまり
悪い話じゃないと思うが？」

「．．．．．同盟、と言ってはいるが、例えば次の競技で仮に俺
達のクラスとお前達のクラスが残ったとすれば、俺達が最終的に
お前に負けないといけないわけだな？」

「そうなるな。ただまあ、そうだとしてもお前達はこの競技で二位
になれる。そうすれば、確実に高得点が加算されて、総合順位でも
上に行ける確立が高まり、もしかしたら上位三位にまで食い込める
かもしれない」

実際、運動神経は一年トップの一組なだけあって、総合順位でも
三位圏内を狙える位置にいる（総合三位までにランクインすると、
二位に五十万円、三位に三十万円が与えられる）。

しかし、それにしても、こうしてよくもまあ平然と八百長まがい
の事を出来るもんだ。

あの選手宣誓の、スポーツマンシップにのっとり云々のくだりを
嵐は完全に忘れて^{コイツ}いるだろう。もしかしたら最初から聞いていな
ったのかもしれない。

ありうる。

それにしても、実際には「同盟」という言葉を借りた八百長なの

かもしれないが、俺だって文化祭予算は欲しいので黙っておこう。

そして、今の問題は、太田が渋っている、という事だ。

やはりコイツは嵐とは違い誠実なスポーツマンなので、こういう八百長まがい（と言っておこう）の事には抵抗があるのだろう。

ただ、高確率（？）で三十万GETは美味しいのか、一組の生徒はみな、少し乗り気だ。

「あー。それと、これは一応同盟の副賞みたいな物だが、」

「こによこによと嵐が太田に何かこっそりと耳打ちをした。すると、」

「解った。喜んで同盟を組もう」

「ああ。よろしくな」

ガシツ、と互いに固い握手をかわした。

一体どうなっているんだ？

「嵐、一体どうやって太田を説得したんだ？」

自分達のクラスの応援席までの帰り道で、俺はさっそく嵐を問いただした。

コイツがいったい、どんなカードを切ったのかが気になる所だ。すくなくとも、そのカードには太田のスポーツマンシップを捻じ曲げる程の効果があつたのだろう。

でなければ、あの太田が動くはずが無い（これでもしばらく尾行

していた身だ)。

「あー。あれな。最初は、あの手は無かったんだけどな。競技中にいきなり良い切り札ジョーカーが生まれてラッキーだった」

「競技中に、生まれた？」

「どういう意味だ？」

「簡単簡単。太田って、女に少し疎いというか、苦手な所があるだろ？」

「まあ、そうだな。それにしても、そんな太田がよくもまあ、あんな大勢の前で告白したもんだ。こんなんじゃないや、デートもロクに出来ないんじゃないか？ って、．．．．ん？」

「感づいたみたいだな」

「おい．．．．まさか、お前．．．．」

「ああ。太田に『初書先輩とのデートについて相談にのってやるから』みたいな事を言っちゃったらすぐに乗ってくれた。いやー。シヤイな少年って言うのはチヨロイね。こんな事で乗ってくれるとは」

「謝れ！ 全国のシヤイな少年達に謝れ！」

確かに、太田の正確ではデートなりなんなりを一人で計画したりする事は厳しいだろう。

しかし、ソコを突くか普通！？

外道にも程があるだろ！！

それにしても、確かその借り物競争でその切り札とやらが生まれたのだが、負けた競技でもちゃんと武器となりえる情報を回収しておく嵐もさすがだ。

「これが本当の切り札ジョーカーってヤツだ」

「カッコつけるんじゃない！ そんな外道な切り札ジョーカー聞いた事ねえよ！」

そしてその後の棒倒しでは見事、一組の活躍により、俺達は一位を獲得した（最後に他クラスとの相打ちを装ってくれたのは助かった）。

そして次は、最終種目である校内騎馬戦を残すのみとなった。

第十三話 走る餌

最終種目、校内騎馬戦。

騎馬戦、とは名ばかりの、「集団八チマキ争奪戦」だ（決して、「リング争奪戦」などではない。死ぬ気の炎なんか使えねえよ）。

他クラスの大将（という言い方は大げさか）、もとい、委員長の騎馬から、ありとあらゆる手段を使って他クラスの委員長のはちまきを、別クラスの生徒が奪う、という事がルールだ。

この学園における体育祭の花形イベントで、毎年この変則騎馬戦が異様に盛り上がるらしい。そして勿論、両親バカッブルの学生時代にもあつたもので、倒産、じゃなかった、父さんは二年生と三年生の二度の優勝経験を持っているらしい。

そして、今体育祭の優勝候補が、祭さんの率いる二年四組が、総合得点でTOPだ（三年生で全ての競技でTOPのクラスは無かった）。そして二位に三年一組。三位に俺達一年四組。しかし、この校内騎馬戦で優勝すれば一気に逆転できる。

「さあ、各クラスの騎馬の入場です！」

この校内騎馬戦で最初に入場するのは、クラスの委員長が乗る騎馬だけだ。何しろこの競技は全校生徒参加型なので、全校生徒を一度整列させるよりも、騎馬だけ入場させた方が時間的に効率的だからだろうか。

俺が校舎の影からこっそりグラウンドの様子を伺っていると、一年生から三年生まで各クラスの騎馬が入場する。因みに俺達のクラスともえかずきの騎馬を作っているのは、映画研究会の部長の巴和樹、副部長の長田海斗、部員の江西洋介だ。ながたかいと えにしよすけ

映画研究会は、部員が少ない為、撮影機材も日々、自分達で管理、そして運んでいたりする。

よって、なまじそこらの運動部員よりも筋力・体力共にある程度備わっている。

騎馬としては申し分ないスペックだ。

そうこうしている間に、全クラスの騎馬が出揃った。

「えーっと、それでは、生徒会長の祭盛人君から、一言、申し上げてもらいたいと思います。盛人君、一言どうぞ」

「はい」

キリッ、とした様子で騎馬から降り、そして朝礼台の上にかかる祭さん。

カッコいい。

ただし、それは右手で抱えている「まんがタイムきらら」が無ければの話だが。

「この競技は、学園の伝統が詰まっている競技です。この競技でこれまで先輩方が積み上げてきた歴史に恥じないように僕達も精一杯競いたいと思います」

歴代の先輩方が今、「まんがタイムきらら」を片手に朝礼台に上がり、一言申し上げてしまった現生徒会長を見たらどう思うのだろうか。

「はい。ありがとうございました。それでは、十分後に競技を開始します。各クラス委員長、それぞれの開始位置へと移動してください」

さすが放送部のエース（いや、だから放送部にエースも何もあるのか？）の牧田さんなだけあってか、普通に「まんがタイムきらら」

のネタ（ネタなのか？ いや、ネタであってくれ！）もスルー。

各クラスの委員長が騎馬から降りて、それぞれのスタート位置へと移動を開始した。

我が一年四組のスタート位置は屋上だった。

「おい嵐。なんで屋上がスタート地点なんだよ」

しかも、大将を警護する為の近衛兵の人数は俺を含めてたったの五人（俺、龍神、長瀬、その他二人）だ。

「逃げ場が無いこの屋上じゃあ、もしも他のクラスが来た時に一気にやられてしまうんじゃないか？」

「そうだな。だけど、だからこそ、ここなんだよ」

「？」

「お前が今言った通り、この屋上はかなりリスクが高い場所だ。逃げ場が無い以上、俺達はスタート前から追い詰められている状態だからな。だが、たとえ他のクラスが屋上^{こゝ}に来て、そして俺達を倒したとしても、その瞬間、逆に俺達を倒したクラスの奴等が逃げ場を失い、他のクラスに追い詰められてしまう形となる。そうなれば三十人しか居ない貴重な戦力が多少なり減少してしまうだろう。俺なら、たかだか一クラスを潰すために、序盤にこんな所には来やしないがな。それに待ち伏せ、という可能性を考慮する必要がある」

お、おう……要するに、まだ多少は屋上は安全だ、という事か。

「ま、こりゃあくまでも序盤の話だ。クラスの数が減った後半になるとさすがに通じないだろうけどな」

「それじゃあ、序盤は俺達はどこで籠城か？」

「違う。それは俺の性に合わない」

「は？」

「あくまでも俺達は、攻める。ちまちまと籠城なんざしてられるか」

「ですよー」。

お前がこんなちまちまと他のクラスの数が減るのを待つワケないよー」。

因みに、クラス委員長は地面に足をつけてはいけない、というルールがある。

長時間騎馬を組む際の体力についても考えなければならないので、長期戦はどのクラスにも不利だ。

因みに、ハチマキには取った数だけ、ボーナスとして賞金が加算されるが、直接の勝敗には関係無い。

何しろ最後まで残っていたクラスが優勝だからだ（最後に残った三クラスからTOP三が決定する）

「んじゃ、幸助。これを頼む」

しゅるり、と嵐は自分の額に巻いていたハチマキを取って、そして俺に渡した。

「……………おい嵐。確か委員長のハチマキを取った瞬間、負けなんじゃ……………」

「お前は人の話を聞いてなかったのか？ 敗北条件はあくまでも、『他のクラスにハチマキを奪われた場合』だ。だから同じクラスの生徒に渡す分は問題無い」

まあそりゃそうだが……………。

「これぞ裏ルール。紙絵が調べてくれたから間違い無い。ただし、委員長である俺の足が地面についた時点で失格だけどな」

「っていつか、俺に渡してどうするんだよ。こんなもの」

「そうだな。まずは頭につける」

「？ こうか？」

俺は自分の額に、元々自分が額に巻いていたハチマキの上に、嵐のハチマキを巻いた。

「よし、その状態で下まで降りて、そして戻って来い。それだけだ。」

それだけ、ね。

なんだかコイツの考えが読めてきた。

伊達に長年、コイツの悪友をやっていない。

「……………あのさあ。それってさあ……………」

「察しがいいな。さすがだぞ幸助。そうだ。要はお前は餌だ。他のクラスを屋上^{（上）}まで引き付けて来い」

「鬼かお前は！！」

他クラスの目的であるハチマキを持っている生徒がノコノコと下までワザワザ降りてきたら、そりゃあ誰だって襲^{（襲）}うに決まってるだろ！

「俺一人でやるのか！？ お前行っておくけどな、俺が他のクラスに見つかったらすぐに集中砲火だぜ！？ ハチマキ取られちゃうぜ！？」

因みにハチマキは、取った数だけ予算がボーナスポイントとして加算される（一枚取るごとにボーナスでプラス一万円だ）

「大丈夫大丈夫。そういう時はほら、アレだ、必殺のサテライトキヤノンだ」

「無理に決まってるだろうがあああああああああああああああああああ！！」

そもそも委員長のハチマキを持った俺が良い待遇を受けるとは思えない。

すぐさまボロ雑巾にされるに違いない。

「まあサテライトキヤノンは冗談として、俺はお前を信じてる」

「ッ……」

真つ直ぐな、そして今までにないぐらいの真剣な表情で俺を見据える嵐。

お前、そこまでして祭さんに勝ちたいんだな……。

仕方が無い。

今回ぐらい協力してやるか。

俺を信用してくれている嵐コイツの為にも。

「お前のその、貧弱で弱虫で臆病な性格が幸いして逃げまくったあげく鍛え抜かれたその脚力を」

「変な後付設定するんじゃねえ！　そもそもお前の喧嘩に巻き込まれた所為で逃げまくっていた日々を送っていたんだろが！　っていつか俺の心の描写五行分を返せ！」

「相変わらずバカだなお前は。日本語もちゃんと使えないのか？　『巻き込まれた』んじゃなくて、『勝手に巻き込まれた』んだろが」

それを言われると返す言葉も無い。

「っていつか、せめて俺を信用しろよ」

「無いな。ないない。俺が信用しているのはそのお前の脚力だけだ」

コイツに一度、『友情』とか、『絆』という言葉を知ってもらいたい。

「でもまあ、感謝はしてるけどな。一応」

「・・・・・・・・・・」

「話は終わりだ。さっさと行け。お前にも、多少だけなら信じてやる」

コイツは『友情』とか、『絆』という言葉は知らないのかもしれないが、まあ『感謝』と『腐れ縁』という言葉は知っていたようだ。

「解ったよ。行けばいいんだろ。行けば」

俺は託された八チマキをぎゅっ、と結び直し、屋上を後にした。

屋上は、校舎の四階の上にある。

そして俺が現在居るのは二階。

ここまではなんとか、他のクラスと鉢合わせにならずに来る事が出来た。

まあ俺の役目は、『他のクラスを屋上までひきつける事』なので、これでは役目を果たしているとは言えないが。

「『行く』って言ったものの、逃げ切れるかなあ・・・・・・・・・・」

歩くたびにチラチラと校内に設置された最新鋭の監視カメラが目につく。

さすがに全ての生徒が外に出ているとは限らないので、こうして校内に限らず、ありとあらゆる所に監視カメラが設置されており、ライブ中継状態となっているので、外の観客席のスクリーンにもこうして映し出される仕様となっているのだ。

つーか無駄に金をかけすぎだろ。

いようだった。

とは言っても現在一対五。

不利な状況だと言う事は変わらない。

しかも相手が俺よりも体格の良い二年生だ。

運動部に所属しているだろうし、勿論足も速いだろう。

しょっぱなからピンチか……！！

「ってあれ？」

おかしい。

後ろの二年生との距離がみるみる離れていく。

「こんにちは。幸助さん」

廊下の角から突然、風人が飛び出してきた。

そして俺の隣を並走する。

「うわっ！？ び、ビックリするな……」

「まあ、それは置いといて、さっそく本題に。後ろの二年生の事についてですが」

ああ、そういえば風人は紙絵さんと一緒に情報収集してたんだっけ。

「なあ、あの二年生は一体どうなってるんだ？ なんか見掛け倒し、って感じが否めないのだが」

「そりゃそうでしょうね。彼等は文化系の部活動に所属していますし、日ごろから走っていない所為なのでしょう」

「文科系かよ!？」

「はい。裁縫部です」

「意外と技巧派だった!」

そして風人はくるり、と引き返し、いともあっさり五人のハチマキを奪っていった。

いや、お前もオーバースペックすぎるだろ。

いくら裁縫部といっても五対一だぞ？

結局、俺の役目は先程の事では果たしたと言えない。

「よし、次こそはっ!」

と意気込む俺。

しばらく歩き、そして曲がり角を曲がった瞬間、

「……………」

再び五人の生徒が待ち構えていた。

しかも全員三年。

ああ、そういえばさつきも俺は何の警戒もせずに出して、足音も消すという事も試みずに普通に歩いていたら足音も当然静まった廊下に響き渡っていたワケで。

それはつまり、待ち伏せが簡単に出来る、という事ワケだ。

「……………逃げるツ!!」

俺はすぐさま全力ダッシュ。

当然、背後から三年生が追いかけてきた。

先程の技巧派二年生とは違い、やはり、速い。

恐らく所属している部活も運動部だろう。

しかし、俺はなんとか逃げ切っていた。

「ああ畜生！ 今日は何れだけ走りゃあ気が済むんだよおおおお
おおおおおおおおおおお!!」

俺は指示通りに屋上へと向かう。

執念か、五人の三年生は未だ追いかけてきていた。

「ええい！しつこいにも程があるでしょう！？ しつこい男は嫌わ
れるという事を知らないのですか!？」

一応先輩なので敬語。

心なしか、五人が涙目になった、ような気がした。どうやら地雷
を踏んでしまったようだ。

そして屋上のドアが見えてきた。

ドアは開いてある。

「幸助！ 速く！」

龍神の声が聞こえた。

そして俺は屋上に飛び込んだ。

続けて、五人の三年生が飛び込んで

「てい(げしっ)」

「「「「「ぎゃああああああああああ!!」「」「」「」

こようとしたが、龍神達近衛兵四人にドアに入る前に思いつき蹴飛ばされ、階段をゴロゴロと転がって行った。

「大漁大漁。こんな狭いドアに五人一斉に押し込んでこようとすれば、格好の的だろ」

と、嵐がさも当然のように言った。

「鬼だ！ 鬼が居る!!」

いや、確かにこの屋上のドアは一人分しか入れるスペースが無いし、五人一斉にすれば、そりゃ狙い撃ちだが、何も蹴って階段から突き落とす事は無いと思う。

「今の内にハチマキだけ回収しておけ。後は邪魔だから廊下の物置にでも突っ込んで」

無常な嵐の一言を皮切りに、ノックアウトしている先輩のハチマキ回収作業が始まった。

屋上に監視カメラが付いてないのが何よりの救いだった。

第十四話 体育祭終幕

あれから俺は何回か餌として校内を駆け回り、そして屋上におびき出している階段の下に突き落とし、おびきだしては突き落とし、を繰り返した。

正直体力以前に心が痛い。

しかも俺が頑張っているというのに時折嵐は携帯をいじっていたり、誰かと電話をしていたりした。

畜生。俺が必死に働いているっていうのに。

「ぜえっ、ぜえっ、も、もう限界だ。何往復したのかも解らなくなってきた」

でもまあ、他のクラスの戦力もそれなりに減らしたのではないのだろうか。

そうでなかったら俺が報われなさ過ぎる。

「そうだな。そろそろ動くか。今は校舎内の生徒の数も少ないようだし」

俺達は屋上からようやく抜け出して、下の階へと降りる事にした。どうやら他の生徒は情報収集（主に監視等）に駆り出されているらしい。

戦力よりも情報を欲しがる所は嵐らしいといえばらしい。

「これからどうするんだ？」

「そろそろ本格的に動く」

ああ。やっぱり俺の働きも本格的じゃなかったみたいだな。解ってはいたけれどなんだか疲れがさらに溜まった気分だ。

「具体的には他のクラスの委員長潰しだな。ボーナス点も欲しいし」

八チマキ一枚に付き、ボーナス点一万円が加算される。因みに、委員長の八チマキは五万円だ。

ていうか見かけがチャライ嵐が「委員長潰し」とか言つとなんだか物騒に聞こえるのは気の所為なのだろうか。

「戦力の大半を情報収集に使ったからな。もう大体の委員長の位置は解っている」

クツクツクツ．．．．と邪悪な笑みを浮かべる嵐。

ああ、こうして見てみると祭さんが正義のヒーローに見えてくる。逆に嵐は完全に悪役にしか見えない。

嵐はアレだな。間違つても一方通行さんみたいなダークヒーローコイツ（？）にはなれない。

ゲームとかで味方を殺しまくつて高笑いを上げるようなヤツだよ。コイツは。

特にモンハンと一緒にやるのはオススメしない。

素材を剥ぎ取っている途中で絶対攻撃してくるからな。

俺なんか何回もやられたからな。

「さて、狩るとしますか」

俺の働きにより戦力が半減したクラスと一気に襲う、という外道な作戦を嵐はためらわずに実行。

瞬く間に委員長の八チマキを三枚も入手した。

因みに、襲う、という表現通りに基本的には背後から襲撃。

ハチマキを取られたクラスからは「鬼！ 悪魔！ この外道！」
と言われたが、対して嵐は「最高の褒め言葉だ。これからもより一
層、鬼で悪魔で外道になれるように頑張るよ」とだけ言い残してい
った。

うん。

俺目線から見てもなかなかの外道だと思う。

「チツ。この程度かよ、シケてんな」

嵐が奪い取ったハチマキを手で数えながら言った。

昭和のチンピラか。お前は。

「そういえば、今、全体の戦況はどうなっているんだろうな」

「確かに、そろそろ気になるな。龍神、紙絵からの連絡は」

「今丁度メールで通知されてきたよ。生き残っているクラス数は、
十二クラス中五クラス。つまり約半数は脱落した、っていう事にな
るね。内のクラスからは四人が脱落している。どれも同盟を破った
際に脱落する予定だった人達だ」

情報収集統括者は紙絵さん。情報収集統括者、なんていう中二く
さい肩書きだが、用はみんなが集めてくれた情報を統括し、管理す
るのが主な役割だ。

そして肝心の情報収集は機動力のある彩と神戸さんが大活躍らし
い。

まあ、あの二人はかなりのオーバースペックだからな。

「生き残っているクラスは？」

「一年は一組、二組、四組。そして残りは祭さんの一年四組と、三年一組」

それはつまりポイント上位クラスは全て残っている、という事だ。金による同盟を結んでいる（嫌な言い方だなあ……）一組が残っているのはありがたい。

……いや、よく考えてみると嵐が一組が生き残るように、何かしらの指示をしていたのかもしれない。

「ん？」

その時、龍神の携帯に、メールが入った。

「どうやら祭さんのクラスと三年のクラスが激突したらしい」

「チャンスだな」

これこそ、この状況こそ、嵐の言う「裏切る」タイミングなのだろう。

これまで何度か祭さんのクラスと連携は行ってきたので、まだ味方だと思ってくれているだろう。多分。

「よし、行くぞ」

「嵐おまえも行くのか？」

「情報収集組も集めるが、しかし他クラスの事もある。一組を護衛に使うには信頼感が足りない」

確かに、それなりの順位に居る一組を委員長あいつの護衛に使っても、

いつ裏切るのか解らないだろう。

「それに、相手もこっちが裏切るのは予想済みだろう。そんな相手に、委員長以外のメンバーだけを差し向けても、相手に警戒心を与えてしまっただけだ。それなら、俺が直接出向くしか無いだろう?」

一理あるかも。

要は、これもまた「信頼関係」だな。

俺達と祭さんの間に信頼関係があるかないかではなく（俺達は祭さんを信頼してはいるが、あっちの方はどう思ってくれているんだろ?）、あくまでも「同盟上の信頼」だ。

まあ、初めから互いに裏切る事を知っているのならば、この同盟には初めから信頼という物は存在しなかったのかもしれないが。

「そっすいう事だ。行くぞ」

嵐はなににくわぬ顔で、まるで、今からコンビニにでも行くかのような様子で、行くぞ、と言った。

嵐が言った作戦はこうだ。

まず俺達が祭さん達に加勢する、フリをして、祭さん達二年四組と、三年一組の激突している場へと飛び込む。

そして序盤は祭さん達を助けつつ、三年一組のハチマキを取った瞬間に（この場合はどちらのクラスが取っても問題は無い）、裏切る。

具体的には同盟を結んでいる一組が祭さん達のクラスの後ろをとって突撃、という魂胆だ。

……上手いくのだろうか? 相手は祭さんのクラスな

のじ。

「龍神。今、祭さん達のクラスはどこに居る？」

「現在グラウンドで交戦中」

「よし、急ぐぞ」

急ぐ、と言っても嵐の場合は騎馬に乗っているので、移動速度にも制限がある。

あまり無理して急ぐと逆に騎馬が崩れて失格になってしまう恐れがあるからだ。

そして、グラウンドに到着。

確かに、ニクラスが互いにハチマキの奪い合いが繰り広げられている。

ニクラスの委員長は二人とも確認出来ている。

ハチマキの奪い合いの状況は五分と五分、と言った所だ。

ていうか祭さん。

こんな時にでも「まんがタイムきらら」を常備するのはさすがだと言わざるおえない。

「参戦だ！」

嵐の合図で、俺達は乱戦の中に飛び込む（因みにこの時点で嵐の委員長のハチマキは返却済み）。

とはいえ、両クラス俺達よりも体格は上だ。

しかし、それでも、数の差は埋められず、ついに、三年の委員長のハチマキを、奪い取った。

因みに奪い取ったのは俺で、手の中にギュっ、とハチマキを握り締めている。

これで三年一組は脱落だ。

「一組！ 今だ！」

直後に、嵐がさつそく、合図と共に同盟を破棄。

一組に援護の合図を出したが。

「残念だったな」

「ッ!？」

一組は、いつまでたっても、姿を現さなかった。

「一年一組はもう脱落しているぜ」

祭さんの手には、相変わらず「まんがタイムきらら」があった。

そして、ページとページの間にチラリと見える物。それは、

「い、一組のハチマキ!？」

俺はおもわず叫んだ。

作戦どころか同盟自体がバレていたようだ。

「お前らが同盟を結ぶのを見ていなかったとでも思っていたのか？」

そういえばそうだ。

あんな大事な同盟を堂々と人前でしていたのだ。

勿論、祭さんは見ていたのかもしれないし、それに誰かに聞かれたのかもしれない。

嵐の、戦術ミス。

一斉に俺達四組と祭さんのクラスが激突したが、俺達は同盟により戦力半減。

生徒メンバーが同盟通りに離脱した。

数でも、体格差でも圧倒的に負けている。

「でしょうね」

しかし嵐は、動じない。

いや、この感じはまさに、「計算通り」という顔だ。

「一組は脱落した。だから頼んだぞ。二組！」

直後。

どこに潜んでいたのか、一年二組のメンバーが突如として一斉に現れ、そしてこちらに向かってくる。

「何っ!？」

「そつちがこつちの考えを読んでいる事は読んでいます。だから、密かに二組と同盟を結んでおきました」

そうか。

嵐が屋上で時折携帯を使って誰かと電話をしていた電話相手は、二組の委員長だったのか!

これで戦力は逆転。

数で圧倒的に俺達が勝っている。

もしかして、勝った!？

「俺達の勝ちです! 祭さん!」

嵐が叫んだ。

しかし祭さんはケロツ、とした表情で、

「いやいや。後輩に勝ちを譲るほど、俺は大人じゃねーよ？」

と言った。

直後に、倒したハズの三年一組が、一年二組と激突し始めた。

「なっ!? 三年一組は倒したんじゃないあ……………」

俺が呆然としている間に嵐がハツ、として、

「幸助！ 奪ったハチマキを確認しろ！」

俺が確認すると、ハチマキは良く見ると委員長仕様の物ではなく、一般の生徒が持つ物と同じだった。

嵐いわく、裏ルールを使ったのだろう。
辺りをよく見渡してみると、騎馬を組んだ三年生が確かに、物陰に待機していたのを確認した。

「他のクラスと同盟を結んでいたのが、お前達だけだと思ったか？」

「くっ……………！ まさか総合二位のクラスと同盟を結ぶなん

て……………!」

「いやあー。百万円寄付する、って言ったら快く引き受けてくれたぞ?」

……………今サラリと汚い事言った!

「そうか。やけにハチマキの回収に勤しんでいると思ったら、そういう事が……………!」

総合優勝クラスは、学年優勝と含めて総額百五十万円を手にする事が出来る。

しかし、そこからハチマキを大漁に奪い、ボーナス点を加算していけば、五十万円加算する事も可能だろう。

実際、ハチマキの大半は祭さんのクラスが奪っていて、五十万円分差し引いても有り余るくらいだ。

「結構、いい所まで行ったのは褒めてやるけど、まだ詰めが甘かったな」

「……………ッ!」

結局その後、俺達は数と体格差によって、敗北した。

結果は三位。

獲得賞金は合計百万円だが、その内三十万円は一組の同盟条件によって三十万円を寄付（優勝は出来なかったが、結局は渡す事にした）。そして二組の同盟条件は二十万円だったので、その分も寄付。最終的に我がクラスに残ったのは、五十万円のみ。

「あー畜生! 勝てると思ったんだけどなあー!」

「ごろん、と嵐が体育祭後の屋上に寝転がる。
相当悔しそうだ。」

「まあ、俺達じゃまだまだ祭さんには敵わない、って事だな」

と、嵐をなぐさめつつ、俺は気になる疑問を口にする事にした。

「なあ嵐。どうして『打倒祭さん』なんかしたんだ？」

「あー。その事なー」

あれ以降、たびたび問いただそうとしてもはぐらかされてきた。

「んー。そりゃあ、祭さんに一度は勝つてみたい、という気持ちもあつたけど、なんつーか……」

嵐はしばらく遠くとみたような視線を向けると、

「アイツが見にくるから少し、カッコつけたかったのかもな」

ぼそつ、とそれだけ言った。

「アイツ？ っていうか、カッコつける、って、今日のお前はかなり鬼だったぞ」

「なんでもねーよ。さて、帰るか。そろそろ片付けも終わった頃だ
るーし」

アイツ、って誰だろう？

なんか、嵐の身近に居る人、のような気がするが。
誰だろう？

彩がもしこの場に居たのなら、「あんたって、ホントに鈍感ね」とか言いそうだが。

そしてその時、屋上のドアが開いた。

「ここに居たのね！？ アンタ達、委員長と副委員長なのになんで後片付けサボってんのよ！」

「……………今から行く所だったんだ。彩」

「はあ！？ 寝言は寝ていいなさいよ！」

「ホントだつて！ だからその拳を下ろしてく……………ぎゃあ
あああああああああああ！」

こうして、俺達の高校一年の体育祭は幕を閉じた。

まあ、色々と無茶をやらかしたと思うけど、それでもこの体育祭は恐らく、良い思い出となって俺の、俺達の中に残り続けるだろう。

俺達を照らす、この真っ紅な夕日と共に。

第十四話 体育祭終幕（後書き）

体育祭編、完結！

この「体育祭編」は主に幸助と嵐が活躍したと思います。この二人は仲が良いのやら悪いのやら（笑）

まあでも、この二人は大人になってもこうして良い悪友同士であると思います。

大人になった、（大学生ぐらいかな？）幸助達まで描いていたら良いのですが、高校一年生の時点でこんなにも話を消費してしまうとなるとそれはいつになる事やら。

しかし、一応、幸助達の卒業まで描いていけたらいいな、と思っています。あくまでも予定ですが。

この「体育祭編」では、普段と少し雰囲気違って、バトル的な物を書いてみました（バトルかコレ？ いや、違うか？）。

それと、意外と嵐も頭がキれるぞ！ という事も描いてみたかったので、作戦を考える役目は嵐に一任しました。

そして、SSを挟んだ次の章、第六章では「文化祭編」を予定しております。

幸助達はどのようにして文化祭を過ごすのか！？ 乞うご期待（？）

次は恒例SSシリーズ。

幸助と彩の過去編を予定しております（あくまでも予定。変更の可能性有）。

俺と彩のファーストコンタクト

さて。

そろそろ、俺と彩の過去編を語っておこうと思う。

内容は至って、至極簡単だ。

俺と彩の初めての出会い、もとい、ファーストコンタクトだ。

まず一つ言っておくと、彩は最初（つまり俺が初めて彩に出会った時）は、今の首筋にかかるぐらいのセミロングヘア、では無く、むしろロングだった。

綺麗なロングヘア。

しかしある日、そのロングヘアをばっさり切ってしまった。

それはなぜなのかは俺は未だに解らないが、しかし、なんとなくだが、俺が関わっているような気がする。

そもそも、彩は元々、そのロングヘアの髪をとても大切にしていた。

しかし、その大切な髪を切ってしまった。

たったそれだけの話。

それだけ。

ただ、俺が何らかの形で彩にその大切な髪を切ってしまったようなキツカケを与えてしまったのだと思うかと、なぜだか罪悪感がわいてくる。

そして繰り返して言うが、これはただそれだけの話。

俺と彩が、「幼馴染」になる前に、「友達」として出会った頃の話だ。

あの時。

あの頃。

季節は春だった。

別れの春、出会いの春、というような言葉を聞いた事があるような気がするが、俺は特に誰かと別れる事もなく、そして、彩に出会った。

その出会いは、我が家の近くに引越してきた親子連れと、その親子連れが挨拶我が家に挨拶をしにきた、というシチュエーションから、始まった。

「こんにちは。これからよろしくお願いしますね。これ、つまりない物ですが」

「ああ。どうも。こちらこそよろしくお願いします」

他愛の無いオバサン（なんだかどこからともなく殺気を感じたので訂正しよう。おねえさん）同士の会話。

そして、その挨拶に来た母親の足の袖をちよこつ、と掴み、そしてぶすつ、とした表情で居たのはまぎれもない、当時小学一年生だった天音彩だ。因みにこの頃は今とは違い、髪が背中にかかるくらいにまで伸びていた。

そんな彩を母親の側でぼーっ、と見つめていたのが、当時小学一年生の俺、桐山幸助だ。

その後、わが子達をほったらかしにしてママ同士の会話は意気投合してゆき、ついには家に招き入れた。

無論、そういう場合は子供など蚊帳の外で、俺と彩は別の部屋で

二人つきりとなったのだ。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

会話など、弾むはずも無い。

ただまあ、憎たらしい具合にママ同士の会話は弾んでいた。

「・・・・・・・・・・お、俺、幸助・・・・・・・・・・えっと、名前はなんていうんだ？」

「・・・・・・・・・・別に」

エリカ様がお前は。

と、今の俺ならばツッコんだらうが、あいにく当時小学一年生だった俺にはそのようなツッコミなど、出来るハズも無かった。

「・・・・・・・・・・えっと」

「何よ」

怖かった。マジで。

当時の彩は今と比べるとかなり尖ってたと思う。

それに比べて、今はまだ、かなり可愛くなったと思う。

しかし当時の俺には女の子相手ににらまれたぐらいでは諦めない程度の根気は備わっていた。

「名前は？」

「……………」

「名前教えてくれよ」

「……………」

「なーまーえーをおーしーえーてーくーだーさーい」

「ああーっ！ もう！ うるさい！ 彩よ！ 天音彩！」

今思い出しても、確かに最後のはかなりうるさかったと思っし、ウザかったと思う。

ただしかしまあ、これによって俺はかなり緊張がほぐれた。その点については感謝だ。当時の俺に。

「そうか。彩か」

「名前で呼ばないで」

にらまれた。また。

「あ、天音」

今思うと、これは明らかに俺のイメージしていた「小学校一年生同士の会話」じゃないと思った。

「これぐらいの頃は男の子と女の子でも」「くん、くん、」「ちやん、」というように「君付けちゃん付け」ではないのだろうか。

「……………」何よ

「な、な、な、な、何よ急に!？」

「何が!？」

「……ううー。もういいっ」

その時が初めてだった。不機嫌以外の表情を見せてくれたのは。正直、子供ながらに可愛い、と思ってしまった。

「天音は……どうしてそんなに不機嫌なんだよ」

それはもはや俺の所為なのかもしれないが、だとしたら一応謝ろうと思って、今度は質問してみた。

また答えてくれないのかな、と思ったのだが、彩はチラリと部屋の時計を見た後、

「……ママが、今日はお人形を買ってくれる、って行ったのに……全然連れに行ってくれないし……」

「ぶっ」

「なっ! 何よ! 何がおかしいのよ! 私、今日は楽しみにしてたんだから! それなのに全然ママが連れて行ってくれないし……」

「あはは。いや、別におかしいとかじゃなくて、ただ、お前ってやっぱり可愛い所があるんだなあ、って」

「……!」

彩が帰る頃までには、俺と彩は打ち解けていた。

そして、彩が一応俺の近所に引っ越してきたワケだが、学校自体は同じだったらしい。

まあ、あまりそう遠くない距離の引越したったらしい。だからそれまで、同じ学校に居た、という事は知らなかった。何しろその時はまだ五月になったばかりだったからだ。

まあ、彩は彩で、そして俺は俺でそれぞれ程ほどの友達を作ったりして、互いにもあまり関わらないまま数日が過ぎた。元々、クラスも違うのだ。

それも当然であった。

因みに、龍神や神戸さんと出会ったのもその頃だ。

今から思えば、現在のメンバーの中でなんだかんだ言っつて、彩の次に龍神との付き合いが一番長い気がする。

ただまあ、昔から龍神は神戸さんと一緒に、本ばかり読んでいたから仲が良くなるのは少し時間がかかったが。

「幸助。あの子、誰？」

「ん？」

放課後。

下校直前の俺のクラスの教室に、彩が現れた。数日ぶりの再会だ。

「あれは………天音？」

「りゅーじん。彩にみとれてたの？」

「なんで俺が」

「だ、だから、アンタと一緒によ……」

「……………」

意味が解らなかった。

「し、仕方が無いのよ！ お母さんに言われたんだから！」

「あ……………解った解った」

そして俺はすぐにぴかぴかの新品のランドセルに教科書を詰め終え、

「んじゃ、帰るか」

「う、うん」

そして俺達は一緒に教室を出た。

この時、俺は女の子と二人きりで下校する、という事が初めてだったので、正直どうすればいいのかが解らなかった。

そんな中思い出したのは、龍神と神戸さんの事だった。

(手を繋げばいいのか?)

もしも現在、俺が急に彩の手を握った暁には確実に何らかの攻撃が飛び込んでいただろう。

だがしかしまあ、これは過去の話なので、そしてその時の俺は何も考えずに、「女子と手をつなぐと冷やかされる」というイベント

も忘れてしまい、そして、彩の手を繋いだ。

まあ、その後は当然といつかなんとつか、「ひゅーひゅーおあついいー」みたいな冷やかしの後、彩が、かーっ、と真つ紅になつたまま固まつてしまったので、結局手を離す事も出来ずにその日はそのまま帰つた。

しかし、次の日から一緒に帰る時には手は繋がなかつた。今思うと、本当に軽率な行動だつたと思つた。

それから一年が経つたある日。

俺と彩、龍神と神戸さんはもう二年生になつたばかり頃だ。

もうこの頃になると、わざわざHR後の教室に来る事はなくなり、集合場所に集合してから一緒に帰る、というようなルールが出来ており、その日は俺は彩を待ち続けていた。

「……………天音、遅いな」

彩は来なかつた。

HRはとつくに終わり、そして時間もかなり過ぎている。

そして、俺はついに待ちきれなくなつて、彩を探しに行った。

校舎の中は全て見回つた。

先生にも聞いたが、教室を出て行く所をちゃんと見たらしい。一体、どこにいるのだらうと思つた。

「き、桐山、君」

「神戸さん？」

結局、彩が戻っているかもしれないと思い、また集合所に戻ってきた直後。

神戸さんが息を切らして走ってきた。

「あ、あのっ、彩ちゃん、が……………」

「天音がどうかしたのか!？」

「校庭で上級生にからまれた私を助けてくれて……………それで……………」

その言葉を聞いた瞬間、俺の体はなぜか動いた。

ランドセルを放り投げ、ひたすら走った。

校庭はまだ見ていなかった。むしろ、居るはずが無いと思っ
た。

そして、見つけた。

校庭の隅に追いやられた、彩を。

「天音……………」

相手は三人。

そして恐らく、五年生、と言った所だろう。

一年生の俺が勝てるワケが無かった。

距離が開いていたため、まだ向こうは俺の存在に気づいていない。
今なら逃げる事が出来る。

今行っても、傷つくだけ。

怖かった。

しかし、当時の俺を、今の俺は責められない。
当然だろう。

何度も言うが、上級生三人相手に俺がかなうワケないのだから。
ただ、俺がこうして迷っていた間にも彩は次第に追い詰められて
いく。何やら口論しているが、その後上級生が動いた。

まずは彩の腕を掴んだ。

女の子の彩は、上級生に掴まれた腕をほどく事は出来なかった。

そして次に上級生は彩の髪を引っ張り始めた。

小学生の喧嘩（これはもはや喧嘩とは呼べないが）にはおなじみ
の行為だ。

「天音って、ずっと髪伸ばしてるよな」

不意に、ある日の下校時の会話が頭の中で甦った。

「うん。そう、ね」

「なんで？」

「死んだおばあちゃんが、褒めてくれたの。『彩の髪は綺麗だね』、
って。だから、あんまり切らないようにしてるのよ」

「ふーん……」

泣いていた。

目の前の、その大事にしていた、死んだおばあちゃんに褒められ
て、それ以来ずっと大切にしてい、伸ばしていた髪を引っ張られて、

泣いていた。

引つ張られているから痛いからじゃない。
心が、痛いからだ。

「　　ッ！！」

気がつくともまた、走り出していた。
痛いのは嫌だ。

だけど、彩が泣くのはもっと嫌だった。

そして、上級生に向かって背後から殴りかかった。

まあ、背後から相手を襲う、なんて事は立派に褒められた事ではないだろうが、嵐なら「これも立派な戦術だ」とか言っただろう。

当然、返り討ち。

所詮俺は脇役エキストラであり、主役にはなれない。

だけどそれでも、主役おやを守る事が、脇役おれに出来る事だ。

例え勝てなくても。

例え主役にはなれなくても。

例え痛みが伴っても。

主役おやを守る事が、脇役おれの役目だ。

そう、思った。

人の幸せを助けられる子になりなさい。

幸助。

それが、俺の名前。

まあ俺には、そんなに立派な子供になる事は正直難しいが、目の前の彩の幸せぐらい、助けたってバチは当たらないだろう。

だからその為にはまず、彩を幸せにしてやらないと。痛くて泣いている事が幸せなんて、ありえない。

だからその涙を、止める。

俺が、彩の涙を拭ってやる。

カツコつけましたが、結局は返り討ち。

途中参戦した龍神（神戸さんが図書室で本を読みふけている龍神を引っ張ってきたのだ。龍神。ごめん）共々だ。

まあ、中学時代に嵐と出会って喧嘩三昧の日々を送る前の事だったので、この時の俺は一年生だった事を含めても、弱かった。

超カツコ悪かった。

そしてボロボロの体を引きずって、彩と共に岐路についた。

「・・・・・・・・天音」

「な、何？」

「お前さあ、なんでもかんでも一人でやろうとするなよ。友達だろ？ それにお前って、女子なんだからさあ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

彩は黙っていたが、俺は続ける。

「次からは俺を呼べよ。カッコ悪いだろうけど、まあなんとか頑張るからさ」

これが当時小学二年生だった俺が言える、最大限の言葉だった。

「……………別に……………」

彩は顔を真っ紅にして、そして、

「……………別にカッコ悪くなんか、無かったわよ……………」

反応に困る発言だった。

「ね、ねえ。アンタ、好きな髪型とかって、あるの？」

「？ どうした突然」

「べ、別に何でも無いわよ！ で、どうなのよ……………」

「んー。そうだなあ。なんか、こつ、少し短めで長めのヤツ」

今思つと、意味の解らない発言だ。

「セミロング？」

「せみろんぐ？ ……ああ、多分それ」

「そ、そうなんだ……………」

「？ 天音？」

「そ、それからっ！」

「!？」

彩は、じっ、と俺の方を見つめて、そして、

「下の名前で、呼んでいいわよ。別に」

「……………天音、さん？」

「どうしてそこで敬語になるのよ!？」

何か自分がやらかしてしまったのかと思っていた、なんて言えなかった。

「いい!？ これから下の名前で呼びなさい！ わ、私もアンタの事、こ、幸助、って呼ぶから」

「わ、解った……………あ、彩……………?」

「……………な、何？ こ、幸助」

互いに名前を呼び合ってみたものの、それ以降、会話が続かない。少しの間沈黙が続き、そして俺がふと、

「なあ、彩」

「何よ」

「これからも、ずっとこうやって俺達って一緒に帰っていくのかな」

「どうしたのよ。急に」

「今はまだそうじゃないけど、小さい頃からずっと一緒に居る友達の事を、『幼馴染』って言うらしいぜ」

「ふーん。で、それがどうしたのよ」

「ああ。だから俺達がこうしてずっと一緒に帰って、そしてもっと大きくなった時に、『幼馴染』って呼ばれるぐらい一緒に居れたらいいな」

まあ正直、友達と離れるのは嫌だし。

「.....」

夕日の所為か、彩の顔がまた真っ紅に染まって、そしてうつむいた。

「？ 彩？」

「そ、そうね」

「??？」

次の日になると彩は、バツサリと、その長かった髪を切っていた。あんぐりとする俺に対し彩はただ一言。

「べ、別に、アンタの為じゃないから」

とだけ言った。

今から思うと、もしかしたら前の日の髪型どうここの会話の所為なのかもしれない。

あれだけ大事にしていた髪を一気に切ってしまったのが俺の所為だと思うと、少し罪悪感が出てきた。

そして現在。

俺と彩はまさに『幼馴染』という関係で、一年生の頃と変わらず、一緒に下校している。

あの時と全く同じ道を歩いて。

これから俺達がどうなっていくのかは、解らないが。

それでも、これからも、俺達は一緒に歩き続けていくのだろう。

俺と彩のファーストコンタクト（後書き）

前々から描きたいと思っていた幸助と彩の過去編を描けました。

まあ、王道（？）展開のいじめられているヒロインを主人公が助ける、という物でしたが（助けてねえ！ むしろ返り討ちにされてるよ！）、幸助と彩らしいかな、と思いました。

すみません。この「あとがき欄」で今回は「次は文化祭編です！」と言いましたが、SSをもう一つか二つ挟みます。

「**明の萌え萌え大作戦！？**」

「萌えだな」

体育祭前のある日、自宅で突如、ソファに座りながら「まんがタイムきららキャラット」を読んでいる祭が、その背後に立っている明に向かってそういった。

「もえ、ですか？」

「そうそう。明が」

「わ、私が！？」

「萌え」

「もえ？」

そしてしばらくの沈黙の後、明がハッ、とする。

「ままま、祭さん！？ 一体私をどういう目で見ているのですか！？」

「んー？ いやあ。明っていつもメイド服着てるからな」

「ま、まあ、そりゃメイドですから……」

「だから、つい」

「『つい』、ってなんですか!? 『つい』、って!」

そして祭は読んでいた「まんがタイムきららキャラット」をテーブルの上に置き、改めて明を見つめる。

「メイド服。それはまさに俺が思うに『萌え』のスタンダードであり、そして至高のコスプレでもある。黒のワンピース。ひらひらのフリルが付いた純白のエプロン。ふりふりのフリルが付いたカチューシャ（または猫耳）。それら全てが融合し、そして奇跡の化学反応を引き起こしたまさに神が作りし世界最高の創造物。もはやメイド服無しに『萌え』は語れないと、俺の中で思っている程だ」

「言っておきますけど、私はれっきとした本業のメイドであって、コスプレじゃ無いですからね!? それにそんなに熱くメイド服について語られても、もはやただの変質者にしか見えませんよ!? 念のため!」

ただしかし、こういう事であれ祭がじつ、と明を見つめているので、それはそれで照れる明であった。

「なー。一度でいいから遷ちゃんみたいに『萌え萌えきゅん?』ってやってくれ! ポーズ付きで! 頼むから!」

「い、嫌です!」

「くっ…….それなら猫耳で我慢するか…….」

そう言って、じつじつと猫耳を取り出す祭。

「それもやりません! ていうか、それは何処から取り出したので

すか!？」

「(. . .)」

「そんな顔をされても困るのですが とうか、もうそろそろ休憩を終りにして、そろそろ体育祭業務を再開してください」

体育祭業務、というのは要するに生徒会長としての体育祭に関する業務の事だ。

当日になると、売店や、文化部の生徒達の展示や販売等もあるの
で、通常の(一般の)体育祭よりも、管理等の量が多い。

ましてや、祭は生徒会長なので、その様々な業務の最終調整、最終チェックがあるのだ。

「うー っーか多すぎるんだよなー。チェックする物って」

「でも祭さんのサインが無いとその申請が通りませんし」

祭の目の前のテーブルには、山積みされた書類の束が二つ程ある。そしてまだ、一束目の半分程、つまり四分の一程しか終わっていないのだ。

既にチェックが終わっている書類には、ボールペンで書いた、祭の手書きのサインが書き込まれていた。

「なんで印鑑じゃ駄目なんだ？」

「学校に印鑑を忘れてきたのって、祭さんじゃないですか」

「じゃあ取りに行く!」

「そのままサボる気でしよう!？」

因みにこのやり取りはもう今日で二度目だ。

そして今までのパターンからして、サボるのは明確だった(例えばコンビニに行く、と言って気がつけば秋葉原のアニメグッズの限定販売の列に並んでいたりする)。

「はあ．．．．自分の名前がゲシュタルト崩壊してきた．．．
．．．もう自分の名前を書きたくない。テストで名前を書くのも嫌だ。
あーあ。アニメみたいに巻き(展開を速くする事)で進まないかな。こっ、場面がパツ、と変わったらもう次のシーンでは書類が全て片付いていないかなー」

「そんな事が実際に起こるわけありません。要は祭さんのやる気の問題ですよ。っていうか、自分の名前を書かなかったらテストで0点ですからね?」

「やる気かあー。それにしてもやる気がでねえなー．．．．それに昨日の『お願いランキングゴールド』を見逃したのも痛い。ヤング声優ランキングで愛生さんが出てたのに．．．．．テンション下がる」

「祭さん。自業自得、って言葉、知ってますか？」

そもそもTVを見逃したのも、祭が学園に居る内に終わらせていなかった業務を居残ってしていたからであった。

「それにしてもやる気が出ないなー」

まさにやる気が無さそうに、そしてボールペンを握る気配の無い祭。

それを見た明は、

「じゃあ、どうしたらやる気が出るんですか？」

「俺のやる気スイッチが入ったら」

「ネタが古い上に解りにくいですよ!？」

「あー。俺のやる気スイッチは何処にあるんだあー？」

「それは祭さんの心の中ですよ!」

某テレビCMの事を思い出した祭と明であった。

「まあそれは冗談として……んー。じゃあ、明が滲ちゃんみたいに『萌え萌えきゅん?』ってやってくれたらやる気だす」

「……………」

明の表情が凍りついた。

そして心なしが顔が引きつっている。

「やらなきゃダメですか」

「やらなきゃやる気が出ないだけ」

明としては、祭が仕事をしてもらわなければ困る。

それでももしも祭が行わなければ祭の印鑑を使って、幸助達後輩組

が居残りで判を押さなければならなくなる。

それは、明としては是非とも避けたい状況だった。
というか申し訳なかった。

「・・・・・・・・わ、解りました・・・・・・・・」

「本当に!？」

「は、はい・・・・・・・・」

と、言いつつも顔が引きつっている。

「ポーズ付きで」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わ、わわわ、解りました・・・・・・・・
(うつうつ・・・・・・・・恥ずかしい。とても恥ずかしい。でも私がやらないと祭さんはやる気を出してくれないし・・・・・・・・うつ~~~~~
!)」

そして祭はキラキラとした目で明を見つめて、対する明はというと、緊張した面持ちで、両手でハートマークを作り、そして、

「も、萌え萌えきゅん？」

「惚れた」

「はいはいはいはいはいはいはいはいはいはい!？」

一気に、顔がこれ以上無いというぐらい真っ赤になっていた。

そしてブツブツと「いや・・・・・・・・でもそんないきなり・・・・・・・・」

「わ、私はおっけーですけど……でもいくらなんでも急すぎるというかなんというか……」と呟いている。

「はっ。いかん。いつの間にか気を失ってた」

「………そうですか」

「ん？　なんで残念そうな顔をしてるんだ？」

「いえ………あの、そうじゃなくて、そろそろ本当に仕事してください」

「やだ」

「なっ………!？」

祭の思わぬ発言に今度も顔を引きつらせる、明。

「や、約束が違いますよ！」

「お願い！　もう一回だけ！　あと、猫耳つけてもらうの忘れた！
猫耳つけてやって！」

「うっ………」

正直、さっきやった事よりもハードルが上がる事に加えて、明の精神的余裕も無くなってきたので、もう限界に近かったが、しかし、それでも、祭には仕事を終わらせてもらわなければならぬので、もはや明に選択肢は無かった。

当の祭はというと、書類の方に目を向けて、何やら真剣な表情で考え込んでいる。

その書類は、体育祭の売店や文化部のコーナーの配置構成を示した物だった。

生徒会長は、この配置を決める事も仕事の一つで、体育祭前の生徒会長における重要な仕事の一つだった。

(祭さん……………)

その真剣な表情に、明は先程まであれだけ恥ずかしかっていた事も忘れて、感動していた。

思わず胸が高鳴る。

そして祭が真剣な表情・眼差しで、

「……………文化祭で、猫耳メイド喫茶もありだな……………」

と呟いた。

「今なんか物凄く大変な言葉を聞いたのですが!？」

「ははは。冗談冗談。別に猫耳メイド服喫茶で一儲けしようなんて企んでないって」

「企んでましたよね!?! 今絶対企んでましたよね!?! っていうかそれは誰得なんですか!?!」

「俺得」

ガクリ、ともはや力無く肩を落とす明。

「なー。明」

「……………なんですか」

「今度はコスプレやってー」

「メイド服は萌えうんぬんかんぬんは何処に行ったんですか!?!」

結局その後、明は一日中コスプレにつき合わされ、書類は終わらず、登校日に幸助達が居残りで作業したのだった。

明の萌え萌え大作戦！？（後書き）

久々の祭&明。

基本的に明は祭に振り回される役ですが、今回もそうでした（笑）
次こそ（多分）文化祭編、かも……………？

第一話 私服喫茶【挿絵有】

文化祭。

我が学園の文化祭は、体育祭終了後、すぐに準備期間へと入る。この時期の学園はとても慌しくなる。

何しろ体育祭の後にほとんど、連続とっていいほどの時期にこの体育祭の準備期間が行われる。

文化部の者達は体育祭の次に連続で自分の部をアピール出来るチャンスなので、体育祭前から準備に余念が無い。

ただし、準備期間は一ヶ月程あるので、それぞれこの一ヶ月はとても慌しくなるのだ。

そして、俺達一年四組も、文化祭についての話し合いが行われていた。

「で、俺達のクラスの出し物についてだが」

俺達のクラスの黒板前で嵐が一応委員長らしく仕切っていた。

相変わらず、この男は委員長という役が似合わない。

だってチャライし。

「何がやりたいか、お前ら好きなの言っていざー」

という事で、それぞれ配られた白紙の紙（嵐のヤツ、俺のノートからびりびりとページを破っていきやがった）に自分のやりたい出し物を書いていく。

名前は無記名なので、それぞれ気兼ねなく、書くことが出来るという寸法だ。

そして、副委員長（これは本当に不本意だが）である俺が黒板に

書かれた出し物を書いていく。
似たような意見の物はちゃんと纏めなきゃならない。

・喫茶店

・お化け屋敷

・展示

・映画上映

・等身大ガンダム製作

・劇

・ライブ

・ダンス

・自伝、「男とは常に孤高であれ、女の居ない男達」の配布

因みに俺は喫茶店。

無難な物にしておいたのだ。

「幸助。最後のは消しておけ」

「おう」

俺は黒板消しで一番最後の項目を消した。

背後で「ギャアアアアアアア！ 鬼！ 悪魔！ この人でなしー！」という声が聞こえたが、聞かなかった事にしよう。

それにしても、どれもこれも文化祭らしいといえづらい物ばかりだ。

「映画製作」は映画研究会部員からの意見だが、不可能といえば不可能じゃない。

それに喫茶店なんて文化祭のエースと言ってもいいほどの定番中の定番。

「劇」、「ライブ」、「ダンス」は、一まとめで「ステージ」でもしておこう。

「でもまあ、『等身大ガンダム』とかは無理だろ。あんなの作れねーし」

「そうでもないぞ？ 何しろ五十五億あれば三重工が作ってくれららしい。でもまあ、これだけあっても絞りきれないからここから投票にするか」

再び、白紙の紙を配る（くそう！ 俺のノートのページがどんどん減っていく……！！）。
そして集計。

「んー。じゃあ、文化祭の出し物は喫茶店に決まった」

パチパチと拍手が起こる。

「まあ『劇』みたいなステージ系も少なくは無かったんだけどな……
……で、問題は、だ。一体、『どいう喫茶店にするか』だ」
嵐の言っている事。

それはつまり、「どんな喫茶店にするか」、つまり、どんな「テーマ」を持った喫茶店にするか、だ。

例えば「メイド喫茶」とかが一番解りやすい例だろうか。

「一応予算としては五十万程あるのだが」

さらりと言つてのける嵐だが、ぶっちゃけ高校生の文化祭の予算で五十万って明らかにおかしい気がする。

しかも余つた予算は生徒同士で分割する事が出来るという物だ。

この学校、予算とかどうやって捻り出してんの！？ とは思つてはいけない。

そして、話し合いが行われたのだが、飛び交う様々な意見。

例えばお化け屋敷と混合させた「お化け喫茶」とか、童話の中のキャラクターにコスプレする、「童話喫茶」、そして定番にして男の聖地、「メイド喫茶」などが挙げられた。

「まあ、どれもこれも不可能じゃないんだけどな」

意見がありすぎて、嵐も纏めるのも大変そうだ。

そして、急に嵐がハツ、としてから、顔を上げた。

なぜだが邪悪な笑みが見えた、ような気がした。

「みんな。ちよつと聞いてくれ。何も、俺達は無理してそこまで凝つた物をしなくてもいいと思うんだ。考えても見る。他のクラスは俺達よりも予算が多い。そんな中で、クオリティに予算の方を回しても俺達は他のクラスよりも地味になるだろう」

「だったらどうするんだ？」

と、俺が言うのを見越したかのように嵐が目をキラリと光らせる。

「だったら、話題性で勝負だ」

「話題性？」

「言うなれば、『私服喫茶』だ。可愛い私服の女子高生とおしゃべりしながら話す事が出来るという物だ。これを宣伝材料にすれば下心丸出しの男共が．．．．．げふんげふん．．．．．老若男女問わず興味を持った者達きゃくが来るはずだ。それに加えて衣装に対する予算は0！」

あれ？ どこか言ってはならない事を言っただよ様な気がするぞ？
でもまあ確かに、話題にはなるかもしれない。

クラスメイト達は了承したようで、とりあえず、俺達一年四組の出し物は『私服喫茶』に決まった。

「クッククック．．．．．予算を出るだけ削れば後の配分が大きくなるからな．．．．．」

．．．．．今のは聞かなかった事にしよう。

『私服喫茶』をするにあたって、まずはその肝心の私服についてだが、とりあえず、クラス皆でその当日着る為の私服をチェックし

よう、という事になった（男子の熱い要望により、だ）。

平日にそんな事は出来ないで、とりあえず日曜日の日に学園の教室に集合、という事になったが。

．．．．．まあ、なんとというか、教室が一気に華やかになった。

因みに今日の彩の着てきた私服はというと、花柄のワンピースに黒のニーソックスというなんとも可愛らしいファッションだ。

正直、家からここまで歩いてくる道中でドキドキしっぱなしだった（今はもう慣れたが。因みに俺はそんなに気合を入れる必要性も感じないのでいつも通り）。

それぞれのクラスメイトは文化祭当日に客前に出る私服とあつて各個人、気合が入っている、という感じがする。

彩も今日はそんな感じだったのかな．．．．。

そして今日の集まりもチェック自体はすぐに終わり、それぞれ友達同士で楽しそうに話をしている。

「りゅーじん。私の私服、どう？」

「あれ？ 愛ちゃん、そんな服持ってたっけ？」

「昨日買った」

「買ったちゃったの！？ ああっ！ だから急に昨日居なくなっただ！？」

「うん。似合っ？」

「あーもう。心配して探して損したよ……………」

「似合う?」

「そもそもなんでワザワザ買いに行ったのさ?」

「……………」

ああ……………龍神。もうそろそろやばいんじゃないのか? 最近、神戸さんの龍神お仕置き方法も日々進歩してきているからな。

もうそろそろ、電気ショック系統の物が出てくると、俺は予想している。

「別にいつも通りでも可愛いのに……………」

「……………」

おお……………成長したな。龍神。

「……………ぼっ」

「愛ちゃん? どうしたの?」

本人に自覚が無いのが欠点だが。

ていうか神戸さんが報われないよな。このままだと。

そして時間的には既に昼食の時間となっていたので、このままそれぞれ昼食をとる事にした。

今日は私服チェック以外にも喫茶店で出す料理の選考、開発もか

ねているので各自昼食は持参している。

俺と彩の弁当二人分は俺が持っているので、自然と俺と彩は一緒に食べる事となるのだが……何処で食べようか。

俺が彩の分の弁当を取り出す所をあまり他の人に見せるワケにはいかない。

出来るだけ人が居ない所へと移動する必要があるだろう。

嵐は料理担当のクラスメイト達と共に家庭科室へ。

龍神は神戸さんと一緒に中庭へ。

他のクラスメイト達は教室、と言った所だ。

男子が多いのは女子の私服姿を見たいが為だろう。となると残りは……。

「彩。屋上に行くぞ」

「う、うん」

屋上、という言葉に反応した、ような気がした。

さっそく弁当を二人分広げる。

「いただきます」

「い、いただきます」

俺はさっそく弁当箱からおかずを一つ取り、そして食べる。

彩はなぜかもしもじと正座したままだ（目のやり場に困る……）

.)。

心なしか、少し不安そうな表情をしているのは気のせいだろうか。

「おっ。美味しい」

「ほ、ほんと？」

相変わらず、少し不安そうにうつむいたままだったが、その声が少し弾んで聞こえる。

心なしか、顔が紅く染まっているのは気のせいだろうか。

> i 3 5 1 6 1 — 4 3 8 1 <

「ああ。なんかいつも美味しいけど、今日のはいつものより美味しいな。味変えたのか？」

「うん。よ、良かった……今日はちょっと味付けを変えてみたんだけど……少し不安だったから」

……お、女の子、っばい。
ていうか何だ。

屋上に来るとどうしてこんなに女の子っぽくなるんだ！？
ここは何かしらの聖域サンクチュアリか！？

「そ、それじゃあ、私も食べようかしら」

そう言って彩はさっそく昼食を食べ始めた。
そしてふと、思い出したのだが、あの時。

俺が彩の事を「幼馴染」ではなくて「女の子」として意識し始めた日。

あの日も確か、こつやつて屋上で一緒に昼食を食べたのだ。

あの日と今とで、俺と彩はどう変わったのだろうか……
彩は変わったのかは解らないが、少なくとも俺は変わったと思う。

そして俺は、変わって良かった、と思っている。

だって、今、俺の隣に居る彩が、とても可愛く見えるのだから。

第二話 猫耳メイド喫茶（前書き）

SS?で公開した祭と明のSSの後日談的な物。
展開は前の話と同じですが、一年四組と同じ頃、祭達二年四組がど
うしていたのか、という話です。

第二話 猫耳メイド喫茶

一年四組が文化祭の出し物について話し合っている同時刻。

同じく、二年四組の教室では、文化祭の出し物についての話し合いが行われていた。

仕切るのは勿論、この学園の生徒会長にして二年四組の委員長である祭だ。

「で、俺達のクラスの出し物についてだが」

副委員長の明は祭の隣に黒板のチョークを持ちながら立っている。その雰囲気はどこか、というよりもやはり、メイドの面影を見せている。

「何がやりたいか、お前ら好きな言っていていいぞー、と、言いたい所だが、何か、どっかの一年もこんな事を言っただけで済む気がするのでもまあ、クラスの希望はもう前日に回収済みだし、ここから色々絞っていくぞ」

祭が言い終わると同時に、明がすらすらとクラスの案を書き並べていく。

書く際にはチョークを持つ手以外は、何も持つてはいない。

全て、記憶している。

「んー。集計してみた所大体、喫茶店が多いな」

予算は先日行われた体育祭の優勝賞金としてかなりの貯えが存在する（高校生には十分過ぎるぐらいに）。

そしてその後の話し合いにより、結局は喫茶店をする事に決まっ

た。

「よし。それじゃあ、俺達二年四組が文化祭で今年する出し物は、『猫耳メイド喫茶』に決定だな」

「ちょっと待ってください！」

「ん？ どうした明？」

祭の背後ですらすらと淀みなく手を動かしていた明が祭の言葉を聞いた瞬間、手の動きが止まった。

「あ、あの、少し確認したい事が……」

「なんだ？」

「先程の話し合いで決まったのは、『喫茶店』ですよ？」

「ああ。『猫耳メイド喫茶』だ」

「おかしいでしょう!？」

「ええっ!？」

祭が心の底から「ええっ!？」というような顔をしたので、逆に明が驚く。

「とりあえず決まったのは、『喫茶店』であって、『猫耳メイド喫茶店』じゃないですよ！？」

「何を言ってるんだ！ 『喫茶店』とはつまりメイドだろ！？ 猫耳付けたメイドさんが居る所だろう！？ 俺がいつも行っている所は店員さんはみんなそうだぞー！！」

「それは確かに『喫茶店』ですが、祭さんが普段から行っている喫茶店は普通の喫茶店と違いますから！」

「なん．．．．．だと．．．．．！ だったら俺が今まで喫茶店と信じてきた物は一体．．．．．！！」

一人現実には打ちのめされている祭を見て、明はため息混じりに少しだけ、微笑んだ。

(なんかこういう所が、可愛いなあ．．．．．)

「仕方が無い。それなら、どんな喫茶店がいいか、挙手で決めるか。あーあ。せつかくこの前、コスプレしてたのになあ．．．．．明が」

そしてチラツ、と制服の胸ポケットから体育祭前に明が行ったメイド服(+猫耳装備)姿で「萌え萌えきゅん？」と言いながら、両手でハートマークを作っているポーズの写真があった。

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああ！？」

「あーあ。文化祭で見られるかと思ったのに．．．．．残念だなあー」

ぴらっ、と大きく写真を掲げる祭。

同時に男子の内なる闘気（テンション）が一気に上昇する。
女子の方も「わ〜」と見とれている。

「か、かかかかか、かかかかか、か、かかかか、返して、ください
〜〜〜っ!」

「ほい」

「……………!」

バツ！ と、写真を奪い取り、そしてビリビリと破り、ゴミ箱へと突っ込む。

「第二弾」

祭が今度は制服の別のポケットから同じ写真を取り出す。

「……………ッ!! な、なんで何枚も持ってるんですかあ
あああああああああああああ!」

「焼き増ししたんだ。高値で売れ……………げぶんげぶん……………
・可愛かったから」

「今サラッと聞き捨てならない発言が聞こえたのですが!？」

しかし、言い訳とはいえ「可愛かった」と言ってもらえた事に対しては照れてしまう明であった。

ただ、これはこれで気をすっかり保たなければならぬので、そう簡単に喜んではいられない。

そもそも、この話し合いで『猫耳メイド喫茶』にでもなってしまう

えばそれでこそとんでもない事になってしまう。

「仕方が無い。こうなったら多数決で決めるか」

黒板には明の字で、いくつかの種類の喫茶店が書き並べられている（中には「猫耳メイド喫茶」も含まれている）。

（これだけあるなら、いくつか票が分散するはず。「猫耳メイド喫茶」だけは必ず阻止しなきゃ……………）

「それじゃあ、まずは『猫耳メイド喫茶』が良い人」

「……………」

手が拳がった。

明以外のクラスメイト全ての。

「……………えっ？」

二十九対一。

勿論、明の大敗北であった。

「うう。どうしてこんな事に……………」

土曜日。

明は学校に普段着メイドぶくで登校した。

衣装合わせ、という事でメイド服を着るらしい。

「~~~~~!!!」

「あ、それと今度はウィンクをしてくれると嬉しい」

「~~~~~っ!!!」

次々と、明の知らない所で話が進み、そして次々と明に対して「萌え」の試練が積み重なっていくのだった。

どんどんと外堀が埋められていく事を感じた明は覚悟を決め、そして恥ずかしそうに顔を赤らめながら、両手でハートマークを作りつつ、そして、

「……も、萌え萌えきゅん？」

最後にバッチリとウィンクを決める。

「きたああああああああああああああああああああああああああああああ!!! これがかつる!!!」

テンションが上がりまくる祭とクラスメイト達をよそに、明は一人、顔を真っ紅にしたままうつむくのだった。

（ていうか……祭さんは一体何に勝つつもりなのでしょう
か……）

「さて、じゃあ今度は料理のメニューを決めるか」

「でも、喫茶店、って、どんな物を出せば良いのでしょうか？ せ

つかくの文化祭ですし、少しすぐらい変わった物も出してみたいですよね」

「その辺は心配するな。ちゃんとメニュー表のサンプルは持ってきてある」

祭は自分の学生カバンからごそごそと何かを取り出し、そして明に渡した。

それは確かに、「メニュー表」と書かれていた。

明はそれを手にとって、中身を見てみる。

「えっと……」

・萌え萌えおむらいすは〜と（別料金二百円でメイドにケチャップで文字を書いてもらう事が出来ます）

・LOVEり〜ちよこぱふえ？

・うわぎちゃんはんぱ〜ぐ

別料金五百円でメイドとメイドさんじゃんけんをお楽しみになれます

「……………」

「俺の数あるバイブル聖書の中の一つだ」

「……………(ぐしゃっ。メキッ。ビリビリ)」

「ああっ!?! め、明!?! どうして破るんだ! 俺の聖書バイブルがああ
ああああああああ!?!」

祭の聖書バイブルは役に立たなかったなので、料理の方は明を中心とした女子メンバーで決める事となった。

そして、料理の試作を行っている内に昼がやってきたので、昼食休憩を行う事となった。

「明。そろそろ昼でも食べに行くか」

「あ、はい」

弁当箱を手に取り、二人で中庭に向かう。

中庭には、昼食を食べるようなスペースがあるからだ。
ベンチとテーブルがあり、その上に弁当箱を広げる。

「あ。俺、少し上に忘れ物したから取ってくる」

「忘れ物、ですか」

「ああ。家の鍵をな」

「早く取ってきてください! 本当に! 一刻も早く!」

わかった!、とだけ言い残して、祭は教室へと上がって行った。
一人残された明は、ときばきと弁当箱を広げる。

そして準備が終わると、ふと、今日の事を思い出す。

(以前の私なら、ありえなかったかも……………)

元々、明は恥ずかしがりやな所があるので、子供の頃からいつも顔をうつむいてばかりだった。

そんなある日、明に手を差し伸べたのが、祭だった。

子供の頃から共に過ごし、そして今もそれは変わらない。

(……………それになんとか、慣れてきた気がするし……………私の恥ずかしがりやも、もしかしたら……………)

じつ、と広げた弁当箱を少しの間見つめる。

そして、周囲に誰も居ない事を確認してから両手でハートマークを作る。

「……………萌え萌えきゅん？」

「萌えた」

「きゃあああああああああああああああああッ!？」

気がつくと、中庭から少し離れた所で、祭がたたずんでいた。

「……………ままま、祭、さん？　なんか、やけに早くないですか？」

「ああ。よく探してみたらポケットの中に在ったから途中で引きかえしてきたんだ」

「そ、そうですか……………あの、今の、見ました？」

「バッチリ。ちゃんと携帯で撮影した。いつでも学園のHPホームページにUP可能だ」

「消去してください！ 今すぐ！」

昔から恥ずかしがりやの明をからかうのは祭だったが、しかし、それでも、明は少しずつ、明るくなってきてはいた。子供の頃のようにうつむいてばかりの子供ではなかった。なくなった。

その自分自身の変化を、明は祭の存在を大きく感じながら、実感していた。

第三話 試食

まず、俺達の「私服喫茶」という出し物をするに当たって、一番重要な事は、「料理」だ。

何しろ、俺達が行うのは「喫茶店」なのだ。

女子てんいんがいくらよくても（ただし男子、テメーらは駄目だ）肝心の料理が良くなければ売り上げも伸びないだろう。

よって、日曜日には料理の案を出し、実際に作ってみたのだが、これと言った物が出来る事も無かった。

月曜日である今日の放課後でも、家庭科室を借りて、料理の試作を行うのだ。

そして俺達は、現在家庭科室に居る。

目の前には様々な食材や調理器具の数々。

既にテーブルの上には作った料理が置いてあった。

「さて、各自各々料理を作ってもらったワケだが、さっそく試食してもらおうと思う。まあ、各自解っているとは思うが、俺達が出す喫茶店の料理は普通の料理じゃ駄目だ。必要なのは『個性』。それを判断するぞ」

因みに料理を作ったのは嵐、紙絵さん、風人の三人だ。

それぞれ（というより皆）料理は程ほどに出来るらしいので、一応普通に作った場合は味は問題無いだろう。

しかし、嵐が必要としているのはあくまでも、文化祭で出しても通用する個性だ。

それが無いと、恐らくボツを喰らうだろう。

「んじゃ、まずは誰が試食する？」

「勿論、幸助。お前だ」

「お、俺!？」

「ああ。俺の自信作を食べてみてくれ」

嵐が作ったのはオムライスだ。

ふわふわの卵でケチャップを混ぜたご飯をふんわりと包み込んであり、一見、美味しそうには見える。

ただ、嵐が言う『個性』とやらがあるのかどうかだ。

「いいのかよ。お前の料理なら、厳しく評価するぜ?」

「ああ。かかってこい。俺はお前が何も言えないような料理を作ったつもりだ」

凄い自信だ。

全く。さすがだな。

いくら俺でも、これだけの自信は持てない。

「解った。楽しみにしてるぜ」

俺はさっそく、スプーンでオムライスを一口サイズにすくい、そして口に運ぶ。

まず驚いたのはその味。

卵のふんわりとした感触が口の中に飛び込み、そしてケチャップとご飯の味と、激辛タバスコの味が口の中いっぱい広がってゆき、瞬く間に俺の味覚を支配した。

つまり、激辛オムライスだった。

「zくあwsえdrfvgtbhyぬjmik、~~~~~ツツツ
ツツツ!!!!!!」

「フツ。あまりの美味しさに言葉を失ったか」

違う！

言葉を失ったんじゃない！ 言葉を発する事が出来ないんだ！

あまりの辛さに！

まるで舌が火事を起こしているみたいだ！

「わあ。泣いてるよ？」

「凄いですね。涙が出る程美味しいとは」

何を勘違いしてるんだバカップル！！

辛すぎて泣いてるんだよ！

ていうか騙された！ 完全に嵐「コイツ」に騙された！

そうだよ！ そもそも最初に俺に料理を勧める事自体、怪しいじやねえか！

体育祭と、今回の文化祭の準備で委員長らしい事をしてたから騙された！

くそう！ やけにコイツの作ったオムライスの中のご飯がギラギラと紅く輝いていたかと思ったらそういう事か！

「けだろ？」

「激辛だと認めやがった！」

「殺す！　いつかコイツだけは俺の手で殺す！」

「じゃないといつか俺が殺される！　マジで！」

「さて、次は誰の料理だ？」

「……………！」

「ついには無視かよ……………！」

「もはや体から力が抜け落ちた。」

「もういい。諦める。」

「コイツには敵わない。色々。」

「はいはい！　じゃあ次は私の作った料理がいいです」

「紙絵さんが元気よく、手を上げた。」

「そうか。じゃあ幸助、頼むぞ」

「また俺かよ！」

「今さっき被害に遭ったばかりなので正直もう試食役は避けたい所だったのに。」

「大丈夫だ。今さっきのは俺の料理だったが、紙絵の料理なら問題無いだろ？」

「うん……………」

まあ、さっきのような事態は嵐だったからこそ、起こった物だ。確かに、紙絵さんならば大丈夫だろう。多分。

「解った」

「じゃあ、食べてみてね」

紙絵さんが作ったのは、いわゆるおにぎりだ（三つある）。

喫茶店におにぎり、というのはなんとミスマツチな組み合わせだが、まあさがせばおにぎりを置いている喫茶店もあるような気がする。

「じゃあ、いただきます」

見た目は普通のおにぎり。

俺はその見た目は普通のおにぎりを一口、食べてみる。

「……………おお。美味しい」

この味は、鮭か？

「ふふふ。他のおにぎりは味が違うからね」

「味が違う？」

一口食べたおにぎりの他に、残るは二つ。

「なら、俺も一つ食べてみるか」

嵐はそう言って、ひょいっ、と俺から見て右の方にあるおにぎりを手に取った。

そして俺はその逆　　左の方のおにぎりを手にとって、食べる。

「これは．．．．．昆布？」

「そうそう」

「じぶはあっ！ー！」

「ッ！？」

俺が美味しく昆布の入ったおにぎりを食べていると、嵐が吐血した。

いや、これは血じゃない。

「．．．．．赤い、米？」

「げふっ．．．．．ま、さか、おにぎりの中にタバスコを仕込んであったとは．．．．．ッ！」

「名づけて、ルーレットおにぎり」

紙絵さんは目をキラキラと輝かせて「してやったり」と言った表情だ。

あ、危なかった．．．．．!!
そうだ。

考えてみれば、あの紙絵さんの作るおにぎりが普通なワケないじ

やないか………！

「幸、助………」

「嵐………」

「さつきは………ごめん………」

それだけ言い残して、嵐は力尽きた。

果たして紙絵さんが仕込んだそれが本当にタバスコだったのかどうかなど、考えたたくもなかった。

〜嵐、蘇生中〜

「………じゃー次いくぞー」

テンションが低い（というよりまだ完全に回復していないだけなのかもしれない）嵐がうつろな目をしながら言った。

「では莉子さんが出したという事なので、次は僕が行きましょう」

名乗り出たのは風人だ。

「………」

先程被害に遭ったばかりの俺と嵐は警戒しつつ、ジトツ、と風人を見る。

そして風人はそのさわやかな笑顔を見せつつ、

「あはは。安心して下さいよ。僕はそんなに辛い物は作ってませんから」

そのさわやかな笑顔を保ちつつ出した料理は、ドリンクだった。緑色の、ドリンク。

「なるほど。確かに喫茶店だから、ドリンクは必要だよな」

「はい。食べ物の方は皆さんにお任せしようと思ひまして」
なるほど。

しかし、こういうドリンクこそ、一番タバスコ等を仕込みやすい。

「幸助。色をチェックしろ」

「了解」

なんやかんやで嵐も試食する事になったので（委員長なので当たり前だろ）、そのチェックは慎重だ。

相変わらず、自分の事が関わった場合だけやる気を出すな。オイ。因みに色は簡単に言えば、緑色だ（これもこれで不安な色だな）。

「一応色をチェックしてみたが、怪しい色はなかった。それに気泡も少なからず立っている」

「ふむ。メロンジュース、と言った所か？」

嵐がそう、結論づけるが風人は相変わらずニコニコと笑顔を保つ

ている。

まるで、「飲んでいれば解りますよ」「とでも言いたそうに」

「だから安心してください。辛い物は一切入っていません」

「……………飲んでみるか」

「……………そうだな」

俺と嵐は同時に「ぐっ、」とそのドリンクを飲む。

「、これは……………！」

「^{にが}苦……………」

隣の嵐も何やら苦そうな顔をしている。

これは、この味はどうやら、抹茶？

「炭酸水に抹茶をブレンドしてみました」

いや、そりゃ確かに辛くないけどさ。

だけど抹茶の苦味が炭酸水と混ざり合って中途半端な物になって、
なんともコメントしづらい味となっている。

「まあ……………抹茶が苦手な人用かな……………」

嵐がイマイチな顔をして、ドリンクのコップをテーブルにコトツ、
と置いた。

結局、その日はこれでお開きとなった。

第四話 文化祭準備

文化祭という物は、準備の段階が一番楽しい、と俺は思っている。例えば、他のクラスのステージに出演するような奴らは楽しそうにステージでの出し物（あれはダンスか何かか？）の練習をしている。

そして俺達のクラスは文化祭用にクラスの内装を喫茶店にする為の道具作りが進んでいる。

まあ、文化祭前日に内装の変更はするのだが、これはいわゆるそれとは別の、前の段階だ。

解りやすいえば看板とかを作ったりする作業。

そして、晴れてメニューも決まった、という事で、俺達は黙々と内装準備に勤しんでいる。

「あー。そういえば嵐」

「なんだ」

「看板だけど、店名はどうする？ 普通に『私服喫茶』でいいの？」

「『1-4』をつけるのも忘れるなよ」

「解った」

こんな感じで、準備は進む。

俺は道具準備に勤しんでいるが、他のメンバーはメニューに出す料理の練習等を行ったりしている。

料理係はおとなしく、女子チームに譲る事にした……..と

いう事もなく、普通に男子が作る。

それというのも、そもそもこの「私服喫茶」の目玉はあくまでも「私服姿の女子高生」という事だ。

それが厨房（教室の中に仕切りで作った小部屋みたいな所）にこもって料理ばかり作っているには意味が無い。

料理が出来る男子を出来るだけ入れて（俺、嵐、龍神がそうだ）、他の女子は基本的にウェイトレスに回すようにしている。

また、隣の三組が全員ステージに出るため教室を使わない、という事なので、ありがたく三組の教室も俺達の喫茶店の店の一室として使わせてもらえるという事になっている。

「紙絵。頼んでおいたチラシは出来ているか？」

「うん。サンプルだけど」

チラシは宣伝用だ。

この私服喫茶の目玉は三つ。

一つ目はさっき言った通り、「私服姿の女子高生」（誤解をまねきかねない言い方だが、あくまでも健全な物だ）。

二つ目は嵐が作った「激辛オムライス」。

三つ目は紙絵さんが作った「ロシアンルーレットおにぎり」（個数を三つから六つに増やしている）。「六つのおにぎりの内、一つが激辛、という物だ。」

紙絵さんが作ったチラシは、これら三つの目玉を効率よく宣伝出来ていて、完成度としては申し分ない。

「OKだ。これをそのままコピーしてくれ。勿論、カラーでな」

「りょうかい」

そのまま紙絵さんはトコトコと新聞部の部室へと向かう為、教室を後にした。

新聞部には高性能印刷機、「ダデイ」がある。

この「ダデイ」に新聞部は毎回毎回、とてもお世話になっているそうだ。

因みに、この「ダデイ」という名前は紙絵さんがつけた物らしい。元々紙絵さんの新聞部入部により加速的に売り上げを伸ばし、予算でも余裕が出来ている為、「ダデイ」を購入出来た、という経緯から、紙絵さんが名前をつけた。

元ネタは「仮面ライダー剣」の橘さんという登場人物のネット上でのあだ名らしい。

初めてこの「ダデイ」という印刷機の愛称を聞いた時には「は？」という思いがあったのだが、今では全校生徒から「ダデイ」という名は親しまれている（俺含めて）。

「ふう。なんとか、文化祭までには間に合いそうだな」

看板の製作に一段落ついた所で、俺は嵐に言った。

「そうだな。ああ、それと、放課後、祭さんに生徒会室に来说いと言われている。生徒会メンバー全員でな」

「祭さんが？」

自分のクラスの準備で忙しいだろうに、一体何をしているのだろう。

俺は疑問を抱きつつ、そのまま文化祭の準備を進めて行った。

委員長である嵐と、そして忘れがちだが副委員長である俺に加え、彩、龍神、神戸さん、紙絵さん、そしてなんか新しく強制的に入会させられた風人の七人が抜ける、という事は問題なのだが、生徒会、ましてや祭さんからの呼び出しとあって、一応、クラスの準備から抜ける事は成功した。

そもそも、祭さんは一体、何の用があるのだろうか。

俺達は最早見慣れた生徒会室のドアの前に立ち、そして俺がドアを軽く二回ノックする。

「おう。入っていいぞー」

いつもの気楽な祭さんの声を聞くと、ドアを開け、中に入る。

「よう」

中に入ってみると、祭さんは伝統ある生徒会室の机の上に足をどっかりと置き、そしてソファにもたれかけ、「まんがタイムきららキャラット」を読んでいた（今日発売の最新号だが、いつの間にか買ってきたのだろう）。

もつこの人に「伝統」という言葉は関係無いんじゃないかな？

「今日集まってもらったのは他でもない。重要な話があるからだ」

それが重要な話をする人の態度には見えない。

「それというのも、やはり『唯梓』か『澪梓』。どちらの組み合わせが至高か、という事だ」

「どっちでもいいです」

それだけ言い残すと、俺達は生徒会室を後にした。
そしてドアを閉めた瞬間、そのドアが開き、「冗談冗談」と祭さんが「てへっ」と言いながら顔だけをのぞかしていた。

そして再び生徒会室。

「まあ、俺としてはやはり『唯梓』こそが至高だと思っているからな。さっきの事についてはもはや語るまい」

「祭さん。本題を早く言ってください」

隣の明さんが（いつの間に居たんだ！？ さっきは居なかったぞ！？）祭さんの言葉に釘をさしつつ、話を進めるように促す。

「ああ。本題。本題ね……おっけ。ちょっと待っていてくれ」

そう言つと、祭さんは生徒会室の机の中からガサゴソと中身から何かを探すように物を出し続ける。

中には生徒会の重要な書類らしき物が混じっていて、明さんが「ああーっ！ こ、こんな所にあつたんですか！？」と悲鳴のような物を上げたりしている。

そして、中には漫画や今までの「まんがタイムきらら」が出てきたりして、完全に祭さんの自宅の勉強机と化していた。

「あつたあつた」

祭さんが取り出したのは、何やら腕章のような物だ。
中に押し込められていた所為か、少しくたびれている。

「ほらよ」

そして、いくつか束になっていた腕章を俺の方へと軽く、投げつけてきた。

俺はその腕章の束をなんとかキャッチする。

「こ、これは？」

「生徒会の腕章。まあ『まんがタイムきらら』の下敷きになっていた所為でくたびれているが、まあいいだろ」

「良くねえよ!!」

なんかそう言われてみると、余計にくたびれて見えるぞ！ 心なしか、「ふにゃっ」となっているしよ！

「祭さん……本当はそれ、生徒会に入会した生徒が本来、入会と同時に受け取る物ですよ？」

と、明さんが言う。

「あつ。わり。ごめん」

………軽っ！

「ようやく邪魔者が無くなって、『まんがタイムきらら』を置くスペースがスッキリしたぜ」

「腕章を『邪魔物』って言っちゃったよ！」

そして俺は、腕章の束から「生徒会長」の腕章を探し出し、そして祭さんに差し出す。

「祭さん。これ、付けてください」

「やだ」

一蹴。

「……………なぜに？」

「だって、そんなの付けてたら堅苦しいじゃん？俺が成りたい生徒会長、っていうのは、『そんなん』じゃねーんだよ」

「……………まあ、確かに「堅苦しい祭さん」というのもイメーヂ出来ない。」

重要な腕章をいつの間にか漫画雑誌の下敷きにしてしまう。

これが祭さんであり、それこそが祭さんだろう。

「じゃあ、どうしてこれを俺達に？」

「んー？まあ、お前達は一応付けておいた方がいいかなー、って。当日は一応、文化祭の見回りとか、ステージの司会とかをしてみたいし」

今なんかとてつもなく、そして今から言うには明らかにタイミングが違うような発言をしたぞこの人。

「……………あの、祭さん」

「おっつ。どうした？」

「文化祭当日、って、俺達は会場の、その、見回りをするのですか？」

「ああ。そうだけど？」

きよとん、としてもらっても、困る。

そして傍らでは明さんが申し訳なさそうに「ごめんなさい。クラスの準備で忙しくて……」と頭を下げている。

……すげえ怒りづらい！

「誰が、何をするかは俺がこの紙にまとめておいたから」

ぴらっ、と祭さんが出した紙には確かに、当日俺達が行う為の役割がまとめられていた。

ああー。

もう完全に従うしかない。

「みなさん。ごめんなさい」

明さんが、生徒会室の外の廊下で、俺達に謝った。

「いいですよ。別に。気にしないでください」

「あの、その、祭さん。この文化祭の時期になると少し気が抜ける、というか、ぼーっ、としちゃう、っていうか……」

「？ どうしてですか？ むしろ意気揚々と準備をしてそうなのに」

そして、明さんは少し昔の事を見るような目で、何かを懐かしんでいた。

「去年の文化祭に、出て行ってしまったからじゃないですかね」

「誰が、ですか．．．．．?」

去年の文化祭は一応、俺はこの学園に来ている。
受験志願校だったからだ。

「先代の生徒会長です」

先代の生徒会長は、俺は誰なのか知らない。
そもそも、去年の文化祭は確か開会式も生徒会長である祭さんがスピーチを行っていたような気がする。

「あの文化祭の当日、祭さんは生徒会長になったんです。この時期になると、多分、その時の事を思い出すのではないのでしょうか」

「どんな人だったんですか?」

「そうですね。とにかく、学園中の生徒達に慕われてました。祭さんも、その一人でした。だからこそ、祭さんはその先代の生徒会長のように成りたいと、思ったのですよ。だからこそ、今の祭さんがあるんです」

祭さんの目標になった人物。

先代の生徒会長。

「その人の、名前は？」

「名前は……………」

いがらしあきこ
五十嵐彰人。

それが、祭さんの目指す、『祭さんの成りたい』、今の学園に居ない、先代生徒会長の名前だ。

第五話 キャンペーン

土曜日。

文化祭の準備であつたという間に日にちは過ぎ、ついに、文化祭前日を迎えた。

まあ、この前日ともなると、授業は無く、その時間の全てを明日に控えた文化祭にまわす事となっている。

そしてそれは、俺達一年四組も例外ではなかった。

「おい！ 誰だそこにテーブルを置いたのは！ 邪魔になるだろ！」

「ねえー、ここに置いといたコンロ、誰かしらない？」

「看板を運ぶから誰か手伝ってくれー」

教室の中はわいわいと準備を進めるクラスメイト達でにぎわっている。

文化祭は準備の段階が一番楽しいというが、それもあながち間違っていないだろう。

そして、俺と嵐　　つまり副委員長と委員長はそんな余裕、楽しむという余裕等、無かった。

「幸助。そのテーブルをどけてやれ」

「解った」

「幸助。コンロを持って行ってやれ」

「解った」

「幸助。看板を運ぶのを手伝ってやれ」

「解った」

「幸助。俺の肩を揉んでくれ」

「解わか．．．．．ってたまるか！！ お前も働けや！」

訂正しよう。

楽しむ余裕が無いのは俺だけだ。

嵐コイツはむしろ楽をしていた。

ていうか働いてなかった。

具体的に言うならば、嵐は皆が忙しく動き回る中、教室の教卓の上にとっかかりと座り、そして腕を組み、そしてそのままクラスの皆が働いている様子を見ているだけだった。

つまり、今の嵐はもはや委員長ニートというより、委員長だった。

「これでも働いているぞ？ 一応頭をフル回転して指示を出しているんだ。幸助おまえに」

「お前は俺のリモコンか何かか！？ あと、さっきの指示だが、最初の三つはまだ解るがなんだ最後のは！ もはや単なる奴隷として扱ってるじゃねーか！」

「そんなに次々とマシンガンみたいにツッコミを入れるな。つーか、一応昨日まではちゃんと働いていたんだぜ？ それに大体、クラスメイトそれぞれに指示を出してある。少しくらい休ませる。自分で言うのもなんだが、指示を出したり皆を纏めるのもそれなりに疲れるからな」

「む……………」

確かに、それはそうなのだ。

昨日まで、確かに嵐はちゃんと皆を纏め上げて、文化祭の準備をしていた。

次々とクラスメイト達に指示を出していったので、休む暇も無かった。

今はこうやって飄々としているが、どこか、俺の見えない所で疲れ、疲労が溜まっているのかもしれない。

「そうか。すまん」

「いいんだ。解れば。ところで幸助。一つお願いがあるのだが」

「ああ。何でも言ってくれ」

俺の方はまだコイツ程疲労が溜まっては居ない。
まだまだ動ける。

「パン買ってこいよ」

「テメエがな！」

駄目だ。

やっぱりコイツは解らない。

そんな俺はふと、教室を見渡してある異変に気づく。

「あれ？ 龍神は？」

「神戸と一緒に買出しに行ってもらっている。何しろ、明日、店に出す為の料理の試作の為の食材が尽きてきたからな」

「ふうん」

まあ、何も無ければいいが。
龍神の無事、という意味で。

学園からしばらく歩くと、近くに大型スーパーがある。

学園から少し距離が開いてはいるが、平日の下校時には生徒達の寄り道コースとなり、そして文化祭と言った行事では生徒達の文化祭の為の「材料」を買う為の施設となるのだ。

何度か幸助達も来た事があり、そして勿論、
龍神と愛も、
来た事があった。

「さて、と。買わなきゃいけない食材は……………」

料理班からの指示を受けて、指示された食材のメモはとってある。
そのメモを片手に、龍神は食材コーナーへと足を向けるが、

「まって」

愛が、龍神の腕を取り、静止を促す。

「愛ちゃん？」

「行きたい所が、ある」

「行きたい所？ って、えっ？ ち、ちよつと！」

無理やり、そして強引に、愛は龍神の腕を引っ張って、食材コーナーとは全く別の方向へと進んで行った。

そのところが、食材コーナーのあった一階から、二階へと進んで行く。

「愛ちゃん。一体何処に寄り道する気なの？」

「二階に今日、この時間帯から、『封都君』ストラップが貰えるキャンペーンがあるの」

『封都君』、というのは、この町のマスコットキャラクターだ。ゆるキャラとも言える。

外見は封筒にこの町のシンボルマークが書かれており、そこに目やまるっこい足や手がくっついているという物だが、なぜかその人氣は高い。

(愛ちゃんも「封都君」が好きだったのかな？ それにしても、そういうキャンペーンなら、ワザワザ僕が行かなくてもいいような気がするけど)

一抹の不安(というよりも疑問)を抱きつつ、龍神は、愛と共に封都君ストラップが貰えるというキャンペーンを行っている会場へとやってきました。

そして、そのキャンペーン会場を見た瞬間、龍神は驚愕する。

(な、何なんだここは……!?)

龍神の眼前に広がるのは、「封都君ストラップお渡しキャンペーン

ン会場」というようなポップが飾られてある。

そしてついでに、ポップには「カップルには無料でストラップをプレゼント」という封に書かれてある。

しかもご丁寧な事に封都君と一緒に写真まで撮れるという特典付きだ。

「りゅーじん。一緒に行こう?」

ぐいつ、と愛が再び龍神の腕を引っ張り始めた。

その流れに抗えるハズも無く、そのままズルズルと龍神は否応無しに会場まで引きずり込まれてしまった。

キャンペーンがまだ始まったばかりな所為か、さほど長蛇の列、というワケでも無かった。

時間はそんなにかからないだろう。

(とにかく、早く済ませて食材コーナーへと急ごう)

数分後。

すぐに龍神と愛の番がやってきた。

ストラップを受け取った後、女性スタッフが封都君の元へと二人を誘導する。

「はい、それじゃあ並んで〜」

封都君の側で、二人が並ぶ。

それを見た女性スタッフが、

「ああ、ダメですよそれじゃあ。もう少しくっついて」

その言葉を聞いたと同時に、愛が龍神の右腕に抱きついてきた。

(ツツツ!?)

突然の事に龍神は驚く。

そして右腕にはしっかりと、愛の平均よりも少し大きいぐらいの胸が当たっている。

それがさらに龍神のドキドキという心臓の鼓動を加速させる。

(な、なんか、良い匂いがする……)

「ええつと、彼氏さん。もっとにこやかに、笑顔でお願いしまあす。それと、その左手で彼女を抱き寄せるようにしてもらえませんか？」

(え、ええつ!?)

このままでは永遠にシャッターが切られないような気がしたのでとりあえず、言われた通りに左手で愛をそっ、と抱き寄せるようにする。

(ななな、なんか、余計に良い匂いがするよな気がつ……)

パシャッ。

と、唐突にシャッターが切られた。

「はいOK。それでは撮影した写真をどうぞ」

「ありがとう」

愛は淡々とした様子で、その写真を受け取る。
その写真を見て嬉しそうにしている愛を、龍神は少し疲れた様子で見守っていた。

買い物も済ませ、帰路につく二人。

愛の手には、しっかりと写真が収められている。

「はあ」

龍神は緊張からか、思わずため息をもらす。

「りゅーじん」

「ん？」

「嫌、だった？」

愛が、龍神の方を見ながら、見つめながら、言った。
そして、龍神の方はというと、

「……いや。嫌い、というよりは緊張した、の方が正しい
かもしれない。まあ、愛ちゃんは緊張なんて無いかもしれないけど」

「そんな事無いよ？」

「えっ？」

たたつ、と愛は少し前に駆け、そして龍神の方に向かってふわり、と振り返る。

「私、とつてもどきどきしたよ？」

頬を少し赤らめて、愛は言った。

それに対して、龍神は何も答える事が出来ず、ただ同じように頬を少し赤く染めただけだった。

第六話 キス

文化祭の準備も少しずつ進み、教室の中も朝に比べるとかなり様変わりしてきており、喫茶店っぽくなってきた。

料理の方は大体、試作等も完成してきており、接客の練習も順調だ。

この調子なら、明日は間に合うだろう。

ただ、俺達生徒会メンバーはローテーションで見回りや、ステージの司会等に出なくてはならないので、他のクラスメイト達の負担は増えそうだが、なんとか皆には頑張ってもらいたい。

「よし、結構、準備が出来てきたな」

「ああ。それにしても、やけに龍神と神戸さんは遅いな」

「まあ、そうだな。どっか寄り道でもしてるんじゃないのか？ 今日日は色々、イベントもあるようだしな」

「？」

嵐が何を言っているのか解らないが、まあとりあえず寄り道している事は確かかもしれない。

「とりあえず、何にしても、今日は俺達は頑張って準備を進めておかないとな。明日は生徒会の仕事で他の人よりも出られない日もある事だし」

「ああ、言い忘れていたが、今日も一応生徒会の仕事はあるぞ」

「それ言い忘れちゃダメだろ!？」

「お前だけに」

「俺だけ!? 何故に!？」

「別に問題ねえだろ」

「あるよ!!!」

「しかも今からだしな」

「今からかよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおお!！」

話を聞いてみると、どうやら文化祭前日にも見回りのような物があるらしい。

当日とは違い、今日は二人ペアを作って行動するようで、一番は明日、一緒に見回りをする事になっている俺と彩のペアみたいだ(嵐は一人。だつて余りだし)。

「つーか本当に早く言えよ。オイ。」

「幸助。行くわよ」

「噂をすればなんとやら、だな。さっさと行ってこい」

「はあ。解った解った。行ってこればいいんだろ」

俺は渋々、教室の前のドアで待つ彩の方へと向かった。

「何でそんなに不意打ちくらったような顔してるのよ」

「いや、たつた今、前日の見回りを聞いたもんだから」

俺と彩はとりあえず、一年生の教室の様子を全て見周り（くたびれた腕章を付けて）、その後は適当に、というよりもブラブラとしながら校舎内を歩いている。

見周り、と言っても実際そんな大した事でもなく、本当に、『ただ見て回る』だけだ。

校舎内はもう、まさしく文化祭一色で、皆準備に勤しんでいる。

「何だかんだで文化部は大変だよな。体育祭の後にそんなに期間が開いていないのに文化祭だから」

「そうね。でも、文化部ってあんまり予算的に恵まれていない場合が多いし、頑張らなきゃ予算とか、諸々の問題が出ちゃうから仕方が無いわよ」

ただ、この学園は無駄に予算が豊富だから、いくら文化部といえども他の高校よりはある方だろう。

ていうかそもそも文化祭のクラス予算が高校の文化祭として桁が大きすぎる。いや、違い過ぎる。

「いや、本当に大変なのは準備なのかもしれないけれど」

文化祭は準備が楽しい。

しかし、準備は大変だ。

所属しているクラスと、所属している部のかけもちならば、尚更だ。

準備は確かに大変だ。

実際、無理やりとはいえ、副委員長にさせられ、クラスの文化祭の準備の中心に近い位置で指示を出したりしていると、改めてその大変さが解る。

でも、楽しい。

楽しかった。

「……いや、楽しかった」と思い出にするのはまだ、早い。

そして、今度は俺と彩は校内の中庭に移動した。

ここら辺は、まだそんなに人は居ない。

居るのは精々、休憩している生徒ぐらいだった。

恐らくローテーションか何かだろう。

しかし、人数自体は少ない。

これは他のクラスに余裕が無い証拠だろう。

「……確かに準備は大変だろうけどさ、でも皆、楽しそうだよな」

俺はふと、さっきの会話を思い出して、呟いた。

「そうね。確かに、楽しそうよね。皆。実際、楽しいし」

確かに、彩は準備の時も楽しそうに準備を行っていた。

可愛い笑顔で。

．．．．．彩がこの学園内で男子からの人気を集めているのが解ったような気がする。

「あっ．．．．．」

彩が、ピタリ、と順調に進めていたその歩を止めた。

「? どうした彩」

「うっ、な、なんでもないっ! さ、さっさとここを離れるわよ!」

「って引っ張るな引っ張るな! 一体何なんだよ!?!」

急に顔が紅くなった彩が俺の腕をつかみ、ぐいぐいと引っ張ろうとする。

ただ、その際に決して小さくは無い胸がぎゅぎゅと当たって色々と困るのだが。

っていつか本当にこのままだとやばいぞ!
俺の中の何かが!

「ま、待て待て待て! とにかく待ってくれ!」

「待てない! じ、邪魔するのは悪いでしょ!」

邪魔? って何だ? 何をだ?
ってとにかく!

「と、とにかく待て! その、む、胸が当たっ．．．．．」

「．．．．．!?!」

彩の顔がさらに紅くなってあわてて腕を放し、ぱっ、と胸元を腕で隠す。

嗚呼、殴られる。

絶対殴られる。

不可抗力だけど殴られる。

ここ最近、特に夏休み以来大人しかった彩だけど、ついにその拳の封印が解かれる時が来たか。

「……………て？」

俺は覚悟も決め、そして目を瞑り、腕で顔をガードしようとしたが、なぜかその拳は飛んでこなかった。

そっ、と目を開けると、彩が顔を真っ赤にしたまま硬直しており、実際には腕を振り上げもしなかった。

「あ、や……………？」

「うっ……………な、何よ」

「制裁は？」

「は、はあっ！？ 何が！？ べ、別に何もしないわよ！」

あれ。なぜだろう。

涙が出てきそうだよ。

「そ、それにしても、どうして急に離れようなんて言い出したんだよ。一応生徒会としての見周りだぞ？ ちゃんと全てをチェックし

ないと」

「……………あ、あれ……………」

「あれ？」

彩が気まずそうに視線を向けた先には、男子生徒と女子生徒が居た。

顔は見た事無いが、それはまあ、ともかくとして、問題なのはその雰囲気だ。

何か、とても良い雰囲気だ。

手を繋いで、互いの体が当たるといふ距離まで近づいて、一緒にベンチに座っている。

周りは木々に覆われており、あの位置ならば普通に歩いていけば見つけかりづらい。

「あ、あれがどうしたんだよ。別に付き合ってるとしたら普通じゃないのか？」

「ち、違っ、さっきまでは、……………」

「さっきまでは？」

思わず、首をかしげてしまった。

まあ、もしもカップルだとしたら（ていうか確定だろう）普通だと思う。

とかなんとか思いつつ、ふと、そのカップルの方に視線を逸らすと、

．．．．．見事にキスをしました。

「．．．．．」

「．．．．．」

思わず、言葉を失ってしまう。

いや、まあ、すぐに終わってしまうぐらいの軽いキス、だったのだが、それでも他人のキスをしている所を見てしまうと罪悪感が否めない。

「も、戻るか．．．．．」

「う、うん．．．．．」

俺と彩は小走りで、その場を後にした。

人気の無いグラウンド付近まで来ると、ようやくその足を止めた。外のバザーの準備はもうとつくに完了していて、もう外にあまり人は居ない。

「びっくりした．．．．．」

「わ、私も．．．．．」

彩に至ってはまだ顔が紅くなっている。

気持ちは解る。
ていうか小走りでも危うく彩に置いていかれそうになった。
彩さんマジパネエッス。

．．．．．それにしても、彩はさっき、どうして俺に制裁を与えなかったのだろうか。

成長か？

それはまことにうれしい事だが、彩からあの制裁を取ったただの「可愛い女の子」にしかならないと思うんだけどな。

「ね、ねえ。幸助」

「ん？」

「や、やっぱり男の子、って、『ああいう事』をしたいものなの？」

「ああいう事？」

「だから、さっきの．．．．．(き、キス、とか．．．．．)」

最後の方の言葉ははっきりと聞き取れなかったが、さっきの．．．
．．．ああ、一緒にベンチに座って手を繋ぐ事、か？

さすがに彩の方からさっきのき、キスの事を蒸し返したりはしないだろうし。

「そうだな。好きな相手となら、そりゃしたいんじゃないのか？
俺なら多分、ずっとしていたいと思うな」

「ず、ずっと!?!?」

彩が驚愕の表情を露にしているが、なぜだろうか。

「そりゃそうだろ。あれぐらい」

手を繋ぐだけだしな。

「あ、あれぐらい!？」

「何故そんなに驚くんだ!？」

「当たり前でしょ!？」

カップル同士が手を繋ぐ事ぐらいでそこまで驚くか普通!？」

「……………彩ってなんだかんだで照れ屋さんなんだな」

「なっ、だ、誰が照れ屋さんよ誰が!……………い、いいわよ。
だったら今すぐしてみなさいよ!」

「今すぐ!？」

夏休みのあの、昼休みの事が鮮明に蘇る。

思わず、顔が少し紅くなってしまつのが感じた。

他の女子ならばともかく、彩となるとさすがにハードルが高いよ
うな気がする。

「……………わ、解った」

「ふーん。やっぱりそうなんだ。ってええ!？」

「あ、あそこでやるぞ」

俺は近くにあったベンチを指差した。

あそこなら、校舎から除かれる事も無いだろう。

さすがに彩と手を繋いでるのを見つかれば誰かに襲撃を受けそうだからな。

「な、なんであんなベンチに行かなきゃならないのよ」

「だってさっきの二人も座ってたし、何より誰かに見られるのは嫌だろ?」

「う……………」

俺と彩はゆっくり、そしてぎこちなくそのベンチに移動し、座る。

「い、いくぞ」

「う、うん」

俺が手をそつ、と出した瞬間、彩はきゅっ、と目を瞑ってしまった。

な、何故に!?

手を繋ぐ事がそんなに彩にとってはハードルが高いのか!?

でも、それにしても、彩ってやっぱり、

……………可愛い、な。

思わず、目を瞑ったままの彩に、見とれてしまった。

頬を若干紅く染めながら、そしてきゅっくゅっ、と目を瞑っているのも、可愛い。
ていうか、この状況だとまるで、

キスを待っているみたいじゃないか。

目の前には可愛い女の子。

二人つきりで、そして目を瞑って、『何か』を待っている。

何か。

何だろう。

何なんだ？

キス、なのか？

.....いや。

それは、無いだろう。

確かに彩は幼馴染だけど。

それ以前に可愛い女の子だけど。

だけど、だからこそ、俺とはつり合わない。

俺みたいな人間には、つり合わない。

もしも彩が誰かとキスをするのなら、それは多分、俺なんかよりも、もっとカッコよくて、頭も良くて、そして俺なんかよりもっと良い奴なのだろう。

そうなる、だろう。

いや、そうであって欲しい。

彩にはもっと、もっと良い奴と一緒に居て欲しい。

.....ただ、それも少しさびしい気がするけど。
って何を考えているんだ俺は。
こんな状況で。

こんな事、今までずっと考えてきた事じゃないか。

.....と、とにかく、今はこの状況をなんとかしなければ。

俺は、彩の手に、自分の手を重ね合わせる。

「ひゃうっ!?!」

急に手を重ねた事に驚いたのか、彩がとても可愛らしい声を上げた。

そして俺は手をそっ、と離れた。

「び、びっくりした……」

「えっ、な、何なの？」

「何なのって……さっきのカップルみたいに手を繋いだんだけど？」

「っ……。そ、そう、よね」

何でだろう。

彩が少し、声のトーンを落とした気がする。

「さ、さあ、とにかく戻るぞ」

「……待って」

ぎゅっ。と、俺が話した手を、彩が掴む。

逃げられない。

逃げられなかった。

「違う……」

ポツリ、と彩が言った。

「違う。違うの。手を繋ぐ事じゃなくて、き、ききき、キス、の話なの」

「……そ、そりゃ悪かったな。勘違いして。さっ、戻ろうぜ」

「待って……私の質問に答えて」

「質問……?」

「そう。勘違いしないようにハッキリと言っわ。ねえ、幸助。アンタは私とキス、出来るの？ 出来ないの？」

「……………」

答え、られなかった。

なんていうか。

この質問に、正直に答えてしまったら、何かが壊れるような気がした。俺と彩の関係が。

ただの幼馴染としてではなく。

ただの「可愛い女の子」としてではなく。

それより先の段階に、進んでしまう気がした。

俺はそれを望まない。

だって、彩の為にならないから。

ごめんな。彩。

進んじゃ、いけないんだよ。

ここから先には、進んでは、いけない。

俺は彩が大切だから。

だから、ダメなんだ。

俺はお前を不幸にしたいくないんだよ。

「わ、私は、……………」

俺が答えを渋っていると、彩の方から、言葉を紡ぎ始めた。

ダメだ彩。

言っな。

言っな。

言わないでくれ。

そんな俺の心境とは裏腹に、彩はきつ、と真剣な瞳で、俺を見つめる。

「私は、出来るよ。アンタと……………ううん。幸助と、キス、出来る」

「う、嘘だ」

思わず、言葉が出てしまった。

彩に引き返して欲しかったから。

今ならまだ、間に合うから。

「嘘じゃない」

「嘘だ」

「嘘じゃない」

何度言っても、彩は俺に向かって、言ってくる。

そして、彩の顔が、俺の目の前に迫ってきた。あっという間に。まるで、俺に否定させないようにするかのようだ。

「……………んっ」

「……………っ!」

俺の唇に、何か柔らかい感触があった。

そしてそれはすぐに離れ、目の前にあるのは彩の頬が紅く染まった、綺麗で、可愛い顔。

「さ、先に戻るから」

「あ、彩……………」

俺は、それだけしか言えなかった。

心臓の鼓動がバクバクと言っている。

そうこうしている間に、彩は校舎の方へと駆け出して行った。

俺はただ、そこに居る事しか出来なかった。

「……………どうすればいいんだよ」

ただ俺がその時考えていたのは、この後教室にどんな顔をして行けばいいのか、だった。

第七話 今はまだ

教室に戻ると、皆は相変わらず、意気揚々と準備に勤しんでいた。もう大部分が出来つつある。

そして、彩はというと、いつもと変わらず、黙々と準備を続けている。

嵐が居ないのは、どうやら恐らく、俺と彩に代わり、見回りへと行ったからだろう。

龍神はまだ、戻ってきていない。

.....まいったな。

こんな時に、嵐が龍神に話を聞いてもらいたかったんだけどな。

俺は仕方が無く、副委員長らしく、クラスメイト達に加わって、明日に控えた文化祭の準備を始めた。

「ほう。ついにそこまで進展したか」

「他人事みたいに言うなよ」

「他人事だからな」

そりゃそうか。

放課後。

今日は文化祭の、前夜祭があるので学園の生徒達は皆、今日は泊

まりだ。

風呂とかは家で入ってきたりするらしい。

彩も今はその為に家に戻っている。

俺と嵐はというと、学園の屋上で二人で居る、というだけだった。そして、誰かに、何かを言っただけで欲しくて、なんとなく、嵐に相談してみたのだ（龍神は神戸さんとどこかへ行ってしまった。クソ。リア充め）

「つーか。何を不満に思う所がある？ あれだけの美少女だ。むしろお前には勿体無いぐらいだぜ？」

「だからだよ」

そう。

彩は美少女なのだ。

学園のアイドル的存在で（本人に自覚は無いが）、綺麗で、優しくて（あれ？ 優しく・・・て？）、可愛い、美少女だ。

だからこそ。

「だからこそ。俺には、お前の言う通り勿体無いんだよ。俺は彩の幼馴染だ。それでいいんだよ。俺なんかと一緒に居ても、彩が、可哀想だ」

俺はバカだから。

俺はダメな奴だから。

だからきつと、彩にはもつと、良い相手が居るだろう。

「ふむ。つまりお前は、『天音には俺なんかよりももつと良い男とくつついて欲しい』と言いたいワケか？」

「そついう事だな」

「アホか」

「何故に!？」

アホって言われた！ 今アホって言ったぞコイツ！
人が一生懸命に考えたのに！！

そんな俺の心境とは裏腹に、嵐はまるでめんどくさそうにはあつ、
とため息をつき、そして俺の方に向き直った。

「お前、本当にアホでマヌケでバカだな。こりゃ流石に天音に同情
しちゃうぜ」

酷い言われようだ。

「……………つ。わ、悪かったな」

「いいや。お前は許されない。つっ—か、俺から言わせてもらえれ
ば、お前はただの自己中だ」

「じ、自己中?」

何を言っているんだ嵐は。
俺はむしろ、彩の為を思って、言っているのだが。

「今、『天音の為を思って』とかなんとかアホな事を思っている
だろうが、お前は天音の気持ちを何一つ解っていない。そしてお前
は、天音の気持ちを解っていないだけじゃ飽き足らず、理解しよう
ともしない」

理解。

理解しようとして、しない。

．．．．．解ってる。

それは解ってる。

だけど、

「．．．．．だけど、さ。実際、俺は、」

「自信が無い、んだろ？」

「．．．．．っ」

そう。

無いんだ。

俺には。

彩にふさわしい奴なのかな、って。
ずっと、彩の側に居るにふさわしい人間なのかな、って。

自信が、無いんだ。

「自信が無い？」

「うん。多分ね」

彩は現在、幸助の家までの帰り道を、一人で歩いていて、
携帯で通話している相手は、莉子だ。

彩も誰かに相談したくて、その結果、選んだのは莉子だった。

「幸助君、さ。確かに他人の事になるとそりゃあもう必死になるけど、逆に自分には自信が無いんだよ。多分、彩の側に居てもいいのかな、って思ってるんじゃない？」

「そ、そんな事……」

「あー。解ってる解ってる。彩はそんな事、気にしないんだよね。ていうか考えた事も無いだろうけど。けど、だけどさ、幸助君の場合とは違うんだよ。彩とは違う。彩と考えている事も違う。今回彩は、多分、踏み込みすぎちゃったんだよ。幸助君の受け止め切れない所まで。だから向こうも戸惑ってる」

莉子の声は、いつものようなふざけた雰囲気は、無い。

むしろ真剣に。

彩の事を、まるで自分の事のように考えてくれている。

彩にはそれが、嬉しかった。

「とにかく、今はまだ、待ってあげなきゃ。焦ってもダメ。お互いに納得出来るまで待った方がいいよ。特に、彩と幸助君の場合は。それまでは、まだ、『幼馴染』という関係でなきゃ、ダメ。これ、友達からの忠告ね」

「……………うん。解った。ありがとう」

「解ればよしっ！ んじゃ、ばいばい」

「うん。また、後で」

プツッ、とそのまま通話は途切れた。

そして彩は、気がつけば家の前まで来ており、中へと入った。

(とにかく、まずはシャワーを浴びないと……………)

「自信持てよ」

嵐が突然、俺にそう言った。

普段は言わないであろう言葉を。

「そもそも、今まで天音を守ってきたのは誰だ？ 天音と一緒に暮らして、天音と一緒に外国まで行って、そこでも天音を守ったのは

誰だ？ 天音を笑顔にしてきたのは誰だ？ 他でも無い、他の誰でも無い、桐山幸助。お前だろ？ これだけ一緒に過ごして、そして天音を守ってきたんだ。自信の一つや二つ持った所で、バチも当たらんだろ」

「嵐……………」

「それに、そうやって悩んでいるのは、お前らしく無いだろ？ 答えが出ないなら出ないで、待ってもらえばいい。それぐらいのわがままぐらい、通せ」

「……………今からでも、追いつけるかな」

「お前なら問題無いだろ」

俺は、その言葉を聞いた瞬間、駆け出した。

屋上の階段から一気に一階まで降りて、そのまま校舎を、学園を飛び出す。

朝、彩と一緒に歩いた道を逆走し、走り出す。

走る。

走る。

走る。

そして、たどり着いたのは、俺の家の目の前。
学園に居たのが、ついさっき、ほんの一瞬のように感じる。

乱れた息を整え、そして、家のドアを開ける。

中に、彩の靴があった。
という事はつまり、彩はまだ家の中に居る、という事だ。
中に入り、廊下を歩く。

「彩……………」

思わず、呟いていた。
大切な人の、名前を。
俺が答えを伝えなければいけない相手の名前を。

「幸助？」

居た。

ドアの向こうから、声が聞こえてきた。

「あ、彩っ!」

バンツ！ と俺は、勢い良くドアを開けた。開け放った。
今思うと、俺はもう少し冷静になるべきだった。
そこが何のドアなのか、また、中には何があり、そしてそこに居る彩がどうなっているのかを。

「……………」

今の俺の目の前に居る彩は両手で持ったタオルで頭を拭いていた。
そして、学生服 と思われる衣服が、側に畳まれて、置いてあった。

この事から解ると思うが、なんていうか、非常に言いづらいのだが、まあ、その。

「！」

封印されし右腕の封が解かれ、その右腕は俺の左頬に綺麗に入り、瞬く間に俺の意識を刈り取った。

しかしなぜだろう。

俺は幸せな気持ちで一杯だった。

「で、何のよう？」

ぶんすか、と怒っている彩。

勿論、着替えはもう済ませてある。

残念だったな少年達よ。サービスシーンはここまでだ。

その時、ポツ！と、俺の左頬を、彩の拳がかすめた。

「……………何か、言った？」

「なんでもございません」

「こえー。」

怖いよ彩さん。

そして因みに、今の俺の状態は正座だ。

「どうして急に戻ってきたのよ」

「あ、いや、その」

いきなり本題かよ。

「……しかし不思議と、俺に緊張感等と言うものは、無かった。」

「多分、さっきの彩とのやりとり（一方的な攻撃）のおかげだろう。なんていうか、楽になった気がする。」

「……………昼間の事、なんだけど」

「……………!」

彩の顔がかあー、っと紅くなったのが、俺でも解った。

「……………ああ。ったく。なんか、こういう所が可愛いよな。」

お前は。

「俺、さ。自信が無かったんだ。彩の隣に居ていいのか、ってな」

「うん。私もそれは、莉子と話をしてみても、解ってる。でもっ、」

俺は、彩のその先の言葉を手で制す。

「必要ない。」

「お前の言いたい事は、解っているから。」

「解ってる。お前の言いたい事は。けど、俺にはやっぱり自信が無い。だから、自信が出来るまで、とは言わねえけど。だけど、時間が欲しいんだ。俺が、お前の隣に居続けられるように、自分が納得出来るまで。だからそれまでは、俺達は、まだ幼馴染のまま居たいんだ」

わがままで。

そうだ。これは俺のわがままだ。

最低だった事は解ってる。

だけど、今の俺にはこれが精一杯なんだ。

「ごめん。ごめんな。今の俺には、これが精一杯だ。これぐらいしか、お前に言ってる事が出来ない」

そして、彩は。

少し、ほんの少しだが、一瞬、悲しげな表情を浮かべた。

そして直後に、笑った。

泣いている。泣きながら、笑っている。

ぼろぼろと、雫が、彩の目から零れ落ちている。

「うん。今は、それでいいよ」

泣きながらの笑顔。

彩を泣かせたのは、俺だ。

「ごめんな。彩。」

今はこれだけしか、言えないんだ。

「なあ、彩」

「何？」

俺と彩は現在、朝と同じく、二人で一緒に、学園までの道歩いている。

もうすぐ前夜祭が始まる。

「今は、これしか、出来ないけど」

俺は、自分の右手を、隣の彩に差し出す。

「ん」

俺の手と、彩の手が、重なった。

手を、つなぐ。

今の俺に出来るのは、学園までの道のりを一緒に、手をつないで歩いてやる事ぐらいだ。

それにしてもつくづく、俺は情けないな。

こんな事しか、今はまだしてやれないんだから。

第八話 素直と突然の告白

前夜祭。

まあ言うなれば、これは「生徒だけの文化祭」、と言った所だ。残っているのは大体、ライブやステージに出るような連中で、練習の為に残っている場合や、もしくは夜の学校を楽しみたいような連中だ。

まあ大半は、居残っている。

それというのも、生徒会主催（厳密に言えば祭さんが手配した）花火もあるので、それを楽しみにしている輩も多いだろう。

俺達のクラスはもう準備が完全に終わっているので、問題は無いだろう。

まあ後は、本番次第だ。

「そついえば龍神」

「ん？」

俺、嵐、龍神は今、屋上に居る。

彩はというと、下で神戸さんと一緒に居るようだ。

「今日の昼はやけに帰ってくるのが遅かったけど、一体何をしていたんだ？」

「うつ．．．．．その、まあ、何でもない．．．．．」

昼間からこれですつとごまかされてばかりだ。

一体何があったんだ？

「そういう君こそ、一体天音さんと何があったのさ？」

「な、何がって？」

まあ、全裸を見てしまったり、泣かせてしまったり、一緒に手を繋いだりして学園まで戻ってきたりと色々とやらかしてしまっただが。

「なんか、変わった、気がする」

「……………」

変わった、か。

まあ、そうかな。

変わった。変わったかもしれない。

俺と彩は、互いに互いの事が、好きだ。

だけど、俺は彩の隣に居る自信が無い。

しかしそんな状況であっても、俺は、あくまでも今まで通りで居たいと思う。

「……………変わってねえよ。今まで通りだ」

今は、だけどな。

まあ、変わる予定があるのかどうかも、何時になるのか解らないが。

「ふーん。そうっ?」

ジロジロと見られている。

これはバレバレのようだ。

まあ、龍神リウケンに隠し事が出来るとは最初から思ってたなど、居ない。

「ああ、そういえば龍神。さっきは家に帰ってたんだっけ?」

俺はとりあえず、話題を変える事にした。

「うん。愛ちゃんがシャワーを浴びたい、って言うから。ついでに、僕もシャワーを浴びてきたんだ」

シャワー、か。

つい。

つい、だが。

さっきの彩の姿を思い出す。

家で、偶然にも見てしまった、彩の「あの姿」。

髪からはばたばたと風呂上りを思わせる雫が落ちていて、一瞬だが、きよとんとした顔もしていて、そして、綺麗だった。

.....変態か俺は。

「そ、そういえば、花火って何時打ち上げられるんだ?」

「そうだな。あと、十分、って所じゃないのか?」

十分か。

今の俺の状況から考えるとそれは少し、長い気がする。

「暇だな」

「そうだな」

「だね」

文化祭の準備はとても大変だったけど、なんだかんだでこのタイミングが一番暇なような気がする。

準備の終わりと、文化祭開始までの、間の時間。

しかも、もう辺りは暗い。

感覚的には修学旅行の夜の雑談だ。

皆も体験した事があると思うが、修学旅行等の夜はよく、皆盛り上がる。

女の子はガールズトークだと思われるが、男の方もそんな感じの話で盛り上がる。

今の感覚的にも、そんな感じだ。

「なー。嵐」

「ん？」

「お前ってさあ、直ちゃんのことどう思ってるんだ？」

「ぶいぶあっ！？」

むせた。

盛大に。

「な、あ、あいつ、の事がどうして出てくるんだ!？」

普段はチャラチャラして、しかし、クラスをしつかりと纏めてい
る委員長がこんなにも動揺するとはな。

俺達の前では、直ちゃんと居る時はいつも普通なのに。
今の不意打ちは予想外だったのだろうか。

「いや、なんとなく」

「……………そうかよ」

とにかく、嵐にかまわずに俺は会話を進める。

「だって直ちゃんって実際、可愛いし、大体の事は器用にこなすだ
ろ? 女の子としては結構良い子だと思っただけだな」

「なんだ。お前は天音が好きなんじゃないのか? もう早くから浮
気か」

「残念だったな。俺は彩一筋だぜ」

という返事をノリで返しつつ。

嵐は直ちゃんをどう思っているのか、少し気になった。

俺が彩を「幼馴染」として見ていたように。

嵐もまた、直ちゃんを「幼馴染」か、「後輩」として見ているの
かもしれない。

「……直は、『幼馴染』でも、『後輩』でも、無い。感謝すべき相手……そうだな。『恩人』、つて所か？」

恩人、か。

中学の頃。

嵐は、まあ、荒れていた。

反抗期のような物だった。

そんな嵐を、あの時の嵐を、直ちゃんは見捨てなかった。

一緒に、居てくれた。

それが今でも嵐の心の中で、大切な思い出として、残っているのだろう。

だけど、それは、直ちゃんにとっては、

酷だ。

俺が言えた事ではないのかもしれないが。

嵐は、あの時の、「過去の直ちゃん」を見続けている。「今の直ちゃん」を見てやろうとしていない。

「今、『天音の為を思っ〜』とかなんとかアホな事を思っているだろうが、お前は天音の気持ちを何一つ解っていない。そしてお前は、天音の気持ちを解っていないだけじゃ飽き足らず、理解しようともしない」

人の事を全く言えたもんじゃねえな。

自分の事を棚上げにしておいて、説教かよ。

とことん、素直じゃねえな。

「あと、五分」

龍神がぼんやりと、携帯の時計機能を見ながら、呟いた。

「嵐」

再び、龍神が、呟く。

「僕は、愛ちゃんが好きだよ」

「「どうしたお前急に!?!」」

インド人どころか火星人もビツクリだ。

この鈍感オブ・ザ・鈍感の龍神がついにこんな事を言い出したか。

「.....別に。なんか、幸助も吹っ切れた、って感じるし。だから僕もそろそろ、素直になろうかな、って」

「つーか龍神。お前そついう事は神戸にちゃんと見えよ」

「バカか君は! 言えるわけ無いだろ!?!」

あ。言えないんだ。

いや、まあ、言えたら苦労しないけど。

「.....そ、それはまあともかくとして、僕はこれからは、愛ちゃんを一人の女の子として、見る、好きな、女の子として。.....嵐。君が直ちゃんをどう思っているのかは知らないが、でも、『幼馴染』とか、『後輩』とか、ましてや『恩人』なんて風に直ちゃんを見ない方がいいよ。じゃないと、いつか、『もしもの時が来た時』に、君は直ちゃんを傷つける事になる」

忠告。

これは、龍神のこれは、まさに忠告、だった。

「……………俺は、」

ドンッ！

嵐が何かを言おうとした瞬間、花火が打ちあがった。
綺麗な、花火。

そこからは誰も、何も言わなかった。「この明るさを利用して本を読もうと思っただけど……………案外花火も良いもんだね」「これはノーカンな。

それにしても、さっきはなんだか色々としてつもない話をしたよ
うな気がする。

全く。

本当に、友達と過ごす夜っていうのは、変な事をしゃべってしま
うもんだ。

「祭さん。花火の手配、終わりました」

「おう。ちゃんと見えてる」

生徒会室。

そこに居るのは、祭と明の二人だけ、だった。

今は二人を、打ち上げられた花火が照らしている。

「なあー。明」

「はい。なんでしょう?」

「俺達って、来年、受験だよな」

「えっと、まあ、そうなりますよね」

「ふむ。そうだよな……うん。よし」

くるり、と。

生徒会長の椅子を明の方へと向ける。

そしてにこっ、と笑顔で、

「明。俺と付き合ってくれ」

とかなんとか言い出した。

「……………はい? え、え、え、あのっ、その、」

これまで伏線も何も無い状態から突然こんな事を言い出されたので、明は戸惑う。

「ど、どうして、です、か?」

「ん？ だって来年受験じゃん？ 彼女とイチャイチャする時間が減るじゃん」

「な、なんて不純な理由っ……！！ って、そ、そうじゃっ、なくてっ、ですね……わ、私で良いのでしょうか……」

「え？ なんで？ 俺別に好きでもない相手に猫耳付けさせたり萌え萌えきゅんさせたりましてや一緒に何処にでも行ったりしねーよ？」

「かかか、考えてみればそうですがつ、それでも突然過ぎませんか！？」

「悪いか？」

きよとん、とした顔で見つめ返される。

「う……悪く、ないですけど……」

かあーっ、と頬が紅くなるのが解った。

（……そうだよな。確かに突然だけど。ある意味ムチャクチャだけど、これが、祭さん、なんだもんね……）

少し、うつむいて考えていると、祭が、明に向かって話しかける。

「で、どうだ？」

「は、はいっ」

「ありがとなこのやるー!」

ばっ! と、祭が明に、『抱きついた』。

「!!」

勿論、今の明にそんな事を処理しきれぬハズもなく、ただひたすらに顔を真っ赤にするだけなのだが、しかし。

(.....なんか、うれしい.....)

そう、思っていた。

「.....明」

「.....はい」

「やっばお前、胸デカイな」

「~~~~~ r d f t g y い、や、やめっ x c v t b j ! ! ! ! !
「!」

結局、そのまま顔を真っ赤にする事しか、今の明には出来ないのだった。

そしてそんな二人をいつまでも、外の花火が照らしていた。

第九話 神神

文化祭当日。

まあ、当日と言っても、その当日を迎えたのは学園内……………ではなく、家だ。

ちゃんと、家には戻ってきている。

ただまあ、やっぱり夜の学校っていうのはテンションが上がるね。

今思うと出来るものなら本当に記憶を抹消したいよ。

あんな会話。

むくり、とベッドから起き上がると、時計の針は午前六時半を刺していた。

いつも通りの起床時間。

そこから制服にのろのろと着替えて、身支度諸々をすまし、朝ごはんの支度……………を終えているであろう彩の居るリビングまで行く。

「……………おはよう」

「おはよう……………って、酷い顔してるわね」

「ん？ そっか？」

「なんかとても眠たそうにしてるわよ。アンタ」

まあ、言われてみればそうだろう。そうなのだろう。

そもそも昨日は学校に十一時ぐらいまで残ってたりしたので、帰宅し、寝る前に色々準備してたので結局、寝る時間自体は一時を軽くオーバーしてしまったからだろう。

さつき顔を洗ったハズなのだが、なんか、眠い。

「ふあ．．．．．」

思わずあくびが出てしまう。

「ああ、もう。だらしないわね」

とてて、と彩が俺の元にかけより、そしてだらけた状態であろう俺の制服を所々直す。

なんか、そういえばあの両親バカップルがこの家に居た時にはこうやって母さんが父さんのスーツのみだしなみを調べてたような気がする（ていうか父さんはなぜスーツを着ていたのだろう？ 必要ないだろ）。

「？ 何ボーツとしてるのよ」

「ん。いや、なんか、父さんと母さんがこうやってるのを、見た事があったからな。それを思い出してた」

「ふーん。アンタのおじさんとおばさんが．．．．．。っ!?!? か、かかか、勘違いしないでよね!?!? そ、そういう鯛は無いんだからっ!?!?」

「鯛」じゃなくて「他意」の間違いだろう。

ていうか、「勘違い」って一体何を、どう勘違いすればいいんだ。

……ていうか彩^{コイシ}、本当に俺の事が好きなんだよな？

なんだか自信が無くなってきたぞ？

いや、まあ。

こうやって、また時がくるまでは俺と彩は「幼馴染」であり続ける事はもう解りきっているので、変に意識されるよりはまあ、いいか。

ギクシヤクするのも嫌だしな。

と、こんな事をふと考えつつ、いつものように彩と朝食をとり、いつものように彩と一緒に家を出た。

いつも通りに、いつもとは違う学園で、今日は文化祭が行われる。

学園に一步踏み入れると、そこはもういつもとは違う学園だった。門には「文化祭」というポップが飾り付けられ、辺りには学生が販売を行う屋台が立ち並び、朝は生徒達が忙しく準備の為に動き回る。

「皆忙しく動き回ってるな。なんだかこういふのを見てると、
嗚呼、青春してるな〜」って思っよ
「^{コイシ}」

「アホか。こうやって忙しく動き回っているのは前日から準備が出来ていないからだろう？ ただ効率の良くない準備をして、こうやって当日にアタフタしているだけだ」

と、身も蓋も無い事を言ってくるのは勿論、俺達の背後からカバンを持って登校してきた、嵐だった。

ていうかその言葉、『俺達にも言える事なんだけどな』。

「台無しだ！ 俺の思う青春が台無しだ！」

「お前の青春如き俺が踏み潰してくれる」

「人の青春を踏み潰すなよ！」

青春如き、って……お前は一体青春をなんだと思っているんだ。

是非ともお前の青春とやらを聞いてみたいよ。

そのまま、三人で校舎の中へと入る。

校舎の中も、かなり飾りつけがされており、文化祭だという事を改めて実感させてくれる。

そして、我が一年四組に入ると、中はすっかり「喫茶店モード」となっており、普段の教室と比べてもやはり、「明るい」、「楽しそう」というイメージだ。

……ただ、我が一年四組、というよりも彩には、大きな問題があった。

それだけが今日の一番の不安要素だ。

「さて、そろそろ始めるか」

因みに教室には俺達クラスメイトは一切、居ない。
それというのも、

「んじゃ、彩。私服に着替えて、それから今日の接客の練習を始めるぞ」

「……………わ、解ったわよ」

彩は隣のクラス、一年三組の教室に移動する。

私服に着替えるためだ。

それというのも、彩については接客を行う事になっているのだが、問題が一つあった。

それは、

愛想が極端に良くない事だった。

例えば練習の段階で注文を聞く、という事があったのだが（因みに練習相手は俺）、緊張の所為かふるふると笑顔は引きつり、セリフは神神（じゃなくて噛み噛み）。

もう「厨房にまわした方がよくな？」みたいな意見もあったのだが、男子達からの熱い要望により、是非とも接客にまわしてくれ、との事で（女子も案外乗り気だった）、こうして今日の朝、当日にアタフタしているのだった。

まあ、家での決死の練習の成果が出てきたのか、少しずつ改善され、残すは今日の最終調整のみなのだが……………しかしそれで

も実践で使えるのかどうか心配だった。

そしてしばらく時間がたち……、

「幸助。そろそろ天音を呼んでこい」

「ん？ ああ」

時間的にはそろそろ、かな？

まあ、女の子の着替えは遅いと相場が決まっているワケでもない
ので、昨日の家でのような事は起きないだろう。

「彩ー。そろそろいいか？」

ガラリ、と、なんの警戒も無くドアを開けたのがマズかった。
ていうか学習しろよ俺。

ああ、まあ、なんていうか。お察しの方々が居ると思うが、な
んていうかこれは、「男の子が普通は見てはいけない光景」だった。

ただし、昨日のような格好ではなかった。

そこだけは勘違いするなよ？

今回はまだセーフだ。

だって。

下着だったから。

なんだかよく解らないが（状況がまだよく飲み込めていない所為のかもしれない）上下ピンクでそろえていて、とても可愛らしい下着だ。

なんていうか、例にも漏れず、綺麗だった。

側には昨日と同じく綺麗にたたまれた制服と、そして学園のカバンと、スポーツバッグ。

スポーツバッグにはどうやら何種類かの私服が入っていたようで、どうやら何を着るかを迷っていたようだ。

ああ、なるほど。

だから時間がかかってるんだな。

だがしかし、ここからが俺の腕の見せ所だ。

今、彩はかぁっ、と顔が赤くなっただまま硬直している。
挽回ならまだ間に合う。

「……………す、スタイルいいな。彩」

「出てけ！ この変態！！」

今度は机が飛んできた。

どうやら俺には大した腕なんてなかったようだ。

午前七時。

顔を腫らした俺を練習相手に、練習が開始された（因みに嵐は指導役）。

「んじゃ、まずは注文を聞く所から」

これは最もオーソドックスな所であり、重要な所でもある。ここは昨日一番重点的に練習した所だ。大丈夫だ。問題ない。

「ち、ちゅうもんをおうかがいたします」

ひらがな発音だった。完全にひらがな発音だった。何処からどう聞いても、まごうことなき、ひらがな発音だった。

普通は「注文をお伺いいたします」、だ。

「もう一度」

嵐の指示が出る。

「ち、ちゅうもんを、おうかがいたしますう………」

やばい。

萌える。

くそっ！ これは反則だろ！ 「おうかがいたしますう………」

「…なんて反則だろ！ 特に最後の「う」が入るだけで萌え萌えだ！ 顔が紅くなってるのも very good！」

「こんなの萌えるしかねーじゃねーか！ クラスの誰かが「噛み噛み」を「神神」と言い換えた気持ちが解るぜ

ていうか、これは是非とも、

「メイド服を着せたいぐらいだ」

「幸助。本音が漏れてる漏れてる」

「いかん。幼馴染に萌えてる場合じゃなかった。

「ひ、人が頑張ってるのになんて事考えてんのよ!？」

「わ、悪かった！ だから机は「ry」

「仕切り直し」

「今日の損害：机×2、は、まあ後で予備を出すからいいとして。とりあえず彩の接客をなんとかしなければ。」

「仕切り直しだな。んじゃ、もう一度。次は別のセリフ。メニューを持ってきた時だ」

メニューは様々な物がある。

しかし、今の時期だと寒いから温かい物も取り揃えている。

「お、おあちゅいのでおきをつけください……。。っ!」

どうやら自分がセリフを噛んでしまった事に気がついたようで、しかもそれがとてもとても萌える物だと気がついた(?) ようで。

そして俺には反応が顔に出ていたようで。

「に、にやけるなああああああああああああ!」

本日の損害。

机×2

桐山幸助×1

第十話 文化祭

結局。

本番までには彩の調整は間に合わず、結局俺達は最初、生徒会業務の一環としてまずは文化祭の見回りを行う事になった。

「……まあ、これも仕方が無い。

イザとなったら厨房にでもまわってもらおう。

その方が安定するしな。現場的にも、彩的にも。」

「はあ………なんか、ストレスが一気に溜まった気がするわ………」

「ていっかなんでお前はあんなに緊張してるんだよ」

その質問をぶつけてみると彩はうつ、と少しためらったような顔をし、そして、

「………せ、接客とか、は、恥ずかしいから………」

まあ、確かにそういう人は多い。

だがしかし、彩がそういう風な恥ずかしがり屋だとは思わなかった。

ていうか、小学生からとかで彩はよく（神戸さんと交代で、もしくはダブルヒロインで）演劇なんかの主役をこなしているので、こういう物は慣れている物だとは思ったが。

接客とはまた別物みたいだ。

ていうか今更そんな「引っ込み思案の恥ずかしがり屋さんキャラ」を追加されても対応に困る。

「な、何か文句あるの!？」

「ありません。マジではありませんよ」

前言撤回。

彩は彩だった。

朝からの神神特訓(?) + 今のやりとりで彩の不機嫌メーターが上がってきたので、ここは一つ機嫌をとっておこう。

「ま、まあ。ここは落ち着けよ。本番までまだ時間があるんだし、ここはまあ、俺達も文化祭を楽しもうぜ」

「……ん。わ、解ったわよ」

良かった。

なんとかこれで機嫌はとれたみたいだ。
気をつけなきゃな。

文化祭中攻撃を受けていたんじゃ俺のHPが保たない。

という事で、まず俺達は適当に文化祭の見学・そして見回りを行う事にした。

辺りでは一般人と生徒が一緒になって文化祭を楽しんでいる。

さて、まずは何をするか。

この文化祭はなまじ予算が満ち溢れすぎている分、無駄にクオリティが高い。

そこら辺の夏祭りよりも規模・クオリティが高いんじゃないか？

ていうか普通に射的とかもあるし。

もう夏祭りとは大差無いだろコレ（季節外れなので「冬祭り」とも言えるが）。

「射的でもするか？」

「そうね」

異論は無し。

まあ、とにかく楽しもう。

クオリティが無駄に高いとは言え、やはり文化祭は文化祭。

「はい。まいどー。おっ。カップルかい？」

．．．．．この人は恐らく先輩なのだろうが、お祭り気分には浸っているのか、最早「学生」ではなくて、「お祭りのおっちゃんだ」。

女の先輩なのに（凄い紙絵さんと同じ匂いを感じる）。

そして彩の方はというと、「か、かつぶる．．．．．」「小さい声で何かを呟いて顔を真っ赤にしていた。

ていうか俺達カップルじゃねーだろ．．．．．ま、まだ。

「射的は一回50えーん。さあ、やったやった。打ち落とせば豪華商品プレゼントー！」

豪華商品、か。

まあ、無駄にクオリティが高く、無駄に準備資金が多いから、確かに景品は期待出来そうだ。

俺は銃をつけとり、もらった弾ターゲット　　十発　　をこめる。
そして、商品を見定める。

キャラメル

ノート

お菓子詰め合わせ

クマのぬいぐるみ

ハワイ旅行

大半がキャラメル、ノート、お菓子詰め合わせだが、後半のクマのぬいぐるみとかハワイ旅行（マジかよ。詐欺じゃねーのか？）とか、この辺りは本つつつ当に、無駄に豪華だな。

「ハワイ旅行とかどうだい？　新婚旅行に！」

「話を飛躍させすぎだろアンタ！」

「ん。そういえば新婚さんじゃなかったな。カップルだった。忘れてた忘れてた。んじゃあ、彼女へのプレゼントにあのクマのぬいぐるみとかどうだい？」

なんなんだこのテンションは。

これが文化祭の魔力と言うものか……！！（ゴクリ）

やれやれ。とにかく、俺も俺でこの文化祭を楽しもう。うん。

とりあえず、まずは何を狙おうか……………。

……………彼女、じゃないけど、まあ、プレゼントぐらいはしてやってもバチは当たらないだろう。

これも青春、というヤツだ。

景品のほとんどは、木の板の上にその商品がそのまま置かれている（ハワイ旅行だけは少し大きめの「ハワイ旅行」と書かれたプレートが置かれている）。

つまりはその景品を落とせば良いワケなのだが、うーん。

あのでかいぬいぐるみはどうやって落とそうか。

当たってもあのふかふかのボディに弾の威力が吸収されるだけだし。

ぬいぐるみはオーソドックスな茶色の毛皮をしている（しかしどこかつやがあり、それなりに綺麗だ）物で、首には赤い首輪に、小さな鉄で出来ているであろうタグのような物がついている。

……………狙うならあそこか？

俺は台から上半身を乗り出して、腕を伸ばし、そして銃口を真っ直ぐにぬいぐるみの赤い首輪へと向ける。

「よう」

パンツ、と軽い音がした直後、弾が発射され、首輪に弾が命中した、が、やはり決定打には至らず、少しぬいぐるみが後ろに傾いた。

その後も十発中七発目まで使い、なんとかぬいぐるみを打ち落とす事が出来た。

なんか執拗に首ばかり狙っていたので罪悪感がある。

「おめでとー！ はい、これが景品ですよー」

俺がぬいぐるみを受け取ると、先輩が今度はまた別のぬいぐるみを奥の方から引っ張り出し、板の上に置いた。

「……………このぬいぐるみ高そうだけど、まだ予備があったんだな。」

そういえば、彩は後ろで見ているだけだったな。なんか俺だけ楽しんで申し訳ない。

「彩もやるか？ 弾、二発しかないけど」

「え、う、うん。そうね。私もやってみるわ」

おお。なんか大人しい。

大人しいぞ彩さん。

まるで大人しくて可愛い小動物みたいだ。

彩は身を乗り出して、俺と同じような体勢で狙いをつける、が……

まあなんて言うか、我が学園の女子の制服スカートが、『少しば

かり』、他校よりも短い。
それゆえに、今の彩さんの体勢は色々と危ないのだ。
ていうか見える。
見えそうだ。

かと言って隣に非難すればそれはそれで彩が可愛そうだし。
くっ・・・・・・・・これは、どうすれば・・・・・・・・!!

「えいつ」

彩が二発とも見事お菓子詰め合わせを命中させ、そして景品を受け取る。

良かった・・・・・・・・すぐに終わって。

彩も気がついてないみたいだし、なんとかあったか。

「それはそうとお姉ちゃん。さっき彼氏がアンタのスカートの中をやけに気にしていたんだけど、いいのかい？」

にやにやとした顔で俺と彩を見てくる先輩。

こ、この、野郎・・・・・・・・!!

「?・・・・・・・・つ!!」

彩がよつやく、自分のさっきの体勢について気がついたようで、
一気に顔を真っ赤にし、そしてスカートを抑え、

「・・・・・・・・み、見るなああああああ!!」

と言って、ゲットした景品を思いっきり俺の顔面に叩きつけてきた。

因みに、朝と同じピンクだった。

第十一話 お化け屋敷

文化祭の見回りも、もうすぐ最初の交代の時間だ。

まあ、見回りと称して文化祭を楽しんでいただけなのだが、今の所異常無し、っと。

「どうする？ もうすぐ交代だけど」

「あつ、そ、そうみたいね」

あわてて彩が答える。

おい。今俺達が仕事申中だつて事、忘れてただろ。

「どっか行くなら次で最後だな」

周囲にあるのはお化け屋敷と．．．．．展示系か。

彩はどちらかという展示系にはあまり興味無いだろうから、お化け屋敷でいいか。

「んじゃ、そこのお化け屋敷でもさっさと回ってからクラスに戻るぞ」

「えっ。お、お化け屋敷!？」

「? ああ」

「彩」と「お化け屋敷」という単語を頭の中で結びつけると、彩がお化けを殴り倒している絵が浮かんだ。

いかんいかん。

俺は好きな女の子でどんな事を想像してるんだよ。

.....でも本当に出来そうだから困るんだよなあ。

「？」

それにしても彩は立ち止まって少し戸惑っているようにも見える。

「まさかお前、お化け屋敷とか苦手なのか？」

幼馴染として長年一緒に居ることには居たのだが、あまり一緒に遠出する機会が無かったからな。ましてや、お化け屋敷なんて入った事無かったし。

「そ、そんなワケ無いでしょ!？」

「でも今立ち止まって.....」

「こ、これはアレよ。そ、そう！ 瞑想してたのよ！ 瞑想！」

文化祭の真っ只中のお化け屋敷前で瞑想する女性高校生は多分世界中でもお前だけだぞ。

「怖いならどこか別の所でもいいけど」

「こ、怖くなんか無いってば！ いいい、行くわよ！」

なんだかかなり無理をしている気がするが、まあ、おびえた彩と言つのも見てみたかったりするのと、りあえずはどんと先にお化け屋敷へと向かう彩に俺はついていく事にした。

入場料は2000円。

それを払い、俺と彩は中へと入る。

中は暗すぎず、明るすぎずの丁度良い具合の暗さになっているし、セツトも本格的だ。

流石、というべきか。

雰囲気的にはバツチリだ。

これなら口コミですぐに評判が広まりそうだ。

それにしても、列に並んでいる時にやけに男女の二人組が多かったのだが、何故だろう？

それはそうと。

さっきまで意気込んでいた我が女神（比喩的表現）、彩さんはいつと……。

「うー……………」

ぎゅっ、と俺の腕をつかんで、びくびくと怖がっていた。ていうかまだ入って1分も経ってないぞ……………。

「は、はやく、進みましょうよ」

「あ、ああ」

……………ああ。クソッ。

彩のヤツ、可愛いじゃねーか。

可愛い。

これは比喩的表現でもなんでもなく、本当に、可愛かった。

おびえる彩も悪くないな。

むしろ女の子らしさが倍増して可愛い。

逆にこっちが緊張してしまう。

ちよこ、ちよこ、と彩は少しずつ、歩を進めていく。

俺もそれに合わせる。

ちよつとした物音でも彩は「ひゃっ」とか、「ひうつ」「、というなんとも可愛らしい声を上げるので、こっちは別の意味でもう緊張しまくりだ。

しかもなまじセットが気合入りまくってるから怖さも通常の文化祭の物よりも倍増だ。

そしてついに、「ソレ」は起こった。

よくある仕掛けだ。

突然、学生が化けたお化け（落武者）が俺達の前に飛び出してきて、それを見た彩が驚きと怖さで悲鳴を上げる。

「き、きゃああああああああああああああああ

！……」

そして悲鳴を上げた彩が、

ぎゅっ！

と、俺の腕に抱きついてきた。

こ、これがあの伝説の「悲鳴抱きつき」というヤツか。カップルとかがよくする。

「……………！」

しかしそんな事はさしたる問題ではなく、問題はその次だ。

彩が腕に抱きついてきたという事はその彩の同年代の女の子にしては少し大きめの二つの山が俺の腕に遠慮なく当たっているという事で、な、なんか、柔らかい。

この感触はやばい。

主に俺が理性を失う、という意味で。

ただ、彩の方はというとその事にはまだ気がついていないようで、目をきゅっ、と瞑り、ふるふると震えながら俺の腕に依然と、抱きついてきている。

正直見ている可愛い、が、今はそんな場合じゃない！

このままだと色々と大変な事になるぞ！

とにかく、この危険な状況を打破しなければ……………！！

俺がそーっ、と腕を少し、引き抜こうとすると、

「じ、幸助え．．．．．」

彩が上目遣いで、こつちを見てくる。

おいバカやめろ。

そ、そんな目で、そんな体勢で俺を見るなよ！

こつちは必死に気確かにするのに必死だというのに。
俺はアレなんだぞ。純情なんだぞ！

「じ、怖い．．．．．」

「．．．．．っ！」

やめろやめろやめろ！

だ、抱きつく力を強めるな！ 当たってるんだよ！ その大きな
胸が！

普段はもうとつくに吹っ飛ばされてるのに。

くそっ。可愛い顔しやがって．．．．．！！

「．．．．．チッ」

あつ。今舌打ちしたぞこの落武者。

ていうか嫌だったのならこんな落武者おほけやくなんかしなければいいのに。

時間が経つにつれて、俺の罪悪感も増し、同時に罪も重なって行っ
ている気がしてならない。

そろそろ風都の半分こ怪人に「さあ、お前の罪を数えろ！」と言
われかねないので、脱出の策を練る。

人間と言うのは土壇場で能力を発揮するようで、俺の危機回避能力が、すぐに答えを導き出してくれた。

．．．．．しかしこれはなあ。

正直気が進まないが、今の状況打破の為だ。
仕方が無い。

「彩。少し走るぞ」

俺が。

「．．．．．えっ？」

俺の突然の言葉に一瞬、きよとん、とした彩は、腕を掴んでいた手を緩めた。

そして俺はその隙を塗って、学生時代、父さんが母さんを奪う(?)時にしたとされる、いわゆる「お姫様だっこ」をしてやった。

「きゃっ！ えっ？ えっ？」

そのままワケが解らないとでも言いたそうな彩をとりあえずはスルーし、そのまま俺はお化け屋敷を駆けぬけた。

「っ、疲れた．．．．．」

お化け屋敷を出た所で、俺は力尽きた。

隣では廊下の床に下ろされた彩が頬を少し赤くして立ち尽くしている。

「．．．．．何度も言うけどやっぱ、彩って、可愛いよな．．．．．
．．．頬をなぜ赤くしているか解らんが、そういう顔がなんという
か、やっぱり、可愛い。」

「．．．．．彩」

「な、なにっ？」

今「きゅんっ」という擬音語が聞こえた気がするが、何か解らないのでスルーを決め込む。

「お前．．．．．」

「えっ、ちよっ、こんな所でっ．．．．．こ、告．．．．．」

何故か彩は慌てふためいている。
しかし俺はかまわずそのまま、

「太ったか？ 何か少し重かつ」う、うるさいっ！」「げほっ！！」

綺麗に決まった。

彩の右ストレートが。

主に俺の鳩尾に。

「ふ、ふふふ、太ってなんかないわよ！」

．．．．．だったら言葉で表現してくれよ。

こつ毎回毎回ダメージを蓄積してては俺の体がマジで保たないぞ。
オイ。

そのまま怒ってクラスの教室へと戻る彩を俺は急いで、追いかけた。

第十二話 にゃあ

俺達はその後、すぐにクラスへと戻った。

中はそれなりに繁盛しているようで、あわただしい。

さて、次は俺達の番だが……………。

「……………」

「あー。彩、お前、大丈夫か？」

「……………うん」

いや、大丈夫じゃないだろ。とツッコミたくなるような表情をしていた。

少し、というより思いつきり不安そうな顔をしている。

とりあえず、裏方へと回り、私服にチェンジ。

そういえば、店の客も男子の比率が多かったし、心なしか嬉しそうにしていた気がする。

「おっ。あの客また来たのか」

ボソツ、と厨房組（場合によってはウェイトレスにも出る。勿論エプロン装備で私服）の男子が呟く。

なるほど。リピーターもちゃんとついてるみたいだな。

女子は女子で、女性客と時折私服について談笑している。

これは、もうそこそこ成功しているんじゃないか？

「……………」

と、俺が店内を見渡していると、彩が出てきた。既に着替えを済まして、俺の隣に立っていた。もう不安が目に見えている。

こんな時にふと出てくる言葉は、

やれば出来る子なんだけどなあ……………。

そして俺は保護者的目で、彩の頭にぽんつ、と手を置き、なでなでとしてやる。

丁度、小さな子供をあやす要領で。

ていうか練習の時からもそうだが、もう少し彩はリラックスした方が良さそうな気がする。

「まあ頑張れ。お前はやれば出来る子なんだから」

「……………なんかすごいイラストとしたんだけど」

「き、気のせいじゃないかなっ」

「ものすごい汗がダラダラと出てらっしやるけど……………」

「まずい。」

このままではおなじみの制裁が飛んでくる。

なんでか知らんが彩様の逆鱗に触れてしまったようだ。

「はて。何の事かな？」

汗の事だろう。多分。

ていうかこっちも仕事前に怪我をしたくないのでここはシラを切りとおさなければならぬ。

そもそも、どうしてそんなに怒っているんだ。こっちはただ心の中で彩を少しだけ子供扱いしただけなのに……………。

「思いつきり心当たりあるわよね？ 絶対あるわよね!？」

「さ、さあ？ 心当たりなんてどこにあるのか知らないな……………」

・ああ、いや。心当たりか。もしかしたらナメック星辺りにでもあるかもな」

「え!?!? どこに!?!？」

ナメック星も知らないのかよ。

「ブリーフ博士の宇宙船ならあら不思議 たった4339年と3ヶ月で着いちゃっ惑星さ」

「遠っ!?!？」

なんかそろそろ限界っぽいぞ。コレ。

「……………ふう。ま、いいわ」

彩はふっ、と一瞬、リラックスしたような笑顔を見せるとにこっ、

と微笑み、そして、

「ありがとね」

そう言っつて、可愛く微笑み、店内へと小走りで駆け出して行った。

．．．．．まあ、リラックス出来たなら何よりだ。

そして俺は、逆の方向。

厨房の中へと、入って行った。

ローテーションが変わり、今度は祭と明が、文化祭の見回りを行う事となった。

一口に見回り、と言っても、特にする事も無く、ただ単純に文化祭を楽しんでいるだけなのだ。

「．．．．．」

明はというと、とことこ、とただ祭の隣を歩いているだけだった。そもそも、突然、突如として前夜祭で告白され、それっきりなのだ。

その後家に帰っても祭はいつもと変わりなく明と接している。明にはどうすれば解らず、出来るのはただ少し頬を紅くして、一緒に過ごす事だけだった。

(うつ．．．．．じ、状況がよく飲み込めない気がするのは私だけでしょうか．．．．．そもそも、メイドさんとご主人様って付き合ってもOK？ はっ。もしかして禁断の恋！？ そ、それはそ

れでロマンチックなのですが、いやでも私達はまだ学生だしその辺りはどうなっているのでしょうか。えーと、うー。あー~~~~~)

と、一人で頭の中でもややもやと考えていると、

「どーした？」

「ひゃああああああああつ!?!」

ひょいつ、と突然目の前に祭の顔が自分の顔を覗き込んでいたので、明は驚きの声をあげる。その声に周囲が少なからずこちらに視線をむけてきた。

特に男の視線が熱いのは明がメイド服を着ているからであろうか。

「び、びっくりしたあ〜」

「????? 何で?」

当の祭本人はきょとん、とした面持ちで明を見る。

「な、なんでもないです。ちょっとぼーっ、としてただけなので・

「.....」

「ふーん。ま、いいか。行くぞ〜」

ぐいつ、と手を引つ張られ、そのままついていく形となった明。

いつものようにただ祭に振り回されるだけだったのだが、そんな状況が、悪くは無い、むしろ、少し微笑んでしまうぐらいに、明は思っていた。

「あ、あのっ。ど、どどこに?」

「ん？ そりゃ勿論、デートだよデート」

「っ！？dfなんdskwvtyfn!?????」

「うおっ！？ ど、どうした！？ 壊れたか！？」

「で、でで、でーと、ですか!？」

「お、おう」

あっさりど。

告白の時もそうだが、なにもかも明にとってあっさりすぎる出来事の連続で、明の頭が状況についていけないので、とりあえず明は自分の頭を落ち着かせる事にした。

「で、でーと。うん。大丈夫。毎日夢の中でしてたし、夢と同じ事をすれば大丈夫。脳内デートも何回も重ねましたし、大丈夫。大丈夫のハズです」

メイドとしてはかなり危ない発言だったのだが、幸い祭には聞こえていないようだったので、明はなんとか自分を落ち着かせる事に成功する。

「は、はいっ！ 大丈夫でひゅ」

「大丈夫なのか!? 噛んだぞ。今」

「うにゃあ!？」

最早、猫耳メイドさんではなくただの猫になりそうなメイドさん

の姿が、そこにはあった。

「……………すっげえ可愛いわ。猫耳つけてると尚更」

「にゃあああああああああああああああああ！？」

いきなりと「可愛い発言」と、自分がさっきまでずっと猫耳装備だった事に赤面してしまい、完全に猫になってしまったので、とりあえず、祭は明を落ち着かせる為に人けの無い中庭へと向かったのだった。

「ん？」

俺が厨房のローテーションの合間に休憩していると、突如祭さんからのメールが来た。

確か、見回りの時間を利用して俺達の教室に来る予定だったのだが。

さっそく受信ボックスを開いて、メールの文面を見る、が……………

「……………何だこれ？」

「どうしたの？」

同じく休憩をとっていた龍神が俺の携帯の画面を覗き込む。

「……………何これ？」

「俺が聞きたいんだけど」

From 祭さん

件名：にゃあ

悪い。愛しの明がなんか猫
になったからそっちに行く
の遅れるm(´) (´) m

そもそもいつの間にか祭さんの中で明さんが「愛しの」になった
のかは定かでは無いが、というよりもシッコムベギはまず、

「猫って何？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3728v/>

俺と幼馴染みの共同生活

2011年12月11日01時54分発行